HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 言語的修復行動に関する語用論的研究 ： 中国語との比較を通して |
| Author(s) | 張, 玲玲 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第11176号 |
| Issue Date | 2014-03-25 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/doctoral.k11176 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/55333 |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Zhang_Lingling.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位論文

# 言語的修復行動に関する語用論的研究

## ――中国語との比較を通して――

北海道大学文学研究科

張　玲玲

平成25年度博士学位論文

# 言語的修復行動に関する語用論的研究

## ―中国語との比較を通して―

この論文を博士(文学)学位論文として提出する

提出:2013年11月29日

北海道大学大学院文学研究科

専攻　　言語文学

指導教員　加藤重広

氏 名　　張　玲玲

# ―目　次―


**第Ⅰ部**

**第 1 章　研究目的と論文構成** ..... 1

1.1　本研究の対象と目的 ..... 1

1.2　本論文の構成 ..... 4

**第 2 章　先行研究の検討と方法論的枠組み** ..... 6

2.1　研究の背景 ..... 6

2.1.1.　会話分析における修復に関する先行研究 ..... 6

2.1.2.　語用論の視点からの研究 ..... 13

2.1.3.　日本語における先行研究 ..... 17

2.1.4.　中国語における修復に関する先行研究 ..... 20

2.2　研究方法 ..... 21

2.2.1.　修復対象の拡張的設定 ..... 21

2.2.2.　語用的視点の導入 ..... 23

2.2.3.　分析資料 ..... 25

2.3　言語的修復行動の概念及び組織の整理 ..... 26

2.3.1.　修復概念の再検討 ..... 26

2.3.2.　日本語における各修復組織の会話例 ..... 29

2.4　研究の基盤となる方法論と語用論的観点 ..... 33

**第 3 章　調整との関係に着目した修復の機能** ..... 35

3.1　会話の本流と傍流 ..... 35

3.2　構造上の特徴について ..... 36

3.2.1.　修復構造の顕在性について ..... 36

3.2.2.　調整の構造について ..... 38

3.3　調整と修復の接点となる三つの段階 ..... 39

3.3.1.　産出のトラブルに対する調整と修復 ..... 39

3.3.2.　理解上のトラブルに対する調整 ..... 40

3.3.3.　受容上のトラブルに対する調整 ..... 46

3.3.4.　まとめ ..... 52

3.4　多領域で生じるトラブルに対処する修復・調整 ..... 52
3.4.1.　研究対象について ..... 53
3.4.2.　発話の産出と理解に跨がるトラブルに対処する調整・修復 ..... 55
3.4.3.　発話の産出と受容に跨がるトラブルに対処する調整・修復 ..... 60
3.4.4.　発話の理解と受容に跨がるトラブルに対処する修復 ..... 63
3.4.5.　まとめ ..... 64
3.5　調整概念を含む枠組みの確立 ..... 64

**第 II 部**

**第 4 章　理解上のトラブルに対処する修復・調整** ..... 66
4.1　分析対象の限定と定義 ..... 66
4.1.1.　不理解と誤解に限定した理由 ..... 66
4.1.2.　不理解と誤解を引き起こす原因 ..... 67
4.2　不理解に対する調整と修復 ..... 70
4.2.1.　不理解を抑制する調整行為 ..... 70
4.2.2.　不理解を解決する修復行為 ..... 74
4.3　誤解に対する調整と修復 ..... 76
4.3.1.　考察方法 ..... 77
4.3.2.　誤解に対処する調整行為 ..... 78
4.3.3.　誤解に対処する修復行為 ..... 82
4.4　修復・調整の枠組みからみる理解上のトラブル ..... 88
**第 5 章　受容上のトラブルとしての不同意について** ..... 90
5.1　不同意を抑制する調整行為 ..... 91
5.1.1.　発話内容の示し方で主張態度を弱める ..... 91
5.1.2.　自分の見方を価値づける注釈挿入表現 ..... 94
5.2　受容問題としての不同意について ..... 98
5.2.1.　言語的不同意 ..... 99
5.2.2.　不同意発話の対象 ..... 99
5.2.3.　先行研究からみる不同意 ..... 100
5.3　情報の管理状態と不一致・不同意 ..... 102
5.3.1.　不同意側の管理下にある情報に対する不一致 ..... 102
5.3.2.　不同意側が情報管理していない場合における不一致 ..... 107
5.3.3.　関与の度合いに大差がない場合に生じた不同意 ..... 110

5.4　修復・調整の枠組みから見る不同意 ..... 113
**第 6 章　受容上のトラブルとしてのフェイスバランス** ..... 115
6.1　フェイスワークと修復 ..... 115
6.1.1.　フェイスに関わるトラブルと修復との関係について ..... 115
6.1.2.　会話におけるフェイスワークに関する先行研究 ..... 116
6.2　本研究におけるフェイスの捉え方 ..... 117
6.2.1.　フェイスバランスという考え方 ..... 117
6.2.2.　フェイスバランスに影響のある発話 ..... 118
6.2.3.　否定的評価と肯定的評価について ..... 120
6.2.4.　フェイス状態の均衡化―ミクロの視点とマクロの視点 ..... 122
6.3　フェイス状態の非均衡化 ..... 128
6.3.1.　ミクロ的な視点からみるフェイス状態の非均衡化 ..... 128
6.3.2.　マクロ的な視点からみるフェイス状態の非均衡化 ..... 139
6.4　修復・調整の枠組みから見るフェイスバランス ..... 148

**第Ⅲ部**

**第 7 章　修復の開始形式についての日中対照** ..... 150
7.1　日本語と中国語の自己開始形式の比較 ..... 150
7.1.1.　日本語の自己開始形式に関する先行研究 ..... 150
7.1.2.　考察方法 ..... 151
7.1.3.　考察結果 ..... 152
7.1.4.　日本語における自己開始形式のまとめ ..... 158
7.1.5.　中国語における自己開始形式との異同 ..... 158
7.1.6.　本節のまとめ ..... 160
7.2　日本語と中国語の他者開始形式の比較 ..... 161
7.2.1.　日本語における他者開始形式の形式整理と分類基準 ..... 161
7.2.2.　中国語における他者開始形式との異同 ..... 173
7.3　両言語における修復開始形式の特徴 ..... 180
**第 8 章　修復方策に関する日中対照** ..... 182
8.1　同一ターンにおける修復方策の対照研究 ..... 182
8.1.1.　考察方法 ..... 182
8.1.2.　日本語における同一ターンの自己修復方策 ..... 184
8.1.3.　中国語における同一ターンの自己修復方策 ..... 187

8.1.4.　同一ターンにおける修復方策の比較 ..... 191
8.2　他者開始自己修復における修復方策の日中対照 ..... 192
8.2.1.　自己修復方策の種類 ..... 193
8.2.2.　他者開始・自己修復方策における比較 ..... 199
8.3　日中両言語における自己修復方策の特徴 ..... 200

**第 9 章　全体のまとめと今後の課題** ..... 202
9.1　全体のまとめ ..... 202
9.2　今後の課題 ..... 208
**参考文献** ..... 210
**参考資料Ⅰ** ..... 219
**参考資料Ⅱ** ..... 234
**参考資料Ⅲ** ..... 245
**参考資料Ⅳ** ..... 265
**参考資料Ⅴ** ..... 280
**参考資料Ⅵ** ..... 284
**あとがき** ..... 289

# トランスクリプトの方法

［　］　二人の発話が重なっている部分を示す。

,,　発話の途中に相手の発話が入った場合，発話がまだ終わっていないことを示す。

：　発話中のコロンは，直前の音が引き延ばされたのを示し，コロンの数は，引き延ばしの相対的長さを示す。

?　疑問符は，直前部分が上昇調で発話されるのを示す。

（　）　短く，特別な意味を持たない「あいづち」は，相手の発話中の最も近い部分に，( )にくくって入れる。

【【　第 1 話者の発話文が完結する前に，途中に挿入される形で，第 2 話者の発話が始まり，結果的に終了した場合，第 1 話者の発話を【【つける。

】】　第 1 話者の発話文が完結する前に，途中に挿入される形で，第 2 話者の発話が始まり，結果的に終了した場合，第 2 話者の発話を】】つける。

＜＃＞　聞き取り不能の部分を示し，＃の数で聞き取れなかった部分の長さを示す。

波線　発話者が笑いながら話していることを示す。宇佐美（2007）では，＜笑う＞という方法で示している。

→　分析において注目する行は左端に矢印を付けて示す。

‹‹文字››　転記者による様々な種類の注釈・説明を示す。

「文字」　直接話法で引用した部分を示す。

…　文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

＝　改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。

# 第1章　　研究目的と論文構成

本章では，本研究の研究対象及び研究目的について述べた上で，論文の構成について述べておきたい。

## 1.1　　本研究の対象と目的

日本語の修復研究は，主に会話分析の手法で行われてきている。それに対して，本研究では，先行諸研究を踏まえながら語用論の視点から記述的研究を試みたい。

まず，研究対象について説明する。会話分析における修復研究では，顕在性の強いトラブルが生じたのを前提とされているため，何らかの間違いが生じたあと起きた修復を対象としている。ゆえに，そのようなトラブルに対処する修復の組織も顕在性の高いものである。しかし，実際の会話では，トラブル(破綻や不首尾と呼んでもよい)がすべて顕在性の高いものではなく，その顕在性の程度が異なっているものとして捉えるべきではないかと考える。そして，破綻や不首尾を未然に抑制する発話から，顕在性の程度(物理的な失行から→理解→受容という順に)それぞれのトラブルを事後解決するための発話まで，トラブルを中心にすれば，こうしたふうに連続的に捉えるべきのではないかと考えている。従って，トラブルの性質に着目して，表 1 のように大まかに分類することができる。

表１：トラブルの性質

| | 話し手サイド | 聞き手サイド |
|---|---|---|
| 発話の形式 | ①産出ミス | ②聞き取り失敗 |
| 発話の内容 | A | ③理解のトラブル |
| 発話のメタ的な側面 | B | ④受容のトラブル |

順調な会話の伝達過程とは，表 1 における①②③④のような不首尾がない場合を指す。つまり，発話が順調に発されたあと，聞き手に正確に聞き取られ，正確に理解された上で受け入れられるということを意味している。そうした場合においては，修復の必要がない。

そして，従来の研究では，修復対象とされるのは①②③であり，本研究ではそれを拡大し，④も含めようとしたい。その理由として，修復は何らかの誤りに依存していないことは既に明らかになってきたため，修復は決して発話の産出と理解の過程にしか現れないものでは

なく，受容過程において問題が生じうる事実が否めない以上，トラブルを解決するのを機能とする修復について考察する際に，それを対象から除外する理由はないからである。

そして，注意してほしいのは，表１の A と B で代表されたものも研究対象に入れるということである。A は話し手サイドが発話を産出する際に，理解上のトラブルを防ぐために事前に行われた方策を指しており，B は話し手サイドが発話を産出する際に，受容上のトラブルを防ぐために行われた方策を指している。本研究では，これらのような方策は，修復行為に対して，調整行為とする。具体的には，A を「情報伝達的調整」とし，B を「対人関係的調整」とする。

総じて，伝達過程を動的に把握するために，「不首尾の少ない会話」という目的が話し手と聞き手に共通しているはずであるという視点から，（１）話し手にもトラブルの抑制を図ることができるとして，話し手によって行われる理解面と受容面とのトラブルを抑制する調整行為と，（２）聞き手が発話の内容を理解する際に生じたトラブルと発話のメタ的な側面を受容する際に生じたトラブルに対処するために，話し手と聞き手によって協力的に行われる修復行為について考察したい。

そして，聞き手サイドのトラブルについて，表 1 の③理解のトラブルと④受容のトラブルを次のように区別する。

- 理解上のトラブルは発話の内容に対する不理解や誤解を指しており，受容上のトラブルは発話のメタ的な側面に対する受け入れ拒否を指している。発話を積極的に受容した場合においては修復が生じずに済むが，消極的に受容した場合，発話内容を受容できなかった場合，もしくはその発話が両者間のフェイス状態の均衡化に悪影響を及ぼしたため聞き手が受容しないという場合などにおいては修復が生じる可能性が高い。
- 受容のトラブルは発話内容を理解したあとの段階に生じるものである。理解上のトラブル(不理解や誤解)が生じると会話を先に進められなくなるのに対して，受容のトラブルが生じても会話を先に進めることはできるため，会話の進行が止まるわけではない。言い換えれば，受容の問題に対処する修復の緊急性がより低いということである。
- 理解上のトラブルと受容上のトラブルが同時に生じる可能性がある。例えば，発話内容を理解できない場合に，その原因が聞き手の知識不足にあることが多いため，こうした不理解を修復するには話し手が知識を提供しなければならない。しかし，こうしたやり方では，相手の知識不足をあらわにすることとなり，相手のフェイスを侵害する行為になってしまう。こうした場合においては，受容の問題が優先的に修復されることが多い。

以上の対象について，本研究では実際の会話例を通して，会話参加者は順調な伝達のために，上記のようなトラブルを抑制する，もしくは解決するためにどのように調整と修復を行っうのか，そのプロセスを動的に捉えてみたい。

次に，研究目的について述べる。

修復に対する研究は基本的に会話分析の手法で行われてきた。串田(2006)では，会話分析の主要目的について，「言語的やりとりにおいて人々が理解可能な形で行為を生成していく方法を記述する」ことであると述べている。つまり，一見無秩序に見える会話であるが，その中において様々な精巧な手続き上の秩序が存在しているという前提に立ち，実際の会話データを観察することを通してその秩序を発見して記述するのを目的としている。この手法を利用して，英語において修復という構造を発見し，次第に他の言語にも同じ構造があると一般化されてきた。

日本語においても修復組織について会話分析という手法を用いて研究がされてきている。しかし，複雑な構造を持っている修復にとって，その機能を考察する必要が迫られている状況の中,組織上の特性を重んじる会話分析の手法だけでは不十分であると言わざるを得ない。修復を分析する際に,実際の会話からしかデータを収集できないので,「会話の構造上の特性や言語使用において実際に何が起っているかを解明するのをトピックの一つとする語用論の視点」(ジェフ.2010)が必要になる。従って，本研究では，日本語における修復について，従来の研究成果を踏まえた上で語用論の視点を導入して再検討を試みたい。なぜなら，語用論の視点を導入するとともにこれまで看過されてきた課題が見えてくるからである。例えば，次のようなものが挙げられる。

- 修復の組織構造だけでなく，修復の機能についても考察すべきであり，組織に関する知見を機能に対する記述と紡ぎ合わせる必要がある。
- 修復組織の特性はトラブルの性質とは独立に存在するものではなく，個々のトラブルに応じた修復組織が生じうる。故に,修復組織も常に顕在的なものではなく，個々のトラブルによってその顕在性の程度も変わってくるというように連続的に捉える必要がある。
- 修復機能を捉える際に，トラブルの性質を問わずに一律に分析するのではなく，マクロ的に見れば同じ機能が備わっているといっても，個々のトラブルに対して具体的な機能が異なっている可能性がある。トラブルの性質(理解のトラブルか受容のトラブルかそれとも両方に跨がるトラブルか)に応じてその機能に対する考察の方法も異なる。

本研究では，上記の研究姿勢を踏まえ，主に四つの目的を達成したい。

第一に，会話分析の手法で研究されてきた修復組織に対する研究成果を整理した上で，日本語の会話例を用いてまとめることである。

第二に，日本語における修復を機能から考察する際に，それと相補的な機能を持つ装置である調整行為も考察対象に入れることを通して，順調な伝達が達成されるためにこの２種類の機能はどのように働いているかについて動的に捉えてみる。

第三に，トラブルの性質によって，理解上／受容上のトラブルに対処するためにそれぞ

れどのような調整と修復がなされるかについて考察することを通して，それぞれに異なる語用論的原理が働いているのではないかということを検証したい。

第四に，修復組織に関する先行研究を参考しながら，修復の開始形式や一部の修復方策について，日本語と中国語の会話資料を利用してその異同を考察することである。日本語においても中国語においても修復に関するこれまでの研究はその組織構成，特に開始の形式や修復実行の方策という課題に重点がおかれている。修復に関する日本語と中国語との対照研究はこれまで考察されていない課題でもあり，修復現象の一般性を検証するための価値があると言えよう。

## 1.2　本論文の構成

本研究は，全体として９章からなる。大きく三つの部分に分けることができる。第Ⅰ部（第１章・第２章・第３章）では，先行研究をまとめた上で，修復と調整に対する基本的な捉え方を確立する。第Ⅱ部（第４章・第５章・第６章）では，理解過程と受容過程に分けて，それぞれの過程に起きうるトラブルを対象として，調整の機能と結びつけながら修復の組織と機能について考察を行う。第Ⅲ部（第７章・第８章・第９章）では，修復開始形式と一部の修復方策に対して，日中両言語の間にどのような異同があるかについて拡張的に考察する。

まず，第Ⅰ部の構成について述べる。第１章では，研究対象／研究目的と論文の構成について述べておく。第２章の「研究の枠組み」では，会話分析から個別に議論されてきた各修復組織について日本語の例を挙げながら再整理した上で，議論が足りないところに対して補足を試みる。そして，本研究の研究方法を確立する。第３章の「修復の機能について」では，修復機能を調整機能と結びつけて捉えてみる。修復と調整との関係に関して，会話の流れにおいて修復機能と調整機能がそれぞれどのような位置づけにあるか，全体的にどのような機能分担をしているかといった問題を明らかにしたい。具体的には，調整の対象について述べた上で，産出・理解・受容の三段階に分けて，異なる性質のあるトラブルに対する調整と修復の働きについて考察する。

次に，第Ⅱ部の構成について述べる。第４章の「理解上のトラブルに対処する修復・調整」では，理解過程において生じたトラブルとして，理解不能と誤解を取り上げて，修復装置の機能について考察する。具体的には，それぞれに対応する修復組織を整理した上で，トラブルの性質に着目し，そのようなトラブルが起きた原因について考える。修復作業はトラブルを引き起こした原因に対処するためのものであり，実際の会話資料を分析するのを通して，修復がどのように働いているかについて考察する。第５章と第６章では受容過程に起きたトラブルを取り上げ，修復の働きについて考察する。受容過程に生じたトラブ

ルとはすべてフェイスに関わるとは限らないため，他の面からも考察する必要がある。そこで，第５章では，発話内容に対して不同意が生じた際に，会話参加者がどのようにその不一致を修復したかについて語用論的視点から考察する。それに対して，第６章では，フェイスバランスの枠組みに基づき，会話参加者間のフェイス状態の均衡化に悪影響をもたらすような行為をどのようにして防ぐか，そして，フェイス状態は均衡化が崩れた，もしくは崩れかけていると認識された場合においてどのようにその状態を元に戻すか，もしくは戻す努力をするかなどの課題について考察を展開する。

最後に，第Ⅲ部の構成について述べる。第７章の「修復の開始形式についての日中対照」では，修復開始形式（自己開始形式と他者開始形式）の特徴について考察する。自己開始形式に関する先行研究は他者開始形式より少ないようであるが，先行研究の成果を整理した上でその不足を補うことを目指す。第８章の「自己修復方策の一部に対しての日中対照」では，「同一ターンにおける自己修復」と「他者開始・自己修復」といった組織に使われる自己修復方策に対して，日本語と中国語とでの異同について考察を行う。

以上より，本研究では，三つの部分に分けて展開していきたい。

第一に，先行研究の提示と吟味を通じて，研究の枠組みを明らかにする。

第二に，修復の機能について，調整の機能を視野に入れながら産出・理解・受容というトラブルの性質に分けて考察する。

第三に，自己修復方策という課題に対して日中対照をする。

以上の本論の後に，本研究の締めくくりとして第９章の「全体のまとめと今後の課題」を置き，全体をまとめた上で，残された今後の課題について触れることにする。

# 第2章 先行研究の検討と方法論的枠組み

本章では，本研究の考察を行うにあたって，研究の視点や研究の背景について述べた上で，修復行動の概念や組織について整理することにする。また，研究方法として，研究対象の拡張や語用論視点の導入及び本研究で使用する分析資料などについて述べる。

## 2.1 研究の背景

まず，研究の視点によって，会話分析の手法から行われてきた研究を概観した上で，語用論の視点から行われた研究についてまとめる。次に，日本語／中国語における修復研究に対して，本研究と関連性の高いものを整理する。

### 2.1.1. 会話分析における修復に関する先行研究

会話修復（Conversation Repair）は従来会話分析（Conversation Analysis）の一分野として研究されている。先駆的な研究として挙げられるのは Schegloff, Jefferson & Sacks（1977：以下では SJS（1977）と略称する）である。また，アメリカ英語における修復行動の組織を検証するものとして（SJS 1977；Schegloff 1979,1992）が，修復と統語構造との相互依存性についての研究として（Schegloff 1979；Hayashi, 1994；Fox et al.,1996; Fox et al.,2009; Fox et al.,2010)がある。また，後者は SJS(1977)での修復組織に基づき，「自己開始された修復」という類型に限定し，修復開始部分のテクニックに関しての異言語間の比較研究でもある。さらに，「他者開始された修復」という類型に限定し，その組織／他者開始形式及び機能，修復のストラテジーなど修復行動の細部に目を向けている研究者もいる（Norrick,1991;Drew,1997; Jefferson,2007;Jan,2008）。また，語用論の視点からトラブル源の性質について検討を入れた研究もある（Bosco et al,2006)。

そして，英語以外の言語における修復行動に関する研究も多くあり（Moerman,1977;Besnier,1989 など），特に中国語の修復に関しては，Liang(1995)，Chui(1996)，Zhang(1998)，Yang(2006)などが挙げられる。日本語に関する研究についても，串田（1995），増井（2005），西阪（2007），Suzuki(2008)，都（2009），宮永（2009）などが見られる。ただ，英語以外の個別言語における修復に対する研究は殆ど SJS（1977）の枠組みで行われてきたため，ここでは，まず SJS(1977)をはじめとする英語における研究を概観することにする。

SJS(1977)をはじめとする会話分析の視点から考察を行う研究では，修復行為の組織に対

しての分類がほぼ一致している。修復行為を開始する側と修復を行う側が常に同一人物ではない点から，まず「自己開始」か「他者開始」かによって区別し，更に「自己修復」（self-repair）と「他者修復」（other-repair）の視点から区別している[1]。こうした分類に基づき，トラブル源の性質や修復開始部分におけるテクニック，修復開始の位置などある側面を対象にする実証的研究が行われている。ここでは，SJS(1977)とその延長線にある研究，ある面でそれを超えた研究という三種類に分けて紹介しておきたい。

#### 2.1.1.1. SJS(1977)

SJS (1977)では，修復に対して明確な定義を示さなかったが，その全体を通して，修復とは訂正(error-correction)より広い概念であり，発話の産出・聞き取りと理解に関わるトラブルに対処すべきものであると理解できる。修復現象を系統的に論述する最初の著作として，その重要性は言うまでもない。その後行われてきた修復の研究は彼らの影響を受けるところが大きい。SJS (1977)では修復について主に３つの面に分けて論が進められている。

① 修復の基本組織形式に対して分類を行ったこと。
② 自己開始と他者開始及び両者の関係に関して考察を行ったこと。
③ 自己訂正の優先性及びそれを支えるメカニズムを探究すること。

結論から言えば，まず修復の組織を＜自己開始・自己修復＞＜自己開始・他者修復＞＜他者開始・自己修復＞＜他者開始・他者修復＞の４種類に分類した。

次に，修復開始の位置について考察を行った。具体的には，自己開始は＜トラブル源と同じターン・トラブル源を含むターンの順番移行場所（TRP）・トラブル源から数えて３つ目のターン＞という３つの位置で起こりうるとし，他者開始は＜トラブル源の次のターン＞という１つの位置にしか生じないということを示した。このことについて，Schegloff et al. (1974)， Schegloff (1992)及び Suzuki(2010)に基づき，修復の各組織類型及びそのフォーマットを表２としてまとめた。

[1] 自己開始と他者開始，自己修復と他者修復，二つの区別を組み合わせると，「自己開始・自己修復」「自己開始・他者修復」「他者開始・自己修復」「他者開始・他者修復」という４種類が得られる。

表 2．英語における修復組織類型のまとめ

| 主要類型 | 下位類型 | フォーマット（最も単純な場合） |
|---|---|---|
| SISR(Self-Initiation Self-Repair　自己開始自己修復） | ⅰ.同一ターンでの SISR | T1（話し手が発話の産出過程でトラブルを意識し，修復実行） |
| | ⅱ．TRP での SISR | T1(T1 が TRP に至ったあとトラブルを意識し，修復実行） |
| | ⅲ.第三順番での自己修復(Third-turn Repair) | T1（トラブル源）<br>T2（T1 に対する連鎖上適切な発話）<br>T3（T1 の発話者が T1 を修復する） |
| | ⅳ.第三位置での自己修復[2](Third-Position Repair) | T1（トラブル源）<br>T2（T1 に対する誤解発話）<br>T3（話し手が T1 を修復する） |
| SIOR(Self-InitiationOther-Repair 自己開始他者修復） | T1(話し手がトラブルを認識し修復を開始したが,完成しなかった）<br>T2（聞き手によって修復完成） | |
| OISR(Other-Initiation Self-Repair　他者開始自己修復） | T1（トラブル源）<br>T2（聞き手が T1 或はその一部に対して修復を要請する）<br>T3（T1 の発話者が T1 を修復する） | |
| OIOR(Other-Initiation Other-Repair 他者開始他者修復） | T1（トラブル源）<br>T2（聞き手が T1 或はその一部に対して修復実行） | |
| | ⅴ．第四位置での修復[3]<br>(Fourth-Position Repair) | T1（トラブル源）<br>T2（聞き手が T1 に応答する）<br>T3（相手に「T2 が誤解のもとで発された」と認識させる）<br>T4（T1 に対して再応答する） |

また，SJS (1977)では開始のテクニックに関して，自己開始には＜中途停止・音の伸び・言いよどみ＞など，他者開始には＜a.「え?」「何?」等のような無限定の質問マーカー b.

[2] 第三順番での自己修復は「自己開始自己修復」という組織類型の下位類型であるという主張は見られるものの，第三位置での自己修復は同じであるかどうかについては議論されていないようである。本研究では，ⅲとⅳのように，聞き手が連鎖上適切な反応を示し，言い換えれば，聞き手としては，何らかの問題が生じていると認識していない，少なくとも，その反応だけからは判断できない場合に関して，修復開始が話し手自身によって起こしたものとして，いわゆる自己開始自己修復として位置づけない。

[3] 話し手のトラブル源に当たる T1 から数えて四つ目の位置で，聞き手によって修復を行うという点から，本研究では，＜第四位置での修復＞を他者開始他者修復というカテゴリーに入れる。

「誰?」「どこ」などのようなカテゴリの限定を伴う質問マーカー c. トラブル源の一部を繰り返し＋試行標識 d. トラブル源を繰り返し e. 修復候補を提示する＞という 5 種類を挙げた。

さらに，SJS (1977)において，「修復の自己開始は自己訂正を導く。……（中略）……修復の他者開始も自己訂正を導く。…自己訂正と他者訂正はあれかこれかの選択肢ではない。会話における修復の組織は，むしろ，何よりも自己訂正へと至る道筋として，自己開始と他者開始という 2 つの選択肢がある」（西阪 2010：216）という，自己開始自己修復という類型の優先性を示した。

このように，SJS(1977)では結論を出したが，他にも多くの研究課題が潜んでいるとも示唆した。そして，トラブル源とは何かについて，発話の産出と理解において生じる問題であると述べているが，「トラブル源の理論的定義を避けたにもかかわらず，暗に，一定の対象の切り取りを行っている」と串田(1995)で指摘したように，トラブル源の性質について十分な議論をしていないと言えよう。そして，他者修復より自己修復が優先されるという組織を会話に既定的なものとして自己修復の優先性を提案したが，修復組織の優先性においては他の可能性もあると反論を行ったものもある(Norrick,1991)。

以下では，その未解決の課題を取り上げたいくつかの先行研究を概観してみる。

#### 2.1.1.2. SJS(1977)の延長線にある研究

本節では，主に Norrick(1991)，Drew(1997)と Hayashi et al.(1994,1996,2009)を中心として紹介する。

まず，Norrick(1991)では，SJS(1977)で提唱された自己訂正の優先性が疑わしいとする指摘を行った。その立場とは，SJS(1977)で提案された修復の組織が既に多くの研究者に認められた状況のなか，それを批判するやり方が「非生産的」であるものの，彼らの結論がアメリカ英語社会から取り出したデータに基づいているため，その普遍性を証明するには，異なる性質のデータを使って検証する必要があるというものである。そこで，Norrick(1991)は他者訂正(other-correction)という類型に限定し，会話参加者の〈自分の立場に対しての認識〉と〈共通のコミュニケーション目的〉に着目しながら，「親子会話・教師と生徒の会話・母語話者と非母語話者の会話」という「明らかに地位が不均等で且つ一方の背景知識が他方より多くある」という性質が備わっているデータを利用して，次の傾向を指摘した。

“It shows that they negotiate such corrective sequences from one context to the next based on their respectively abilities to complete the correction, rather than adhering to the so-called ‘preference for self-correction prosposed by Schegloff et al.(1977)”（p59）

また， Norrick(1991)では，会話参加者の地位が非対等で，且つ片方の背景知識が足りないという特徴がある親子会話においては，自己訂正が優先されていないという現象を指摘した上で，他者訂正とフェイス侵害行為(FTA)との関係について論じた。上記の３種類のデータの性質によってフェイス侵害度が軽減されたにもかかわらず，もし対等地位にある且つ同じぐらいの背景知識を持つ母語話者の会話であれば，FTA が深刻になりうると述べている。それは，聞き手にとって話し手の発話を訂正する正当な理由が「誤解」と「相手の発話に間違いがあると確信を持っている場合」という２種類しか残らないからであり，もしそうした場合でないと，両者間のバランスが失われる恐れがあると主張している。

しかし，この論文で扱われるのは「修復」ではなく「訂正」であるということは問題があるのではないかと思われる。訂正は何らかの間違いに対するものであるが，トラブルとは必ずしも間違いとは限らないため，ゆえに他者訂正と比べて他者修復の範囲がより広いと言えるため，他者修復においても同じような特徴が見られるかについて考察が必要である。

次に，Drew(1997)では，SJS(1977)であまり議論されなかったトラブル源の性質とある種の修復開始のテクニックについて考察した。

SJS(1977)では，他者開始の場合，話し手は「トラブル源を含む発話の一部を繰り返す」というトラブル源を特定するテクニックを用いることもあれば，「What?」「Pardon?」などのトラブル源を明言しないテクニックを使用することもあるということを述べている。著者は後者を「非特定的他者開始形式(‘open’ class repair initiators)」（本研究では，‘open’ class repair initiators を「非特定的他者開始形式」と訳す）と呼び，それに限定して出現環境及び性質に関して考察を行った。

「非特定的他者開始形式」の出現環境に関しては，①単純に相手の発話を聞き損ねた場合，②トラブル源を含む発話がその先行発話と関連性がない，もしくは聞き手にとってその発話が当の話題から脱線したと確信する場合，③聞き手にとってトラブル源を含む発話が当面の話題から逸脱していないものの，その前の発話の返事発話としてあまり適切ではない場合，という３種類を挙げているが，Drew(1997)は後者の２種類に絞っていた。

その性質について２点に分けて述べている。第一に，「SJS(1977)では，他者開始の形式には「トラブル源を特定する能力(capacity to locate a repairable)」によって相対的な強弱性があり，強い開始形式のほうが優先されている」(p369 : 筆者訳)という指摘である。そして，「(強い)非特定的他者開始形式を使うこととは，相手に元の発話あるいはトラブル源がありそうな部分を再解釈してもらうように要請する行為になるため，修復するためにかかる労力が大きく，相手にかける負担も最も大きくなり，こうした開始形式は聞き損ねたり，理解できなかったりする場合にしか使われない」(p97 : 筆者訳)という Clark et al.(1987)での主張に

賛成せず，非特定的他者開始形式の最大の機能とは「聞き手が聞き損ねたり理解できなかったりすることを表明するのではなく，相手の注意をトラブル源が含めうる発話全体に仕向ける」(pp. 97–98)ことであると述べている。第二に，この種の開始形式を引き出すトラブル源は直前の発話だけでなく，連鎖的な発話に導かれる可能性があるという指摘である。日本語におけるこうした無標の他者開始形式の特徴に関しては，その言語形式やトラブルを特定する強弱などに限定して第 7 章で詳述する。

更に，Hayashi et al.(1994, 1996, 2009)について述べる。これらの論文はいずれも異言語間比較研究の視点からなされたものである。

まず，Hayashi(1994)では，統語上の違いは修復組織にどのような影響を及ぼすかという課題を解決する為には異なる統語構造を持つ異言語間の比較研究が必要であると述べ（p. 78)，英語と日本語における修復組織について対照分析を行っている。

結論としては，①形態論的視点から，日本語には動詞や形容詞，助動詞などの活用形式が複雑であるため，例えば，接尾部分を間違えたことで生じたトラブルに対処する際に，間違った部分だけ繰り返すことで修復が実現されるという点で英語と異なっている。②統語的視点からみれば，「繰返し」という方法で修復する際に，英語では「主語＋動詞」という単位で繰り返されるのに対して，日本語では動詞だけ繰返される。そして，日本語ではトラブルを含んだ名詞句だけ繰返されるが，英語ではその名詞句を含む節まで繰り返されるという現象が発見された。その他共通点として，トラブル源と同じ性質を持つ単語で言い換えたり，前置き表現でその直後で行う修復行動を予告する手法を用いたりすることが挙げられた。

次に，Hayashi et al.(1996)では，修復行為の統語構造に目を向け，日英語の統語構造の違いによって「同一ターン修復行為」の構造が異なってくることについて述べられている[4]。同論文では，ある日本語の会話例を取り上げ，トラブル源が生じた原因・修復行為の意義と効果など表面構造の裏にあるものを追究した。著者は語用論には触れていないが，その分析過程を観察してみると文脈状況と結びつけてそのメカニズムを説明していることから，語用論のアプローチが用いられていることが分かる。次の例文を参照されたい[5]。

例 1＜Hayashi et al.1996＞T と H は共通の友人である深谷の妹さんに関して会話している場面。

---

[4] 例えば，same-turn self-repair という類型の修復において，日英語の形態的構造の差異によって修復開始部分の特徴も異なってくると指摘し，下記の例で説明した。
(英語)[Why don't y--*]Why don't we just do it right now?
(日本語)ja nanji goro ni kurida[shi-*]soo?

[5] 分析対象に当たる部分を→で示す。

1T　　いくつなんですか?妹さんって。
2H　　妹さんは 20…
3T　　ああ，そんなに大きいのか。
4H　　5?
5T　　25?
6H　→　で，またね，体格も深谷より[デケ-](0.8)足は少なくとも深谷より長いの。
7T　　ああっ！大きい。
8H　　170 ね。
9T　　えっ?いいなあ。
10H　　いくつぐらいあるんだよ。確か，妹さん…
11T　　そんなに年が近いのか。
12H　　うん，で，身長も 2，3 センチしか確か違わないかぐらいなんだよ。
13T　　すごい，大きいね。

同論文では，トラブル源の形成とそれに対応する修復行動の意義について詳しく述べている。以下では，簡単にまとめる。

同論文では，１行目から修復が行われる6行目までの会話の流れから，修復行為の原因について述べられている。3行目の「大きい」という表現は「年齢が大きい」と「体格が大きい」という二通りの解釈が可能であるため，これは6行目での修復行動の原因(source)である。Hは妹さんの年齢を伝えた後，もう一つの解釈にあたる「体格」について言い出したが，形容詞述語文(デケ)を終える直前で，TRPに至りそうなところで修復行動を行った。この一連の行動に関してどのように理解すべきか著者たちは分析を行った。

まず，6行目での修復行為についての意義として，2点を挙げた。一つはこの修復行動を「訂正」(error correction)として捉えることである。「体格がデカい」と言ったら，妹さんが深谷より物理的に大きいという意味になってしまう。しかし，12行目から分かるように，Hは妹さんが深谷より背が低いため，「デカい」という言葉自体が誤解に導きうる。そこで，誤解を防ぐために修復を行ったわけである。もう一つは，「訂正」とするだけでなく，「修復対象(トラブル源)」(repairable, ここでは「でけ」を指す)を先行部分(3行目)とコヒアランスを保つために行われた意図的な行為として捉えられることである。5行目までは表面上「妹さんの年齢」に関するやりとりであるが，Hを体格の話に導くのは3行目での「大きい」という言葉による潜在的な意味であった。Hの意図する話題が「妹の体格が大きい」であり，そこで，「でけ」という表現には二つの話題の間にクッションを入れ，意味上関連を持たせるという働きがあると指摘された。

なぜこの「でけ」はトラブル源になったのかに関しては，以下の2点を挙げた。一つ目は「体格」という表現から伝達された言外の意味によることである。体格という表現には,「垂直的にも水平的にもサイズが大きい」というニュアンスがあるため,「妹さんがだいぶ太っている」という推意が生じかねない。これを取り消すために修復を行った。二つ目は「深谷より」という比較表現にあるという。6行目での「体格も深谷よりデカい」という表現は事実に合わない(12行目で分かる)ため，もし「体格もデカい」という表現にしたらそれほど問題にならなくなると指摘している。つまり，同論文では，修復の類型だけでなく，トラブル源の成因や修復に導かれるプロセスなどについても分析を行っている。

最後に，Hayashi et al.(2009)では，異言語間の比較研究という視点から修復開始の位置について 7 言語を対象に考察を行った。結論としては,「同一ターンにおける自己修復」というタイプについて，①異なる修復タイプには異なる修復開始形式がある，②修復対象の単位は修復開始の位置に影響を及ぼす重要な要素である，③七つの言語のうち，四つの言語(英語・インドネシア語・日本語・フィンランド語)において,「置き換え」という修復のストラテジーが常に「認識可能の完結」(recognizable completion)の前に行われるのに対して,中国語ではよくその後で行われるという特徴が見られる,という 3 点にまとめたのである。

以上より，英語における修復に対する一部の研究成果について，SJS(1977)を中心軸として整理した。SJS(1977)の延長線に位置づけられるものとして，Norrick(1991)，Drew(1997), Hayashi et al.(1994, 1996, 2009)があり，これらは SJS(1977)での結論の一部に対して反論を行ったり，十分討論されなかった課題に対して深く掘り下げたり，SJS の成果はアメリカ英語に見られる現象にすぎないという批判に応じて異言語間比較研究をするものである。これらの研究を眺めてみると，SJS(1977)が既に 40 年前も書かれたものだが，その中で提示された未解決な課題やその成果の普遍性を検討するなどが未だ残されていることが分かる。

本研究では，これらの先行研究の成果を踏まえて，例えば，Norrick(1991)で考察したフェイスと修復との関連性、Drew(1997)で考察した各種の開始形式の使用状況、Hayashi et al.(1996, 2009)で示した対照研究の成果について，本研究の視点から更なる考察を行いたい。

### 2.1.2. 語用論の視点からの研究

本節では，語用論的視点から行われた修復に関する研究について述べる。具体的には，認知語用論のアプローチからトラブルの性質について考察した Bosco et al (2006) ，他者開始形式に階層性があることを示唆した Jan(2008)と，ポライトネスの視点から＜他者開始される修復＞を考察した Ferečník, M. (2005)を中心に紹介する。

#### 2.1.2.1. Bosco et al(2006)

Bosco et al(2006)では，伝達の不調及び修復について認知語用論の視点から考察が行われている。まず，グライスの理想的伝達の定義にならい，伝達の不首尾とは，「聞き手の精神状態を意図通りに修正することに失敗した話し手の試み」（an unsuccessful attempt by the actor to modify the partner's mental states in the desired way）であると示した。伝達の不首尾が理解過程のいずれの段階においても生じうる現象であり，聞き手の返事によって話し手に自分の失行を認識させることができ，こうした認識が失敗を修復する起点でもあると指摘した。具体的には，a．failure of the expression act，b．failure of the actor's meaning，c．failure of the communicative effect という三段階における伝達の不首尾について考察している。この三種類の不首尾について，次にように述べている。

a. Failure of the expression act occurs in the first phase of the comprehension process, and consists in the partner's failure to comprehend the expressive value of the utterance.This failure can be due to either a non-comprehension or to a misunderstanding. In the case of non-comprehension the partner does not detect the move proposed by the actor, for example because he does not hear what the actor says. In the case of misunderstanding, what the partner recognizes is different from what is uttered by the actor.(p.1404)

b. Failure of the actor's meaning occurs in the second phase of the comprehension process; it consists in a failure, on the part of the partner, to comprehend the behavior game bid by the actor. The failure can be either a non-comprehension or a misunderstanding.(p.1405)

c. Failure of the communicative effect occurs in the last phase of the comprehension process of a communicative act; it does not involve the detection of a mismatch. The partner understands both the expression act and the actor's meaning, but he does not modify his mental states in the way the actor desires, that is, he refuses to adhere to the actor's goal.(p.1406)

そして，異なる不首尾に対する認識の困難度（difficulty of recognition）について，a＜b＜c の順に大きくなると主張している。また，話し手が伝達の不調を修復する際に用いるストラテジーが不首尾の類型と深く関わっており，複雑度が a＜b＜c の順に簡単なものから複雑なものに変わっていくこと[6]も指摘した。

要するに，Bosco (2006)では他者開始・自己修復という類型に限定し，**聞き手側**の視点から，理解過程を発話の聞き取り・発話意味の解釈・発話意図の受容という三つの段階に分けて，各段階に生じた失行を対象として分析を行った。

---

6　例えば，a について，失敗した部分をそのまま言い直すことで修復可能であるのに対して，b を修復する際に，異なる発話形式で言い換えるストラテジーを講じる必要がある。c を修復するのは最も困難で，それは修復側が相手の動機・欲求等を考慮しなければならないからである。

#### 2.1.2.2. Jan(2008)

Jan(2008)では，他者開始のテクニックには階層性があるということに関して考察を行っている。まず，先行研究を踏まえて２種類の階層性が指摘されたことを述べた。一つは「トラブル源の特定程度」というものであり（SJS,1977; Clark&Schaefer,1987），もう一つは「修復行為を引き出す程度」（Pomeramtz,1984; Schegloff,2007 など）というものである。同論文では後者について２点に分けて論述を行っている。まず，異なる他者開始のテクニックと異なる性質のトラブル源（聞き取りのトラブル・理解のトラブル・受容のトラブル）との間の対応関係について量的統計をしたところ，他者開始・自己修復という類型において，修復開始部分では聞き手がトラブル源を受容のトラブルより聞き取り・理解のトラブルに偽装する傾向があると結論している。

開始部分におけるこうした階層性についてフェイスの視点から解釈できると指摘した上で，聞き手が受容の困難があるという認識を持っている時，聞き取りのトラブルが生じたと偽装する[7]テクニックを使う傾向があると示した。そうした手段を取るにはいくつかの利点があるとも述べている。その利点とは，開始側が先行発話の意味を理解するのに少し時間を稼ぐことができる点，相手に先行発話において理解困難や受容の問題等が生じたかどうか点検させる機能がある点である。このような利点から，直接的に受容の困難を示すテクニックを使うよりフェイス侵害度が軽減されると述べている。つまり，Jan(2008)ではトラブルの性質により開始テクニックが異なっている可能性を示唆している。

それに対して，Drew(1997)では，トラブルの性質と開始テクニックの間に対応関係があるかどうかに関して，次の内容を引用して述べている（p. 96）。

There is no single, determinate relationship between a particular source or kind of trouble, and this (or any other) form of repair initiation.(Schegloff,1987:216-217)

よって，トラブルの性質と開始テクニック（開始形式）との間に対応的関係があるかについて日本語の会話例を通して検証する必要があると考えている。

#### 2.1.2.3. Ferečník, M. (2005)

Ferečník,M.(2005)では，Brown&Levinson(1987)（以下，B＆L(1987)で提示する）のポライトネスの枠組みを取り入れて，ラジオでの視聴者参加番組における他者開始された修復について分析を行った。

まず，修復とは「会話過程において生じた聞き間違い・聞き損ない・言い間違い・誤解・

7 2.1.2.2 で示した Drew(1997)の「非特定的他者開始形式」という概念に近い。例えば，「何?」「すみません，よく聞き取れなかったんで」などの形式が聞き取りのトラブルに偽装するときのテクニックとして使われうる。だが，こうしたテクニックそのものは理解や受容にトラブルが生じたのを示さない(Jan,2008:p347)。

自己表現整理・適切な言葉探し・用語特定・事実上の誤りなどのトラブルに対処する効果的な装置である」(p. 69)という定義を示した。

同論文では，4種類の修復類型についてデータでの出現頻度を調べたところ，SISR>OIOR>OISR=SIOR[8]という順序が観察された。その他，他者開始・他者修復という類型についてポライトネスの視点から考察を行い，こうした類型の修復は常に会話参加者両方が何らかの対立状態において生じうるタイプであると指摘し，相手の発話を修復する行為が相手の自由を脅かし，時には相手の知識状態の質に不足があると挑戦するものになりうるため，B&L(1987)で提唱された「消極的面子」(negative face：他者に干渉されない自由を持つという欲求)を侵害したものであると主張した。面子侵害度を軽減するためには話者が negative politeness という面子侵害軽減策(B&L(1987)では主に積極的フェイスに働きかける positive politeness と消極的面子に働きかける negative politeness という2種類に重点を置いていた)を講じるはずだと予測したが，実際のデータを観察したところ，「会話参加者は自由に他者開始・他者修復という行動を施している」という対立した傾向が見られたということである。なお，自己開始・自己修復という類型と比べて，こうした修復組織があまり好まれていないものであるため[9]，修復実行の部分には遅延や繰り返し，垣根表現，言いよどみなどの現象が見られるということも示した。

英語においては，SJS(1977)で提案された4種類の修復組織のうち，自己開始・自己修復という類型が最も優先されているという選好性があるとされている。これは既に共通認識になっていると言えよう。同論文では，ポライトネスの視点から＜他者開始される修復＞について考察したことを通して，こうした共通認識に対して，異なる視点から見れば異なる可能性もあるのではないかという姿勢を見せた。

#### 2.1.2.4. まとめ

語用論の視点からの研究として，Bosco et al(2006)，Jan(2008)，Fereník(2005)を挙げた。これらの先行研究から以下の2点を取り上げてまとめる。

まず，トラブルの性質について考察した Bosco et al(2006)から非常に大きなヒントが示されている。それは，トラブルを捉える際，発話行為の聞き取りに生じた失行・発話意味の理解に生じた失行・発話意図の受容に生じた失行という三つの段階に分けるという考えである。ただ，これらを理解のプロセスに位置づけるべきかどうかについては，まだ検討の余地があるのではないかと考える。なぜなら，発話の産出と聞き取りに問題が起らずに，

---

8 それぞれ，自己開始・自己修復(self-initiated self-repair, SISR)／他者開始・他者修復(other-initiated other-repair, OIOR)／他者開始・自己修復(other-initiated self-repair, OISR)／自己開始・他者修復(self-initiated other-repair, SIOR)というものに対応している。

9 これは SJS(1977)での結論をそのまま採用したものである。

聞き手の理解においても不理解や誤解など生じない以上，理解のプロセスが既に成功したと言えるからである。聞き手側が発話意図を受け入れないというトラブルは理解の段階の後に生じたものとして位置づけるべきだと考える。これに関しては，西阪(2007)では，SJS(1977)の考察対象には，「礼儀に反する行動をたしなめることや，意見の食い違いをただすことなどは含まれていない」という指摘もある。そこで，本研究では，このようなものを＜受容上のトラブル＞として視野に入れたい。

次に，これらの先行研究には「階層性」という視点を持っている点で共通している。例えば，Bosco et al(2006)では「異なるトラブル源に対する聞き手の認識の困難度」や「話し手が伝達の不調を修復する際に用いるストラテジーの複雑度」において段階性があると指摘した。また，Jan(2008)では「他者開始のテクニックには階層性がある」と示した一方，Ferečník(2005)では「出現頻度の視点から SISR>OIOR>OISR=SIOR という順序」が見いだされたと報告されている。つまり，彼らは，トラブル源の性質・開始テクニック・修復のストラテジー及び全体的な修復組織の分布はいずれにおいても，ある種の「階層性」が存在している可能性を示している。

このような語用論的視点を取り入れて，階層性の有無という角度から各種のトラブルの性質を捉えた上で，それらに対処する日本語の修復行為について考察したい。次節では，日本語における幾つかの先行研究を取り上げて述べる。

### 2.1.3. 日本語における先行研究

ここで取り上げる研究はいずれも SJS(1977)の延長線上に位置づけられるものである。というのは，串田（1995），西阪（2007），鈴木（2008）と Suzuki(2010)はいずれも会話分析の手法で行われているものである。

#### 2.1.3.1. 串田(1995)

串田(1995)では，会話におけるスムーズなトピック推移(「トピック性の漸進性」とも呼ばれている)と修復行動との関連について考察を行った。同論文の研究目的については，①Schegloff らによって行われてきた修復に関する研究における「修復活動」(repair)に対する定義を修正すること，②会話におけるトピック推移に対しての先行研究を批判し，新たな捉え方を導入すること，③従来議論が分かれていた‘repair’と‘remedy’という２つの概念を統合することの３つにまとめることができると考える。

まず，①に関しては，Schegloff et al.(1990)における修復の定義について，「修復とは会話において話すこと，聞くこと，理解することにおいて繰り返し生ずるトラブルに対処するあらゆる営みを指す」と述べている。具体的には，「順番取りの失敗・違反，言い間違い，

聞き損ない，誤解，適切な言葉探し」(串田 1995:3)等のトラブルに対処するものが修復として研究されてきたと指摘した。しかし,「トピック性との関係を論じたものはまだ少ない」(p. 3)ため，このことも修復の対象として考察する必要性があると提案した。

また，会話分析における修復とトピックとの関係について,「修復活動の開始はトピック性の一時的保留であり，……（中略）……修復活動の完了／成功が定立し損なったトピックの最定立を意味し，続く発話は「その」トピックについてのものになる」(p. 3)と指摘した。これに対して，串田(1995)では「会話中に修復が開始された場合，その後のシークエンスの進む方向がどのような局域的組織化によって決定されるか」(p. 3)で切り出し，二つの会話断片を分析することを通して，トピックの推移という現象を含んだ会話における修復が開始された後の発話連鎖において，修復開始部分が長引く現象及びトピック推移が修復実行部分によって実現される現象などを観察している。そして，修復開始に後続するシークエンスはトピック再定立のシークエンスだけでなく，トピック推移をもたらすシークエンスになることもあるという結論に至った。

さらに，'repair' と'remedy'という二つの概念を修復の概念に統合することを提案している。Goffman の相互行為儀礼論の中心概念である'remedy'(「面子への脅威」に関わるトラブルに対処するもの)は Schegloff らに提唱された'repair'(「話すこと，聞くこと，理解することにおいて生ずるトラブルに対処するもの」の概念に含まれていないことに対して，両概念の中にそれぞれ他方との接合点[10]が含まれているとして，'remedy'という概念を従来の修復活動(repair)の対象として取り入れることを提案している。

#### 2.1.3.2. 西阪(2007)

西阪(2007)では，修復のある側面に限定し,「修復の開始及び修復の操作は，修復だけではなく，様々なことを行いうる」(p. 141)という目的で考察を行った。つまり，修復行為の組織だけでなく，修復の機能に着目して考察を行ったのである。

その対象は，まず，SJS(1977)で分類された修復類型の一種，いわば他者開始・自己修復という類型に限定したうえで，他者が「トラブル源(或は一部)をつまみ出して繰り返す」というテクニックを用いて修復を開始し，且つ，修復側(自己)は「部分的繰り返し」というストラテジーで修復を実行するというパターンに限定されたのである。

結論としては，修復開始においてつまみ出された部分が先行発話の主眼である可能性が高く，且つ修復開始と全く同じである修復実行表現には「主眼であることと確認すること

10 'Remedy'というのは「面子への侵害」という概念に関わっている以上，あらゆる発話が状況を変えれば面子を侵害する行為になりうるという遍在性と,「会話の構造にとって基本的だとし，あらゆる発話が修復を受けうる」(Schegloff et al.(1990))という'repair'の遍在性と，接合点にすれば両者を統合する可能性があるという主張である。

を行う」という機能があると主張している。

また，修復開始における「部分的繰り返し」というテクニックで対処するトラブルにはある種の順序がある(①聞き取りのトラブル，②言い間違い／勘違いのトラブル，③ある表現の不確かさ，④発話全体の不確かさ)ため，修復側が「より弱い修復」(番号の小さい方に対処するもの)から「より強い修復」(番号が大きくなる方に対処するもの)を順次的に提示するという階層性のある手法で修復を実行する傾向があると示している。

具体的に関連する課題とは，修復開始技法には弱いものと強いものがあるということがある。トラブルを特定する時に，修復開始形式には強弱性があるかどうか，日本語においてどのように体現しているのかについて，本研究では日本語の会話例を通して考察したい。

#### 2.1.3.3. 鈴木(2008)・Suzuki(2010)

鈴木(2008)では，統語的視点から議論されてきた「文法項の省略」を相互行為的視点から捉え直した。同論文では，「文法項の省略」に関して，「言語形式の面から省略のある発話を規定するというアプローチを取らずに，会話の当事者たちにとっての「なにかがかけている発話」を探索する」ところから始めた。その結果，会話の最中に，「疑問詞＋格助詞」という決まった表現を伴って開始される他者開始修復を通して，ある発話に「なにかが欠けている」性質が付与されると同時に，その欠けた部分を補習する作業が行われるということが分かった。そして，注意すべきところとして，「トラブルあっての修復なのか，それとも修復あってのトラブルなのか」ということに対して，「実際には特定の発話が修復のターゲットとなることで初めて，そこに何かしらのトラブルがあることが顕在化される」(p. 72)という基準を示したことが挙げられる。

Suzuki(2010)は会話分析の手法で，＜他者開始修復＞という現象を手がかりとして，相互理解に達成するプロセスについて考察したものである。同論文では，主に次の三点をめぐって議論を展開した。①英語における修復研究の成果を踏まえて修復の各組織を紹介した上で，日本語における他者開始修復の組織や運用状況について議論した。②＜文法項の省略＞と他者開始修復とのつながりについて論述した。③会話参加者の知識状態が修復の遂行に関与するかという問題点から出発し，修復開始した側が当面の事柄についてよく知っている場合と知らない場合とでは，他者開始修復の実態が少し異なっている現象を示した。

#### 2.1.3.4. まとめ

まず，日本語における修復に対する研究では，英語で行われた諸研究の不足を回避しようとする姿勢が多かれ少なかれ見られる。例えば，串田(1995)では，SJS(1977)をはじめとする研究における修復の範囲を広げるために，従来の受容トラブルが含まれていない‘repair’の概念に，受容上のトラブルを指す ‘remedy’という概念を取り入れ，また，トピックの推

移過程に生じるトラブルに対処する活動も範囲に入れるべきだと主張している。

次に，西阪(2007)のトラブル源の性質及び修復実行部分においてある種の順序をなしているという指摘は英語における研究の流れと一致しているが，細かく研究対象を限定した[11]ため，他の部分や類型においてはどう体現しているのかについて更なる考察が必要である。

さらに，鈴木の一列の研究では，「他者開始修復は，基本的には発話の聞き取りと理解の問題を解決するために遂行される」（Suzuki,2010: ⅱ）という立場を取っている。この認識は従来の研究と一致しているが，相手の発話を理解した後の段階に生じうるもの，いわゆる受容上のトラブルについては言及されていない。

日本語における修復に関する先行研究はいずれもある側面に限定しているものであり，全面的な考察は管見の限りまだ知られていないようである。本研究では，英語の修復に対する研究を踏まえながら，修復の対象を拡張し，会話分析で得られた知見を取り入れた上で，語用論的視点から考察したい。上記の姿勢を踏まえた上で，本研究における研究方法や分析資料について述べる前に，中国の修復行為に関する研究を簡単にまとめる。

### 2.1.4. 中国語における修復に関する先行研究

中国語の修復に関する最初の研究が Liang(1995)であり, その後の研究として, Chui(199　6), Zhang(1998), Tseng(2006), Yang(2006), Tang(2010,2011)などがある。

まず，Liang(1995)は修復方策のパターンを三種類（繰返し／置き換え／再構成）にまとめた上で，異なる言語において同じような修復方策が使用されていると示唆した。それに対して，Chui(1996)では，修復方策のパターンを六種類（repetition/completion/replacement/addition/reordering/abandonment）にまとめた上で，異なる言語において異なる修復方策が行われる可能性があると主張した。そして，Tseng(2006)では，修復における統語的要素と韻律的要素に着目し，個別の語やフレーズを修復する際に使用される修復類型や多用される語／フレーズについて分析したほか，修復対象の音節数や修復対象まで遡った音節数などについても量的統計を行った。

次に，Zhang(1998)では，自己修復という修復組織に絞って，その開始形式及び修復方策について記述した。そして，Yang(2006)では，ウェブ会話を対象として，会話分析と談話分析の手法を融合しながら，修復の構造，修復開始のテクニック及び修復方策について，量的分析と質的分析を行っている。

さらに，Tang(2010, 2011)では，それまでの修復研究がたいてい統語的操作だけに着目していることと，修復開始を引き起こした原因やトラブルの性質についてはあまり分析され

---

[11] 2.2.2 に参照されたい。

ていないことを指摘した上で，教室の独話を対象として，トラブル及び修復のメカニズムについて分析した[12]。また，修復方策に対して分析する時，グライスの格率を取り入れながら，各修復装置における統語的操作及び語用的機能をも検証した。

以上より，中国語の修復に関する先行研究は修復の構造と修復方策に重点を置いていることが分かる。トラブルの性質に着目しているものは Tang(2010, 2011)以外，殆ど見当たらない。修復方策に関しては，文法上の問題に対処するものと，意味上の問題／受容上の問題に対処するものとその特徴が異なるはずである。そこで，本研究では，こうした基本的な立場に立ち，実際の中国語の会話データを取り上げた上で，修復開始形式及び修復方策の特徴について日中対照分析を行いたい。

以下では，本研究の研究方法について述べる。

## 2.2　研究方法

本研究での基本的な立場は，「参加者は会話を順調にするために何をしているか」ということではなく，「参加者は順調な会話を妨げるトラブルを予防／解決するには何をしているか」ということである。こうした基本的設定により，まず，会話を妨げるトラブルには何があるかを明らかにする必要がある。また，これらのトラブルが生じたあと，たいてい修復が行われるが，一方，トラブルが生じる前に発話者が既にその発生を抑制する行動を取っている可能性も想定できる（本研究では，修復に対して，後者を調整と呼ぶ)。更に，個々のトラブルに対処する際に，調整と修復が具体的にどのように働いているか，どのような機能を果たしているかについて考察したい。

### 2.2.1.　修復対象の拡張的設定

従来の先行研究では，発話の産出と理解に生じた問題が修復対象とされている。そして，修復対象となるのは必ずしも何らかの誤りや間違いであるとは限らない。これについて，SJS（1977）では，「訂正という表現は，通常，誤りや間違いがあって，それが正しいものに置き換えられることと理解されている」（西阪 2010：160）とする。しかし，その後で，言葉探しの例を取り上げた後，「修復もしくは訂正の出現もしくは分布は，誤りの出現と関

[12] In previous investigations, only the syntactic operations imposed on speaker's erroneous utterances were analyzed. The incentive of each repair initiation, however, was not properly discussed. Thus, the repairs incurred by different erroneous productions remained indistinguishable and different problems were mistakenly categorized as the same type of error. (Tang,2010:93)

係しているわけでは必ずしもない。誤り・間違い・過失と聞くことのできるようなことが，一切ないところにも，修復もしくは訂正は見いだしうる」（西阪 2010 : 161）と述べている。

これは修復対象となるものの重要な性質である。会話における修復は，修復を開始する側が何らかの間違いが生じたと認識した上で修復を開始したわけではなく，修復する必要があると認識してはじめて起きうるものである。どういった時に修復する必要があるかは修復を開始する側の判断による。トラブルが間違いや誤りであると，それらがある種の客観的な基準として修復現象を判断する手がかりになるが，この基準を否定した場合，どういった場合が修復として判断すべきなのかは不明である。つまり，何らかのトラブルが生じたために修復が起きたと判断するのか，それとも，修復が起きたので何らかのトラブルが生じたと判断するのかを，修復現象を認定する際に決めなければならない[13]。

このことに関して，本研究では，これら二つの方法を融合して修復現象の判断基準としたい。まず，修復開始側が使用した言語形式を手がかりにして，修復の生起を判断する。次に，あらゆるものが修復対象となりうる以上，予め何が対象となるか・何を対象から外すかということを決めるのではなく，順調な伝達を妨げるトラブルの性質を分類しておく必要がある。また，「参加者は順調な会話を妨げるトラブルを解決するには何をしているか」という語用論的視点から，トラブルの性質について考察しておく。ある種のトラブルを解決する修復とは，そのトラブルを導いた原因を取り除く装置であるため，その原因が伝達のプロセスを妨げる可能性があると証明できれば，それは修復開始形式とともに，修復の生起を判断する手がかりになると考える。そして，同じ性質のトラブルに対処する修復を一つのカテゴリーにおいて考察する方法では，修復の特徴が見いだしやすくなると考える。

以上のことに基づき，本研究では，会話の伝達過程に着目し，トラブルの性質を三つの段階に分けて捉えたい。

第一段階は，発話が正確に聞き取れるまでのプロセスを指す。つまり，話し手は発話を産出する過程で失敗が起らず，且つ，聞き手は発話を聞き取る過程にも失敗が起きないということである。第一段階にはトラブルが生じない限り，修復が行われずに第二段階に移ることができる。

第二段階は，発話が聞き取られた後，聞き手に正確に理解されるまでのプロセスを指す。この段階において生じるのは，聞き手の理解上のトラブルである。基本的には，「不理解(non-understanding)」と「誤解(misunderstanding)」に分けることができる[14]。殆どの場合，発

[13] 鈴木（2008）では，「トラブルあっての修復なのか，それとも修復あってのトラブルなのか」ということに対して，「実際には特定の発話が修復のターゲットとなることで初めて，そこに何かしらのトラブルがあることが顕在化される」（p. 72）という基準を示したことがある。
[14] なぜこの 2 種類に限定したのかについては，第 4 章で詳述する。

話内容もしくは発話者の意図などに対して不理解や誤解のようなトラブルが生じると，会話参加者がその場で速やかに対処する。

第三段階は，発話が正確に理解されたあと，聞き手に受容されるまでのプロセスを指す。この段階では，主に次の２種類について考察する。それは，①相手の発話内容を受け入れない場合，不同意発話をすることがあるため，そうした不同意を引き起こした原因，いわゆる何らかの不一致を解消するために修復が行われる場合と，②発話する際に配慮が足りなかったことで，会話参加者間のフェイス状態が非均衡になったというトラブルに対して修復が行われた場合，である。

第一段階と第二段階では，発話が理解されるまでのプロセスに起きうるトラブルが含められている。つまり，この二つの段階に起きた修復は，発話の理解達成を妨げるトラブルに対処する装置であると捉えることができる。そこで，このような修復を＜情報伝達的修復＞と位置づけるとすれば，第三段階に生じたトラブルは発話の受容を妨げるものであるため，それらに対処するものは＜対人関係的修復＞とするべきだろう。しかし，これら三つの段階はそれぞれが独立しているのではなく，複数の段階に同時に関わっているものもあり，そうした場合についても考察する必要がある。

### 2.2.2.　語用的視点の導入

先行研究では，会話分析の手法で修復の構造について考察されてきた。どの言語にも修復という現象が存在し，且つ，修復構造も高度に相似していることは既に解明されてきた。

本研究では，修復の構造に関する成果を踏まえて，語用論の視点を取り入れながら，異なる性質のトラブルに対処する修復には，どのような語用機能があるかについて分析を展開したい。つまり，本研究では，修復の構造よりその機能に重きを置き，会話伝達の各段階において生じた各種類のトラブルに対して，会話参加者がその原因を抑制する／取り除くためにどのように調整装置と修復装置を利用するか，異なるトラブルに対処する調整と修復の働き方について考察したいと考える。また，これまでの修復研究においては，語用論の理論を利用してそのメカニズムを解明しようとするものが殆どないため，本研究では，次のように，伝達の異なる段階に起きるトラブルに対して，異なる語用論的理論を利用して分析を行いたい。

具体的には，理解過程の問題に対処する＜情報伝達的修復＞について，グライスの協調の原理や加藤(2006，2009a)で提案された＜動的文脈論＞を利用して分析する。一方，フェイスに関わる問題に対処する＜対人関係的修復＞については，B&L(1987)で提案されたポライトネスの枠組みを修正した上で構築された＜フェイスバランス＞の枠組みを利用して分析する。これらの分析を通して，同じ性質のトラブルに対処する時にどのような調整方策が

使われるか，どのような修復構造と修復方策が使用されるか，調整行為と修復行為にはどのような語用的機能が備わっているか，個別のカテゴリーにおいて一般性のある傾向が見いだされるかを考察したい。

繰返しになるが，本研究の出発点は「参加者は順調な会話を妨げるトラブルを予防／解決するには何をしているか」ということであるため，トラブルを解決する機能がある修復に重点を置いているものの，トラブルを予防する現象も視野に入れたい。修復とは目的が似ているため，両者を区別するために，このような現象を「調整」と呼ぶ。

修復だけでなく調整も取り上げるのは，語用論的視点から「会話参加者がトラブルを抑制／解決するために何をしているか」ということを解明するためには不可欠であると考えるからである。グライスの協調の原理によれば，話し手と聞き手は「協力して会話を順調にする」という共通の目的を持っているとされる。言い換えれば，「順調にする」とは「成功が多い」という意味合いを含んでおり，その逆から捉えれば，「失敗が少ない」ということを意味している。調整も修復もこのことを目的としているため，同じ現象を反対側から捉えようとする点から見れば，本研究は語用論において非常に中心的な課題を扱うものであると言えよう。

加藤（2009b）によると，グライス系の語用論は発話者中心（utterer-centered）の枠組みである。調整行為に即して考えると，調整を実行する側を発話者として扱うことができる。つまり，グライスの協調の原理を用いて調整行為を考察する場合，発話者が会話の各格率を守るもしくは破らないようにさまざまな調整行為を行う可能性を看過してはならない。また，調整行為は加藤（2009a）などで提案された＜動的文脈＞の枠組みとも深く関わっている。本研究では，こうした文脈と関わっている調整現象についても考察を行いたい。ここで言う文脈とは，従来の帰納的文脈と性質が異なるものであり，演繹的文脈である。前者は「記述と分析を行うものは発話解釈に用いられた前提を遡及的にしか規定できない」（加藤 2009a:213）という性質が備わっているのに対して，後者は「あらかじめ措定される」（加藤 2009a:213）ものである。従って，「（演繹的文脈に対して）自然な会話のやりとりの中で，聞き手が発話からどのように推意を引き出すかを考えるには，文脈がどのように構成されているかを事前に分類しておき，そこから予測可能な記述と分析を行う必要がある」（加藤 2009b:545）ということになる。そして，演繹的文脈の下位分類として，加藤（2009a）では，形式文脈・状況文脈・知識文脈と三種類を立てた。これらの文脈には，会話参加者の間で共有される義務があるものとないものがあり，共有される程度もそれぞれ異なるが，会話参加者は発話が順調に解釈されるのに必要となる文脈に対して，〈文脈共有義務違反〉というトラブルにならないように調整行為を行うことがある。

上記を踏まえて，本研究では，次の４つの現象を調整の範疇に入れたい。

❶. 文脈共有義務に違反しないように行われる調整。

❷. 一時的に知識が共有されるように行われる調整。

❸.「同調」の効果を対象とした調整。

❹. 会話参加者間のフェイス状態に悪影響を及ぼさないように行われる調整。

本研究では，修復を＜情報伝達的修復＞と＜対人関係的修復＞とに分類している。同様に，上記の❶と❷を＜情報伝達的調整＞とし，❸と❹を＜対人関係的調整＞とすることができる。発話がうまく理解されるまで生じた問題はすべて情報伝達の過程に入れられるが，その後の段階に生じたもの，いわゆる受容上の問題は対人関係のカテゴリーに入れられると考えられる。会話に起きる具体的な調整現象については，第三章で詳しく述べるが，その前に，本研究に使われる会話資料について述べる。

### 2.2.3. 分析資料

本研究では，日本語の会話資料と中国語の会話資料について，合計４種類のデータを利用している。それぞれ，①「BTS(Basic Transcription System)による多言語話し言葉コーパス−日本語会話1」（2007年版），②「HCR（Hokkaido University Conversation Resource)」，③会話分析の手法で行われる先行研究から取り出した日本語会話例，④中国語のテレビ番組から取り出した会話例の四種類である。そして，HCRは2012年から2013年にかけて北海道大学文学部の学生たちに協力してもらい，筆者が採取したものである。

②の採取方法について述べる。HCRは日本語会話と中国語会話からなる。日本語会話に参加したのは北海道大学文学研究科言語情報講座の日本語母語話者計10人である。会話参加者は一人を除いて，全員が20代である。会話は雑談という形を取り，録画・録音を行った。そのすべてが一対一の会話である。「HCR−日本語会話」は，一回が30分程度，延べ5. 5時間の会話を文字化したものである。また，「HCR−中国語会話」に参加したのは北海道大学文学研究科言語情報講座の中国人留学生計10人である。会話参加者は全員20代である。「HCR−日本語会話」と同様に，雑談という形を取り，録画・録音を行った。そのすべてが一対一の会話である。一回が30分程度，延べ5. 5時間の会話を文字化したものである。

文字化の方法については，宇佐美（2007），Schegloff et al(1974), 串田他（2005）を参考した上で，以下のような基本方法に基づいて行った。会話例は話者交替の起るところで発話を区切り，それぞれのターンに番号と参加者を示すアルファベット記号を付けて左側に記す。一人の発話が一行を超える場合は二行目の左側に行数だけ記す。参加者の一方が発話している間に，相手の相づちや笑いなどのようなターンを取らずに発されたものを括弧でくくってその発生位置に記す。具体的には，付録を参照されたい。また，文字化の方法は，

BTSJにおける表記方法と異なるところがある。BTSJの会話資料は参考しているものの，HCRに従う場合には，その旨を明記することにする。

以下では，本研究における言語的修復行動の定義，各類型の認定基準及び実際例について整理する。

## 2.3　言語的修復行動の概念及び組織の整理

本節では，機能に着目して修復概念を再検討した上で，日本語の会話例を用いて修復の各組織について述べる。

### 2.3.1.　修復概念の再検討

「修復とは何か」ということに関して，これまでさまざまな議論が行われたが，全面的かつ説得力のある定義が出されているとは言えない。本研究では，まず，着目点が「構造上の性質かそれとも機能上の性質か」に注目して先行研究における修復の定義を区別して整理してみる。次に，なぜ有力な定義が出せないのかを考えた上で，本研究での扱い方を述べる。

#### 2.3.1.1. 構造上の性質に注目した定義

まず，メイ(2005)では，修復を挿入連鎖の一種として，「挿入連鎖が起っている間も，会話の普通の流れは止まらない。……（中略）……障害が取り除かれた後には，会話は元のまま流れ続ける」(p. 223)という挿入連鎖の性質が備わっていると述べている。つまり，「普通の流れ」を「会話の本流」だとすれば，修復はそれと並行的に流れる「会話の傍流」として理解できる。その傍流の機能とは「障害を取り除く」ということであり，且つ，その傍流は組織的にどこで開始されるか，どこで終結し本流に戻るかは明白である。本研究では，修復連鎖のこうした特質を＜修復組織の顕在性＞とする。この顕在性については，トラブルの性質と関係なく常に同じ程度のものとして現れるのではなく，トラブルの種類によってその程度も変わってくると連続的に捉えたい。

次に，Suzuki(2010)では，会話分析という手法で解明されてきた修復の性質をまとめている。構造上の特質に限ってみると，以下の 4 点が挙げられよう。

①修復は修復開始と修復実行という二つの部分からなる。
②修復には，会話参加者がトラブル源との相対的位置によって多様な組織類型がある。
③修復の各類型がそれぞれ特有の方策によって内部で組織化されている。
④修復の各組織が体系化され，潜在的なトラブル源に修復機会を提供する。

これらの特徴を念頭に入れながら，修復の機能に着目した定義を見てみたい。

#### 2.3.1.2. 機能上の性質に注目した定義

日本語の修復に関する先行研究（串田 1995；西阪 2007；Suzuki,2010 など）では，その定義に対する共通認識がその機能に着目した上で形成されている。つまり，修復とは会話における発話の産出・聞き取り・理解に関するトラブルに対処する行為である(SJS,1977)というものである。修復の対象となるのは，言い間違いや聞き間違い，誤解などのような何らかのミスを含んでいるものだけでなく，適切な言葉探しや中断されたトピックに戻るという現象にまで広げられてきた。つまり，修復対象とは必ずしも何らかの間違いとは限らないということである。こうした共通の認識がある以上，受容の問題を修復の対象から除外すべきではないと考えていいだろう。

繰返しになるが，本研究では，受容の問題とは，基本的に相手の発話を聞き取り，理解した後の段階に生じるものであり，聞き手が発話内容や話し手の意図・行為を受け入れないということを指す。従って，本研究では，「受容のトラブル」というカテゴリーを増やし，「修復とは，会話において，発話の産出・聞き取り過程／解釈過程／受容過程に生じた不調(トラブル)に対処するための営みであり，参加者のどちらかに不調だと認識されるのを前提として生じた言語現象である」という定義を示した。しかし，これは，修復対象の範囲を広げただけで，従来の認識と実質上相違ないものである。

この問題に対して，本研究では，語用論的立場に立ち，トラブルの性質に着目して対応策を提出することを目指す。

#### 2.3.1.3. 考察及び本研究での姿勢

修復を定義する際にトラブルを鍵概念とする以上，種類が多岐にわたっているトラブルに対して具体的な定義を決めなくては，修復を明確に定義することも困難であると言えよう。従って，修復を定義する際に，トラブルとは何かということを明らかにしなければならない。この点については，日本語の修復研究であまり議論されていないが，串田(1995)と永山(1996)では少し触れている。

まず，永山(1996)では「repair が対象とする破綻とはどのような現象なのか」という問いに対して，Kasper (1985)(Tomasello et al.(1990)に基づいて破綻の診断基準を二つ挙げている。一つは会話において明確化要求(request for clarification)・聞き流し(non-acknowledgement)・話題変更(topic shift)といったような現象が生じたか否かという基準であり，もう一つは「一方の期待するような反応が他方から提出されるか否か」という基準である。つまり，上記のような現象が発生した場合に破綻が生じたと判断され，それらに対処する修復が起きうるということである。これら二つの診断基準はトラブルとは何かを考える上で有用ではあるものの，全体を通して見るとトラブルの種類の列挙に留まっているという問題がある。

次に，先述した通り，従来修復対象とされてきたトラブルは，発話の産出過程と理解過程に生じたものが主であり，受容過程に生じたものは含まれていない。これに対して，串田(1995)では，受容のトラブルのうち，フェイスに関わるものとされてきた remedy という現象を，修復と合併すべきだという指摘について既に触れた。本研究では，従来の修復研究で対象とされていない受容過程に生じたトラブルについても考察を行いたい。しかし，トラブルを三つの過程(産出/聴取・理解・受容)に分けて考察するといっても，それはトラブルの性質に基づく分類方法にすぎず，定義にはならない。それに加え，これら三つの過程はそれぞれが独立しているのではなく，複数の段階に跨がるトラブルも観察されている。

これらの問題点にどう対応するかについて，まず，構造上の性質（修復組織を指す）をどう捉えるかについて述べる。先述した＜挿入連鎖＞として捉えられる修復には修復連鎖がいくつかのターンに跨がっていなければならないという条件が必要であろう。しかし，修復連鎖が必ずしも複数のターンに渡って行われるとは限らないため，挿入連鎖の性質が適用できる例もあれば，同一ターンに生じた自己開始・自己修復や受容のトラブルに対処する修復などのように適用できない例もある。そこで，本研究では，修復構造の全体的な性質について，挿入連鎖との類似点を念頭に置きながら，「会話における主な流れを主流とした場合，修復とは主流から逸脱した傍流であり，主流に生じた問題を解決するのを目的とする，メタ的な機能が備わっている行為である」という捉え方をする。

実際のデータの観察を通して見ると，トラブルが生じてもそのまま聞き流す場合もあるが，会話参加者のどちらかにとって「このままでは会話を先に展開できないとか，トラブルを解決しないとどこかで問題が生じうる」といった認識が背景となって，「先に進むのを後回し」にして修復に入るというのが共通した性質であると言えよう。しかし，トラブルの単位及び性質がそれぞれ異なっているため，共通の性質といってもその程度が異なるはずである。例えば，言い間違いや誤解といったようなトラブルに対してはその構造が明瞭であるが，フェイスに対する侵害といったトラブルによるものなら構造の顕在性も下がる。このような状況と結びつけて考えると，本研究では，従来の修復の構造に対する考え方をそのまま取り入れるのではなく，新しい視点から見直してみたい。

次に，機能上の性質の捉え方を述べる。上記の状況から，現段階では修復の機能という角度から有効な定義を提案することはまだできないと言わざるを得ない。なぜなら，修復について定義しようとするにはトラブルの定義が不可欠だからである。トラブルの性質を無視してはトラブルの定義もできないはずである。トラブルの性質に対して明確な認識も得られていない状況の中で，修復の機能を捉えることができないのではないかと考える。

そこで，本研究では，まず会話の各過程に応じて，トラブルの性質によって分類した上で，各類型のトラブルに対処する修復の機能を個別に考察することを通して，全面的な認

識に辿り着くという手順を取る。また，三つの過程(産出／理解／受容)が分離しているのではなく，複数に跨がるトラブルに関しても初歩的な考察を行ってみたい。

修復とトラブルについて，予め確認しておきたい性質を次に挙げる。

①トラブルに関しては，修復は「誤りの発生」に依存しない特徴を持っている。明らかな言い間違いや聞き間違い，誤解や不理解などはトラブルとして認識しやすく，顕在性が高いと言えよう。一方で，会話におけるトラブルはすべてが顕在的であるとは言えず，抽象的且つ潜在的なものも存在しているはずである。

例えば，相手の発話意図を受け入れない場合や，フェイスを侵害された場合がそれに当たる。具体的には，フェイスに関わるものに関して言えば，誰かにフェイスを侵害されるとした場合，聞き手がその発話意図を受け入れずに，フェイス侵害を仕返したり自分のフェイスを守ったりするような行動を取る行為が観察されている。このような行動はフェイス上のトラブルが生じた状況で施された可能性が高い。しかし，このようなトラブルは何らかの間違いによるものではない。従って，これらの問題を修復の対象から外すべきではないと主張したい。

②修復とは，会話参加者のどちらかにトラブルを認識されるのを前提としており，「まだ起ってはいないが，予期されうる破綻を未然に防ぐための方策」(永山 1996)を修復ではなく，調整とする。これについては第３章で詳述するが，大まかに言えば，修復も調整も「伝達を順調なものにする」ための装置であり，会話の本流に対して「機能的傍流」として位置づけられるものである。この二種類の機能は基本的には並行しているものの，完全に分離しているのではなく，重なる場合もある。

以上より，異なる性質のトラブルに対処する修復行為の語用的機能を探るのが課題であるが，それについての考察に入る前に，構造上の性質に当たる修復の組織について，日本語の会話例を挙げながら整理してみる。

### 2.3.2.　日本語における各修復組織の会話例

本研究において，他者開始形式について記述する前に，2.3.2.1 では自己開始される修復組織及びその下位類型について説明し，2.3.2.2 では他者開始される修復組織について述べる。

#### 2.3.2.1. 自己開始される修復の組織について

ここでは，自己開始・自己修復及びその下位類型の三種類と(2)自己開始・他者修復について説明する。自己開始・自己修復(Self-initiation Self-repair)とは，トラブル源の産出側はトラブルを認識し，修復開始機会（同一ターン／TRP／第三順番／第三位置）を利用して実

行作業を行った場合を指す。次の２例を参照されたい。例 2 と例 3 において，→で示されたのは問題源及びそれに対する修復実行である。

例 2＜BTS 男女討論 2＞同一ターンで自己開始自己修復の例。

1A　→　あと、なんかあの女の子はその、子供産もうと思ったら、産もうと思ったらって
2　　いうか、変わっちゃうじゃん??、生活が(ん：)、がらっと。
3B　　ん：：

例 3. ＜BTS 初対面雑談 4＞TRP での自己開始・自己修復の例。

1A　　じゃあ今あと 1 年間?(え：)、どうやって過ごそうと思ってます?
2B　　いや：ちょっとなんか、だめですね：
3B[15]　→ だめですねっていうか、暇な時間の使い方がわからないんですよ：
4A　　うんうんうんうん。

なお，自己開始自己修復の下位類型として表 2 では i ～iv という 4 種類を挙げた。その中で，i と ii は従来の先行研究において典型的な下位類型として扱われてきたが，iii と iv は組織上から見れば他者開始された修復と同じように見えるために，異なる扱い方をされてきた。本研究では，〈聞き手が意図的に修復開始を要請したかどうか〉ということを基準にして，iii と iv についても自己開始・自己修復の下位類型とすべきであると考える。例 4 と例 5 を参照されたい。

例 4＜BTS 親しい女性友人雑談 6＞第三順番での自己修復（Third-turn Repair）

1A　　/沈黙 9 秒/卒論は例の，案を決行するわけ?
2B　　あ，そうそう，もう進んでる。
3A　　あ，ほんと。
4B　→ 進んでるっていうか，いちおう本は読んでる。
5A　　う：ん。

これは表 2 における iii. 第三順番での自己修復の例である。この例では，B は 2B で産出したトラブル源（「もう進んでいる」）を 4B で自己修復をした。次のターン（5A）における A の反応から，A は相手の修復を受け入れたと判断できるため，修復が完了したと判断できる。しかし，B は自分の卒論の進展状況について事実を述べているだけで，なぜ自己修復を施し

[15] 本研究の文字化の規則によると，2B と 3B を一行にまとめるべきであるが，ここでは，分かりやすくするために，あえて 2 行に分けて記している。

たか，修復実行側が講じたストラテジーなどの問題点に関してはポライトネスの視点から探る必要があると考えられる。このことについては受容上の問題として第 5 章・第 6 章で扱う。また，第三位置での自己修復（Third-position Repair）について，例 5 を参照されたい。

例 5＜堀口 1997:112＞同じテニスクラブに所属する二人のやりとりである。

1A　　ダンロップは高いからブリヂストンにしようよ。
2B　　高くないよ。
3A　→ ボールだよ。
4B　　あっ，ボールか。ラケットと思ったよ。

例 4 と例 5 においては，→で示されたのは修復実行である。例 4・例 5 では，聞き手の返事(2B)がいずれとも連鎖上適切なものであるが，会話の展開から見ると，例 5 における聞き手の発話（2B）が 1A に対する誤解であることが分かる。

次に，自己開始・他者修復について述べる。自己開始・他者修復(Self-initiation Other-repair)とは，トラブル源の産出側がトラブルを認識した場合において，修復開始機会（同一ターンか TRP）を利用したものの，トラブルと同じ順番で修復が完成できず，聞き手によって修復の実行作業を行われた場合を指す。次の例を参照されたい。

例 6 ＜BTS 男女友人討論 2＞自己開始・他者修復の例。

1A　　だから子供いらっしゃらない先生もいるし。
2B　　やっぱり、はなからそうしたふうに結構あきらめてる、あきらめてるっていう[か]。
3A　→ [んー]あきらめてるっていうか、一番忙しいときが重なるっていうか、その一番
4　　子供が出来やすい時期と重なって、Ｐｈ.D やっててそれどころじゃないとか。
5B　　/少し間/子供以前に結婚自体の持つ意味もね。
6A　　そうそうそう。

この例では，2B で B がトラブル（「あきらめてる」という表現が不適切である）を認識し，修復開始したものの（「あきらめてるっていうか」という表現で修復開始した），そのターンで修復が実行されず，結果的には相手 A が修復を完成した。典型的な自己開始・他者修復の例である。

#### 2.3.2.2. 他者開始される修復の組織について

ここでは，他者開始・自己修復と他者開始・他者修復及びその下位類型に当たる第四位置での修復について述べる。まず，他者開始・自己修復について述べる。他者開始・自己修復(Other-initiation Self-repair)とは，トラブル源の産出側がトラブルを認識していない，も

しくはトラブルだと思っていない場合(聞き手との判断の間でずれが生じた)において，聞き手が修復開始機会を利用して修復要請表現をしたあと，トラブル源の産出側によって修復の実行作業を行われた場合を指す。例７を参照されたい。

例 7＜BTS 初対面雑談 7＞他者開始・他者修復の例。

1A　　なんか，スクーターって３０キロが，限界なんですって。
2B　　え?
3A　→　３０キロが，あの，制限速度。
4B　　あ，そうなんですか=
5A　　=うん。

この例では，B にとって 1A の発話に理解のトラブルが生じたため，2B で「非特定的開始標識(‘open’ class repair initiators)」を用いて修復を要請し，トラブル源の産出側 A によって 3A で修復を実行した例である。B がトラブル源の所在を明言していないため，A にとって先行発話において聞き取りの問題か，理解の問題かそれとも受容の問題かが不明瞭であり，どの部分を修復すべきかそれとも最初から言い直すかという選択をしなければならない。よって，この場合においては，話し手にとってトラブル特定の労力も修復労力も相当大きいと言える。

ただ，上記の例は修復が容易なものであるため，判断がそれほど困難ではないが，複雑な場合となると，例えば，1A の発話が長く続けられた場合，B がこうした非特定的な開始形式を使いにくくなると予測できる。また，聞き取りの問題だと即時的に聞き返しができるが，理解の問題や特に受容の問題が生じる場合には，相手の発話が完結しないとトラブルを完全に特定できないこともある。一方で，相手の発話が長ければ長いほど指定をせずに修復を要請することは相手にトラブル源の特定とその修復に多大な労力を課すことになるため，このような場合において修復要請の遅延や放棄が行われる傾向があると推測できる。

次に，他者開始・他者修復の例を取り上げる。他者開始・他者修復(Other-initiation Other-repair)とは，トラブル源の産出側がトラブルを認識していない，あるいはトラブルだと思っていない場合(聞き手との判断の間でずれが生じた)において，聞き手が修復開始機会を利用して実行作業を行った場合を指す。その下位類型として，第四位置での修復(Fourth-Position Repair)がある。例 8 を参照されたい。

例 8＜HCR 日本語会話 2＞二人は台湾の食べ物について話している。A が一度台湾に行ったことがある。

1A　　何かお茶に中国人が砂糖を入れるなんて＜相手が笑い出す＞，だって，普通に
2　　コンビニにこうしたの＜テーブルに置いてあるウーロン茶を持って＞ポンと買
3　　って，飲んだら砂糖を入れて(えっ！)緑茶とかそうしたの関係なく。
4B　　へ：：：：：
5A　　これは何かもう,,
6B　　まずい。
7A　→ まずいというか，飲めない。
8B　　う：：ん，う：：：ん。

例 8 は，先行発話の一部を繰返した上で「というか」という形式で不同意を表し，他者修復が実行されたのである。次に，第四位置での修復(Fourth-Position Repair)の例を挙げる。

例 9（筆者の研究室で起きた会話断片である）
1A　→ カレンダーある?
2B　　はい。(机に置いてあるカレンダーを渡そうとするが，まだ渡していない)
3A　　壁にかけるやつ持ってる?
4B　=> あっ，ない。

例 9 では，B が 1A に対して何の問題も感じていないため，連鎖上適切な反応である 2B を発した。2B (「はい」) に対して A も問題を感じていない (感じたら修復に移すはずである)。しかし，3A によって B が自分の先の反応（2B）が誤解であると認識し，4B で 1A に対する再応答を行ったのである。→で示された修復実行がトラブルに対する四番目の位置で起きたのであるため，第四位置での修復という組織になっている。

以上，会話分析の先行研究を踏まえて，実際の会話例を用いて修復の各組織について整理した。

## 2.4　研究の基盤となる方法論と語用論的観点

以上，本研究の出発点として，会話分析の手法で行われた修復研究と語用論的視点から行われた先行研究の一部についてまとめた。また，日本語と中国語に分けて，関連のある先行研究について概観した。

さらに，先述した先行研究を踏まえて，本研究における修復の概念を検討した上で，各修復組織について日本語の会話例を用いて説明した。

修復の構造よりその機能に重視するという語用論的視点から修復の語用的機能を解明することが本研究の目的であり，この目的を達成するために，修復対象の拡張的設定及び語用的視点の導入について述べた。修復組織の一般性が次第に検証されてきたが，その機能

に対する議論が足りないという状況のなか，「参加者は順調な会話を妨げるトラブルを予防／解決するには何をしているか」という視点から，修復行為と相補的な機能を持つ調整行為も考察対象に入れ，順調な伝達が達成されるためにこの二つの機能はどのように働いているかについて動的に捉えることを通して，修復の機能を把握したい。次章より，調整と修復との関係について初歩的な考察を行う。

# 第3章　調整との関係に着目した修復の機能

## 3.1　　会話の本流と傍流

実際の会話では,「何をめぐって話しているのか」という主要な流れがあるはずである。この主要な流れを本流とすれば，それに対する傍流が存在するかは考えるに値することであろう。

ここでは,「実際の会話が本流だけでは成立できず,「内容的な傍流」と「機能的な傍流」も並行的に流れているのではないか」について考えてみたい。例えば，実際の会話では当面の話題から他の話題に逸脱する現象がよくある。それは内容的に本流から逸したものであるため(勿論意図的に行われることもある)，このような現象を「内容的傍流」とすることができるだろう。勿論，傍流の中でまた他の傍流に逸脱したり，時には本流の話に戻らなくなったりすることもあるが，これらはすべて「内容的傍流」として捉えたい。一方，調整や修復という現象は上記のものと違い，会話を順調に進めるためのある種の機能そのものであるため,「内容的な傍流」と区別するために「機能的傍流」として位置づけられると考える。

つまり，会話の実態を把握する際に，本流だけではなく，本流と並行的に流れており，ある種の補佐機能を果たす傍流も存在していることを念頭に入れるべきである。ここで言う補佐機能とは，本流や内容的傍流の展開を妨げうるトラブルを予防することや，それらの展開を一時的に妨害したトラブルを取り除くことなどを指す。本研究は，機能的傍流の一つとしての修復について分析を展開したい。それについて考察する前に，調整という傍流との関係についてまず考えておきたい。

日常会話では我々は常に一つの話題について最後まで話すのではなく，会話の本流から傍流に入り，その傍流の中でまた内容的な傍流に入っていくというように脱線しながら進んでいくと言えよう。一方，機能的傍流は本流の中で生じるだけではなく，内容的傍流の中にも発生する。つまり，概念上では本流と「内容的傍流」と「機能的傍流」のように分けられるものの，三者は同じ次元に属するものではないということである。内容的傍流は本流に対してのみ発生するのに対して，機能的傍流は本流の中にも内容的傍流にも発生可能である。

機能的傍流として捉えられる修復と調整の関係について，次の三点を挙げておきたい。

①　話し手にも聞き手にも会話を不首尾の少ないものにするという目的があり，グライス

の協調の原理によれば，話し手と聞き手が協力して会話を順調にするという共通の目的を持っているということである。修復と調整はその目的を達成するための機能であり，両者は相似しているため矛盾しているものとしてではなく，平行している現象として捉えられる。

② 調整も修復もトラブルを対象としており，前者はトラブルを未然に抑制するのに対して，後者は既に生じたトラブルを解決するという機能を備えている。つまり，調整と修復とは両々相まってトラブルを減らし，円滑的なやりとりを保証するというメタ的な機能を持つ装置である。基本的には，両者の関係について，調整がうまく施されれば修復も施さずに済み，逆に，調整がうまく行われない限りトラブルも生じやすくなり，故に修復の出番も多くなると捉えたい。

③ 調整と修復はある種の機能としては基本的に平行しているものの，常にそうであるとは限らず，時々両者を兼務する発話も行われ，交叉しているところもある。トラブルを除くのを目的とする修復機能をよりマクロ的に捉えてみると，トラブルを取り除くことによってその後の会話を順調にするという意味合いもあり,「これを除かないと後にトラブルになり会話の支障になりうる」という調整の機能と重なる部分がある。そうした点から言えば，修復機能には調整機能が備わっている面もある。

以上の捉え方を念頭に入れ，修復と調整が実例においてはどのように機能しているかを見ていきたい。次節では，まず両者の構造を対照的に捉えてみる。

## 3.2 構造上の特徴について

### 3.2.1. 修復構造の顕在性について

これまで，会話分析の立場から修復組織についてはさまざまな研究が行われてきた。その中には重要且つ共通している認識がある。それは，修復組織を挿入連鎖の一種として捉えられるという点である(メイ,2005；Suzuki,2010 など)。つまり，修復とは「どこから開始しどこで終結したか」は明確であり，独立性の高い組織特性を持つという認識である。しかし，これはトラブルの性質を問わず修復を捉える際に生じた必然的な結果であると言わざるを得ない。もしトラブルが言い間違いや理解不能，誤解などのように顕在している場合であれば，それに対する修復も組織的に顕在性が高いと想定できるが，もしトラブルがフェイスに関わるもののように潜在している場合であれば，それに対処する修復組織も顕在性が下がると推測できる。ここでは，①トラブルが顕在的であるか潜在的であるか，②そのトラブルに対する修復開始形式が明白であるかどうかの二点で修復組織の顕在性の程度を判断する。次の 2 例を参照されたい。

例 10＜BTS 初対面同性同士雑談 9＞A は B の研究方向について聞いている場面。

1A　　どう，どういうことやってらっしゃるんですか?
2B　　いや, いや, もう本当になんか, 私の指導教官の人がなんか, もうヴォイスとか,,
3A　→ ヴォイス?
4B　　ヴォイスとか, だから受身とか(あ:), 使役とか, そうしたやつとか, あとまあ,
5　　周りにはアスペクトとかやってる人(あ:)とか, まあ私もまあ, それ似てますね。
6A　　え：：あ，（ええ）へぇ：あぁ：

この例でトラブルになったのは「ヴォイス」という表現に対する理解不能である，また，他者開始形式（「相手の発話の一部を繰返し＋上昇調」）も明白であり，全体として他者開始・自己修復という修復類型になっている。修復組織がトラブルを含む 2 行目から修復を完成した 5 行目にわたって行われている。修復組織全体が明瞭で，修復組織の顕在性の程度が高いと捉えられる。それに対して，例 11 を参照されたい。

例 11＜BTS 初対面同性同士雑談 8＞A は大学 4 年生で中国語を専攻としており，B は台湾で日本語教師を勤めており中国語ができる。この例では，A が B に自分の中国留学の経験について語っている。この会話は「B に「中国で一年住んでみてどうだった」と聞かれたため，A が自分の中国留学生活について色々話している」という会話本流の一部である。例示部より前の部分では，A が「留学していた時はがやがやしすぎて後悔している」と言って，もっと勉強すれば良かったというような内容を話している。

1A　　でもいるときはほんとに辛くて，なんで辛いかっていうと、たぶん言語が伸び
2　　ないからで。
3B　　〈笑い〉
4A　　それは自分が悪いんですけど。
5B　→ まあね，ある一定ぐらいでね，行くと結構伸びるのほんと難しい::。
6A　　ね：：そんな[ちょっと生活できて],,
7B　　[比較的なんか：：],,
8A　　うん,そんなにすごい困らなくなってくると，何か余り焦らなくなってくるって
9　　いうか：：
10B　　あ：：

この例では，理解上のトラブルがなく，受容過程においてフェイスに関わるトラブルが生じたのである。トラブルになったのは「A が 1A と 3A で自分に対して連続的に否定的評価を行ったことによるフェイス上のアンバランス状態」であり，この状況に対して，B は＜他

者指向的フェイス支持行為＞（「言語力が伸びないのはあなたが悪いのではなく，一定のレベルに達したら上達が遅くなる」という一般論的なことを言うのを通して，相手の自分に対する否定的評価の程度を軽減しようとした。これには相手のフェイスを立てる効果があり，フェイス支持行為としたのである）を行ったのである。全体として他者開始・他者修復という類型になっている。

例 10 と比べてみると，例 11 におけるトラブルが抽象的で，修復開始形式も不明瞭である。修復の対象も修復を開始する時点も曖昧であるため，修復組織が会話の本流に嵌め込まれている(embedded)ように見える。つまり，例 11 は例 10 より修復組織の顕在性の程度が低くなったと言える。

以上より，本研究では，修復組織には挿入連鎖に備わるような組織独立性が備わっているものの，すべて同じ程度であると一律に捉えるのではなく，トラブルの性質によってその程度も変わってくるというふうに連続的に捉えたい。また，修復組織の顕在性の程度が「物理的失行(産出ミスや聞き取り失敗など)→理解のトラブル→受容のトラブル」の順に，「トラブルの認識されやすさ」が小さくなるにつれて，修復がどこから開始されるかが認識されにくくなるというふうに捉えたい。

### 3.2.2. 調整の構造について

修復の構造について，会話分析から既に研究されてきたのに対して，調整の構造についてはまだ行われていないようである。本研究では，既に解明された修復構造の特徴を対照しながら，次のように捉えてみたい。

まず，(一対一の会話において)修復は会話参加者一方だけでも行うことができる(同一ターンにおける自己開始・自己修復や他者開始・他者修復)ものもあれば，両者の協力で行われるもの(自己開始・他者修復と他者開始・自己修復)もある。これに対して，トラブルを抑制する調整のほうは参加者一方によって施しうるものである。

次に，3.2.1 で述べたように，修復組織の顕在性には程度があるため一律に捉えることができないものの，調整という現象は会話の本流に埋め込まれることが多く，殆ど潜在的なものであると捉えられる。つまり，修復が起きる会話には，トラブルの単位を問わず，トラブルと思われるものが現れた場合に会話の流れが中断され，トラブルが修復されてから会話を先に進めるという特徴がある。それに対して，トラブルの発生を抑制する調整に関しては，トラブルが未発生なので，どこから調整に入るかは調整側の判断次第であり，本流の内容をメタ的に管理する発話がなされはじめてでないと判断する手がかりがないと言えよう。次の例を参照されたい。

例 12＜BTS 初対面雑談 3＞

1A　→ /少し間/あ，話全然変わるんですけど,,

2B　はい。

3A　今年の夏ってどっか旅行行きますか?

4B　あ，あたし，あの，来週の月曜日から実は留学に行くことになってて：

この例では，B が新しい話題を即座に理解できない，またはこれからの内容をこれまでの話題の一部だと誤解するといったトラブルを抑制するために，A が調整行為を行っている。この行為は話題の本流，いわば＜夏の旅行先＞に対しては傍流であるものの，その一部として紡ぎ込まれるところから見れば，調整の構造は全体的に潜在していると言えよう。

一方，調整の対象にはどういった現象が含まれているか，調整と修復とはどのように関わっているかについて，次節から詳しく考察したい。

## 3.3　調整と修復の接点となる三つの段階

ここでは，本研究における調整という用語について説明した上で，修復との接点に関する考察方法を述べることにする。繰返しになるが，会話の各段階に生じうるさまざまなトラブルを解決する修復装置のほか，各種類のトラブルを事前に防ぐための装置もあり，本研究ではそれを調整と呼んでいる。会話において，発話者が調整方策を実行する目的からすれば，大まかに二種類に分けることができる。一つ目は，聞き手によりよく理解してもらい，よりよく受容してもらうための調整，いわゆる，成功のための調整であり，もうひとつは，聞き手に理解上の問題や受容上の問題を生じさせないように，それらの問題を引き起こしうる原因を見極め，事前に手を打つというタイプの調整，いわゆる，失敗の少なくするための調整である。本研究における調整は後者を指している。

そもそも，修復方策はあくまで特定のトラブルを引き起こした原因を解消することを通して実行されるものであり，同じく，本研究でいう調整方策も特定のトラブルを引き起こしうる原因を事前に抑制することで実行されるものである。両者の関係を説明するために，調整方策が行われなかった場合に，特定のトラブルが生じてしまい，修復に移すケースを取り上げて議論を展開していかなければならない。従って，本節では，この方法を用いて，発話の産出／聞き取り・理解・受容の三段階に分けて修復を考察するという立場から，調整との接点を見てみる。

### 3.3.1.　産出のトラブルに対する調整と修復

産出の過程に起きるトラブルに対する修復を考える際に，聞き手がいつ／どこで／どの

ような反応をするかは修復の組織類型に決定的な影響を及ぼす。例えば，産出過程における言い間違いといったトラブルに対して，自分で同じターンでの言い直し／言い換え／言い足しなどの方法で修復する場合は自己開始・自己修復になるが，聞き手に言い間違いを指摘される場合には他者開始・自己修復という類型になり，聞き手に直接正しい表現に変えられる場合には他者開始・他者修復という類型になる。一方，聞き手に言い間違いを指摘されない場合には(連鎖上適切な相槌などのようなものを指す)，第三順番での自己開始・自己修復となる。いずれの場合においても，聞き手から何らかの応答をもらうところが共通している。

また，修復が間違いに依存していないことは既に明確化されたが，産出過程に限って言えば，「話し手が特に言い間違っていない且つ聞き手からも返事をもらっていない時点で施された言い直し」とは修復としてではなく，調整として捉えるべきである。これについては例 13 を参照されたい。

例 13＜BTS 初対面雑談 2＞B に留学を薦められた A が自分の進路について話している。

1A　→ あたしはその，これからやろうとしていることが，まさに，に，日本，別に日本
2　　にこだわるつもりはないんですけど,,
3B　　はい。
4A　　ん:日本の思想史っていうところにちょっと足をつっこもうかなと思っているの
5　　で,,
6B　　はい。

1 行目では，明らかに言い間違いが生じていない。「日本」に対する言い足しは修復とすべきではなく，調整行為とするべきであると考える。この断片の発生状況から，1A と 4A を結びつけて考えると，A の発話の趣旨が二つの可能性がある。一つは，「これからやろうとしているのは，日本の思想史である」ということであり，もう一つは「これからやろうとしているのは，(日本の思想史なので) 日本でやるほうがいい (留学の必要がない)」ということである。「日本」の直後で起きた中断とは，「日本の思想史」が中断された可能性もあれば，「日本でやるほうがいい」という文が中断された可能性もある。いずれにしても，「別に日本にこだわるつもりはないんですけど」という発話を付け加えた理由は，発話者 A が情報の出し方を調整しようとするところにあるだろう。

### 3.3.2.　理解上のトラブルに対する調整

理解過程に生じたトラブルに対処する修復の発生，特に本研究で対象とする不理解と誤

解に対する修復は，いずれも聞き手の反応があってはじめて成立する。相手からの反応がない限り，相手が理解できなかったか誤解したかの判断はすることができない。

それに対して，聞き手から反応をもらう前に，発話の伝達方法を調節することや，発話の出す途中で付加説明をすることや，予め自身の発話態度を表明することなどの行為は，理解上のトラブルを抑制する機能を持つ調整として考えるべきであろう。こうした行為を＜情報伝達的調整＞として，いずれも理解上の問題を防ぐためのものである。次には，加藤（2009a，2012）で提案された＜動的文脈論＞の枠組みを利用し，正確な理解を妨げる２種類のトラブルを抑制するケースを取り上げる。一つは，形式文脈が共有されないというトラブルを抑制する場合であり，もう一つは，一時的に知識の共有のために調整する場合である。

#### 3.3.2.1. 形式文脈共有義務の違反を抑制する場合

会話においては，話し手も聞き手も自分の言ったことと相手の言ったことを覚えておかないと何らかのトラブルが生じてしまうという認識を持っているはずである。会話が順調に展開されるのは，両方ともこうした形式文脈を共有しているという前提が必要である。しかし，会話を長く続ければ続けるほど，互いに保存・蓄積すべき情報も多量になり，形式文脈を維持する負担が大きくなる。負担が大きくなっても会話の内容を共有する義務は変わらないため，こうした状況下では，会話参加者が互いに共有義務を違反しない，または違反させないように調整行為を行う可能性がある。そして，形式文脈を共有する義務を守るためには，(1) 相手と自分が言った内容を記憶に蓄積する，(2) 正確に覚えていない時，もしくは今の話題と時間的に少し離れている場合，内容の確認を行う，(3) 相手／自分が言っていないことを勝手に付け加えないということも含まれていると考えられる。次の例を参照されたい。

例 14＜BTS 初対面雑談 4＞A は家電メーカーで働いたことがあり，B は四年生で会社の内定を持っている。

1A　私、1 番最初は、(はい)あの、それこそ家電メーカーで、(はい)うん、勤務して
2　たんですけど。
3B　あ、そうなんですか。
4A　うん、10 年弱くらいね〈笑い〉。
5B　へぇー。
（50 行省略）
6B　あ、質問なんですけど。

7A　　ええ、何でしょう?

8B　→ あの、お仕事覚えるのに(うん)メーカーを、家電メーカーさんで働いてらっしゃ

9　　ったんですよね。

10A　　うん、そうですね。あ、でも営業、うんそう、営業事務でしたね。

11B　　お仕事覚えるのに、(うん)だいたいある程度(うん)１人前になるのに何年ぐらい

12　　かかりました?

13A　　う：ん、人によるかもしれませんけど、うんでもね、1 つの仕事を、う：ん、任

14　　されてやる、やれるまでに、やっぱ 3 年はいるかなー。[↑]

この例で生じた現象とは，11B と結びつけて分かるように，8B で B が言いたかったのは，＜お仕事覚えるのに，だいたいある程度１人前になるのに何年ぐらいかかりました?＞ということであるが，8B では途中で発話が切れてしまい，「メーカーを、家電メーカーさんで働いてらっしゃったんですよね」という確認発話を付け加えたのである。

＜お仕事覚えるのに，だいたいある程度１人前になるのに何年ぐらいかかりました?＞という発話が成立する前提条件として，〈聞き手（A）が仕事に就いた経験がある〉ということが必要である。＜家電メーカーで勤務していた＞という形式文脈は 1A で起きているが，50 行ほど前に行われた話題であるため，B としてはその形式文脈に対する記憶の精度が落ちている可能性がある。そこで，8B で確認発話をしたわけである。B の判断プロセスには，次の三点があるはずである。①これからの発話は相手が働いた経験がないと成立しない，②相手が確か家電メーカーで勤務したことがあると言っていた，③はっきり覚えていない可能性があるため，確認したほうがいい，ということである。この確認発話には，次のような機能が備わっていると考えられる。第一に，自分が形式文脈を共有していると相手に伝えることができる，第二に，相手に言った内容を記憶から捜索する負担を軽減できる，第三に，相手にこれからの話題を予測させやすくすることができるということである。

これらは＜形式文脈共有状態＞を確認するためだけのものでなく，新しい話題を開始する際に相手に理解の困難を生じさせないように行われた調整行為でもある。同じ性質のある例 15 も参照されたい。

例 15＜BTS 初対面雑談 4＞

1A　→ そうですね、でも私、(はい)あの営業…でしょ?

2B　　はい。

3A　　営業って結構やっぱり人とこう接するのが(はい)仕事になってくるんで、(え

4　　ぇ)結構合わない人も沢山いるんですけど、(えぇ)うん。でもね、やっぱり合う

5　　人もいるから、(えぇ)うん、そうした中で、なんかこう信頼関係ができてってい

6　　うのは(えぇ)やっぱり嬉しいことですよね。
7B　　はぁ：：

この例は，前に出された形式文脈を再度言及する時に，確認している例である。A が「でも私」という部分で新しい話題を言いだそうとしているが，相手が即座に理解できないというトラブルを抑制するために，確認発話したのであろう。こうした行為を調整として捉えられる。データを観察した結果，形式文脈を確認する場合には，例 14 の「～よね」と例 15 の「～でしょ?」という形式のほか， 例 16 における「～でしたっけ」という形式もよく見られる。

例 16＜BTS 初対面雑談 13＞
1A　→ ふ：ん、で、機械、制御でしたっけ。
2B　　機械制御[です]。
3A　　[あ：]、具体的にはどういうことをやってらっしゃる[んですか?]。

これらの例において起きた現象は，すべて同じ性質が備わっている。つまり，既出の形式文脈での内容を再び取り出して，新しい話題を開始する際に，聞き手の理解上のトラブルを防ぐために，発話者が行う調整行為である。

#### 3.3.2.2. 「知識の一時的共有」を調整対象とする場合

調整という用語は様々な分野で利用されている。例えば，Schegloff et al.(1974)やメイナード(1993)，Levinson(1983)では，「知識の共有」を調整の対象としていることが分かる。近年，この点について相互行為的視点から考察を行うものもある。ここでは，西阪(2005)，串田(2008)で注目された現象について見てみたい。

まず，西阪(2005)では次の例を挙げており，例 17 は本論文と関係のあるところだけ切り出したものであることを断っておきたい。

例 17＜西阪 2005：72＞A と B はつい最近知り合ったばかりで，A が自分の名前が出身地の北海道でいかに珍しいかを話している場面。
1A　　それは：：：,,
2B　　普通はあの森林のシン[ですよね：]。
3A　→ [そうなんですよ]。あの：：(.) ですから h-[北海道],,
4B　　[だけどこれは],,
5A　　では：：僕のところ一軒しかなくて：：
6B　　あ：,　北海道。

7A　　そうなんです。
8B　　は：：：ん。

A が 3A〜5A で実施した行為について，西阪(2005)では，「説明なしに北海道をトピックのためのコンテキストとして導入しながら，しかし同時に，それを，十分遅延させることでマークすることである」(p. 75)と述べている。また，3A における遅延に対して「A はこのような遅延により，いきなり北海道に言及することが好ましからざるやり方であることをマークする」と説明した。さらに，B に共有されていない「北海道」という情報に対して修復を要請しなかった(6B での反応だけを見ると修復要請の機能につながるかもしれないが，会話の流れから見ると修復開始表現より自ら気づいたことをマークしたとするほうがより適切である)理由もこうした遅延と関係があると主張した。

串田(2008)では，日本語における「指示者が開始する認識探索(the referrer-initiated recognition search)」について考察を行った。これは，指示者がある指示表現を用いる際に，相手が指示対象を認識できるかどうかを予備的に調べるという現象を指す。例 18 を参照されたい。

例 18(串田 2008：97)
1A　→ あと：(1.1)江守徹?
2B　　う：ん。
3A　　の：：：：演出やったときの：魔笛：とか。

この例においては，新しく導入される「江守徹」に試行標識(try-marker)の「?」が付されている。これは同時に「半疑問(音声表現の研究で半疑問イントネーションとも呼ばれる)」の現象としても注目されている。平地(2008)によると，半疑問には，「相手の注意を引きつけながら相手の理解度を確認する機能」(井上 1997)，「断定調や場に合わない難しいことばの使用で相手との関係を悪化するのを予防する機能」(井原 1994)，「発話に含まれる単語や事実関係などについての判断を相手に委ねる機能」(郡 2003)があるということである。

これら研究を踏まえて，本研究では，例 18 を用いて半疑問を使用する話し手の狙いについては次のように捉えたい。一つ目は知ったかぶりをしない姿勢を作ることである。躊躇なく「江守徹」の情報を提供するやり方では色々なリスクが伴い，例えば，もし相手がこの人物についての知識を持っていないとしたら，B の知識不足をあらわにすることになり，相手のフェイスを脅かす恐れがある。一方，もし相手が自分より詳しく知っている場合には，「そんなによくは知りませんが」というように自分の判断を不完全なものであるかのようにマークする姿勢が無難であろう。二つ目に，「相手が確実に指示対象を認識できたのを

把握してから先に進めたい」という狙いがあると考えられる。A としては「私は江守徹という情報について確実に知っているが，相手が知っているかどうか確認しないと，後でトラブルになるかもしれない」といった動機のもとで使用した可能性がある。三つ目は，「TRP にて修復の機会を作る」という狙いである。A が「江守徹」という情報そのものやその読み方（例えば，「トオル」ではなく「テツ」）が正しいかどうかの判断を聞き手に委ねた場合，もし間違いがあれば試行標識の直後で B が修復することができる。

以上を踏まえると，この三つの狙いはいずれとも調整行為を施す動機として考えられる。三つとも「未来生じうるトラブルを抑制し，事前に手を打つ」という点で共通している。

串田（2008）では，指示者がこうした行為をする目的について，「本題行為の開始・再開に先立って準備的発話連鎖を開始する形で……（中略）……本題行為を遅らせることと引き替えに，本題行為からその次への進行を円滑にする」（p.103）ためであると指摘し，更に，このような「本題行為に進む条件が満たされているかどうかを調べる行為」（p.103）を取るのは，「予め認識を確認しておかないならば，本題行為のあとで相手側から修復が開始される可能性の高い状況になる」（p.103）ためだと述べている。それでは，例 18 と類似している状況において，指示者が確認なしに指示対象を出し，修復が生じた例 19 を挙げる。

例 19＜BTS 初対面同性同士雑談 9＞自分の研究方向について語っている場面。

1A　　ま，かなり理，理論がこう，(うん)複雑になって，(ええ)ますよね。
2B　→ 前，山下先生がいらっして(うんうん)，講演なさった，それ聞いたんですけど，
(2.0)
3　　なんかやっぱ違いますよね。
4A　　あ，どういう方ですか?山下さんって。
5B　　あの，生成文法，(はい)やってらっしゃる先生で。
6A　　あぁ，はい。

この例は二人に共有しているかを確認せずに知識(「山下先生」)を導入した場合において，相手に修復を要請され，他者開始・自己修復という類型になった例である。

さらに，例 19 と同じ状況において，情報の伝達方法自体を調整することで例 19 における修復を回避することができたケースについて，例 20 を参照されたい。

例 20＜BTS 親しい男性同士の雑談＞二人は「相手に対する印象」という話題で雑談している。A が B に「モテモテだよね」と言ってから，二人は各自の恋について話している場面。A は恋に落ちたばかりで，B は失恋したばかりである。そして，A は自分に対して好意を持

っている女の子が「最近寄って来ない」ということを話したところ。

1A　　最近寄ってこないよ，あの人。
2B　　え，だって知ってるんやろ，付き合ってるの。
3A　　知らないと思う。言ってないよ，おれは。
4B　　言わんだろ。
5A　→ 言ってない，言ってない，言ってない。でも：その人がゆ，あの：：，ダンスが
6　　さ：：ダンススクールが同じだった人がい，いるって言ったじゃん。
7B　　ああ，はいはい。
8A　　その人が言ってるかもしんないけど。
9B　　うーん。

この例では，5A で「その人」に対して B が理解できないトラブルを予防するために，直接的に＜私は言っていないが，その人は言っているかもしれない＞というふうに展開せずに，「その人」に対する共通認識ができていると確認してから会話を先に進めた現象が見られる。このことは「不理解を回避するための伝達方法の調整」として理解できる。同時に，マクロ的に捉えてみると，5A では「その人がゆ」という部分が中断され，「あの：：」で修復開始を標識し，「ダンスがさ：：ダンススクールが同じだった人」という言い足しで自己修復を行ったことが分かる。この例からも，マクロ的な捉え方では，修復の機能が調整の機能に含められているという関係も窺える。

まとめてみると，例 17 に使用された「新知識の導入に伴う遅延」という装置を「理解上のトラブルを抑制する調整策」として捉えたい。つまり，共有されていない知識を導入する際に何らかの調整策を伴わないと相手に修復を要請される状況を招来するのであり，それを事前に回避する方策となっているのである。そして，例 18 に見られる共有されているかどうかを確認する行為をも理解上のトラブルを抑制する調整行為として捉えたい。この例からも，このような調整行為を施さなければ，何からのトラブルが生じ，修復連鎖に入る可能性があるという予測とその予防策の発動と考えることができる。例 19 は上記のような調整行為が行われない場合に修復が生じた例であり，例 20 は調整行為が行われた場合に修復が回避された例である。これらの例では調整と修復との間に連動的な関係が存在しているのではないかと考えられる。

### 3.3.3.　受容上のトラブルに対する調整

受容過程におけるトラブルに対処する調整について考えてみる。この過程に起きる調整は＜対人関係的調整＞とする。まず，発話が理解されたあと，聞き手が発話内容に対して

同意しない場合，会話参加者の間に不同調というトラブルが生じたと言えよう。次に，順調な伝達は発話内容が聞き手に受け入れられるだけでなく，会話参加者間のフェイス状態が均衡していることが必要である。そこで，本節では，不同調を抑制する調整とフェイス状態の非均衡を抑制する調整について述べる。

#### 3.3.3.1. 「同調」による効果を目的として調整する場合

「同調」という概念はさまざまな現象を含んでいる。参加者が意見や主張を対立させたくない会話では，両者は「最大の一致」を維持しながら，対立を回避するように振る舞うはずである。この場合，相手の主張に対して賛意を表明するという態度が重要になる。

二人の意見が対立していることを両者が互いに認識しつつ，対立したままで会話を終わらせる場合では同調現象が生じにくいかもしれないが，その対立状況を変えようとする場合に「自分の主張態度を弱めたり，相手の意見に理解を示したり」するといった同調行為が生じうる。ここでは，マルチモーダルの視点からこうした「話し手の主張態度の調整」について考察された中村(2011)を見る。

会話分析では相手の出方に合わせながらデザインすることによってさまざまな行為を遂行する能力を重視している。会話をする際に，参与者がどの程度の長さで話すかは事前に決められているわけではなく，相手の反応に影響を受けながらターンを構成したり，ターンを相手に渡したり相手から奪ったりするといったダイナミックな性質を持っている。従って，相手の反応(言語表現ではなく，目線やジェスチャ表情なども[16])を窺いながら自分の発話を調整することは珍しいことではない。中村(2011)はこうした背景の下で議論を展開したのである。例 21 を参照されたい。

例 21(中村 2011:36)A と B が「町」という言葉の持つイメージについて話している。自分の出身地(〜町)がいかに田舎であるかと語った B に対して，A は「都会では町のつく地名はおしゃれだ」といくつかの例を挙げる。

1A　あ：だから町っておしゃれなんだけど。
2B　何かイメージが違うんだけど。(0.7)
3A　〈軽く笑い〉
4B　イメージが違うんだけど，なんか，[なんか],,
5A　[駅の名前]で(.)あるよ，町って言ったら。

16 ただし，本研究ではマルチモーダル的に考察するつもりはないことを断っておきたい。調整や修復に対する研究が言語表現のレベルではまだ不完全な状況にあり，それに加え，ある表情や目線，ジェスチャなどが具体的にどのような情報を伝達できるかはまだ解明されない状況であるので，今後の方向としておきたいが，本研究での目的ではない。

6B　　あ，でも(0.2)それは名前がたまたまちょうで終わった,,(0.5)

7A　　◦そうなのか[な：：◦

8B　→◦っていう感じ?◦(0.4)

9A　　あれ，分かんない。

この例で起きている現象とは，B が 8B で「っていう感じ」という表現で断定を避ける上に，低い音量と上昇調のイントネーションを伴って主張をかなり弱めたということである。こうした行為を促したのは，7A での「そうなのかな」という好ましくない返事[17]によると考えられる。つまり，断片の最初から二人の「町」に関するイメージが分かれており，そのような対立を維持するまま会話を進めるのは良くないと認識した B は，相手の不同意(「そうなのかな」)に合わせて自分の主張を弱めたという現象が見られる。

こうした＜相手の出方に合わせた主張態度の和らげ＞という行為を，単なるトラブルを抑制する調整でもなければ修復でもなく，両方の機能を有する行為として捉えたい。相手の出方に合わせた主張態度の和らげには，＜対立を維持する／激化するというトラブルを抑制する＞機能もあれば，A が非選好発話（7A）をしたことから両者が既に意見において対立するトラブルに身を置いているという状況に対して，修復機能もあると考える。ただ，ここでのトラブルとは＜お互いに相手の見方を受け入れない＞という受容上のものであり，そのトラブルに対する修復組織が埋め込まれており，顕在性が低いと言える。

もう一つの例を挙げる。例 21 では，会話参加者の間にある程度の対立が存在しているのを知っていながら，調整が行われたのであるが，対立しているという前提がなくても，調整が行われることもある。次の例を参照されたい。

例 22＜BTS 初対面雑談 6＞

1A　　将来は：今仕事：：

2B　　そうなんですよね、それが、多分進学はこの先あんまりしないかなってちょっと

3　　思ってて、もしするとしたら一回社会に出てから考えようかなっていうくらい。

4A　　会社帰りに勉強したりして,,

5B　→ なんか、社会に出ないで：：勉強ばっかしてても：(うん) よくないかなーって

[17] この場合，好ましい返事とは賛同を表示するものを指す。Pomerantz(1984)では，評価を下す場合において，同意が期待される場合においての「同意」と，不同意が期待される場合においての「不同意」を「選好行為」(preferred)とする一方，同意が期待されているのに不同意をした場合と，不同意が期待されているのに同意をした場合を非選好(dispreferred)の行為としている。そして，中村(2011)では「選好の行為は概して早いタイミングで産出され，発話自体も短く直接なのに対し，非選好的な行為は沈黙や言いよどみ，修復の導入など何らかの形で返事の産出を遅らせる工夫がなされる」という引用もあったことから，この例に対する解釈がこうした背景があることが分かってくる。

6　　いう気もして：：いやでも甘いかもしれませんが。
9A　　や、でも、それは本当だと思う。

例 22 では，会話参加者の間には特に対立が見当たらない。B が 5B で自分の見方，つまり，＜進学するとしても一度社会に出てからにする。社会に出ないで勉強ばかりしていても良くない＞という見方を表す際に，「～かなっていう気がする」という断定を避ける表現形式を使用した上で，その直後にまた自分の見方に対してメタ的に否定的評価（＜自分の見方が甘いかもしれない＞という 6B の意味）を付け加えた。つまり，B は「～かなっていう気がする」という表現で自分の主張態度を弱めるという手段と，「いやでも甘いかもしれませんが」というメタ的な否定的評価で自分のフェイスを侵害する手段を使用して，相手に同意を促したと言えよう。これらのような手段も，「同調」の効果を目的とする調整策として捉えられると考える。

3.3.2 で示した 2 種類（形式文脈共有義務の違反を抑制する調整行為と知識の共有化を一時的調整する行為）を＜情報伝達的調整＞とすることができる。それに対して，本節で取り上げた「同調」に関する調整行為は，主に対人的関係と関わっている。両者間の意見が食い違う時に，互いに自分の主張態度を弱めたり取り下げたりする行為は互いのフェイスに対する配慮の影響があると考えられる。そもそも，順調な伝達は情報を順調に相手に伝えただけでなく，二人の関係を維持しながら相手に受け入れてもらうということも含んでいる。次節では，続いて対人関係に関わる調整行為について見る。

#### 3.3.3.2. フェイス上の均衡化を目的とする調整行為

対人関係上悪影響を及ぼしうる行為とは，例えば，相手のフェイスを侵害する行為や自分のフェイスを高める行為などが挙げられる。それらを抑制する調整行為は＜対人関係的調整行為＞として捉えられる。

B&L（1987）のポライトネスの枠組みでは，フェイス侵害を軽減するためにさまざまなポライトネス・ストラテジーが行われるという現象について論じられている。話し手がどのようなストラテジーを使用するかは，相手との力関係や親疎関係といった要素によってこれからの発話が相手のフェイスに侵害する程度を見積もった結果によるのである。つまり，B&L（1987）の枠組みにおけるポライトネス・ストラテジーはすべて「発話者が事前にフェイス侵害度を見積もってから施した行為」として理解することができる。そうした場合，B&L（1987）で提案したさまざまなポライトネス・ストラテジーを「フェイス上の問題を抑制する調整策」とすることができるようである。

しかし，こうした簡単な捉え方には問題がある。というのは，これは本研究と B&L（1987）

における分析単位が違うからである。発話の単位では，B&L（1987）の枠組みが成立するかもしれないが，考察の単位を発話の連鎖や会話まで拡大すると，もっとダイナミックに捉えなければならないということである。フェイス侵害度に影響を及ぼす三つの要素，「親疎」「力関係」と「当面の行為の負担度」が，会話まで考察単位を拡大しても，親疎関係や力関係という要素が変わらないものの，相手にとっての当面行為の負担度の計算方法は変わってくるだろう。単純にその行為の負担度を計算するのではなく，これまでの会話において，相手から受けたフェイス侵害やフェイス支持による効果も考慮に入れられる可能性がある。例えば，相手にフェイスを高められた場合と相手に連続的にフェイス侵害された場合では，発話者にとってこれからの行為の負担度を見積もる際に，その影響が異なるだろう。

このような考えを踏まえ，会話において，話し手と聞き手の間にフェイスバランスという抽象的な概念が存在するとしよう。成功なる伝達の重要な特徴の一つとして，会話参加者の間におけるフェイスバランスが均衡であるということが言えよう。そうした均衡化を実現するもしくは均衡化を維持するために，発話者はある行為のフェイス侵害度を個別的に見積もるのではなく，会話でのやりとりが互いのフェイスに及ぼした効果も入れて総合的に判断するだろう。そうした場合，発話者がフェイスバランスに悪影響を及ぼしうる行為を抑制し，フェイスバランスの均衡化を図るために修復を行うというシステムが成立することになる。

本研究では，フェイスの均衡化に悪影響を及ぼしうる行為を抑制することを＜対人関係的調整＞の一種とし，フェイスバランスの均衡化を取戻すための行為を＜対人関係的修復＞の一種とする。フェイスバランスの枠組みについて詳しくは第 6 章に譲りたいが，本節では，実例を用いてこのことに関する基本的な考えを示しておきたい。

会話を行う際に，フェイスを傷つけたり傷つけられたりするといったフェイス侵害行為（FTA:Face Threating Acts）が生じうる一方，自分のフェイス或は相手のフェイスを高めたりするようなフェイス支持行為（FSA:Face Surpporting Acts）もある。フェイス状態をアンバランスにさせうるのは FTA だけでなく，FSA も同様考慮しなければならない。順調な会話の過程が成り立つためには，参加者が交互にこれらの行為を交わすことを通して，フェイスバランスが維持されていることが必要だと言える。従って，参加者がフェイスバランスを維持するために事前に施される方策は調整として捉えられる一方，フェイスバランスが崩れた場合，もしくは崩れかけた場合に，それを元に戻すための方策は修復として捉えられると主張したい。

よって，ここでの修復とは理解のトラブルに対する修復と同じく，＜参加者のどちら側にフェイスバランスの崩壊に認識した＞のを前提となる。聞き手が反応しない限り，会話

内でフェイスバランスが崩れたかどうか把握できず，その修復も施しようがない。従って，一般的には，会話内でフェイスのアンバランスを認識した側によってフェイス修復方策を施すため，他者開始される類型が殆どであるということが予想できる。しかし，受容のトラブルに対処する修復組織のうち，自己開始されるものも多くある。例 23 を参照されたい。

例 23＜BTS 初対面雑談 1＞A と B が初対面で，B は就職試験に英語の会話能力が求められて困っているようであり，A に英会話を教えてほしいという希望を伝えた後，A が自分の語学旅行の経験を B に話している場面。

1A　　あたし，2 年の 9 月ぐらいに，3 週間行ったんですよ。
2B　　3 週間?
3A　　はい，1 人で。
4B　→たった 3 週間で，何かなります?何かなるって[いうか：：]
5A　　[いや，でも]，授業はおもしろかったですよ，すごい。
6B　　語学学校行ったん[ですか]。
7A　　[はい]。
8B　　あ，そうなんですか。

この例では，A の「語学旅行に行くのも英会話の練習になる」というアドバイスに対し，B が 4B で一般論として，＜普通三週間だけでは英会話の上達に役立たないのではないか＞という認識を表明した。しかし，これは相手のしたことに対しての否定的評価になり，フェイスバランスを崩すことにつながっている。そこで，B は「何かなるっていうか」という開始形式でフェイスバランスに対する修復を試みた。この点から見れば，これは自己開始・他者修復という類型である。

一方，「たった 3 週間で，何かなります?」という発話の直後に A が反応していないため，B は自分の発話に両面性があると認識したにもかかわらず，相手から言語的な反応をもらう前に，直接的な修復を実行するのではなく，＜まだ相手が確認していないが，自分の発話には不適切なところがあるため，後にトラブルが生じうる可能性がある＞という状況に対して抑制方策を取った。具体的には，「～ていうか」という発話をもって，発話における不適切さに認識し，否定的評価として捉えられうる面を取り消そうとするという調整方策を施したのである。つまり，これは修復開始の機能と調整の機能を兼務している現象である。

理解上のトラブルと同じく，受容上のトラブルに対しても共通認識がなければ修復そのものが完成しないため，相手の返事の特徴を通して，当面のトラブルに対して共通認識が形成したかどうかを確認できる。相手からの返事の前に，理解上のトラブルやフェイスバランスの崩壊を予防するために施される方策は，トラブルが形成する前に行われたため，

修復ではなく，調整策として捉えるべきであろう。

### 3.3.4. まとめ

本節では，いくつかの分野に取り上げられた現象と本研究での調整との関係を探ってみた。

まず，情報伝達的調整として，＜形式文脈共有義務違反＞を防ぐ調整の例と＜一時的な知識共有＞を調整対象とする例を取り上げた。具体的にいうと，まず，順調な理解達成には＜形式文脈を共有する＞＜必要とされる知識を話し手と聞き手が両方とも知っている＞というルールがあるはずである。従って，形式文脈が共有されず，理解に必要となる知識が共有されない限り，順調な理解が達成されない。例えば，会話が展開している中で，相手が理解達成に必要な知識を知らない場合において，話し手は共有していない部分，いわゆる相手が欠落した部分を補充してから先に進めるという方策を取る傾向がある。それは修復として考えるべきである一方，話し手は当面の話にとってポイントになる情報を出す前に，両方に共有しているかどうかを確認するような行為が知識を共有している状態に持っていってから進めたほうがいいという認識のもとで行われたと見なされうるため，調整策として見なされうる。

次に，対人関係的調整として，同調による効果を目的とする調整例とフェイス状態の均衡化を目的とする調整例を取り上げた。同調という現象は主に，＜相手の主張への賛成を表明する＞ことや＜相手の考えに近づける＞という行動を指す。つまり，対立を最小限するために自分の発話態度を工夫する現象を調整として捉えたいということである。また，両者間におけるフェイス状態の均衡化に対して悪影響を防ぐために行われた行為をも同じ方法で捉えられる。

勿論，その他にも調整の対象とすべきものがあると考える。例えば，垣根表現(hedge)(「伝達しようとする命題内容やそれに対する自身の態度を調節する目的で使われる言語表現」)(林 2008:72)のうち，「本題に入る前に現れ，コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして使用される」(大塚 1999)と定義される「前置き表現」が含められている。そもそも「会話を円滑にする」とは伝達方法や自身の態度を調節するのを通してトラブルを減らすという面も含んでいると考えられるため，前置き表現もこの節で取り上げた現象と同じく扱えると考えているが，これは今後の研究課題としたい。

## 3.4 多領域で生じるトラブルに対処する修復・調整

本節では，会話の産出過程と理解過程に関わっている調整及び修復，産出と受容に跨がる調整と修復，理解と受容に関わっている修復について考察をしてみたい。

本節の構成について，まず，3.4.1.では主にどんな現象を取り上げるかについて述べ，3.4.2.では産出と理解に跨がるものを取り上げて調整と修復について見てみたい。また，3.4.3.では産出と受容に関わるものを対象にして調整と修復を考察し，3.4.4.では理解と受容に関わっているトラブルに対処する修復について述べる。最後に，3.4.5.でまとめる。

### 3.4.1. 研究対象について

#### 3.4.1.1. 二つの過程に関わっている調整と修復現象とは

まず，調整として取り上げる対象について述べる。第一に，産出と理解に跨がるトラブルを抑制する調整は何かについて，本研究では理解過程に生じたトラブルとは理解不能や誤解を指しているため，これらのようなトラブルを防ぐために発話の産出過程において話し手が既に何らかの方策を施している現象を取り上げたい。第二に，産出と受容に関わっているトラブルを抑制する調整については，発話の産出段階においては，発話内容を相手に受け入れられやすくするために工夫した方策やフェイスバランスを崩しうる行為を回避する方策などが施された現象を対象とする。第三に，理解と受容に関わるトラブルを回避するための調整現象は具体的に何を指すかがまだ分からないので，ここではその部分を触れずに，理解と受容に関わっているトラブルに対処する修復についてだけ見る。

上記の現象について，高木(2008)では少し触れている。高木(2008)では調整という概念が使用されてはいないが，このような現象の存在を確認している先行研究がある。高木(2008)では，次のような記述がある。

「話し手は，これから発言することが受け手に適切に理解されるか，或は，受け入れてもらえるかが不確定であるという認識を公然化し，実際に理解の困難が生じたり，発話が不適切であったりという理由で受け手が修復を促す事態に至ることを，さまざまな手続きで事前に回避することが可能である。」(p. 59)

高木（2008）では，具体的な会話現象として，＜非同意の予示・表示＞と＜不適切性の予示＞を挙げて会話分析の視点から分析を行っている。本研究では，このような現象も含めて，調整の視点から見直したい。

次に，修復の対象には何があるかについてであるが，産出と理解，或は産出と受容に関わっているトラブルという概念自体に分かりづらいところがあると思う。一対一の会話において，話し手が産出側に，聴き手が理解側／受容側に回るのが一般的であるため，同時に二つの過程に関わるトラブルの生成とはどういうことなのか理解しにくいところがある

と言わざるを得ない。そのため，ここでは，調整との対照を通して考えることとし，調整機能のある方策が施されない場合に発生したトラブルに限定して，どのような修復策を講じられ，修復を実行されたのかについて考察してみる。

#### 3.4.1.2. 調整策と前置き表現との境界

以上で分かるように，本節で取り上げた調整策とは「理解過程及び受容過程に生じるトラブルを抑制する機能のある」ものを指す。更に広く捉えてみると，前置き表現の機能と重なっている部分があるようである。

前置き表現に関しては数多くの先行研究がなされてきた。前置き表現の定義については，大塚(1999)によると，「本題に入る前に現れ，コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして使用される表現」(p. 119) である。この考え方を引き継いだ陳(2007)[18]においても，「前置き表現とは，主要となる発話を導入するため，その主要となる発話の直前に用いられ，話し手の言語行動における配慮を表す発話である」(p. 100，下線は筆者によるもの)として，配慮の種類を「伝達性配慮的な前置き表現」と「対人型配慮的な前置き表現」に分けた。更に，小沼(2007)では，前置き表現に対して形式と機能に分けて考察する必要があると主張し，形式上では文(節)だけでなく，文がいくつか集まったテキストからなる前置き表現もあると指摘した上で，機能上では儀礼的なものだけではなく，メタ的な機能もあり，自分の意見や考えを詳しく説明したり，ある事項について細かな情報を与えたりすることで，次ぎにくる主眼点の本題や本論を相手に理解しやすくする働きを持つ情報付与の前置きも存在する(下線は筆者によるもの)と述べている。

以上から分かるように，形式上では，前置き表現の単位に対しては未だ認識が一致していないようであり，また，前置き表現が主要部を導入するためのものであるとするならば，前置き表現と従属節との境界線が不明瞭であると言える。それに対して，機能上では，先行研究での記述において共通しているところがある。いわゆる＜相手に理解しやすくする＞，＜相手に対する配慮を表す＞という機能が備わっているならば，発話者が相手に発話を理解してもらいやすく，或は受容してもらいやすくするために前置き表現を使用するのである。これには，相手の理解過程と受容過程においてトラブルが生じないように発話を工夫するという意味合いも含んでいると言えよう。

従って，本研究では，前置き表現の単位を問わず，前置き表現を主要部を導入するというより，相手との間にあらゆるトラブルを防ぐために行われた事前行為として調整の視点

---

18 陳(2007)では，10 個の前置き表現を取り上げている。それぞれ「悪いけど／すみませんが／申し訳ありませんが／失礼ですが／勝手ですが／僭越ですが／恐れ入りますが／恐縮ですが／恥ずかしいですが／及ばずながら」である。

から捉えてみたい。ただ，これまで前置き表現として考察されてきたすべての表現を調整の枠内に収めることはできず，現段階では，発話を産出する過程で，相手に理解上のトラブルと受容上のトラブルを生じさせないように事前にさまざまな方策を（相手にトラブルがあるのを指摘される前に）施した現象だけを取り上げる。

### 3.4.2. 発話の産出と理解に跨がるトラブルに対処する調整・修復

理解上のトラブルを抑制する調整策について，3.3.2 で＜情報伝達的調整＞として既に触れている。3.3.2 では，一時的な知識共有を目的として理解上のトラブルを抑制するケースについても論じた。具体的な調整手段には，新しい情報を出す時に現れる遅延／半疑問現象と新しい情報を出す時に相手の知識状況を確認するといったものがある。また，3.3.2 では，相手が産出した形式文脈について確認する場合における＜形式文脈共有義務違反＞を抑制するケースであり，本節では，自分が産出した形式文脈を再び言及することで＜形式文脈共有義務違反＞を抑制するケースを取り上げる。そして，＜話題予告行為＞という調整方策についても述べる。

#### 3.4.2.1. 調整行為について

##### 3.4.2.1.1 「形式文脈共有義務違反」を抑制する調整策

発話者が相手の言ったことを再び言及する際に，自分の形式文脈に対する記憶が正確かどうか相手に確認する場合もあれば，発話者が自分の過去の形式文脈に再び言及することで形式文脈の共有義務の違反を抑える場合もある。

繰返しになるが，加藤(2009)の「形式文脈共有義務」とは形式文脈を会話参加者が共有保持するという義務を指す。会話のセッションの間，保持しなければならない情報をもし忘れた場合，或ははっきり覚えていない状況になったら，理解上のトラブルが生じてしまう恐れがある。会話において，発話者がこうしたトラブルを防ぐために調整策を使用することがある。典型的な手段として，「さき／いま／この間…言った／述べた／話した…ように」という表現がある。例 24 を参照されたい。

例 24＜高木 2008:61＞A はカウンセリングの受け手で，B はカウンセラーである。

1A　→ あの。さきちょっとお話しまし[たけ]れども，あの：：：：
2B　　[はい]。
3A　　自分と：母親との：関係[：：],,
4B　　[はい]。
5A　　ていうんですか：?(0.7)う：ん，まかなり：：つよい，あの：：タイプの人間

6　　だったんですけ[ども：：]。
7B　　[あ、お母]さんがね：：
8A　　ええ。

この例では，「さきちょっとお話しました」という表現は，これから言及することが既に語ったことであるということを受け手に明示するものである。高木(2008)では，この表現について，次のように述べている。「二人のやりとりの中で既に語られた事柄について再び言及する際には，既に語られた事柄であるという話し手の認識を示す必要がある。話し手は受け手が既に知っていることと分かっていること，そして話し手がそのことを分かっていることと受け手にも分かっていることについて避けるべき」(p.61)ということを根拠にして，「既に話したことに再び言及することを予告する」この表現を＜発言の不適切性を予告する前置き表現＞の一種としたのである。

高木(2008)の論述に対しては，全面的に支持することはできない。なぜなら，既に語られた事柄に再び言及する際に何らかの表現で相手に予告することは必要であるが，参加者が双方とも分かっていることを「避けるべき」だという認識には疑問が残る。従って，こうした表現は＜発言の不適切性を予告する＞ものではないと考える。

また，なぜ既に言及した事柄を再び語る際には何らかの予告表現を使用する必要があるかと言えば，既に語った事柄が相手にとって既に処理済みのことであるため，「先言ったように」という発話の裏には＜これから言うことは先も言ったものなので，談話記憶から呼び出せば十分である＞という意味合いが含まれ，相手にとって理解上の負担が軽減される効果があるからであろう。言い換えれば，この表現には相手に形式文脈の共有を促す機能がある。つまり，もし相手が共有義務を違反すれば，修復連鎖に入る可能性がある。また，相手のフェイスを傷つける(「ちゃんと話を聞いてくれなかったため」という推論も可能であるため)可能性もある。

#### 3.4.2.1.2　話題変換を予告する行為

会話において，話題を変える際には，何らかの表現で相手に予告する必要がある。予告がない場合，相手が話題の変更を理解できなかったり，これまでの話の一部として誤って解釈したりするような事態が生じかねない。このような予告行為も理解上のトラブルを防ぐための調整策として考えられよう。例 25 を参照されたい。

例 25＜BTS 初対面雑談 1＞A が B に英会話を教えてほしいと頼み，B に承諾してもらったあと，二人は各自の高校生活について話していた。しかし，就職の二次試験で英会話が科目になっている A は，もう一度相手の気持ちを確かめたいためか，その話に戻すように話題

変換を予告する。

1A　→ え、でも、いやちょっと話変わるけど、本気で、あの、探してるんですよ、英会
2　　話指導して(ん：)、指導してくれる人。
3B　　だったら、本物の外人のほうが良くないですか?
4A　　や、別に、だって多分、面接官日本人。
5B　　うんうん。
6A　　何か、コーヒーおごるぐらいしかできないんですけど。ほんの 15 分ぐらいとか。
7B　　うん。
8A　　え、ほんとに[いいですか?]
9B　　[いいですよ]。

話題転換とは何を指すかについて説明する。会話における話題の区切り方について先行研究では数多くの議論がある。本研究では，筒井(2012)において提出した以下の五つの基準で話題を区切る方法を使用したい。それぞれ，①新しい話題への転換，②旧話題に登場した事柄の新しい側面，③旧話題に登場した事柄の新しい様相，④旧話題に登場した事柄と同種の事柄への転換，⑤旧話題に登場した個別の対象や事態の一般化である。②～⑤の場合は，従来の研究では「切れ目ないトピックの推移」（ある発話によって提示された対象と同じカテゴリーの別の対象に言及することによりなされる話題の推移，串田（1997）による)とされている。一般的に，②～⑤の場合においては，話題を変える予告をしなくても，先の話題とつながりがあるため，理解上のトラブルを招くことは少ないが，それに対して，①の場合には，かえって話題変換予告を行わないとトラブルを招きかねない。この場合に，理解上のトラブルが生じ，修復が行われる。

#### 3.4.2.2. 修復行為について

##### 3.4.2.2.1 ＜形式文脈共有義務＞の違反に対する修復

形式文脈の共有義務を違反すると，何らかの形で修復が行われる。ただし，その義務に対する違反の程度によって，つまり，言及済みのことを完全に忘れた／間違えた／あやふやになったかによって，修復の組織も異なってくる可能性がある。例 26 は A が「言及済み」のことをはっきり覚えていない場合に生じたものである。

例 26＜初対面同性同士雑談 8＞B は台湾で日本語教師を勤めている。

1A　　そうすると、日本語を、(うん)あっ、日本語じゃない(うんうん)でしたっけ?(う
2　　んうん)教えるんですか?
3B　→ うん、日本語教えてる=

4A　　=時は、(うん)中国語で教えるんですか?
5B　　あ、でもね、最初ほら、全然分かんなかったし、(うん)それで日本語を教えてた
6　　経験は、日本であったからね,,
7A　　あ、そうなんだ。

1A までの話題は,「B が SARS のせいで台湾から一時帰国した」ということについての内容である。B が自己紹介の時は既に「台湾で日本語を教えている」(元のデータでは，自己紹介の内容が出たのは 39 行目であり，1A は 120 行目に出たのである）ことを A に伝えた。しかし，この共有すべき形式文脈は A があやふやになっていることが,「日本語じゃないでしたっけ?」という形式で分かる。形式文脈に全く違反していない場合，分かり切った情報（ここでは，〈B が日本語を教えている〉ということを指す）を確認する必要はない。この点から言えば，A がある程度＜形式文脈の共有義務＞に違反したと言えよう。この違反に対して，B が修復を実行した。全体的に自己開始・他者修復という組織になっている。

例 26 では A は＜形式文脈の共有義務＞に違反したものの，その程度は軽いと言える。それに対して，次の例は，＜形式文脈の共有義務＞を完全に違反したケースである。

例 27＜BTS 男女討論 1＞A は男性であり，B は女性である。A が自分の妹の仕事について話している。

1A　　ん：：まず、総合職で就職しようと思ったけども(ん：)、人数が少なくて、無理
2　　で(ん：)、人数が少なくてっていうかまあ、本人の能力的に、な評価も(ん：)厳し
3　　かったみたいだしね(ん：)、一般職で入ったんだけども(ん：)、そうすると、やっ
4　　ぱりどうしても男のサポート役みたいな(ん：)、仕事みたいで(ん：)。でも、男も
5　　それが当たり前みたいな(ん：)。アシスタントっていうんですか?
6B　→ ん：総合職なのにね。
7A　　いや、総合職じゃないよ、一般職で入っ[て]。
8B　　[一]般職で入って、あ、そっかそっか。
9A　　そうそうそう。

この例では，6B の反応から，3A の「一般職で入ったんだ」ということを共有することに失敗したことが分かる。トラブルの性質から言うと,6B は誤解という理解上の問題である。そして，それが引き起こされた原因は B の形式文脈の共有義務に違反したところにある。B が＜形式文脈の共有義務＞を完全に違反していると判断する基準は，共有されるべき情報が直前に起きているのに共有できていない，正確に共有していると確信できない場合は確

認発話が必要なのにしていない，という 2 点である。B の違反に対して，A が 7A で他者開始・他者修復を実行した。もう一つの例を参照されたい。

例 28＜初対面同性同士雑談 7＞二人はお互いに自己紹介したあと，各自の研究分野について話している場面。

1A　　えっ、何、研究は何を?
2B　　あ：：シンガポール英語を。
3A　　あっ、シンガポール、（はい）英語なんだ。
4B　　はい。
5A　→ えっ、英語学科って言いましたっけ?
6B　　日本語。
7A　　あっ、日本ですよね。
8B　　なんか言語接触やってて（うん）なんかだから、シンガポールだと英語なのに、
9　　中国語の影響ってすごい受けてるから、すごい面白いなぁって[思って]。
10A　　[あ：]、なるほど。

自己紹介した時に，B は既に専攻が日本語であることを話した。A はそれを覚えている。しかし，2B で研究分野が英語と関係があると聞いた A は，3A で＜相手の専攻が英語なのだ＞と誤解した。つまり，新しく出た情報が先の形式文脈と矛盾が生じたと認識した A は，そのトラブルを解決するため，5A で先の形式文脈の内容を確認することで修復開始を要請した。この例を通して分かるのは，形式文脈の共有義務を違反していないものの，受け手に前後情報の一貫性が足りない，もしくは矛盾が感じられる場合においても修復が要請されるケースもあるということである。

#### 3.4.2.2.2　話題変換予告をせずに招致した修復例

3.4.2.1.2 で述べたように，話題を変える際に施された予告行為を調整策とするなら，そのような予告行為をしない場合においてトラブルが生じて，修復に入る可能性があるということを具体例で説明する必要が出てくる。その例を次に挙げる。

例 29＜初対面同性同士雑談⑧＞A が中国語を専攻としていることを聞いたあと，B は「今台湾に住んでて，中国語勉強した経験者です」ということを話した。A は B に仕事について聞いている。

1A　　え、台湾…(うん)は今、お仕事で、い?

2B　　あ、うん、そうなんですよ、うん。主人も向こうで仕事してるんですけど、私も
3　　向こうで(あぁ：)日本語を教えてるんですよ、うん。
4A　　えっじゃあ、あの、行く前から(うん)一応学んではあったんですか?
5B →　あっ、うん、あっ、うんとね、中国語?中国語はね、行くと決まってから、発音
6　　だけやって。
7A　　へぇ：：

1〜3 行目までは,A が＜台湾で仕事しているか＞と聞き,B が肯定的回答で返事しており,「質問-応答」連鎖になっている。そして，4A では A が B に＜台湾に行く前から中国語を勉強し始めたのか＞と聞いており，B はその質問に対して 5B で答えている。つまり，4A から新しい話題を始めている。だが，新しい話題を開始するのを予示／予告しなかったため，4A で A が聞きたかったのは「行く前に日本語教育を学んだか」それとも「中国語を学んだか」，B にとって不明瞭であり，理解上のトラブルを生じさせてしまったのである。この点は 5B の返事における遅延(「あっ、うん、あっ、うんとね」)からも分かるだろう。B が「中国語?」という上昇調で修復開始を要請したが，修復過程が顕在化されておらず，相手の目線やうなずきなどによって潜在的に解決されたことも見られる。

勿論，話題を変える際に，いちいち「話題が変わるけど」というふうに予告表現をしなければならないとは限らない。この例では，この手段以外にも，他にもトラブルを抑制する方法が考えられる。例えば，4A を＜中国語は行く前から一応学んではあったんですか?＞というふうに,「中国語」を省略しなかったら，上記のようなトラブルを招かずに済む可能性もある。

### 3.4.3.　発話の産出と受容に跨がるトラブルに対処する調整・修復

#### 3.4.3.1. 産出と受容に跨がるトラブルを抑制する調整について

本節では，受容過程におけるトラブルについて考察し，主に発話内容の不受容とフェイス上の侵害による不受容という 2 種類をその対象とする。そして，産出と受容に関わるトラブルを抑制する調整策とは，発話の産出する途中で，相手の返事より前に行われるものである。発話内容の不受容を防ぐための調整策については，3.3.3 で取り上げた例 21 と例 22（発話者が自分の主張態度を弱めることで相手を同意に仕向ける例）を参照されたい。ここでは,フェイス状態の均衡化に悪影響を防ぐための例として,例 30 と例 31 をあげる。

例 30＜初対面雑談 1＞A の専攻が英語であり，B に英会話を教えるように頼まれた後，二人は大学で受けた英語の授業において会話の練習が少ないということをめぐって話している。

1A　　あと、シェイクスピアとか,(あ：)やりましたよ：：。
2B　　そうなんだ：シェイクスピア面白そう：だけど、や、でも、文法ばっかりで、[な
3　　んか全然],,
4A　　[ん：：]、会話が,,
5B　　会話が[なくって]。
6A　　[ない]。
7B　　ネイティブ、いるん[ですけど]。
8A　　[うん：]、話さないですか?
9B →　ん：：1、2 年の時は、話せるようにな、話したんですけどね、もう、3、4 年、
10　　になると、[表現]【【。
11A　　】】[授業も]少ないし。
12B　　そう。

田山(2000)によると,「可能の状態＋進展性(ようになる)」という構文には「物事の実現」という意味合いがあると述べられている。9B で B は「話せるようになった」と言いたかったが、途中で自己修復をしたことが見られる。「英語が話せるようになった」ということは自分のフェイスを支持する行為に相当するため，相手に英会話を教えてほしいという立場にいる A にとって不適切な行為になりうるからである。こうした「自己指向的 FSA(フェイス支持行為)」はフェイスバランスを崩しうる行為の一種であり，そのようなリスクを回避するために B は途中で自己修復をしたのであろう。

たとえ，B が元々言いたかったのは＜話すようになった＞であり，うっかり「話せるようになった」と言い間違えたとしても，安達(1997)において述べられている,「意志的動作を表す事態が「ようになる」構文を取るとき，決してある具体的な行為の過程のなかで，次第にそのような行為の実現という状況に至るという意味を表すことはできず，そのような習慣が次第に身に付いたということを意味するだけである」(p.81) ということに従えば,＜英語を話す習慣が身に付いた＞というのも自分に対して肯定的な事項であり,「自己指向的フェイス支持行為」になる可能性がある。

どちらの場合にしろ,文法的には正しい表現になる。しかし,B は途中で修復を実行した。その理由は相手に受容してもらいやすいため，できるだけ自己指向的フェイス支持行為を避けたいという心理に帰結できるだろう。そうすると，これはフェイスバランスを崩しうる自己指向的フェイス支持行為を回避する事前調整行為として捉えられる。次に，同じ目的を達成するために他の手段を使用された例を見てみよう。

例 31＜高木 2008：61＞

1A　　ただ：最近＜鼻を啜る＞,,

2B　　[うん]。

3A　　はほんとにそうしたふうに思う(うん)ことが少なくなりましたねえ。

4B　　ああそうですか，はい。

5A　→　あの：:ん：:(11.0)こんなこと言うと：:(ん)，ちょっとあれですけ[れども],,

6B　　[はい]。

7A　　あの：：:(4.0)多分その：：:(2.0)ん：：:うちのあの：:家内の(はい)対応

8　　が非常に(うん)あの：(2.0)まあ(1.0)自分を(うん)更正させてくれたていうか,,

高木(2008)では，5A における「こんなこと言うとちょっとあれですけれども」という表現には「後に続く自分の発言が何らかの不適切性を含むことを予告している」という機能があると述べられている。そして，7〜8 行目の発話における，いわゆる後続部分において現れた「際立った遅延」もその不適切性を反映しているとした。

5A における発話と同様なものは日本語の会話においてよく聞かれるものだと思われる。こうした発話は「こんなこと言うとちょっと…ですけど」「こうしたとちょっと…ですけど」という文型で現れる。このような発話には，後続発話には不適切の部分があるのを事前に予告するというメタ的な機能がある。つまり，発話する前にその発話に対する評価を先行させ，且つ，その評価はよく自分に対するマイナスなことであるという点から考えると，こうした行為は自己指向的 FTA(フェイス侵害行為)として考えられる。

一般的には，自分の発話がどのように評価されるかは相手次第であるが，自分で評価を先に言ったとしても，相手がその評価も含めて再評価を行うだろう。つまり，こうした行為には相手の理解上の負担を軽減する効果は殆どないと言えよう。従って，発話を産出する途中で＜自己指向的 FTA＞に相当する評価を先行させるのは，相手に理解上の問題を生じるのを防ぐのではなく，相手に受容上の問題を生じさせないためではないかと考えている。

こうした発話は相手に次の発話でフェイスバランス修復方策を取らせないように，フェイスバランスの不均衡状態の生成を抑制するものとして理解できるだろう。そもそも，会話において相手の反応がなければフェイスバランスが均衡を失ったかどうか自体を判断できないため，自分の発話内容を監視し，フェイスバランスが不均衡の状態になりうる発話にならないように事前に手を打つという点から見れば，修復機能より調整機能として考えた方が適切だと考える。重要なのは，例 30 では，自己指向的 FSA の程度を軽減する方法で調整を施したのに対して，例 31 では自己指向的 FTA を使用する手段で調整を行った点にある。両者に共通しているのは，フェイスバランスを維持する効果があり，よって，相手に

受容してもらいやすい役割があるところである。

#### 3.4.3.2. 産出と受容に跨がるトラブルに対処する修復について

3.4.2.2 では，産出と理解に跨がるトラブルに対処する修復についての例において，＜産出側の不首尾による理解上のトラブル＞と＜産出された内容を共有する義務に違反したトラブル＞という 2 種類を取り上げた。両方とも 3.4.2.1 で指摘した調整に対応するものとして成立できると考える。

しかし，上記と同じロジックで考えると，受容の問題を抑制する調整方策が施されない場合に生じたトラブルについて，その修復過程を考察する必要がある。前節では 2 種類のケースに分けて論じた。一つは自己指向的 FSA の程度を軽減するする方法で調整を行うケースであり，いまひとつは自己指向的 FTA を使用する手段で調整を行うというケースである。これらのような調整方策が施されない場合に，フェイスバランスが崩れ，修復が行われる実際例について説明する必要がある。

だが，産出と理解との間には一定の必然性があると言えるが，産出する際にフェイスバランスに対する配慮が足りないとその次のターンにおいて＜フェイスバランス修復策＞が行われるとは限らない。そうした配慮があればトラブルが抑制されるという効果があると言えるが，そうした配慮がなかったことで特定の受容上のトラブルが必ず生じるということは検証しがたい。

### 3.4.4. 発話の理解と受容に跨がるトラブルに対処する修復

本研究では，＜対人関係的調整＞と＜対人関係的修復＞というメタ的行為はいずれも受容上の問題に対処する装置として扱っている。しかし，理解過程で生じた問題も対人的関係に関わっている可能性がある。例えば，ある発話に対して理解不能というトラブルが生じたとしよう。理解不能を引き起こした原因はさまざまであり，大まかには，話し手にあるか聞き手にあるかと区別することができる。もし聞き手の知識不足により不理解が生じた場合，(話し手の情報の出し方に問題がある可能性があるが) 不理解を表明するとともに，自分の知識不足もあらわになり，それは自分に対するフェイス侵害になってしまう。こうした考えを踏まえ，理解過程と受容過程に跨がるトラブルの存在を取り上げた。次の例を参照されたい。

例 32＜初対面雑談 2＞ B に「何について研究するつもりですか」と聞かれた A は卒論の内容について説明している場面。

1A　　日本の戦後の思想で、え：と、卒論に、「文筆家名」ってご存じですか?

2B　　あ、すいません。知らないです。

3A　　→ あっ、全然、そんな、超有名な人じゃないんですよ。
4B　　はい。

B は 1A を理解するのに必要とされる知識を持っていないため，その一部に対して理解できなかった。理解過程のトラブルとして見ると，B は 2B で「文筆家名」について説明し，両者間の共通知識上の不一致を修復するはずである。しかし，実際に起きたのは，3A のような＜他者指向的 FSA＞（3A から，＜超有名な人ではないから，知らなくてもいい＞という推論が得られるためである＝であった。つまり，1A はフェイス侵害の危険性のある発話であり，相手が発話内容の理解に必要な知識を知っていない場合においては，相手が知識不足ということをあらわにすることになってしまい，実際例 32 では 2B においてそうした展開になった。そこで，3A では＜相手が知らないのは無知ではなく，自分が言った人物はそんな有名人ではない＞からであると補充説明を加え，実質，相手のフェイスを持ち上げる効果のある＜他者指向的 FSA＞になっている。これによって，両者間の崩れかけるフェイスバランスを戻したのである。そして，4B 以降が「文筆家」についての説明であり，つまり，A は理解のトラブルではなく，受容上のトラブルを優先して修復を行った。

### 3.4.5.　まとめ

これまでの研究と異なり，単一の過程に生じたトラブルではなく，二つの過程に関わっているトラブルを対象として，調整と修復との視点から考察してきた。

産出と理解過程におけるトラブルとして，形式文脈共有義務に対する違反による理解上のトラブルと話題変換の予告をせずに招致した理解上のトラブルの 2 種類を取り上げて分析した。産出と受容における調整現象については，自己指向的 FSA を回避することで調整を行うものと自己指向的 FTA を実行することで調整を行うものの 2 種類を取り上げた。理解と受容に関わっているものに関して，他者指向的 FSA を通してフェイスバランスが修復された例を取り上げ，フェイスバランスの枠内で議論を展開した。

## 3.5　　調整概念を含む枠組みの確立

本章では主に 5 つのことについて論じてきたことを通して，調整の概念を取り入れた枠組みを確立することができた。

一つ目は会話の本流と傍流の相対的な関係についてである。トラブルの少ない円滑なコミュニケーションを実現するための機能に着目し，修復も調整も＜機能的傍流＞として捉えられると結論した。

二つ目は修復と調整との関係についての論述である。主に，①基本的には並行的な関係

であり，時には交叉することもある，②未然にトラブルを抑制する調整がうまく施されれば修復の発生率も低くなり，その逆でも成立するはずである，という 2 点をめぐって展開した。

三つ目は修復と調整との構造を対照的に捉えた。修復の構造はトラブルの性質によってその顕在性の程度も変わってくるのに対して，調整は常に会話の本流に埋め込まれており，潜在的な構造特性を持っている。

四つ目では伝達過程の性質に着目し，＜情報伝達的調整＞と＜対人関係的調整＞とに分けて捉えた。そして，聞き手反応の有無から修復と調整との接点を探ってみた。発話の産出過程において，話し手が言い間違っていない，且つ聞き手からの返事がない時点で施された言い直しというのを調整とするべきであり，理解過程においても受容過程においても，トラブルを含む発話が発されたあと，聞き手の反応がないうちに話し手が施したトラブル予防策はいずれも調整であるとするべきだと主張した。なお，フェイスバランスに関わるトラブルに対処する自己開始される修復現象は同時に調整の機能を有していることが分かった。このことは，データを観察する際に，トラブルの性質及び聞き手反応の状況を考えた上で分析する必要性があると示唆している。

最後に，五つ目は，①発話の産出と理解に関わるトラブルに対する調整と修復，②産出と受容に関わるトラブルに対する調整，③理解と受容に跨がるトラブルに対する調整と修復，という 3 種類のケースについて述べた。①については，発話を産出する際に，聞き手に理解上の問題を生じさせない方策を調整とし，それに対し，そうした調整策が行われていない場合に起きた現象を修復として考察した。②については，発話を産出する際に，聞き手に自分の意見に同意させやすくするため，もしくはフェイス状態の均衡化を失わせないように，事前に行う方策を調整策であるとして考察した。③については，理解過程に起きた不理解や誤解などのトラブルが，理解上の問題だけでなく，時に会話参加者のフェイスに関わっていることもあるという点から，二つの装置の接点を模索した。

以上，本章では修復の機能をよりマクロ的に捉えてきて，次章からは具体的なテーマをめぐって修復の機能を考察する。第 4 章では理解過程のトラブルに対する修復の組織と機能を，第 5 章と第 6 章では受容過程に生じたトラブルに対処する修復組織及びその主要機能について考察する。

# 第4章　理解上のトラブルに対処する修復・調整

## 4.1　　分析対象の限定と定義

日常会話にはトラブルを生じさせる可能性が多く潜んでいる。話し手側と聞き手側に分けて考察すれば，話し手が発話を産出する際には言い間違いや言い直しがよく起るものであり，発話がなされた後にも，聞き手が聞き取れなかったり聞き間違えたりすることは珍しくない。また，発話が正確に聞き取れたとしても，聞き手がその内容を理解する際にトラブルが生じることがある。発話の理解に必要となる知識がないことでの理解の失敗や，相手の発話を不適切に解釈する誤解も生じうるのである。さらに，相手の発話内容をうまく理解した後でも，受容面のトラブルが生じる可能性がある。例えば，発話に対して不同意や反論というような不受容もあれば，フェイスワークに関わる不受容もある。全体を通して見ると，このような受容の問題は発話を理解したあとに生じたものであり，理解の問題と区別して捉えるべきであると考える。

### 4.1.1.　不理解と誤解に限定した理由

なぜ理解上の問題として，不理解（non-understanding）と誤解（misunderstanding）に限定したかについて述べる。誤解に関しては，数多くの研究がなされているが（Schegeloff,1987; Weiland,1999; Dascal,1999; Bazzanella&Damiano,1999; Bosco et al.,2006 など），日本語を対象とした誤解に関する研究は少ない。

上記の先行研究を踏まえ，会話伝達の過程における誤解と不理解に対する捉え方を述べる。第一に，本研究では，誤解や不理解を会話参加者が順調な伝達を求める過程において生じた失敗として捉える。つまり，「コミュニケーションは理解に達成するためにデザインされている」（Weigand,1999:766，筆者訳）という前提に立って，誤解や不理解を伝達上の失敗として捉える。

第二に，発話に対する解釈の結果に関しては，理解困難／不理解／誤解という三種類に区別することができる。Weigand(1999)によれば，この三種類はそれぞれ異なる要因によって引き起こされる可能性があるため，個別的に扱うべきである(Difficulties of understanding, non-understanding and misunderstanding have to be kept separate.Weigand,1999:765)。

本研究で，誤解と不理解を取り上げたのは，両者に対立的な性質が備わっているからである。次の三点から両者の性質を区別することができる。(1) 誤解には程度があり，完全

に誤解している場合と弱い誤解している場合では，聞き手の反応が異なるはずである。それに対して，不理解には程度がない。(2) 聞き手は誤解発話をする際に，自分が誤解していることを認識することができないが，不理解が起きた場合にはそれを認識することができる。(3) 誤解が発生する場合，ほとんどの場合に修復が行われる。Dascal(1999)によれば，「ほとんどの場合，誤解が生じたら直ちに次の順番で発見され，且つ，第三順番もしくは第四順番で成功的に修復される」（'Most misunderstandings are detected immediately after occurrence(second turn), and successfully repaired in the third or fourth turn'）( Dascal,1999:754)ということである。しかし，誤解する際に，誤解した本人がそれに気づいていないため，どのように対処するかを選択する先決的な権利がない。それに対して，不理解が生じた場合，聞き手自身が不理解の発生に認識できているため，それを修復するように相手に要求するかそれとも自分の不理解を隠すかという選択ができる[19]。

第三に，誤解や不理解を修復するもしくは抑制するのは，その自体ではなく，それらを引き起こした原因がターゲットである。これまでの研究では，誤解を引き起こした原因について考察したものがあり（Weigand,1999; Bazzanella&Damiano,1999 など），原因の所在によって分類されるものもあれば，話し手にあるか聞き手にあるかというような分類方法であり(Bazzanella&Damiano,1999)，さらに，各種の伝達手段（言語的手段[20]／身体的手段[21]／認知的手段[22]）に由来するものかそれとも発話意図に対する解釈に由来するものかによって分類するものもある(Weigand,1999)。本研究では，Bazzanella&Damiano(1999)で提案されている分類方法を参考する。これについては次節で述べる。

### 4.1.2. 不理解と誤解を引き起こす原因

Bazzanella&Damiano(1999)では，誤解を引き起こすトリッガー表 3 のような分類をしている。

---

19 これは，Weigand(1999)の不理解（non-understanding）に対する分類から得られた知見である。'We may distinguish two cases of non-understanding: the first, when you know that you are not understanding and you want to be enlightened; the second, when you know that you are not understanding and you want to conceal it.(Weigand, 1999:770)'

20 言語的手段（linguistic means）とは主に，発話を産出する際に，順調に相手に伝達できるかどうかはまず周りの状況に依存していると著者は述べている。例えば，周りには騒音がある場合，相手に自分の発話を聞き取らせること自体が困難であることが誤解を引き起こす原因の一つになりうる。

21 身体的手段（perceptual means）とは主に，ジェスチャなどで自分の意図を伝達する時に，正確に表現できないことが誤解の原因になりうるということを指している。

22 認知的手段(cognitive means)とは主に,我々が常に利用している習慣的な知識と相似的な推論方法が，すべてのケースを正確に解釈できるとは限らないので，このような習慣が誤解を引き起こす原因となりうるということである。

表 3：誤解のトリッガー（Bazzanella&Damiano,1999:821）,日本語訳は筆者による）

| トリッガーの種類 | 下位分類 |
|---|---|
| A. 構造的トリッガー<br>(Structural triggers) | ⑴伝達過程に生じた各種の妨害<br>(Disturbances along the communicative channel)<br>⑵言語的コードの要素における類似性<br>(similarities between elements of linguistic code)<br>⑶外国語の使用によるトラブル<br>(Troubles caused by the use of a foreign lang uage)<br>⑷構造的曖昧性（語彙的もしくは統語的）<br>(Structural ambiguities(e.g. lexical or syntactic)) |
| B. 話し手関連のトリッガー<br>Triggers related to the speaker | ⑴狭義的要素：言い間違い、思い間違い、曖昧的な形式の使用など。('Local' factors, such as speaker's slips of the tongue, misconception, use of ambiguous forms)<br>⑵広義的要素：情報の統語的構造と語用的構造に関連する要素（ポライトネス、不確定性、非論理性など）。('Global' factors concerning the structuring of information both on the pragmatic and on the syntactic level(e.g. politeness, indeterminacy, and anacolutes)) |
| C. 解釈側関連のトリッガー Triggers related to the interlocu -tor | ⑴知識上の問題。例えば，間違った認識、語彙能力の不足、百科事典的知識上のギャップなど。(Knowledge problems, such as false beliefs, lexical incompetence, gaps in encyclopedic knowledge)<br>⑵認知プロセス。例えば，間違った推論、認知的負担とその負担が聞き手の解釈にもたらした効果(Cognitive processes, such as wrong inferences, and the cognitive load and its effects on the interlocutor's production) |
| D. 会話参加者間の相互行為に関連するトリッガー<br>(Triggers related to the intera ction between the participants) | ⑴知識の非共有(Non-shared knowledge)<br>⑵話題の構成(Topic organization)<br>⑶焦点上の問題(Focusing problem) |

この表によると，トリッガーの種類は多種多様であり，本研究では，これらのようなトリッガーは誤解だけでなく，不理解の形成原因でもあると考える。

Bazzanella&Damiano(1999:818)によれば，誤解の発生においては曖昧性が中心的な役割を働いている(Both in literature[23] and in our data(66%), Ambiguity is the major source of mis understanding)とされる。表 3 に合わせてみると，A.の⑷構造的曖昧性（語彙的もしくは統語的）と B. の ⑴における曖昧的な形式の使用が誤解を引き起こすということになる。しかし，曖昧性に対する定義がないため，語彙的曖昧性や統語的曖昧性或は曖昧的な形式とは何を指しているかは不明である。

それに対して，本研究では，理解過程にかかわる誤解や不理解というトラブルの形成原因について，曖昧性ではなく，理解が達成されるために必要となる文脈に着目して議論することにする。ここで言う文脈については，加藤(2009a, 2012)で提案されている＜動的文脈論＞という枠組みを利用して説明したい。以下では，その概要を述べる。

加藤(2009a)は，従来の静的な文脈の捉え方と異なる，文脈を動的に把握する枠組みを提案されている。動的に文脈を把握するにはまず文脈を「一次文脈」と「二次文脈」に分け，一次文脈には形式文脈・状況文脈・知識文脈という三種類が含められている。また，二次文脈とは「一次文脈の情報を使って推論することで得られる文脈のことである」（加藤2012：56)ということである。

加藤（2009a）によると，形式文脈とは，「同一セッション[24]の内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる」（加藤2009a：214)ものであり，顕在的なものであるため会話参加者が共有していることが前提である。状況文脈とは「セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したもの」（加藤2009a：214)であり，顕在性の程度が形式文脈より下がるため，会話参加者が共有する程度も一定ではない。そして，知識文脈は「セッションが開始する以前から，会話参加者が持っている知識のうち，言語知識を除外した世界知識に当たる」（加藤2009a：215)ものであり，顕在性の程度が更に低くなるため，会話参加者が完全に共有することはないが，共有度の高いものも少なくない。

相手の発話をうまく理解するには，形式文脈と状況文脈を相手と共有しつつ，世界知識から適切な情報を活性化させなければならない。こうした複雑な作業を会話参加者が瞬時的に行い，相手の発話を理解し，相手には自分の発話を理解してもらう。そして，形式文脈が「原則として，セッション参加者が共有していなければならないもの」(加藤 2009：214)であり，これは，いわゆる＜形式文脈共有義務＞である。日常生活では，相手が一度言ったことを正確に覚えられなかったり忘れたりすることは生じうるものであり，その場合，

[23] ここでは，Zaefferer(1977); Blum-Kulka and Weizman(1988)を指している。
[24]会話のセッションとは，「やりとりの開始から終了まで言語行動の全体」であり，最初の発話開始点をもって始まり，最後の発話終了点を持って完了する(加藤 2009:206)。

相手に同じ趣旨を言ってもらうことで修復が行われる。

このように，形式文脈を忘れたり，状況文脈について双方の認識にずれが生じたり，相手の発話から引き出した解釈が世界知識に整合しなかったりするように，時には適切な解釈に失敗する可能性も潜んでいる。理解過程における修復とはまさにそうした失敗の可能性に備える装置として捉えられる。一方，本研究では，不理解と誤解を引き起こしうるトリッガーを予防する行為を＜情報伝達的調整＞とした上で，その下位分類として，以下の 5 種類を挙げる。

① 理解達成に必要となる形式文脈を共有しているかどうか確認することで理解上の問題を予防する調整行為。

② 理解達成に必要となる知識を事前に相手に教えることで A.の⑴知識上の問題（知識不足／語彙不足／世界知識のギャップ）を予防する調整行為。

③ 理解達成に必要となる知識を相手が持っているかどうか事前に尋ねることで D.の⑴知識の非共有(Non-shared knowledge)を予防する調整行為。

④ 話題転換する際にそれを予告する行為で D の⑵話題の構成(Topic organization)によって引き起こされうる問題を予防する調整行為。

⑤ 解釈側が完全に誤解するのを防ぐために行われる確認発話。

次節より，トラブルを不理解と誤解に分けて，それぞれに対する調整と修復について考察する。

## 4.2 不理解に対する調整と修復

ここでは，4.1.2 で触れた①～④について見てみる。3.3.2 では，①～④について，(1) 形式文脈共有義務の違反を抑制するケース，(2) 知識の一時的共有のために調整するケース，(3) 話題の予告で理解上のトラブルを抑制するケースの三種類について論じたが，本節では，「知識の一時的共有」のために行われた調整行為として，(4) 付加説明で知識文脈を調整するケース，(5) 相手の知識状況を確認することで調整するケースの 2 種類が数多く観察されたため付け加える。

### 4.2.1. 不理解を抑制する調整行為

本節では，聞き手の不理解の発生を抑制するために，付加説明で知識文脈を調整する場合と相手の知識状況を確認することで調整する場合に分けて述べる。

#### 4.2.1.1. 付加説明で知識文脈を調整する

付加説明で知識文脈を調整することは，発話者が言っている内容を中断し，それについ

ての付加説明をつけることで,知識文脈を調整するケースを指す(例 20 で少し触れている)。こうした調整が行われない場合,聞き手が発話内容に対して修復を要請することがある(例 19 は修復の例である)。このことに関して,次の 2 例をも参照されたい。

例 33＜BTS 初対面雑談 6＞A の研究室には中国からの留学生と台湾からの留学生がいる。A が「留学生同士のなんか、集まりっていうのがあるんですけど、もうほんと、台湾留学生会と中国留学生会違うんですよね」という発話をした直後に起きた断片である。

1A　　で､ほんとに知り合いになる機会っていうのは(うん)､クラスで一緒だとか(う､
2　　うんうん)､誰かの紹介でとかいう限り、同じ中国語を喋ってるからって（う：
3　→　ん)､あの：部屋とかで、院生の部屋があるんですけど（う、うんうん）そうい
4　　うところでこう知り合ってわいわいっていうのはないんですよね。
5B　　ないか、そっか。やっぱりそうですよね。

A は 3 行目に出された新情報である「部屋」について,その直後で付加説明(「院生の部屋があるんだけど」)を加えた。これは,相手が突然出された新情報(「部屋」)を理解できないことを事前にブロックする機能がある行為であろう。もしも,2 行目で「…限り、同じ中国語を喋ってるからって…」の直後に,「部屋とかで知り合ってわいわいっていうのはないんですよね」という発話を出した時,聞き手にその部屋について知識がなければ,「部屋?」「どこの部屋?」というふうに修復を要請することが想定できる。

また,A の発話内容から,「…限り、同じ中国語を喋ってるからって…」が示された時点で,後続の内容が否定的な事項(「知り合いになることはない」ということを指す)であると予測するはずである。しかし,「…限り、同じ中国語を喋ってるからって…」と示された直後に示されたのは「部屋」という聞き手の予測と違う情報なので,A には発話の一貫性を保つために,その「部屋」が先の内容とどういった関連があるかについて説明する必要がある。

つまり,この付加説明は,新情報に対する不理解をブロックする調整機能もあれば,自分の発話に一貫性がないことを抑制する調整機能もある。もう一つの例を参照されたい。

例 34＜BTS 初対面雑談 13＞[25]A は中央大学の学生であり,英語の研究をしている。B は東京工業大学の機械科に属している学生である。二人が各自の研究室の様子について話してい

[25] BTSJ（2007 版）で公開された資料では,会話参加者の具体的な所属大学などの情報を非公開にしているが,本研究では,会話の内容を理解しやすくするために,それぞれ具体的な学校名や専攻などの情報を付け加えた。

る場面において，A は中央大学の文系にはパソコンが少ないと言ったあとで，理工学部にはけっこうあると発言している。

1A　　ええ、やはりパソコン…はけっこうあると思いますよ,,
2B　　はいはいはいはいはい。
3A　→ 理工学部のほうは。ええ、あの、多摩…僕、多摩ですけど、(はいはい)八王子は
4　　理工学部ないんですよ。理工学部はあの、東京ドームのすぐそばで。
5B　　はいはいはい。
6A　　はい。
7B　　あ、そうなんだ。
8A　　はい。

まず，相手が 3A で初めて出された情報である「多摩」を理解できないのを防ぐために，「僕、多摩ですけど」という説明をつけ加えた。〈A が多摩キャンパスにいるので，多摩と発言した〉と相手は解釈することができる。

全体を通して，A の発話内容をみてみると，「ええ、あの、多摩…僕、多摩ですけど、八王子は理工学部ないんですよ。理工学部はあの、東京ドームのすぐそばで。」という部分は発話内容の論理上の一貫性を維持するために行われたことが分かる。例 34 の会話の前に，B が自分の学校には「パソコン一人一台以上ある」という話をしており，それに対して A は自分の学校にはパソコンが少ないと発言した。しかし，この例 34 の冒頭で，A が先の発話と矛盾しているような内容（「やはりパソコン…はけっこうあると思いますよ，理工学部のほうは。」）を示した。先の発話と矛盾しないように，パソコンが多い理工学部は私がいるキャンパスにはないという説明が必要となる。結局，A が言いたかったのは，＜私の所属する学部がある多摩キャンパスにはパソコンが少ないが，他のキャンパスにある理工学部にはパソコンがけっこうある＞ということである。しかし，A と B は初対面であり，所属する大学も違う。こうした状況において，A は B が中央大学には八王子地区に多摩キャンパスがあること，多摩キャンパスには理工学部がないことなど知っていると判断することはできない。

故に，この付加説明も先の例と同じく，新情報に対する不理解をブロックする調整機能もあれば，自分の発話に一貫性がないことを抑制する調整機能もあると言える。

#### 4.2.1.2. 相手の知識状況を確認することで調整する

相手の知識文脈の状況を事前に確認することで，表 3 での D. の⑴知識の非共有(Non-shared knowledge)を予防する調整行為がある。次の例を参照されたい。

例 35＜BTS 初対面雑談 2＞ベトナム語について話している。A の専攻はベトナム語であり，B の専攻は現代思想であり，日本の戦後思想について研究している。

1A　　あ、漢字は、あ、元々使ってたんですけど、(うん)フランス、植民地になって,,
2B　　あ：：：
3A　　でそれでフランス人わかんないじゃないですか?(はい)漢字なんか。で、それを、
4　→　あ、中国語分かります?ちょっと。
5B　　ちょっとわかります。
6A　　中国語の拼音[中国語で言う](うんうんうん)、拼音[中国語で言う]みたいな感じに
7　　全部直したんですよね、ローマ字に。
8B　　はぁ：：

この例では，A の発話全体を通してみると，ベトナムではかつて漢字が用いられていたが，フランスの植民地になったあと，ベトナム語が中国語の拼音のように，ローマ字表記に改められたということである。4 行目に起きたのは，新情報である「中国語の拼音」に言及する前に，相手の知識状況（中国語が分かるかどうかを確認している行為である。これは，＜相手がもし中国語が分かれば，拼音について分かるはずだ＞[26]という想定のもとで発されたものである。もしこのような調整行為を取らずに，直接的に B に「それを中国語の拼音、拼音みたいな感じに全部直したんですよね」という発話を示した場合，その新情報について相手に修復を要請される可能性が高い。この例に起きた＜相手の知識文脈の状況を事前に確認する＞という調整行為には，不理解というトラブルを抑制する機能がある。

また，この例では，A が「中国語が分かります?」という調整行為に対して，もし B が否定的な応答（分からない）をした場合，A は中国語の拼音について先に説明する必要が生じ，話を進めることを中断しなければならないはずである。これについては，次の例を参照されたい。

例 36＜BTS 初対面雑談 15＞A が学部は中国語専攻であり,修士課程は中国史を研究している。B に「どういう研究しているのか」と聞かれたあと。

1A　→ で、特にあの、明代ってご存知ですか?中国の。
2B　　明って時代ですか?明。
3A　　そうですね。あの、あの、明るい[って]。
4B　　[明るい]、はいはい。

[26] 台湾系の中国語が分かる人であれば（注音符号を使っていることが殆どであるから），拼音について分からない可能性もあることまでは,A は多分想定していないだろう。

5A　　だいたい 15 世紀ぐらい(ああ)なんですけども、ちょっと(はぁ：)マニアックですけど。

6

7B　　いやいや、っと、にち…日本って貿易してませんでしたっけ?明と。

8A　　あっ、やってました(はいはい)ね、日明貿易。

9B　　あ、ですよね。

この例では，1 A の「明代ってご存知ですか?」に対して，2B の「明って時代ですか?明。」という反応から，B が「明っていう時代が知らない」と可能性が高い。そこで，3A（「あの、あの、明るいって」）で引き続き＜明＞について説明した。4B の反応から，相手が本当に知っているかどうか判断する根拠が不十分であり，5A まで説明を続けた。A にとって，B が明のことを知っていると最終的に確認できたのは 7B になった時であろう。しかし，B の質問は「どういう研究しているのか」というものであり，A が自分の研究についてはまだ話していない。よって，相手の知識状況を確認できるまでは少し手間がかかったと言えよう。

例 36 に起きたのは例 35 と同じく，不理解や誤解を引き起こしうるトリッガーを事前に除去する調整行為である。

以上をまとめると，理解にかかわる問題を予防する調整には，3.3.2 で述べた（1）＜形式文脈共有義務の違反を抑制する調整手段＞，(2）＜新情報とともに使われる遅延や半疑問という調整手段＞，(3) ＜話題予告をすることで不理解を抑制する調整手段＞のほか，(4）＜新情報を出す途中で中断し，付加説明で調整する手段＞，（5）＜相手の知識状況を確認する調整手段＞も観察された。次に，（4）と（5）のような調整が行われていない場合に起きた不理解に対処する修復の例について見てみる。

### 4.2.2.　不理解を解決する修復行為

不理解とは聞き手が話し手の発話の全体，或は特定の部分に対して理解できない場合を指す。勿論，理解できなくても修復を要請しない／要求しなくてもいいということがある。ここで，特に注意したいのは，不理解を引き起こしたトラブルはその直前の発話にあるということである。修復される対象になるのはこのトラブルを引き起こした原因である。

会話の中で不理解が生じた場合，聞き手が非言語的要素によって相手に修復を開始させることは可能であるが，一般的には，聞き手が何らかの手段で不理解を表明しなければ「不理解に対処する修復」自体を判断できない。

聞き手が「不理解」を表明した発話そのものが修復開始になりうるため，理論上は，聞き手が理解できなかった時，それを引き起こした原因を修復するには，①同一ターン或は

TRP における自己修復，②第三位置での自己修復，③第三順番での自己修復，④他者開始自己修復の何れも可能である。

しかし，具体的に考えてみれば，①は聞き手の表情や動作などの非言語情報によってはじめて可能になるため，本研究では除外しておきたい。②は聞き手の反応に誤解があり，話し手自ら誤解を引き起こした原因を修復したものであるため，不理解に対処する方法ではないと判断できる。

誤解と不理解を区別する時に，＜聞き手にとって何らかのトラブルが生じたということに対しての話し手の認知状態＞に着目するほうがよい。つまり，理解できなかった時の反応は聞き手自身が理解できなかったというトラブルが生じていることを認識した上で発生したのに対して，誤解した場合は聞き手自身が「誤解というトラブルが生じた」という認識を持っていないのが普通である(その認識を持っていればその発話を発するべきではない)。こうした認知状態のもとで発された反応が異なるはずである。

この点から考えれば，③第三順番での自己修復について，聞き手としては次の順番において自分が前の発話を理解できたかどうかはっきり表明していないため，話し手が第三の順番で修復を行ったのは相手の「不理解」に対するものであると判断する根拠が薄い。従って，総合的に考えると，不理解を引き起こしたトラブル源を修復するのに対して最も現れやすいのは他者開始・自己修復であると考えられる。次の例を参照されたい。

例 37(例 10 の再掲)＜BTS 初対面同性同士雑談⑨＞A が B の研究方向について聞いている。

1A　　どう，どういうことやってらっしゃるんですか?
2B　　いや，いや，もうホントに何か，私の指導教官の人がなんか，もうヴォイスとか，，
3A　→ ヴォイス?
4B　　ヴォイスとか，だから受身とか(あ：)，使役とか，
5　　そうしたやつとか，あとまあ，周りにはアスペクトとかやってる人(あ:)
6　　とか，まあ，私もまあ，それ似てますね。
7A　　え：あ，(ええ)へぇ：あぁ：。

この例では，B が 2B で，相手の知識状況を確認するなどの調整手段を行わずに，直接「ヴォイス」という情報を出した。二人は初対面なので，相手が自分の研究に関する専門的な用語（「ヴォイス」）を知っていると B が判断するべきではなかった。つまり，トラブルを導いた責任が B にあり，B の情報の出し方に問題があると言えよう。これは，A が 2B を中断させてまで修復を要請した現象に繋がっていると考えられる。

他者開始形式から言うと，相手の発話全体に対する不理解なら，「えっ?」「ん?」「え，どういうことですか?」「どういうこと?」などのような「非特定的開始標識」が使用されるこ

とが多く，例 37 のような相手の発話の一部に対しての不理解なら，「先行発話の一部を繰返し＋文末イントネーション／引用形式って／だっけ」や「疑問形式＋上昇イントネーション」といった形式が使用されるといった傾向が観察された。他者開始形式については第 7 章で述べる。

## 4.3　誤解に対する調整と修復

聞き手サイドに生じた理解のトラブルの一つとして，話し手の発話内容に対する誤解に着目して，誤解の発生を抑制する調整方策や誤解を修復する方策などについて論じる。

日本語コミュニケーションに関する研究を通して，日本語が高コンテクスト依存的な言語であることが分かってきた（Hall,E.T.,1976 岩田・谷訳, 1993；八代他, 2009）。具体的には，コンテクスト依存の言語に共通している点は「言語への依存度が小さい／非言語的要素の利用度が高い／曖昧な情報が多い」ということである。「はっきり表現しなくても分かる」という「暗黙の了解」のもとで，会話では省略や婉曲的な表現が多用される。このような特徴によって伝達上の失敗が起きた現象については先行研究がある。

まず，「日本語の相互行為は＜以心伝心＞＜阿吽の呼吸＞によるところが多い」という現象に関して，田中（2008）では「暗示的発話」について論じている。「暗示的発話」とは，広い意味で，ある事柄について話す際に，それ自体を指す言葉で明示的に述べずに何かを告げることを言い，「示唆」，「ほのめかし」，「比喩的用法」，「婉曲表現」などを含むこととする（田中 2008：111）。そして，「話し手は「暗示的発話」を産出すること自体によって，聞き手に対し，表面に現れている部分に頼らず含意されている内容を汲み取るよう暗に求める場合がある。このとき，聞き手がその働きかけを拒絶したり，或は見逃ししてしまうと，会話の運び自体に支障を来しかねない」（田中 2008：111）と述べたように，暗示的な発話は常に正確に相手に伝達できるとは限らないため，それが失敗する時には誤解や不理解を生じさせてしまう可能性もある。

次に，日本語で省略が多発しても会話がうまく行く理由は，高コンテクスト依存性に帰結されている。しかし，コミュニケーションでは省略が常に適切に復元されるとは限らず，はっきり表現しなくても，もしくは省略しても分かるはずであるという想定の下での発話がうまく理解されなかったり，誤解されたりするケースもあるはずである。このような現象に着目し，修復と関連づけて行われた先行研究も見られる。鈴木（2008）では，「統語的制約の緩い」[27]という日本語の特徴は相互行為で利用可能なリソースであると同時に，「何か

[27]鈴木(2008)によると，主に「日本語の話し言葉において主語や目的語が高頻度で省略されるという文法項の省略」という特徴があるとして，「日本語の性質上，多くの発話はたとえ文法項が省略されていたとしても問題とは見なされない」という現象を指して言っていると思われる。

が欠けている発話を生み出す危険性を孕む」（p. 70）と述べ，「統語的制約の緩い日本語の弱点は，会話において修復という相互行為的な「支援装置」によって補強されている」」(p. 78)と指摘し，主に省略のある発話に対して他者開始によって修復が要請される会話事例について考察した。続いて，本研究の考察方法について述べる。

### 4.3.1. 考察方法

まず，4.3 の考察対象について述べる。一つは，完全な誤解を防ぐ調整行為とは何かということであり，いま一つは誤解の解決を目的とする修復行為である。

実際の会話において，誤解は理解過程に生じたものであり，いわゆる聞き手サイドの解釈過程に起きる問題である。話し手は，誤解の形成を抑制するために，さまざまな調整策を施しうる。先行研究(田野村（1996），古別府(1994)，西條(1999))を踏まえて，調整するために用いる表現が「メタ言語」に相当していると考える。古別府(1994:103)は，「メタ言語表現は話し手の聞き手に対する分かりやすさのための主観的な配慮(伝達過程調整)を中心に，さらに，聞き手との関係を良好に保つための丁寧さのための配慮(対人関係調整)がある」と述べている。誤解の発生を事前に抑制するための話し手の調整行為は，伝達過程調整の一種として捉えられよう。

しかし，誤解の形成を防ぐ調整策は話し手だけでなく，誤解が生じないようにするために聞き手が施すこともある。例えば，話し手の発話に対して聞き手がある種の反応発話を示し，その発話がなんらかの誤解に基づく内容で，上昇調の文を含むとしよう。こうした場合においては，聞き手の反応発話には理解チェックの機能が備わっていると考えられるため，修復の他者開始として捉えられる。しかし，この場合には，聞き手が誤解しているとは言えず，聞き手の解釈は誤解を提示する方向に展開してはいるが，その方向が聞き手の理解チェックによって遮断されたとも考えられる。その意味で，こうした理解チェックの発話がまだ確定していない誤解を修復するための他者開始としてではなく，誤解が重大化するのを防ぐための調整策としても捉えられるのではないかと考えられる。

本節では，誤解が重大化するのを回避する場合に，話し手と聞き手が調整策を施しうることと，確定的に誤解が生じた場合に，どちらから修復開始をするかということについて述べていきたい。次に，誤解を解決するための修復行為について述べる。

会話に誤解が生じた場合，それをそのままにして先に進むことは不可能ではないが，会話参加者の一方あるいは双方ともが誤解を修復してから先に進むことが経験的には予想される。修復対象とされるのはトラブルを引き起こした原因であるため，誤解に限定して分析する場合，分析対象は，聞き手サイドの誤解を引き起こした原因になる。誤解が引き起こされた原因にはどのような要素が考えられるか，どういった修復策でその原因を解消す

るのかについては従来の会話分析の手法では十分な解明ができないと思われる。そこで，本研究では，聞き手サイドの誤解を分析する際に，修復の組織類型に加えて，誤解を引き起こした原因及びその原因を修復する方策について語用論の視点から説明を試みたい。

次に，誤解を捉える方法について 3 点に分けて述べる。

第一に，聞き手サイドの誤解の程度は，その都度異なっているものである。誤解の有無という離散的な捉え方をするのではなく，誤解には度合いがあることを想定して区分してみると，(1) 完全に誤解している場合と，(2) 誤解する方向に進んでいるもののまだ完全な誤解になっていない場合とに大別できる。前者の場合，修復によって誤解を解消することになるが，後者の場合，完全な誤解というトラブルの形成を避けるための調整策が事前にとられるものとして捉えたい。また，誤解の度合いを判断するには，聞き手の発話が最も重要である。完全に誤解した上で発されたものであるか，それとも完全な誤解にならないように自分の理解を確認する発話であるかによって判断する。

第二に，誤解の発生原因については，表 3 で示したもののなかから，加藤(2009a, 2012)で提案されている＜動的文脈論＞の枠組みと結びつけて説明したい。

第三に，誤解の原因を明らかにした上で，その原因を修復する時にどんな修復組織が使用されるかについても考察する。

### 4.3.2. 誤解に対処する調整行為

ここでは主に，①話し手が聞き手に誤解させないようにメタ的な発話を示す場合と，②聞き手自身が誤解しないように確認する場合とに分けて述べる。

#### 4.3.2.1. 話し手の調整行為

会話において，聞き手が完全に誤解した場合には，修復という手段を利用してそのトラブルを取り除くことになるが，完全な誤解になる前に，話し手と聞き手が事前に抑制策を施すことも見られる。調整も修復も会話を順調に進めていくためのものであり，調整にトラブルを抑制する機能が備わっていると考えると，修復は既に生じたトラブルを解決する装置として捉えられるため，話し手が聞き手に誤解してほしくないことで，発話の直前もしくは直後に，調整機能を利用して「勘違いしないでね＋後続内容」あるいは「誤解されたら困るんだけど，実は＋後続内容」のようなメタ的機能を持つ発話をすることが想定できる。このような発話には事前に相手の誤解をブロックする機能があるため，誤解を防ぐための調整策として捉えられる。もちろん，これらの調整行為が常に成功するとは限らず，話者が施しても誤解を回避できないこともあり得る。これは調整行為に備わっている性質に繋がっていると考えられる。調整とはあくまでも抑制機能しか持っていない行為である

ため，調整策が行われれば必ずトラブルが回避されるということではない。

#### 4.3.2.2. 聞き手の調整行為

聞き手自身が完全な誤解に陥らないように確認発話をする事例を取り上げて説明したい。この例は，誤解の方向に向かって会話が進んでいるものの，聞き手が誤解の進行に歯止めをかけるために確認発話を行う事例である。ただし，誤解の度合いにより，その確認発話の形式も異なってくる。聞き手の確認発話の性質によって，誤解の度合いも次第に深くなる。次の例は，聞き手の確認発話に上昇調がついているため，より弱い誤解の例として挙げる。

例 38＜HCR 日本語 2＞二人は各自の旅行経験をめぐって話している。

1A　　東京は毎，毎，半年に一回ぐらい行くかな，それ以外だと，高校の修学旅行か,,
2B　　どっかへ行ったのか。
3A　　関西と沖縄。
4B　→ 2 回?
5A　　いや,うちの高校って何か変わってて＜相手が笑い出す＞,関西，沖縄,
6　　関西に行って(え),,っていうコースと，あとロスに行くコースがあって,,
7B　　すげえ。

まず，誤解の発生原因とは,「二回修学旅行に行くのは世界知識に整合しない」ということにある。そこで，4B で確認発話をしているのであろう。4B が示された時点では，B はまだ完全な誤解の状態にはない。もし，4B が「二回も行っていいね」などのような断定発話になると，その時点で B が完全に誤解したと言っていいだろう。

次に，従来の修復に関する研究の考え方に従って例 38 を分析してみると，3A は「誤解の対象」であり，いわゆる誤解を引き起こした原因を含む発話にあたり，4B は「誤解の発生」であり，いわゆる誤解が表明されたターンに相当する。そして，誤解の修復が誤解を引き起こした原因を修復するものであるとする以上，3A が修復対象になる。また,「2 回?」という上昇調付の 4B に修復を要請する機能が備わっており，5〜6 行目から「二回ではなく，一度の旅行で沖縄と関西の両方に行った」という自己修復を行い，他者開始・自己修復(OISR)という組織になっている。

4B に着目すると，聞き手がまだ完全な誤解には至っていないので，例 38 は誤解に対処する修復ではなく，完全な誤解を避けるための調整行為として捉えることもできよう。つまり,「２回?」という聞き手の反応には，完全な誤解にならないように自分で調整する機能もあるということである。

そして，トラブルの性質も誤解の度合いも似ているものの，他の修復組織が使用可能な事例として例 39 を挙げる。聞き手サイドの軽い誤解が表明される時点について，例 38 では，3A の発話が TRP に至ってから B から確認発話が示されているが，例 39 のように話し手の発話途中で不規則な発話を割り込ませる場合には，発話権が変わらず，同一の話し手が同じターンの中でその問題に対処できると考える。例 39[28]を参照されたい。

例 39＜HCR 日本語④＞二人は「ペットの飼育経験」について話している。

1A　　アパートはペット禁止なんだけど，内緒で飼ってミニチュアダックスフォントと
2　　チワワ,,
3B　→ 2 匹?
4A　　の＜やや強調的＞，何というの：
5B　　ハーフ?
6A　　ハーフというか，を飼って，真っ黒で名前がジョルノというんですよ。

この例においても，誤解の原因が＜2 匹の犬を同時に飼うのは世界知識に整合しない＞ということにある。同様に，もし 3B が「2 匹もいていいね」というような内容であったら完全な誤解になっているが，この例で起きたのは，自分の理解を確認する B が完全に誤解に至っておらず，誤解の途上にあるものの自分の確認発話でその発生をブロックしたという現象である。その性質が例 38 と類似しているものの，修復組織の違い（例 38 は他者開始・自己修復であり，例 39 は同一ターンにおける自己修復である）は，例 39 における「2 匹?」という反応は A がまだ TRP に至っていないところで発生し，例 38 における「2 回?」という反応は A が TRP に至った後，発話権の移行が終わってから生じたところにある。このように，相手の反応（「2 匹?」）が TRP に至らないうちになされ，かつ，誤解を含んでいる場合に，話し手にとって当面の発話を中断せずただターンを完結することで相手の誤解を解消するという潜在的な修復手段も使用可能であると示唆した。

次に，誤解の度合いが更に深まる例を取り上げる。例 38 と例 39 における「2 回?」や「2 匹?」のような自分の理解に確信がない時の聞き手の確認発話と違い，次の例 40 の聞き手の反応は断定こそしてはいないものの，自分の理解に確信があることが見て取れる。この点からその誤解の度合いがより強いと判断できる。

例 40＜堀口 1997:121＞子供と教育電話相談の断片

相談者 1　　野球部の先輩といろいろ相談したらしいんです。

[28]例 39 の表記方法については，話者転換が起きていない以上，3B を独立させずに，A の発話の一貫性を保ちながらその途中に組み込む表記法も考えられるが，ここでは分かりやすくするために 3B を独立させて表記した。

回答者 2 →部活のことですね。
相談者 3　　いえ，勉強のことを。

この例では，「省略の復元失敗[29]」という原因による誤解が生じかけている。省略された要素の復元方法などについては数多くの論考がある(久野, 1978；堀口, 1997；新里, 2003 など)。また，省略と修復を結びつけた研究(鈴木, 2008)もあるが，省略の復元失敗に言及したものは管見の限り少ないようである。具体的には，例 40 では主語と目的語が省略され，回答者は主語は復元できたが目的語は正確に復元できなかったということができる。修復組織から見ると，トラブル源が次のターンにおける誤解を引き起こした直前の発話であるため，話し手が三番目のターンで自ら目的語を復元する形の＜第三順番での自己修復＞という組織になっている。結果的には，省略がある発話が修復を経て，＜私の子供が野球部の先輩と勉強のことについて色々相談したらしいです＞という形に完全に復元された。

「部活のことですね」という発話には自分の復元が正しいかどうかを確認する機能があるわけだが，もし回答者が復元に確信を持っているなら，こうした確認発話はしないはずである。従って，この発話には相手に自己修復の機会を提供する機能もあり，さらに，完全な誤解にならないように調整する機能も備わっていると言えよう。

そもそも，会話における省略は聞き手は復元できるという話し手の見込みの下で行うものである。しかし，省略が常に正しく復元されるとは限らない。これは，すなわち，話し手が十分だと想定した情報量が聞き手にとっては十分ではなかったという，解釈計算に関するずれが生じていることによる。双方に共有されている要素であれば省略可能であるが，復元失敗は「話し手が両者に共有されていると誤認している要素が実際には聞き手に共有されていない」場合に生じる現象である。したがって，それに対処する修復には，「会話参加者間の共有文脈に対して編集作業」を施す機能が備わっていると言えよう。次の例は，発話における省略現象によって完全な誤解が起きた例である。

例 41＜BTS 女性友人雑談 2＞B は日本語の教師であり，授業参観日にある生徒の家庭教師が見学に来て，自分の隣に座って辞書を渡したりアクセントを直したりした。B は A にそのことについて感じた不満を話している。1A は＜その人がそこまでやるのは自分が TA やっているつもりでいたのか＞という意味に復元できる。

1A　　ＴＡやってんの?
2B　　ＴＡやってんの。頼んでないのに。

[29]失敗は，さらに「復元不能」な場合と，「復元を試みたものの結果として不適切」な場合とに分けられる。前者は不理解につながり，後者は本研究でいう誤解にあたる。

3A　　うん。
4B　　で、えっとか思って(うん)、最初は(うん)しん、"ご親切にどうもありがとうございます"みたいな(うん)感じでやってたんだけど(うん)、なんか途中からうざくなって(うん)きてさ、なんかアクセントとか直してんの。
7A　→ うん。なんで?「A の名字」先生ダメなの?アクセントが。
8B　　違うの、あの：私のアクセント直すんじゃなくって：生徒が[言ったの]。
9A　　[あ：：生徒の][アクセント]。
10B　　[私が]直せばいいじゃん。私が直す前に直すのよ。

この例では，7B が疑問表現であるため，一見して B が自分の理解が正しいかどうか確認していると判断されるかもしれない。しかし，5 行目から B が主張したいこととは，＜途中からその人がうざくなってきた。なぜなら，私の生徒のアクセントを直したからだ＞ということである。それに対して，7B の疑問表現を表意復元すると，＜何でその人があなたのアクセントを直したのか。その人があなたのアクセントを直したのは，あなたのアクセントがだめだからか＞ということになる。つまり，7B の質問の前提（太線引いている部分）が間違っている。そこで，A が 8A でその質問に対してではなく（自分のアクセントがだめかどうかについての返事ではないため），その前提を修復したのである。この点から，B が完全に誤解していたと言えよう。

その誤解の原因とは，6 行目の「なんかアクセントとか直してんの」という発話にある省略にあると考えられる。もし，6 行目で＜なんか生徒のアクセントとか直してんの＞という内容であったら，後続の誤解も起きずに済むだろう。誤解側が省略された目的語の＜生徒のアクセント＞を＜相手 B のアクセント＞と考えたため，誤解が起きたのである。従って，修復も目的語を補充したことで実行されたのである。また，問題源は 6B にあり，7A は間違った想定のもとで発された連鎖上適切な発話であるが，A にとって自分の理解に問題があると認識していないことにより，その発話には修復を要請する機能もないと言えよう。従って，この例に起きた修復とは，6B における誤解を引き起こした原因（目的語の省略）を 8B にて自分で修復したという＜第三位置での自己修復＞である。

続けて完全な誤解に対処する修復について見ていきたい。

### 4.3.3.　誤解に対処する修復行為

#### 4.3.3.1. 誤解に対処する修復組織の捉え方

誤解が生じた会話において，どの部分を問題源であると見なすかによって，修復の組織

についての判断も異なってくる。

もし，誤解を含む発話そのものを問題源とすれば，理論上は，①同一ターン／TRP でのSISR（話し手自身が，話している最中に誤解の存在に自ら気づき，それを修復する），②OIOR（聞き手が，話し手の誤解を指摘し，修正する），③OISR（聞き手が話し手の誤解を指摘し，話し手自身がそれを次に修正する），④第三位置での自己修復（聞き手の応答によって，話し手の，直前の発話に誤解があることが明らかになり，話し手がその解決を指向した発話を行う）の，少なくとも４つの修復方法が可能である。

しかし，本研究では，誤解を含む発話そのものではなく，誤解を引き起こす原因を修復対象とするため，一つ簡単な会話例を用いて，この 2 種類の捉え方による修復組織の違いについて見てみる。

＜誤解発話そのものを修復対象とする場合＞

例 42（例 5 の再掲）〈堀口 1997:112〉同じテニスクラブに所属する二人のやりとりである。

| | | |
|---|---|---|
| 1A | ダンロップは高いからブリヂストンにしようよ。 | |
| 2B | 高くないよ。 | ←問題源 |
| 3A | ボールだよ。 | ←他者開始 |
| 4B | あっ，ボールか。ラケットと思ったよ。 | ←自己修復 |

つまり，「高くないよ」という誤解発話そのものを問題源，いわゆる修復対象と見なす場合，「ボールだよ」という A の発話で修復が開始され，全体として他者開始・自己修復という組織になっている。しかし，本研究では，この誤解を引き起こした原因は，1A における省略にあると考えている。A が 1A を発する際に，＜ダンロップのボール＞ではなく，ダンロップだけにしたのは，ボールという情報を相手と共有しているという想定を持っているからであろう。しかし，4B から分かるように，ボールという情報は B に共有されていない。このような＜省略された情報の非共有＞こそ 2B の誤解を導いた原因であろう。この修復のプロセスは次の例 43 のように示すことができる。

＜誤解を引き起こした原因を含む発話を修復対象とする場合＞

例 43（再掲）

| | | |
|---|---|---|
| 1A | ダンロップは高いからブリヂストンにしようよ。 | ←問題源 |
| 2B | 高くないよ。 | ←誤解発話 |
| 3A | ボールだよ。 | ←1A を修復する |
| 4B | あっ，ボールか。ラケットと思ったよ。 | ←修復を受け入れる |

2B から分かるのは，B が 1A に対して理解上も受容上も問題がないということである。そこで,「高くないよ」という連鎖上適切な発話をした。2B によって，A に B が誤解していると認識したため，3A で「ボールだよ」という発話を示したのである。B を誤解させた原因は＜ボール＞という情報が省略されたことにある。言い換えれば，B が＜A に省略された情報のボール＞を共有していないために，誤解が生じてしまったということである。A が 3A で誤解を認識し,それを指摘した上で修復を行った。誤解を導いた原因を含む 1A に対して，第三の位置で起きた修復実行なので，＜第三位置での修復＞という組織に当たる。これは第 2 章の表 2 にまとめたフォーマットと一致している。

＜第三位置での修復＞（表 2 の一部を再掲）のフォーマット：
T1（トラブル源）
T2（T1 に対する誤解発話）
T3（話し手が T1 に対して修復を実行）

以上を踏まえて，誤解に対処する修復の組織を判断する時に，Schegloff らの修復類型の認定に必要な「問題源」「修復開始」「修復実行」との整合性を一致するために，次の２点に分けて捉える。

第一，完全な誤解になる前の段階で行う修復については，聞き手の反応が＜理解チェック＞である可能性が高いため，それには修復を要請する機能があり，故に，他者開始される修復になることが多い。具体的には,「修復対象（問題源）」（誤解を引き起こした原因を含む発話を指す），「誤解の発生」（誤解が表明された発話そのものを指す），「誤解の修復」(誤解を引き起こした原因を修復することを指す)という三つの部分をそれぞれ修復類型の認定に必要な＜問題源＞＜修復開始＞＜修復実行＞に対応させて検討する。これについては，4.3.3.1 で述べた。

第二に，聞き手が完全に誤解した場合の修復組織については，聞き手が完全に誤解した場合，その応答発話が誤解のもとで発されたものになり，たいてい＜理解チェック（自分の理解が正しいかどうか確認する発話）＞にならないはずであり，従って，その反応には修復を要請する機能もないと考える。よって，＜誤解の発生＞を他者開始とするべきではなく，修復開始と修復実行が一体化になる＜第三位置での修復＞や＜第四位置での修復＞とするほうがより適切ではないかと考える。これについては，次節で実際の会話例を用いて見てみる。

#### 4.3.3.2. 完全な誤解に対処する修復

完全に誤解した際の聞き手の反応は，先に挙げた例(「2 回?」「2 匹?」「部活のことです

ね」など)と違い，ほとんどの場合断定調になっている。そして，聞き手が完全に誤解した場合，トラブル源と見なされるのは誤解発話そのものではなく，その誤解を引き起こした直前の発話である。しかし，その直前の発話そのものが必ず修復対象になるとは限らない。

繰返しになるが，語用論的視点から考えれば，修復対象となるものは誤解を引き起こした原因であると考える。先に挙げたいくつかの例では，例 38 と例 39（2 回と 2 匹）において修復対象となったのは＜会話参加者間の世界知識上の非整合＞であり，例 40（部活のことですね）においては修復対象となったのは＜省略による会話参加者間の一時的な知識の非共有＞である。そして，例 41 においては，修復対象となったのは特定の発話ではなく，誤解している側が持っている前提である。これらの原因がどんな発話によるものかを判断した上で，修復対象を決めることができるようになる。

聞き手が発話に対して完全な誤解になる場合に限定して見てみよう。これは，誤解を引き起こした原因を含む発話（ここでは，便宜上，＜一番目の発話＞と呼ぶ）に対して聞き手が誤解発話をし，且つ聞き手が自分の誤解を認識していない場合を指す。もし，一番目の発話をした側は三番目の位置で聞き手の誤解発話を認識できなければ，連鎖上適切な発話をするだろう。その場合，もし聞き手が第四位置で自分の誤解を認識し，一番目の発話（修復対象）に対して修復を行ったら，それがいわゆる＜第四位置での修復＞になるのだが，一番目の発話をした側が三番目の位置で聞き手の誤解発話を認識でき，一番目の発話（修復対象）に対して修復を行う場合，それは＜第三位置での修復＞になる。つまり，誤解の原因に対して，＜第三位置での自己修復＞と＜第四位置での修復＞が最も一般的だと推測できる。しかし，非言語的手段を用いて誤解している側自身に修復を開始させるケース，いわゆる，自己開始・他者修復の組織が見られた。ここでは，各種類に分けて説明する前に，自己開始・他者修復という組織の例を一つ見てみよう。

例 44＜BTS 女性友人雑談 2＞A が友達の一人が病気のため授業に欠席していることについて B に話している。

1A　　で、通算で、今日数えてみたらー(うん)、26 回(うん)、欠席で：：(う：ん、は
2　　んはん）だめでしょ：？
3B　→ 1 ヶ月近くだよね、もうね。あ、そうした意味じゃなくて?
4A　　あ、ずっと続けてじゃなくて、4 月から,,
5B　　あ：[あ：あ：前期で]ってことか。
6A　　[4、5、6]、7。
7B　　でも、まだ 3 ヶ月で：(うん)、26 回だから：かなり、だめだよね。
8A　　そうだね。

全体的な会話内容を通して，＜前期に入ってからAの友人の現在までの欠席回数が26回だ＞ということに対してBが＜この一ヶ月の欠席日数を通算して26回だ＞と誤解したことが分かる。誤解の原因が1Aの発話にあると思われる。1Aは＜今日数えてみたら，その人の欠席回数は通算で26回になった＞という意味であり，もしAが 1Aで「今学期に入ってから」という情報を入れれば，相手も誤解しないはずだろう。ここで注意したいのは，3Bに起きた現象である。「1 ヶ月近くだよね、もうね」とその続きの「あ、そうした意味じゃなくて?」の間に，A の言語的反応がないということである。しかし，「あ」という感動詞は，Aが何らかの反応を示し，Bがそれを入力した標識として使われたものであるため，Aが言語的な返事はしていないものの，表情やジェスチャなどで相手に理解に問題があると認識させたことが想定できる。結果的には，「1ヶ月近くだよね、もうね。」という誤解に対して，Bが自ら修復を開始したのである。つまり，自己開始・他者修復という組織類型になっている。この現象については，マルチモーダルの手法を使って会話資料を文字化する方法を取れば，より詳細に記述できるはずであるが，本研究では，これ以上深くは触れないようにする[30]。

次に，＜第三位置での自己修復＞は，話し手は聞き手の反応が誤解であることが分かり，自分でその原因を取り除くという修復を実行する場合を指す。本節で取り上げる例では，誤解の度合いが強く，自分の理解が正しいかどうかを確認するという理解チェックの形をとっておらず，聞き手が自分の反応に確信を持っている点で異なっている。理解チェックの機能を果たしていない聞き手の誤解発話そのものを他者開始形式として扱うべきかどうかは，まだ議論の余地があるところである。繰返しになるが，本研究では，この二つの場合を区別して，完全に誤解した上で示された聞き手の反応を他者開始としない。すなわち，この場合に起きた修復組織を他者開始・自己修復としてではなく，＜第三位置での修復＞か＜第四位置での修復＞として扱いたい。トラブルの次の順番で起きた反応発話が連鎖上

---

[30] このような例文は偶然に見られるものではなく，何度も観察されたものであり，以下の例も同じく＜自己開始・他者修復＞の組織になっている。1Aの「あ、違うか」という自己開始の前に相手Bの反応を印されていないものの，Bが必ず何からの反応をしたはずだと予測できるだろう。

＜BTS 女性同士討論 4＞

1A　→　両親は?共働きだったと。あ、違うか。

2B　　そう、お母さんは,,

3A　　パートとかやって?

4B　　そうそうそうそう。

適切なものであり，その反応発話から聞き手が話し手に修復を要請する意図性が判断しがたいという理由から，他者開始される修復と区別したのである。

誤解に対する＜第三位置での自己修復＞について，次の例を参照されたい。

例 45（再掲）〈堀口 1997:112〉同じテニスクラブに所属する二人のやりとりである。

1A　　ダンロップは高いからブリヂストンにしようよ。
2B　→ 高くないよ。
3A　　ボールだよ。
4B　　あっ，ボールか。ラケットと思ったよ。

例 45 では 1A の発話が TRP に至ってから聞き手が誤解をしている。2B は自分の理解が合っているかどうかを確認するものではなく，自分の反応が正しいであると確信を持って行った発話であることがわかる。誤解が生じた原因とは，1A で省略された部分を正確に復元することができなかったことである。つまり，共有すべき形式文脈が共有されなかったことによるトラブルである。

そして，修復組織については，誤解を引き起こした発話は 1A であり（なぜなら，もし 1A を＜ダンロップのボールは高いからブリヂストンにしようよ＞とすれば，後続の誤解は生じないはずである），誤解の発生は 2B にあり，そして誤解の原因を解消する作業は 3A で話し手によって行われたため，＜第三位置での修復＞という組織になっている。A は「ダンロップのボールが高い」と言うつもりだったが，B は「(ダンロップのラケットは）高くないよ」と返事している。つまり，B は 1A に対しての発話を誤解したわけである。それを認識した A は 2B を直接修復するのではなく，B の誤解の原因に当たる点（「ラケットではなく，ボールの値段だ」）を提示したことで修復を完成したのである。もう一つの例として，例 46 を参照されたい。

例 46（例 27 の再掲）＜BTS 男女討論 1＞A は男性であり，B は女性である。A が自分の妹の仕事について話している。

1A　　ん：：まず、総合職で就職しようと思ったけども(ん：)、人数が少なくて、無理
2　　で(ん：)、人数が少なくてっていうかまあ、本人の能力的に、な評価も(ん：)厳し
3　　かったみたいだしね(ん：)、一般職で入ったんだけども(ん：)、そうすると、やっ
4　　ぱりどうしても男のサポート役みたいな(ん：)、仕事みたいで(ん：)。でも、男も
5　　それが当たり前みたいな(ん：)。アシスタントっていうんですか?
6B　→ ん：総合職なのにね。
7A　　いや、総合職じゃないよ、一般職で入っ[て]。

8B　　[一]般職で入って、あ、そっかそっか。

9A　　そうそうそう。

この例では，6B の反応から，3A の「一般職で入ったんだ」を共有することに失敗したことが分かる。トラブルの性質から言うと，6B は誤解という理解上の問題である。そして，その誤解が引き起こされた原因は B の形式文脈の共有義務に違反したことにある。相手の誤解に対して，A が共有されていない形式文脈を再度言及することで修復を実行した。最終的には，8B の B の反応からも分かるように，修復が成功している。例 45 では，会話内で発生した誤解が省略された情報が共有されていないことによるものであるのに対して，例 46 では，形式文脈が共有されていないことによるものである。このように，当面の発話を理解するのに必要となる知識が一時的に共有されなければ，さまざまなトラブルが生じてしまうのである。

## 4.4　修復・調整の枠組みからみる理解上のトラブル

まず，理解過程の問題として，誤解や不理解に限定した理由を説明したうえ，先行研究を踏まえて，それらのトラブルを引き起こした原因について述べた。そして，トラブルの性質を不理解と誤解に分けて，それぞれに対する調整行為と修復行為について分析を行った。そして，誤解に対処する調整について述べたように，調整は話し手のみが行う行為ではなく，聞き手も会話の途中でさまざまな抑制策を取ることで調整を行うことができる。

次に，会話分析では，何が誤解であるか、誤解に対処するのにどのような修復組織が行われるかというところに重点が置かれている。不理解や誤解を引き起こした原因についての議論があまり見られない。本研究では，トラブルの性質及びそれを導いた原因に着目し，その原因を抑制する調整行為とその原因を取り除く修復行為について分析してきた。不理解や誤解を導いた原因について，先行研究と結びつけながら，加藤（2009a，2012）で提案された＜動的文脈論＞の枠組みを利用して説明を試みた。理解達成のために必要となる形式文脈・知識文脈が会話参加者に共有されない場合に生じた不理解や誤解の例に限定して述べた。

更に，修復と関連づけて，誤解の度合いという要素を利用して，誤解（の一部）といったトラブルに対する新たな捉え方を試みた。不理解には度合いがないのに対して，誤解の程度はさまざまである。誤解の程度によって，修復の組織も異なってくることも観察された。具体的に言えば，修復組織から見れば，聞き手の誤解がまだ完全に形成していない場合において，聞き手の反応は多くの場合，＜理解チェック発話＞であることが多いため，修復連鎖の他者開始として捉えられ，他者開始・自己修復という組織になる。同時に，こ

のような事例における理解チェックの発話には調整機能も備わっている。一方，聞き手の誤解が完全に形成された場合においては，聞き手の反応は＜理解チェック発話＞の要件を満たしておらず，故に＜第三位置での自己修復＞か＜第四位置での修復＞になることが多い。

次章から，伝達過程の第三段階に当たる受容過程における問題に対処する修復について見ていきたい。

# 第5章　受容上のトラブルとしての不同意について

本研究でここまで扱ってきた理解上のトラブルは，主に発話内容に関わるものであり，そのすべてが理解達成に影響を及ぼしうるものであるため，それらに対処する調整や修復も順調に会話を理解できるように行われたものである。それに対して，受容上のトラブルは，主に発話者の発話態度に関わっているものとして捉えられる。つまり，受容上のトラブルに対する調整や修復は相手の理解過程で働くものではなく，発話が順調に受け入れてもらうように行われるさまざまな方策である。

本章で取り上げる不同意発話は，相手の発話を理解はしたものの，何らかの不一致により受け入れないというトラブルであり，つまり，両者間の何らかの不一致は不同意発話を引き起こした原因に当たるということである。本研究では，聞き手の不同意発話を抑制するための方策を調整とし，会話参加者間の不一致を解決するための方策を修復として捉えることができる。そもそも，不同意をある種のトラブルとして扱う以上，基本的には，同意が期待されている状況下で行われた場合を指す。よって，もともと不同意が期待される場面，例えば，発話者が自分に対して否定的な評価をする場合や謙遜する場合などにおいて起きた不同意を対象外とする。むしろ，その場合に生じた同意行為こそがトラブルになりうると言える。

それと同時に，不同意はトラブルの一種と言えるが，産出過程及び理解過程に生じたトラブルと本質的な違いがあることを看過してはならない。会話において言い間違いや聞き間違い，不理解や誤解といったような問題が発生した場合，意味伝達を実現するために修復が行われることが殆どであるが，受容過程に生じた不同意やフェイス上のアンバランスなどのようなトラブルとなると，その緊急性と義務性が下がると言えよう。となると，不同意に対する修復は必ず起きるものではなく，起きる可能性があるに過ぎないということである。この点は，ほかの受容問題についても同じである。

また，不同意発話を引き起こした原因は会話参加者が認識態度において同調していないことにあると言えよう。そこで，調整と修復をトラブルの発生原因に働くものとして捉えているため，聞き手の不同意発話を回避することは相手との不同調を抑制することに，聞き手の不同意を解決することは相手との不同調を解決することに言い換えていいだろう。本研究では，①話し手が相手との不同調を避けるために施した調整行為，②聞き手(不同意表明側)が不同意を表出する際に施した調整行為，③両者の不同調が顕在化した場合に行わ

れた修復行為，という三種類に着目して展開したい。

## 5.1　不同意を抑制する調整行為

会話において，会話参加者が同調すれば，より順調な伝達が達成されるだろう。同調とは，ただ相手の発話内容に同意するだけでなく，同意が期待される場合に同意を示すもしくは不同意を回避する，不同意が期待される場合に不同意を示すもしくは同意を回避することなど，相手の出方に合わせた行動を取ることを指しているだろう。この観点から考えると，順調な伝達を達成するために，受容上の問題を回避するもしくは解決するために会話参加者が互いに何らかの行動をとるだろう。

話し手にとって，相手に同調させるためにどのような行動を取るべきか，もしくはどのような行動を避けるべきかが重要である。同時に，聞き手が話し手に同調しない場合，聞き手がどのようにその程度を軽減するかということも重要である。そこで，本節では，話し手が発話する時に，相手の不同調を抑制するために行う調整行為について述べる。主に以下の 2 種類を観察する。一つは，発話の示し方で主張態度を弱めることを通して調整する手段であり，いま一つは，自分の見方などを価値づけることで調整する手段である。

### 5.1.1.　発話内容の示し方で主張態度を弱める

主張態度を弱める手段については，3.3.3 で 2 種類の現象について触れた。一つ目は，「…かもしれない／かな／気がする／っていう感じ?」といった文末表現を用いて自分の主張態度を弱める手段である。二つ目は，自分の見方を示した後，「(この見方が) 甘いかもしれません」という表現を付け加える現象である。ここでは，前者について見ていく。3.3.3 では，次の例を挙げた。

例 47（再掲）(中村(2011)p.36)　A と B が「町」という言葉の持つイメージについて話している。自分の出身地(〜町)がいかに田舎であるかと語った B に対して，A は「都会では町のつく地名はおしゃれだ」といくつかの例を挙げる。

1A　あ：だから町っておしゃれなんだけど。
2B　何かイメージが違うんだけど。(0.7)
3A　〈軽く笑い〉
4B　イメージが違うんだけど，なんか，[なんか],,
5A　[駅の名前]で(.)あるよ，町って言ったら。
6B　あ，でも(0.2)それは名前がたまたまちょうで終わった,,(0.5)
7A　◦そうなのか[な：：◦

8B　→ ◦っていう感じ?◦(0.4)

9A　あれ，分かんない。

→で示した 8B では，B が相手の反応（「そうなのかな」）に合わせて自分の主張態度を弱めた現象が見られた。同じ性質の例として，次の例も参照されたい。

例 48＜BTS 男女友人同士討論 3＞A は女性であり，B は男性である。

1A　でも、そっか、でもなんかさ(んん)、やっぱ男か女かによってさ(ん：)、こうなん

2　か、物事の進み方ってさ、違ったり,,"

3B　する?

4A　する…,,

5B　そうなん[だ]。

6A　→ [と]思うよ。なんか、私、女で、なんだろう、ちょっとだん、男尊女卑っぽいけ

7　どさ(あ：)、なんかやっぱ女の子はちょっと仕事できなくても(あ：)、それで,,

8B　い[い]。

9A　[ゆ]るされちゃう(あ：)、みたいな。

10B　あ：：なるほどね。

この例では，2A が TRP に至る前に，3B（「する?」）が示された。3B では B が相手の見方に賛成するかどうかまで判断できないが，上昇調を付けられるところから，A にとって B が修復を要請している可能性があると判断してもよい。そこで，相手 B の不同意している可能性に備えて，A が 6A で発話を完結する時に，「と思うよ」という主観性を示すことで主張態度を弱めたと言えよう。これは，例 47 における「っていう感じ」と似た機能があると言えよう。

会話では，上記のような現象が数多く観察された。これらの表現に共通しているのは，自分の主張態度を強く示さないという機能である。このような機能は自分の主観的な感覚を述べる際に使われると思われるが，ある事実や自分が情報管理していることを言及する際にも使われることが分かった。次の例を参照されたい。

例 49＜BTS 初対面雑談 2＞A と B は同じく大学四年生であり，進路について語っている。A が大学院に進学するのに対して，B は大手会社の内定を持っている。しかも，B はかつてベトナムとアメリカに留学したことがある。そして，A がこの断片の前に，「(留学を）やっぱり経験しておくといいかな」という表現で留学を憧れている態度を表明した。

1A　や、でも、留学 2 つしたら、東外大に来て、何ていうの、東外大生らしい大学生

2　　だったんじゃないですか?なんか…。
3B　　そう、ですかね：：でもなんか、就職してて、そうした、か、就職か、就職活動
4　→　してて感じたのが、いや、別に留学したからってそれが有利になることはまった
5　　くない??
6A　　あ：：それは、え、いっぱいいるからですか?もう世の中に、留学してる人が。
7　　[それが]【【。
8B　=>】】[それも]ありますね。また逆に、女性だと、海外に駐在させたりできない,,
9A　　は：：
10B　　っていうのがあるんで：：

4B では,「別に留学したからってそれが有利になることはまったくない??」と表現の最後に疑問符が付けられていることから，この発話が上昇調で発されたことが分かる。

現象としては，これが 3.3.2 で言及された半疑問とは異なっているところがあることに注意する必要がある。3.3.2 での半疑問という現象は，新情報（「江守徹?」）を出す時に現れた。その使用には，①知ったかぶりをしない姿勢を作ること，②「相手が確実に指示対象を認識できたのを把握してから先に進めたい」という狙い,③TRP にて修復の機会を作る，という三つの要素が考えられると述べた。しかし，4B の上昇調は，この三つの要素すべて絡んでいるとは言いきれない。4B において新しく出された難解な言葉などがないため，これを相手に理解上の問題を生じさせないように行われた行為として考えにくい。

これは，理解達成に関わるものではなく，受容達成に関わるものとして捉えるのではないかと考える。B には二回の留学経験があるだけでなく,既に大手会社の内定を持っている。留学経験が就職活動にとって有利かどうかについては，相手より詳しいはずである。つまり，B は当面の情報を十分に管理しているものの，4B の発話を上昇調で示した。これを，相手に不受容のトラブルを生じさせないように行われた行為として捉えたい。

半疑問の機能には,「知ったかぶりをしない姿勢を作る」ことが含められている。留学経験がないものの留学に憧れている A の前に,「別に留学したからってそれが有利になることはまったくない」と言い切る場合，それは相手の受容態度にも影響を及ぼしうる。当面の情報を管理していないために，その情報を出す時に自信が足りず半疑問を使用する場合もあれば（「江守徹」の例で示したように），この例のように，当面の情報を管理しているからこそ相手の立場を考える上で「言い切り」を避けて半疑問を使用する場合もある。つまり,「知ったかぶりをする姿勢」は＜共感形成＞とは逆に，＜反感形成＞をもたらす可能性があるため，相手に反感を覚えさせ，不同調になってしまう可能性を回避するために，十分に知り切ったことでも，その主張態度を弱めることが対人関係上有利である。

次に，=>で示した 8B について見てみよう。＜留学経験が就職活動に有利とは限らない＞という内容に対して，A が＜世の中に留学している人がいっぱいいるからだ＞という理由を提案した。それに対して，B が「それもありますね」という表現で相手の意見に同意を示したあと，「また逆に」という接続表現を挟んで＜女性を海外に駐在させないからだ＞という理由を提示した。しかし，論理的に考えると，＜世の中に留学している人がいっぱいいるからだ＞と＜女性を海外に駐在させないからだ＞との間に，逆説的な関係が存在していない。逆説的な関係がないのに「逆に」という表現を使用したことは，B が 6A で示した理由と違うもの，いわゆる，8B で提示した理由を言いたかったからであろう。6A で示された理由が B の言いたかった理由とは異なる場面において，B が 6A を否定したり不同意を示したりするのではなく，「それもありますね」という表現で相手に同調を示した上で，異なる意見を出したのである。これは，話し手の見方に対して聞き手が異なる意見を表明する際に，相手との最大の一致を維持するために施した調整行為として捉えられよう。

この例に観察された＜自分の管理下にある情報を言及する際に使用された半疑問現象＞と＜異なる意見を表明する前に相手の見方に同意を示しておく現象＞は，いずれも珍しいものではない。この二つの現象は，自分の主張態度を弱める手段として対人関係上問題を生じないように行われた調整行為として捉えられる。そのほかにも，自分の主張態度を弱める手段が多くある。次節では，自分の見方を低く価値づけることで実施した調整行為について見てみよう。

### 5.1.2. 自分の見方を価値づける注釈挿入表現

本研究では，＜自分の見方を価値づける＞表現は「注釈挿入」のカテゴリーに加えることができると主張したい。従来の研究では，これは注釈挿入の対象ではないということである。まず，注釈挿入に関する先行研究について述べる。

会話資料を利用した先行研究には主に丸山他(2004)，林(2005)，船橋(2011，2013)がある。注釈挿入とは，「一文節を分断する形で補足的な注釈が加えられているもの」（船橋 2011:107)であると定義されている。そして，「挿入された発話は，適切な情報伝達を行うべく，聞き手の理解を助けるべく発話されたものであり，聞き手もそのように理解する発話である」（船橋 2011:107）と示されている。次に，その下位分類について述べる。

丸山他(2004)では，注釈挿入の機能を以下の三種類に分けた。表 4 で示す。

表 4：丸山他（2004）における注釈挿入の機能

| 種類 | 例文 |
|---|---|
| A 型：発話全体の背景や全体となる情報を表す。 | 色んなパターンを、ここに書いてある数字は頻度ですが、たくさん集めてみました。 |
| B 型：直前に発話した語や内容について注釈を加える。 | 正直言って、学部、私工学部だったんですけど、そちらの勉強は殆どしておりませんで。 |
| C 型：今から発話しようとする語や内容について予め注釈を加える。 | お酒と，メニューは少ないんですが，食事が置いてあります。 |

そして，船橋（2011）において，林（2005）で提案されたメインアクティビティ（MA）とサイドアクティビティ（SA）[31]の概念を利用し，「注釈挿入がコミュニケーションに貢献する現象であるということは，MA と SA という発話構造にともなった一定の言語形式の使用があるという考えのもと，挿入部を 3 タイプ（内容補足，外界指示，メタ的コメント)」に分け，……（中略）……注釈挿入の発話構造にともなう言語形式の使用を明らかにしている」（船橋 2013:128)。例文と合わせて次の表で示す。

表 5：船橋（2011）における注釈挿入の分類

| 種類 | 例文 |
|---|---|
| (1)内容補足：挿入部が，挿入部に先行する要素に関する内容的な補足となっているもの | それから、ん、言語形成期、これをゼロ歳から十二歳という風にしましたが、え、それを標準語アクセント地域で過した者。（船橋 2011：114） |
| (2)外界指示：挿入部が，挿入部に先行する要素に関し，外界における同定を行い，外界の指示対象物に関する情報の追加を行っているもの。 | 言い淀みというのはですね、えーとー、七と、次の頁でしょうか、ええ、七になりますが。（船橋 2011：116） |
| (3)メタ的コメント：挿入部が，MA に関するメタ的コメントとなっているもの。 | 普通の、あの、一般的、これまでのあの、三件のあのう、ご発表と違ってですね、一般的な研究発表になります。（船橋 2011：114） |

表 4 と表 5 における分類からみると，丸山他(2004)に提案された類型（表 4 の A 型 B 型と C 型）は船橋（2011）で示した「(1) 内容補足」に含められるようである。内容補足と

[31] ここで言う MA と SA は，第三章で示した会話の本流と傍流の概念とはほぼ一致している。

は，発話内容に付加説明するものを指している。そして，表 5 の(2)外界指示とは，＜動的文脈論＞の枠組みで考えると，状況文脈を共有するために付け加えられたものとして捉えられよう。この 2 種類は，確かに「適切な情報伝達を行うべく，聞き手の理解を助けるべく発話されたもの」（これは，理解達成のための機能として扱える）として捉えられよう。

本研究では，表 5 の（3）について分析することを通して，注釈挿入はすべて理解達成のために機能するだけでなく，発話の受容面に影響を及ぼす機能があることを示したい。

具体例についての議論に入る前に，なぜこれまでの注釈挿入の研究において，受容面に関わっている可能性が論じられていなかったかについて考えてみる。それは，丸山他 (2004) と船橋（2011，2013）で使われた資料の性質と関わっているのではないかと考える。これらの論文では，CSJ(Corpus of Spontaneous Japanese)という学会講演と模擬講演を中心とした資料を利用している。独話である講演資料は一対一の会話資料とは質的な違いがある。会話では，相手が直前の発話を受け入れないと，そのあと，受け入れ拒否という状況をめぐって交渉するという展開になる可能性が高いものの，講演などでは，聞き手がその場で受け入れなくても話が元の方向で進めることができるからである。つまり，受容するかどうかどのように受容するか，受け手の態度が随時会話の展開方向に影響を与え，会話において重要な構成部分であるのに対して，講演ではさほど重要視されていない問題だと言ってもいいだろう。そこで，これまでの注釈挿入の研究において，理解達成の視点から述べてきたが，これらの研究が受容達成に目を向けなかったのは，このような資料を利用しているためであるかもしれないと考える。

第 3 章と第 4 章で，理解上のトラブルを抑制する機能のある調整行為について分析する時に取り上げた現象[32]は，表 5 の（1）内容補足，(2) 外界指示と重なっている部分が多い。ここでは，「(3) メタ的コメント」というカテゴリーに着目し，特に＜自分の主張態度を弱めるために施された注釈挿入＞について見てみる。次の例を参照されたい。

例 50＜BTS 初対面討論 4＞

1A　/沈黙 8 秒/そうだねもう子供が、できたらまた新たな問題ができるね。子供がい
2　なかったらさあ,,
3B　うんうんうん。
4A　なんだろう、まだ付き合ってると同じな感じでね[↑](うん)、会社帰りデートとか
5　ってできるけどさあ。

[32] ここでは，(1) ＜形式文脈共有義務の違反を抑制する調整手段＞，(2) ＜新情報とともに使われる遅延や半疑問という調整手段＞，(3) ＜話題予告をすることで不理解を抑制する調整手段＞ (4) ＜新情報を出す途中で中断し，付加説明で調整する手段＞と (5) ＜相手の知識状況を確認する調整手段＞を指している。

6B　　うん、そうか。
7A　　そうだね。
8B　→ それ、あ、そうか。でもそれだとさあ、私の考えたけど：、結婚、する意味がな
9　　い、じゃないかな：って思うの。
10A　　確かに、確かに。

注釈挿入とは「一文節を分断する形で補足的な注釈が加えられているもの」(船橋(2011))であるという定義から見ると，8B の「私の考えたけど：」という部分が「でもそれだと結婚する意味がないじゃないかな：って思うの」という文を分断しているため，基本的な性質が注釈挿入の定義に合っている。しかし，この部分が「適切な情報伝達を行うべく，聞き手の理解を助けるべく発話されたものである」かどうかについてまだ検討の余地がある。

内容の流れとしては，A が＜結婚して子供が出たら新たな問題が出る＞と切り出し，その例としていくつかの問題を挙げている。それに対して，B が＜そのようなことを問題としたら，そもそも結婚する意味がない＞と A の前提に対して反対的な態度を示している。つまり，「私の考えだけど」という表現を挟んだのは，相手の発言に反対の態度を示すためである。これは相手の解釈作業に役立ちたいという狙いから発話されたものではなく，相手に受容させやすくするもしくは相手に反対されないようにするための方策として捉えられよう。

このような注釈挿入表現の最大の機能は，メタ的に自分の見方を価値づけることにある。ただ，これは自分の見方を低く価値づける例である。相手の不同調を回避したいもしくは相手に反対されたくないなら，自分の意見を高く価値づけるのではなく，低く価値づけたほうがより効果的だろう。「私の考えだけど」という表現を用いて，「でもそれだと結婚する意味がないじゃないかな：って思うの」というのは自分の主観的な見方に過ぎないという価値づけをしたことを通して，相手に反対する余地を残しただけでなく，自分の見方を強く主張することを回避することができた。よって，このような表現を注釈挿入の一種，いわゆる「メタ的コメント」として位置づけられる一方，理解達成ではなく，受容達成を目的として発話されたものとして扱えると主張したい。また，10A の聞き手の反応（「確かに確かに」）から，その機能が実現されたことが分かる。もう一つの例を参照されたい。

例 51＜BTS 初対面討論 4＞A は結婚した後も仕事を続けたいと言ったが，B は専業主婦になりたいと言った。
1A　　ん、なんだろう、やっぱり、仕事はしたいな：、生甲斐を見つけたいなっていう
2　　のは[###]。

3B　　[それは]すごく大事なこと、だよね。だって、なんか私みたいに：、なんか誰か
4　　に頼って(<笑い>)結婚すると：、もし１人になった時に、どうしていいか分から
5　　ないじゃん。ちゃんと自分で、生活立てていける、(うん)ぐらい、ちゃんと仕事、
6　→　とかしてて、そうしたら、なんか変な言い方だけど、いつ１人になっても(ん：)
7　　大丈夫って。
8A　　いつふられてもいいっていう####ような<2 人笑い>。
9B　　そうそうそう。

まず，6B の「なんか変な言い方だけど」という部分が，「そうしたらいつ１人になっても大丈夫って」という文を中断したことから，注釈挿入の特徴を持つと判断できる。

例 50 における注釈挿入表現と違い，これは相手に反対の態度を示すために使われたものではなく，むしろ相手の意見に合わせるような見方を述べる時に使われたものである。しかし，例 50 と同じく，例 51 も相手の解釈作業を助けるというより，相手の受容態度に影響を及ぼしていると言えよう。「なんか変な言い方だけど」という表現には，自分の見方（「そうしたらいつ１人になっても大丈夫って」）を低く価値づける機能があるため，自分の主張態度を弱めることに繋がっている。従って，この注釈挿入表現も，例 50 と同じく，自分の意見を反対されない，相手の不同調を抑制するもしくは相手を同調に仕向けるという狙いがあって使われたものとして考えられる。また，9B の聞き手の反応（「そうそうそう」）から，その効果も果たしたと分かる。

以上，不同調という受容上の問題を抑制するために，二つの部分に分けて，発話者側が施した調整方策について述べてきた。一つ目は，発話内容の示し方自体で自分の主張態度を弱めるという調整手段であり，二つ目は，メタ的なコメントという注釈挿入表現で主張態度を弱めるという調整手段である。また，発話者が主観的な見方を述べる時に先述した調整手段を利用している例が殆どであるということから，主観的な意見を述べる際に，強く主張するより態度を弱めた現象が観察されたと言えるものの，事実を述べる際にも同じ傾向があるかどうかについてはまだ考察が必要である。以下では，不同調という問題に対処する修復行為について見てみたい。

## 5.2　受容問題としての不同意について

聞き手の不同意発話を引き起こした原因が会話参加者間に生じた何らかの不一致である。よって，修復対象となるのは不同意発話そのものというより，その原因にあたる不一致である。本研究で修復の視点から不一致を捉える際に，不一致の性質によって，修復の労力と修復の結果においてどのような差異が出るかということに着目する。というのは，修復

プロセスを，不同意表明を通して他者修復を実行するまでではなく，不同意表明とともに顕在化になった不一致をめぐる交渉まで拡張する。

次に，修復労力と修復結果について述べる。

そもそも，トラブル源の産出とともに，不同意表明側には不一致の存在を確認することができる。そして，次の順番で不同意を表明することでその不一致を修復するため，修復組織から見れば，他者開始・他者修復になる。次の順番で行われた修復実行とともに，両者間の不一致も顕在化になる。顕在化になった不一致に対して，修復実行の受け手がどのように受容するかで修復の労力を判断する。受け手が修復実行の次の順番で受け入れる場合，修復の労力が小さいと判断する。一方，修復実行と離れた順番で受け入れる場合，その距離が大きいほど修復の労力も大きくなると判断する。

また，本研究では，修復の結果とは両者間の不一致が一致になったかどうかということを指している。つまり，他者開始他者修復が実行されてから，顕在化になった不一致をめぐる交渉まで修復プロセスとして考えるということである。

### 5.2.1. 言語的不同意

修復について考える時に，トラブルの性質に着目しているため，不同意発話に対処する修復について分析する前に，不同意の性質に対して大まかな分類をする必要がある。本研究では下記の 2 種類を検討対象から除外することを断っておきたい。一つ目は，誘いや命令や提案など，ある種の行為を要求する発話に対する不同意であり，もう一つは褒め／非難／謙遜に対する不同意である。

まず，一つ目を除外する理由とは，ある事実や見方に対する不同意と違い，時間差(time differential)があるからである。つまり，誘いや命令を受け入れた時，何らかの行為を伴う責任や義務が生じるとともに，発話する時点と行為を実行する時点が離れているのに対して，事実や見方に対する不同意や同意の場合においては，発話する時点でその不同意の行為も実行されたということである。

そして，二つ目を除外する理由は，発話者が褒め／非難／謙遜というような行為をした場合，聞き手としては不同意を示す方が両者間のフェイスバランスの均衡化に有利であるということである。この点において，事実や見方に対する不同意と決定的な違いが存在しているため除外した。以上より，本研究では，ある事実や見方に対する言語的不同意を対象とする。

### 5.2.2. 不同意発話の対象

まず，＜自己の発話に対する言語的不同意＞か＜相手の発話に対する言語的不同意＞か

によって分類してみる。

＜自己の発話に対する言語的不同意＞とは，発話を産出する途中で自分の意見を変えたり取り下げたりすることや，部分否定したり限定したりするといった現象を指す。言語表現からみると，自分の意見とそれと相反する意見との間に，よく何らかの標識が見られる。例えば，言いよどみや遅延といった発話行為自体の特徴もあれば，「でも（さ／な)」「ただ（ね)」「〜けど」などのような接続詞や接続助詞，「いや」などのような感動詞，「違う（か／かな)」などのような自立的な語や節もある。

広く捉えてみれば，これは自己開始・自己修復(自己とはトラブルを産出した側を指しており，産出した側によって修復を実行された場合を指す)という修復行為として捉えられる一方，聞き手に自分の言い分を受容してもらいやすくするための調整行為としても捉えられると考える。そもそも，局所に対する修復行為には調整の機能（更なるトラブルを招かないように）が備わっていることとつながっていると言えよう。本研究では，このような現象を，話し手の視点から出発し，話し手が聞き手に発話を受容してもらうための調整行為として捉える。それに対して，本節で取り上げるのは，「相手の発話に対する言語的不同意」である。

### 5.2.3. 先行研究からみる不同意

不同意の研究において，先行研究で扱われてきたのは殆ど＜相手の発話に対する言語的不同意＞である。Sifianou(2012)によれば，これまでの不同意の研究について，その研究方法から分類すると 2 種類に分けられるとされる。一つは会話分析 (Mori, 1999； 椙本, 2004；大塚, 2005 など)であり，いまひとつはポライトネス(Brown&Levinson,1987; Rees-Miller,2000; 木山, 2005；村田, 1997；Tanaka,2010;堀田・吉本, 2012；楊, 2009 など)である。そして，会話分析の研究では，主に不同意発話そのものの特徴(遅延や笑い，沈黙などがあるかどうかというようなこと)やその中に使われているマーカーなどについてのものが多い。一方，ポライトネスの視点からの研究においては，不同意の程度や不同意を表す方法，不同意発話に影響を与えうる要素などを分析するものが多い。

まず，不同意発話の定義について，先行研究ではよく使われるのが Rees-Miller(2000)における定義である。本研究においてもこの定義を採用する。

「話し手 S は，聞き手 A が発話した，もしくは信奉していることが前提とされるある命題 P が，真実ではないと見なした場合に不同意し，P ではない命題内容または含意を持つ発話で反応する。」（木山訳）（A speaker S disagree when s/he considers untrue some proposition P uttered or presumed to be espoused by an Addressee A and reacts with an utterance the propositional content or implicature of which is Not P)( Rees-Miller2000:1088)

次に，先行研究における不同意発話は，主にある種の会話断片であり，その単位は発話者 A がある見方を表明したところから，聞き手 B がそれに対して何らかの方法で不同意を表明したところまでというパターンである。本研究の目的を実現するために，それより長い会話の断片にする必要がある。なぜなら，聞き手が話し手のある発話に対して不同意を示すことで両者にある種の不一致が存在することが顕在化になり，そうした不一致を修復するプロセスを観察するためにはより長い断片にしなければならないからである。

従来の研究では，このようなより長めの会話断片（発話 1 →発話 1 に対する不同意→不同意に対する交渉）に着目しているものが多くあり，例えば，Jacob&Jackson(1989)や Mori(1999)では，それを「意見交渉(‘opinion-negotiation’ or ‘conversational argument’)と呼ばれている。更に，修復との関連性を言及した Jacob&Jackson(1989)では次のような記述がある。

「意見交渉のプロセスは“ある種の修復”のメカニズムと関わっており，そのメカニズムが好まれる同意を求めるシステムにおいて不同意の出現を調整するためにデザインされたものである。」（筆者訳：p. 158）

このような考え方は，従来の研究における，会話参加者が一致を達成するために発話を交わしているという前提に立ち，不同意を「好まざる行為」[33](Pomerantz,1984)や「会話参加者間に生じたある種の失敗」(Myers, 2004)として扱うやり方につながっている。つまり，不同意発話が常に否定的な視点から捉えられ，衝突やインポライトネスを招来するものであると見なされている。これに対して，Sifianou(2012)は，このような考え方を批判し，不同意が必ずしも衝突(conflict)やインポライトネスを導くとは限らず，時には両者間の親密性(intimacy)や社交性(sociability)を示すことができると主張している。

上記の考え方を合わせて，Sifianou(2012)で指摘したことを考慮に入れた上で，基本的には従来の捉え方で分析を展開していきたい。ただし，すべての不同意が修復されるべきものであるという立場ではなく，不一致の程度がそれぞれであり，修復されるべきものもあれば，修復しなくてもよいものもあるというふうに捉えたい。従って，本研究では，不一致の性質や程度に注目する。具体的には，不同意をしたからには，相手との間に何らかの不一致が存在しているためであり，何についての不一致なのか，その不一致の程度がどうであるかなどの要素によって，それを修復する必要性の程度も修復の結果も異なるはずだと考えている。

従って，本研究では先行研究を踏まえて，①ある事実に対する認識上の不一致による不同意，②あることに対する主観上の評価や見方の不一致による不同意，の二種類に分けて考察していく。その考察をするにあたって，⑴事実との関与度の違いによって，不同意の

[33] Pomerantz(1984)では，相手の発話に不同意をする行為が不愉快・フェイス侵害・侮辱・非協力というような認識とリンクしているからと述べている）

程度や修復の労力において差異が見られるかどうか，⑵事実に対する認識上の不一致に対処する修復と物事に対する評価や見方の不一致に対処する修復の結果とはどう違うかについて分析することを目的とする。

## 5.3　情報の管理状態と不一致・不同意

まず，会話をする時に，ある発話に対する態度について，同意と不同意を連続的に捉える立場からすれば，「より強い同意→より弱い同意→部分的な同意→より弱い不同意→より強い不同意」というふうに大まかに分けられるだろう。本研究では不同意の程度について，相手の反応発話を手がかりにして判断する。例えば，もし聞き手が「いや，違う／そうではない／～ではない」というような明白的な否定表現を用いて不同意を表明する場合，それを＜より強い不同意＞とする。一方，相手の発話の一部を否定する／同意する場合や「言いよどみ／言いさし／遅延／沈黙」などを伴って相手の発話を否定するのではなく，ただ自分の同意の態度を曖昧にする表現で不同意を表すものを＜より弱い不同意＞として分類しておく。

そして，不一致と不同意の関係については，本研究では，不一致を不同意の原因として扱い，同時に，修復対象となるのも具体的な不同意発話ではなく，当該の不同意を引き起こした何らかの不一致である。

さらに，情報の管理状態によって不同意の程度や不同意の表し方などとの関連について考察したい。例えば，事実認識における不一致による不同意の場合，当面の事実に対する不同意側の管理状態によって不同意のありかが異なる可能性がある。もし不同意側が当面の事実との関与度が高ければ，つまり，相手より詳しく知っている場合には，より強い不同意が示される可能性も高くなるだろう。一方，主観的評価における不一致による不同意の場合，不同意側が相手の主観的評価を管理することが不可能なので，それによって不同意の表明仕方も異なる可能性が想定できる。このように，本研究では，事実認識や主観的評価のように分けるのではなく，不同意側が当面の情報を管理している状態によって分けておきたい。

### 5.3.1.　不同意側の管理下にある情報に対する不一致

不同意を表明した側が当面の情報についてより詳しく知っている場合において，会話参加者間に生じた認識上の不一致により起きた不同意である。これは，ある事実に対しての認識の不一致による不同意を指す。

従来の研究によれば，この場合，不同意する側がよく明確的に不同意を表明するということである。しかし，本研究では，不同意した側がその事実との関与度の違いによって不

同意の程度が異なってくることを主張したい。例 52 と例 53 を対照的に参照されたい。例 52 は，不同意する側が当面の情報を管理している事実に対して「より強い不同意」が行われたケースである。

例 52＜BTS 初対面雑談 14＞A と B が自己紹介を終えたあと。

1A　　あの：東外大だとけっこう、あの、僕ここ今日初めて来たんですけど,,
2B　　はい。
3A　　あの：外国語のほうはけっこう皆さんよく喋りますよね、B さんも。
4B　→ あっ、私実は東外大じゃなくて,,
5A　　あっ、そうなんですか。
6B　　近くの、あの、国際基督教大学,,
7A　　あっ、そうなんだ。
8B　　のほうなんですよ。
9A　　ごめんなさい。
10B　　いえいえ。

この例では，「B が国際基督教大学の学生である」という事実に対して，A との認識の不一致による不同意である。不同意発話（4B）をした B のほうが，この事実との関与度が深く，その真偽を判断する権利があるため，「～じゃなくて」というような明確な否定表現で「より強い不同意」をした。更に，4B で両者間の不一致が顕在化したが，7A の「あ，そうなんだ」という発話から分かるように，両者の不一致が一致に変わり，B の修復が簡単に実行された。それに対して，例 53 は，同じく事実に対する認識の不一致による不同意であるが，不同意側（A）が当面の情報を管理していないケースである。

例 53＜BTS 初対面雑談 6＞B は 18 歳までフランスで暮らしており，帰国子女として大学入試に参加した。これに対して A は 14 歳までインドネシアで暮らしていたことがある。二人が帰国子女として大学入学試験を受ける条件について話している場面。

1A　　でもあれ、帰国子女の条件ってけっこう厳しくなかったです?
2B　　条件?
3A　　何年以上、住んでてー、[で]【【
4B　　】】[あ]、でもたいてい 3、4 年、2、3 年かな?2、3 年住んでて、あと統一試験
5　　っていうのがあるんですけど、それも受けてて、あと何だろ、日本国籍持ってて??、
6　　ま、それぐらい：。
7A　→ そうでしたっけ。あたしもでもなんか、え?高校：までに、海外にいないとだめ

8　　なん##。あ、そうそう、だ、最終学歴かな?っていう：最終を、高校まで、海外
9　　にいないとって。
10B　　[そうそう]そうそう。
11A　　[だから]、3、4 歳の頃に海外にいたっていうん[じゃ],,
12B　　[それは]、[だめです]。
13A　　[だめ]なんですよね。
14B　　[だめです]。
15A　　[それが]、厳しいなーと思って。

矢印で示した部分は，＜帰国子女として大学入学試験を受けられる条件＞について両者間の認識の不一致による不同意である。帰国子女として大学入学試験を受けた B が＜帰国子女として大学入学試験を受けられる条件＞について，実際に受けたことがない A より詳しく知っているはずであり，関与度がより深いと言えよう。4B～6B において B が①海外に２、３年間住んでいたことがある，②統一試験を受ける，③日本国籍を持っている，という三つの条件を列挙したところ，A が「高校まで海外にいる」という条件があると示した。

7A～9A を観察してみると,A の不同意発話がかなり弱まっているということが分かる。「そうでしたっけ」という表現は「そうではなくて」と違い，相手の発話を否定する機能がなく，疑いの態度を示した機能しか持たない。また，発話の最後に「って」という引用表現も付けられており，自分の不同意を間接化にしている。更に，不同意発話が全体的に言い淀んでいるところからもその弱化も窺えよう。その理由は，会話参加者間に生じた不一致の対象が，例 52 と違い，不同意された側との関与度が深いからであろう。B が実際に経験したことだから，詳しく知っているはずだという判断の上，A は相手のポジティブフェイスに対する侵害度を軽減するために，不同意を示す時に明白に相手の発話を否定するよりも，不同意の態度を弱める手段を選択しただろう。それだけでなく，もし自分の認識が不正確である場合，弱い不同意の方が余地を残し，自分のフェイスへの侵害リスクを軽減することもできる。例 52 の 5A と例 53 の 10B から分かるように，この 2 例に共通しているのは，その不一致を修復する労力があまり大きくないというところである。

しかし，この場合における修復が常に容易に修復されるのではなく，例 54 のように多くの説明が必要な場合も見られた。

例 54＜BTS 初対面雑談 3＞B が日本課程の言語文化コース院生一年目であり，A がベトナム語が専攻である。

1A　　え、何年生ですか?
2B　　私は大学院の 1 年です。

3A　　あっ、大学院：あ、じゃあ【【。

4B　　】】日本課程の。

5A　　え、日本課程。

6B　　はい、あ、日本専攻です。あ、言語文化コースなんで、日本語教育コースとはま

7　　たちょっと違ってて。

8A　　え、もともと学部の時は?

9B　　日本語です。

10A　　東外大で?

11B　　はい。

12A　　日本語科?

13B　　はい。

14A　　あ：そうですか。日本語科の方たちって、すごいですよね。すごいですよねぇっ

15　　ていうか、なんか私たちにない視点をもってるっていうか。

16B　　あ：なんかやってることが全然違いますよね、なんかね。

(133 行省略した。省略された会話のうち，半分程度は日本語の鼻濁音についての内容であり，残ったのはAの専攻のベトナム語についてのものである)

17A　　だからまぁ1個、英語以外の言葉として、ベトナム語は持ってようかなって=

18B　　=あ、それはすごくいいですよね、うんうんうん、あ、そうなんだ。

19A　　いやでも、日本の、日本語研究なさってるんですよね。

20B　→　いやいや、私はやってないです。私は、なんか日本専攻なんですけど,,

21A　　はい。

22B　　言語学専攻で,,

23A　　はい。

24B　　日本語学専攻でなくて言語学専攻してるんで,,

25A　　はい。

26B　　で：：言語接触やろうと思って、で、シンガポール：なんですよ。

27A　　え、言語接触って?

(6行省略した。言語接触について説明している)

28B　　うん、で、それを興味があって、まぁ多言語文化の中で、どういう風に言語が影

29　　響しあって：、っていうのを：、はい、やってるんで、日本語じゃないです。

30A　=>　あ：：そうなんですか。

31B　　はい、そうなんですよ。

この例で生じたのは，「B が日本語の研究をしているかどうかということ」に対する認識がずれていることによる不同意である。これは B(不同意発話をした側)の管理下にある情報に対する不同意だと言える。しかし，当面の情報が不同意を表明した B との関与度が深いものの，修復が成功するまでにかなりの労力がかかった。

まず，会話内容からみると，17A までの形式文脈から B の専攻について，＜学部の時は日本語科であり，現在は日本専攻の言語文化コースである＞ということに対しては A も理解したと考えられる。その後，二人は日本語の鼻濁音について話したあと，A は B の専攻についてを再び話題として取り上げようとして，19A を発したのである。そして，19A に対して B は明確な否定表現で（「いやいや、私はやってないです」）強い不同意を示した。

そうした不一致を修復するプロセスも 20B〜30A にかけて行われた。例 52 と同じく，不同意側の管理下にある情報に対する認識上の不一致が修復される例であるが，例 52 と例 54 では修復の労力にかなり差が出た。本研究では，修復労力の大小を判断する時に，当面の不一致をめぐるやりとりの長さで判断する。例 52 では，不同意が表明された次のターンで相手が納得したが，例 54 では，その次のターンではなく，かなり離れた位置で納得した（30A の「あ：：そうなんですか。」）のである。その理由には，次の３点があると考えられる。①会話参加者間の対象に関する知識量の差異であり，②強い不同意した側には説明責任を伴うということである，③知識文脈[34]に対する作業の種類が異なることである。

まず，知識量の差異という要素については，例えば，例 53 において，二人とも海外で長く生活したことがあり，一人はもう一人に比べやや長く海外にいたために帰国子女の条件を満たし，帰国子女として大学入試を受験できたが，もう一人は条件を満たしてないためできなかった。受験できなかったほうも帰国子女の条件についてはある程度知っているため，会話内での不一致が簡単に修復されたのであろう。一方，例 54 においては，A の専攻がベトナム語なので，＜日本専攻の言語文化コース＞というのはどういう意味なのかよく分からないこともあれば，会話の冒頭で B から日本語言語学に関する話を色々聞いたことも加えて，最初から「B が日本語の研究をしている」という誤解を持っている可能性が考えられる。また，前の話題とかなり離れているところでその話が再び話題になり，B の専攻についての情報（誤解である可能性も否めない）が既に丸められて A の知識文脈に貯蔵された可能性がある。つまり，情報そのものの精確度が当初より下がったかもしれないということである。こうした状況では，B にとって，A の知識文脈に丸められた精確度の低い情報

[34]知識文脈は，形式文脈、状況文脈とともに，加藤（2009）で提案された＜動的文脈論＞を構成する主要概念である。知識文脈とは，会話が開始される以前から，会話参加者が持っている知識のうち，言語知識を除外した世界知識（百科全書的知識とも言う）に当たるものを指す（加藤 2009：215）。また，会話が行われる過程に出された形式文脈が会話参加者に処理されたあと，知識文脈に蓄積されることがある。

について色々説明を付け加える必要があり，それにより，交渉の連鎖も長くなるということになる。

次に，説明責任については，相手の発話に対して強く不同意を示した場合，それに続いて不同意の態度を支える根拠や原因などについて説明する必要があり，不同意された側もそれを期待することが考えられる。不同意を示された側が相手の説明を促し，不同意を表明した側も協力して説明を加える必要があるため，交渉の連鎖も長くなりうるということである。

さらに，知識文脈に対する作業の種類が異なるため，交渉の連鎖も長くなりうることに関しては，例えば，例 52 では，＜B が東外大の学生だ＞という命題と＜B が国際基督教大学の学生だ＞という命題とは明らかに矛盾しているため，不同意を表明された A がどちらかを選択すれば修復が成功になるが，それに対して，例 54 では，＜B が学部時代では日本語科であり，且つ，日本語の鼻濁音について詳しく知っている＞という形式文脈から，＜B が日本語の研究をしている＞という命題は既に A の知識文脈に蓄積された可能性が高く，不同意を表明する側（B）にとってそうした知識の修正を通して不一致を修復する必要がある。つまり，例 52 における間違った命題と正確な命題のどちらかを棄却することで修復される場合と比べて，既に知識文脈に保存された命題を修正するほうが手間がかかり，交渉の連鎖が長くなる可能性もあるということである。

### 5.3.2. 不同意側が情報管理していない場合における不一致

これまでの例は，ある事実に対して不同意側の関与度が深いかどうかによって区別できるものである。それに対して，本節で取り上げる例文は，真偽判断できる事実ではなく，主観的な評価に対する認識上の不一致による不同意である。具体的な会話例として，会話参加者の A がある物事に対して主観的評価を示したあと，聞き手の B がそれに対して不同意を示すケースを取り上げる。つまり，本節では，A の主観的評価に対して，不同意を示した B が情報管理していないという前提に立っている。

また，事実に対する認識の不一致，特に会話参加者の片方にとって関与度の深い事実に対して修復の必要性が存在するのに対して，評価や見方の不一致に対しては，不同意表現の程度もそれに対する修復の必要性もかなり低くなるという現象が観察された。次の 2 例を参照されたい。

例 55＜BTS 初対面雑談 6＞　A は 18 歳までフランスで暮らしており，帰国子女として大学入試を受験した。そして B は 14 歳までインドネシアで暮らしていたこともあるものの，条件を満たせず帰国子女として試験を受けられなかった。そのことに対して A が「惜しい」

と評価した。

1A　　惜しい。もうちょっとずらして【【。

2B　→ 】】インドネシアですからね：なんか、特に英語、中国語、フランス語、どれも、

3　　特にそんな、ねえ、関係ないんで：まあ。

4A　　でもまあ、統一試験も受けられるっちゃ受けられる：あ：惜しいっすねえ。

5B　　ん：：惜しいのか[なあ]。

6A　　[ちょっと]ずれてた。

7B　　でも、それでなんかやってもね（うん：）、たぶん、特にね、どれもピカ一なわ

8　　けじゃないんで、###。

9A　=>　　でもどっちがいいんでしょうね。

10B　　インドネシア語の日常会話のテストがあったら大丈夫かもしれない<2 人笑い>。

内容からいうと，1A を復元すれば，＜もうちょっと時間をずらせば帰国子女として試験を受けられるのに，受けられなかったのが惜しい＞という意味になる。そうした評価に対する B の不同意の態度が２B において既に表明された。帰国子女の大学入試の外国語科目があり，A はフランスで暮らしていたのでそれで受験できたのに対して，B はインドネシアに暮らしていたため，2B で＜受験できる外国語とは特に関係ないので，受けられなかったのがあまり惜しくない＞(2B～3B)という不同意の態度を示した。ただ，B が＜惜しくないよ＞というふうに直接相手の発話を否定するのではなく，＜惜しくない＞と感じた理由を語ることに焦点をずらし，その不同意の態度を弱めたことが分かる。しかし，4A で A がまた他の角度から，いわゆる，＜帰国子女として統一試験を受けられるのに，受けなかったのが惜しい＞という意味合いのある発話をした。4A に対して，B が 5B（「惜しいのかなあ」）で再び「より弱い不同意」をした。且つ，＜帰国子女として試験に参加し，受験できる外国語からどれかを選んでも，特に優れているものがないので，あまり惜しくない＞(7B)という不同意の根拠を示した。

その評価の不一致に対する修復のプロセスを見てみる。まず，不一致の対象とは，＜B が帰国子女として大学入学試験を受けられなかったのは惜しいか＞という主観的評価である。両者間の評価上の不一致が 2B～3B にかけて既に顕在化になった。そもそも，＜B が帰国子女として大学入学試験を受けたかどうか＞という事実なら，B にその情報の真偽を判断する権利がある。つまり，その場合，実際に受けたことのある B の関与度がより深いと言えよう。しかし，＜B が帰国子女として大学入学試験を受けられなかったのは惜しいか＞という評価に関しては，実際受けた B としても，それを判断する権利があるとは言いがたい。そのため，A の発話(4A と 6A)では，2B で不同意を示されたことに対して，A がすぐに自分の

評価を取り下げていないことに繋がっていると言える。交渉を経て，辿り着いたのは「でもどっちがいいんでしょうね」(9A)という発話であり，つまり，A が＜受けるのと受けないのとどっちがいいか分からなくなった＞という趣旨をもって，自分の評価(「惜しい」)を維持しておらず，相手の評価（「惜しくない」）をも支持しないというような意見保留を選択した。結果的に両者間の不一致の程度が小さくなったものの，不一致が完全に解消されたとは言いがたい。同様の例 56 も参照されたい。

例 56＜BTS 友人同士討論 3＞A は女性であり，B は男性である。二人が「男の人生と女の人生どっちが得か」という話題をめぐって議論している。

1A　/少し間/と、く：：でも、やっぱ女の子はちやほやされるのは、得なのかな。
2B　あ、そうだね，ん。
3A　でも、それ言ったら逆に女の人から(ん：)、ちやほやされる：
4B　→ そう?あんまないでしょ?
5A　な[い]?
6B　[そ]ういうのって。うん。
7A　あ、ほんとに?
8B　なんか、キャーキャー言われることはさ：(ん：)、人によってはあるけどさ：ね、
9　ちやほや、ちやほや：
10A　ない[のかなあ]。
11B　[それはない：]かな。
12A　ん：：
13B　んん。
14A　はあ。[ため息]

この例において,A は 3A で＜男の人が女の人からちやほやされる＞という見方を示した。それに対して B が＜そうしたことあまりない＞という不同意発話をした。ただ,B は「そう?」や「〜でしょ?」というような疑問表現を使い，直接的に相手の発話を否定することをしなかったため，不同意の程度がやや弱いと言えよう。

4B で両者の不一致が顕在化になり,その不一致を修復するために,A が二度とも(5A の「ない?」と 7A の「本当に?」)修復を要請した。しかし，B は 8B で部分的に同意を示したものの，結局 11B（「ちやほやはないかな」）で不一致が維持された。そして，10A と 11B における「かな（あ)」からも窺えるように，両者とも自分の意見を強めるのではなく，不確定な発話をしている。結果からいうと，両者間の不一致が修復されず，そのまま維持されてし

まっているという結果になった。

例 52〜54 において，修復の労力が異なるにもかかわらず，会話参加者が当面の情報に対しての認識が不一致から一致になっているものの，例 55〜56 においては，認識上の不一致が一致になっていない。こうした差異が生じたのは，認識上の不一致の対象が主観的な見方である場合，修復の必要性が元々高くないことと関連しているからであろう。

### 5.3.3. 関与の度合いに大差がない場合に生じた不同意

ある事実に対して認識上の不一致が生じた場合，不同意する側の関与度が深ければ，より強い不同意を発する現象が観察された。これに対し相手の関与度が深い場合，より弱い不同意をするようになる傾向が見られた。認識の不一致に対して，関与度が深いということは，当面の事実との関連性が強く，それについてより詳しいということでもあり，相手よりその事実の正否について判断する権利が大きい。言い換えれば，不同意する側が十分な根拠を持っており，その正確性について明確に判断できる故に，明確に不同意を表明することができるということであろう。

一方，主観的認識に関する認識上の不一致となると，例 55 と例 56（「惜しい」と「ちやほや」）で示したように，不同意側が相手の主観的認識を管理できない場合，より弱い不同意が現れる。つまり，主観的評価とはもともとその真偽で判断できないものなので，容易に相手の見方を否定することができない。それは，会話において，主観的評価に一致しなければならないという制限がなく，不一致であっても会話が先に進められるのに対して，話題に出てきた事実に対する認識が正確でないと誤解や不理解などのような理解上の問題が生じてしまう恐れがあり，先に進められなくなる可能性があるからである。よって，後者の場合，修復の緊迫性が高くなるのに対して，前者の場合低くなる。こうした緊急性において違いがあるため，緊急度の低い不同意がよく弱められるということである。

これに対し，これまでの例と違い，会話参加者が当面の話題との関与度においてあまり差が見られないケースを取り上げて，事実に対する認識の不一致の例 57 と主観的認識による不同意の例 58 を参照されたい。

例 57＜BTS 初対面雑談 6＞インフルエンザの感染対象には年代層があるかどうかについて話している。

1A　あ、でも、どうなんだろう、年代層とか、あるのかな?なんか。

2B　なんか、ありますよ。

3A　やっぱ、年寄りが危ない[とか]。

4B　[年寄り：：]。＜小声で＞

5A　　年寄りと子ども[かな?]
6B　→ [いや]、赤ちゃんは意外と平気らしいですよ。
7A　　そうなのか。[小声で]
8B　　体温が高いほうがいいみたいですよ。
9A　　あ：：
10B　　よく分かんないけど：
11A　　ん、うん?
12B　　抗体とかがきくとか、そうしたんでしょうね。
13A　　うん?免疫?
14B　　うん。ウイルスもいづらいんじゃないですか。
15A　　う：ん、大変だ、ほんとに。

この例では，認識上の不一致の対象とは＜年寄りと子供がインフルエンザにかかりやすいか＞ということである。これにはどちらも関与度が深いとはいえないことであろう。しかし，B が 6B で「いや～ですよ」という明確な否定表現で強い不同意を示した。つまり，このことに対する認識が分かれているという不一致が 6B で顕在化したことになる。この不一致に対する修復が 15A まで続き，不同意した側の説明を受け入れるのをもって終了したのである。

例 57 では，まず，両者の関与度があまり変わらないことに対して B が強く不同意を表明した。その不同意の表明と同時に，B がなぜ不同意を示したのかについてその根拠や説明をする義務も生じるのである。我々が自分の認識を表明した時に，誰かに強く不同意を示されるとしたら，相手に自分が不同意を示す根拠や知識を持っていると考えられるのと同じく，A もそうした期待を持っているのであろう。これは 10B と 11A から窺える。B が自分の不同意を示した根拠を示すべきところで，10B の「よくわかんないけど」という発話をした。これに対して，A が「うん?」という修復開始形式を利用して更なる説明を促した。

次に，B の修復プロセスについては，8B-10B-12B-14B にかけて長く続いた。修復の結果，15A の「う：ん、大変だ、ほんとに」という反応によって，二人の当面のことに対する認識が不一致から一致になった（＜年寄りがインフルエンザにかかりやすい＞）。次の例 58 は，両者間における見方が分かれている場合に生じた不同意である。この例では，二人の不一致が修復されたとは言いがたい。

例 58＜BTS 初対面雑談 6＞自分でインフルエンザを判断できるかどうかについて話している。
1A　　インフルエンザとかになると、もうほんと、飲まないとやってらんないんで:ね::

2B　　インフルエンザ、ほっとくとやばいですよね。
3A　　あれは、肺炎起こしちゃうんでね：
4B　　あ：：
5A　　ちょっとね：とりあえずね、ねえ、抗生物質ぐらい飲んどかないと。
6B　　やっぱ、医者行けって話ですよね。
7A　　そうそうそうそう。
8B　　自分じゃ判断、[できないです]よね：：
9A　→ [いやいやいや]、自分でも,,
10B　　[風邪か【【
11A　→　】】[やばいと]思いますよ。
12B　　あ：：そっか.
13A　　ふつうの風邪だったら、だるいな：とか、そのぐらいで済むんですけどね。
14B　　う：ん。
15A　　暑いっ、暑いっ、だめっ、おかしいっ、ほんとに死ぬんじゃないか自分は、ぐら
16　　いの、なんか＜笑いながら言っている＞
17B　　あ：そこまでなるんだ。
18A　　ちゃんと、自分で分かりますよ（うん）、本能的に。
19B　　これは行かないと：
20A　　這ってでも行かないとみたいな。
21B　　あ：そっかそっかそっか

＜自分ではインフルエンザを判断できるかどうか＞というのは両者との関与度があまり変わらない話題であろう。これに対して，B が「自分では判断できない」(8B)と示したところ，A が発話権を奪うように＜いやいやいや，自分でもやばいと思いますよ＞と強く不同意を示した。11A では二人の不一致が顕在化した。

A が強く不同意を表明した後，そのことについて説明を付け加えた。13A～18A にかけての説明では，A が笑いながらユーモアのある表現で両者間の対立を和らげようとしたことが分かる。ただし，＜本能的にちゃんと自分でも分かる＞(18A)と，自分の見方を維持した。つまり，両者間の不一致に対して，A が自分の意見を否定したり取り下げたりせず，それを繰返すことを選択し，強調したということになる。結果，A は「自分では判断できない」という見方を強調していない。しかし，＜そこまでなったら病院にいかないといけない＞(17B～19B)という発話からは，A が相手の見方を受け入れたとは判断しがたい。

結果からいうと，「自分でインフルエンザを判断できるかどうか」ということに対して両

者間の見方が一致にせずに会話が修了している。見方における不一致に対して，必ずしも相手の意見を受け入れることで修復を終えるのではなく，このようにあやふやにされることもよく見られる。

## 5.4　修復・調整の枠組みから見る不同意

本研究では，不同意発話という発話現象を受容上の問題とし，不同意を導いた原因を抑制するために話し手が施した調整行為と，不同意発話の表明とともに顕在化した不同調をめぐる交渉プロセスで行われた修復行為について分析してきた。

まず，調整行為に関しては，発話者が自分の主張態度を弱めることによって相手の不同調を抑制するという現象を取り上げて分析した。具体的には，①発話内容の示し方自体を調整する手段，②メタ的コメントという注釈挿入表現で調整する手段，という 2 種類を取り上げた。①については，話し手側（不同意を表明された側）が＜自分の管理下にある情報を言及する際に使用された半疑問現象＞と，聞き手側（不同意を表明した側）が＜異なる意見を表明する前に相手の見方に同意を示しておく現象＞について考察した。②については，従来の注釈挿入の研究を踏まえて，注釈挿入の機能が理解達成に関わっているだけでなく，受容達成にも関わっていることを主張した。つまり，メタ的コメントを挿入することで自分の見方を低く価値づけることを通して主張態度を弱める手段には，不同調を抑制する調整機能が備わっていることを明らかにした。

次に，会話参加者間において不同意の対象との関与度上何らかの差がある場合に限定して，5.3.1 では事実に対する認識の不一致に対する不同意と修復のプロセス，5.3.2 では物事に対する主観的な評価や見方上の不一致に対する不同意と修復のプロセスについて見てきた。具体的に言えば，5.3.1 では，不一致の対象との関与度が深い側であれば，より強く不同意を表明するのに対し，逆のケースでは不同意がかなり弱められる現象が観察された。5.3.2 では，いずれも「より弱い不同意」しか観察されなかった。5.3.3 では，両者と当面の話題との関与度において大差が見られないケースを取り上げたが，2 例ともより強い不同意が観察された。そして，修復の結果に関しては，関与度の差異を問わず，事実に対する認識の不一致を修復する場合，結果として両者が不一致から一致に変わるようになるが，評価や見方に対する不一致を修復する場合，必ずしも一方が自分の意見を取り下げたり否定したりするのではなく，意見を保留したり曖昧にしたりするといった現象が観察された。これは，不一致の性質（事実に対するものか評価／見方に対するものか）によってそれに対する修復行為自体の必要性の程度が異なるからではないかと考えている。

最後に，本章で取り上げた不同意現象はすべて同意が期待される状況下でなされたものであるため，不同意表明が必然的に両者のフェイス状態に関わっていると言っても過言で

はない。上記の傾向について，会話参加者が当面の話題との関与度の差異、不一致の性質による修復の必要性からだけでなく，フェイスに着目して考察する必要がある。そこで，次章から，会話参加者間のフェイス状態に着目し，不同意のほか，フェイス侵害行為による受容上の問題に対処する修復について考察する。

# 第6章　受容上のトラブルとしてのフェイスバランス

第 5 章では，同意が期待される状況に起きる不同意現象について，不同意を抑制する調整行為と不同意をめぐる修復行為について考察してきた。修復に関しては主に，不同意の対象の性質と不同意の程度に着目して，それぞれどのような修復策が講じられ，どんな修復結果が達せされたかについて論じた。語用論的視点からすると，不同意とは「同意要求の内容に対する否定的評価」（関崎 2013：112，下線は筆者による）として捉えることができる。そうした捉え方では，不同意が会話参加者間のフェイス状態に関わっていることが想定できる。つまり，発話の示し方や主張態度の強弱という要素が相手の受容態度に影響を与えるほか，会話参加者間のフェイス状態に対する配慮が足りないことも同じく相手の受容態度を影響する可能性がある。というのは，両者間のフェイス状態に与える影響に着目し，ポライトネスの視点から不同意を考察する必要があるということである。

そこで，本章では不同意も含めて，B&L（1987）のポライトネスの枠組みを踏まえながら，フェイスワークに関する新たな枠組みを提示する。その上で，＜対人関係的修復＞における重要な部分，いわゆるフェイス状態上のアンバランスに対処するための修復方策について分析を行いたい。次節では，フェイスワークと修復との関係について，関連のある先行研究を概観する。

## 6.1　フェイスワークと修復

我々が会話をする際，相手のフェイスを傷つけないように前もって自分の発話を調整することもあり，また，もし相手のフェイスを傷つけたとすれば，何らかの行動を取って修復することが考えられるだろう。こうした行為は受容の範囲に含めるべきだと主張したい。本研究では，前者を対象とするものを＜対人関係的調整＞の一部とし，後者を＜対人関係的修復＞の一部とすることを断っておく。

### 6.1.1.　フェイスに関わるトラブルと修復との関係について

従来の修復研究では，受容上のトラブルが扱わされないままにしてきたという状況[35]のなか，日本語における修復に注目した串田(1995)では，remedy(フェイスへの脅威を対象としている)とされてきたものを，repair の範疇に入れるべきだと主張した。だが，それをめぐ

[35] 修復研究の先駆である Schegloff et al.(1977)では，発話産出・聞き取り・理解に関わるトラブルに対処するものとしているためか，その影響から抜け出せない面も考えられうる。

る分析は管見の限りまだないようである。そして，こうした主張は Goffman から由来したと言えるとのではないかと思われる。

社会学及びコミュニケーション論の観点からフェイスについて述べた先行研究が数多くあり，その中には，フェイスと修復との関係を示唆する研究もある。Goffman(1967)は，「人は自分及び他者のフェイスを常に保持しようと，フェイスが脅かされることを防いだり，失われたフェイスの回復に努めたりする」と述べている（横溝 2012：17）。Goffman(1967)は，フェイスワークを自他のフェイスを保つために取る行為と定義した上で，さらに 2 種類に分けた。一つは，「これから起こりうる自己像が損なわれる恐れのある出来事をコントロールしようとするストラテジー」という「回避プロセス（avoidance process）[36]」であり，いま一つは，「既にダメージを受けたり失ってしまったりフェイスを回復しようとするストラテジー」という「修正プロセス（corrective process）」である（浅野 2012）。

このような考えを踏まえて，受容過程におけるフェイスに関わるトラブルを取り上げ，それに対処する修復行為について分析を行う。一方，上記の先行研究は殆ど理論上で展開されたものであり，実際の会話を分析していない。それに対して，本研究では，実際の会話を対象として，修復プロセスの特徴を解明していきたい。以下では，同じく実際の会話を分析した関連の先行研究について述べる。

### 6.1.2. 会話におけるフェイスワークに関する先行研究

受容のトラブルという用語が使用された先行研究はないものの，フェイスワークに関する分析は数多くあり，その中から修復と何らかの関係を持っているものだけ紹介する。

まず，三牧（2008）では，よりマクロなレベルからフェイス侵害行為（FTA）を捉え，会話参加者が「FTAバランス探究行動」を相互的に行う可能性があると指摘した上で，B&L(1987)に代表される従来の「FTAの量を見積もってから取ったFTA緩和策」としてではなく，①過度のFTAを犯したと認識すると相手からのFTAを誘導したり自らに対してFTAを遂行したりする，②相手から多めにFTAを受けたと認識した場合に自発的に相手に対してFTAを行うといったようなダイナミックな面があると指摘した。

次に，日韓の対照研究という視点から「FTA補償行為」を中心に考察した林（2010）によれば，友人同士の会話においてどちらか一方によって「否定的評価」[37]をされた後，評価を受けた側が「①否定的側面の肯定化②相手の立場から弁論する③自分もそうだと述べる④否

[36]横溝(2012)によれば，フェイスに関わる問題に対処する時間的位置によって行われるフェイス・テンポラル・ストラテジーという研究においては，「予防的(preventive)フェイスワークストラテジー」と「回復的フェイスワークストラテジー」と呼ばれているということである。

[37] 林(2010)では，主に親しい間柄同士の間で行われるけなし・冗談・悪口などのような現象を指す．そして，山路(2005)では「会話の相手やその行動，発話，認識及び相手が好意を抱いている人物・物事に対して，否定的な評価を述べる行動」というふうに定義を下したと指摘した。

定的側面の解消・改善⑤他の側面を褒める⑥自信の判断を疑う」という 6 種類のFTA補償行為のどれかを施してフェイス侵害を解消するという現象を記述した。

これらのような「過度なFTA」[38]や「相手による否定的評価」というのは受容のトラブルを引き起こした原因として捉えられる。ちなみに，従来のフェイスに関する多くの先行研究においても，「何らかのフェイス侵害やコンフリクトや困惑が生じたあと」ということを前提として，そうした状況が生じた場合にどういったフェイスワークが施されるかという「激化（Aggravation）−緩和（Mitigation）」というパターンに着目しているようである。本研究では，「会話参加者のどちらかのフェイスが侵害されたあとのフェイスワークだけでなく，両者間のフェイスバランスが崩れるまでの過程においてどのようなフェイスワークが行われたかにも着目する」というマクロ的な視点から考察をしたい。

## 6.2　本研究におけるフェイスの捉え方

受容のトラブルとは言語表現が正しく示され，且つ聞き手に正確に理解された上で生じた問題であるため，その存在が言い間違いというトラブルより抽象的であり，潜在性が強いと言わざるを得ない。そして，第三章で述べた通り，産出問題や理解問題と比べて，受容のトラブルに対処する修復の組織は顕在性が低いことが分かった。フェイスに関わっているトラブルもそうした性質が備わっており，つまり，トラブル自体も修復組織も顕在性が低いということになる。言い換えれば，何がトラブルなのか・どこから修復に入るか自体判断しにくいということである。そこで，この課題に対する考察方法を確立するにあたって，フェイスに関わるトラブルを特定する基準を決めておかなければならない。

以下では，フェイス状態に関わる修復について考察する基盤として，フェイスバランスという枠組みを提出する。そのうえで，何を修復対象とするかについて具体的な判断基準について述べる。

### 6.2.1.　フェイスバランスという考え方

本研究では，B&L(1987)の中心概念であるフェイスを利用する。

Goffman(1967)が指摘したように，人は自分及び他者のフェイスを常に保持しようとする欲求がある。ただし，実際の会話では，自分のフェイスを保持しようとする行為は時として相手のフェイスを侵害する恐れがあり，一方で相手のフェイスを立てることは自分のフ

[38] この言い方は三牧(2008)で用いられている。「会話参加者一方が質量ともに過度に FTA を遂行した会話例」に限定されたものの，質量ともに過度なフェイス侵害行為とは何かについては明確に定義していないようである。全体的にみると，①相手の過去の受験失敗体験をめぐる会話②相手の国の食事を批判する会話③痛烈なからかいが生じた会話という三種類の話題を取り上げたため，「質的に過度」とは話題の性質と関わっているように見える一方で，「量的に過度」とはフェイス侵害行為が何度も繰返されるということを指していると考えられる。

ェイスを傷つけることもある。自他のフェイスに対する欲求は時に矛盾しているため，同時に満たすことは容易ではない。実際の会話では，ある行為が一方にとってフェイス侵害になるものの，同時にその反作用力を考えなければならないため，一つの言語行為がフェイスに対してどのような効果を持つかは判断しにくいことがある。話し手のフェイス欲求か聞き手のフェイス欲求か，どちらか一方に着目するだけでは，ある言語行為のフェイスに対する効果を説明しにくいのではないかと考えている。

この問題を解決するために，本研究では次のような立場を取る。①会話参加者間の「フェイスバランス」を客観的に存在しているものとして捉える，②会話参加者がこれまでの会話を踏まえながら，両者間のフェイスバランスの状況について判断を行った上で調整や修復を行うという立場を取る。ただ，両者間の判断が異なる場合がありうる。

つまり，本研究では，会話参加者どちらか片方のフェイスに着目するのではなく，一対一の会話おける両者間のフェイス状態の「バランスが取れているか」に注目し，両者間のフェイスバランスの状態が均衡を失ったと一方によって判断されれば，その状況を改善するためのフェイスバランス修復方策を取る傾向があり，一方，フェイスバランスが均衡を失いかけたりまたはそうした危険にさらされたりしていると判断されれば，その状況を回避するためのフェイスバランス調整方策を取る傾向があるという点に着目する。というのは，フェイスバランスという状態そのものを会話参加者の間に抽象的に存在している参照物として位置づけながら，その状態に対する会話参加者の判断でそのバランスを作り出す／維持するように行為を調整し，必要に応じて均衡を失った／失いかけた状態を修復する。そうすると，人は自分及び他者のフェイスを常に保持しようとすると捉えるのではなく，人は常に相手との間のフェイスバランスを保持しようとすると捉えられる。

### 6.2.2. フェイスバランスに影響のある発話

まず，本研究では，B&L（1987）でフェイス侵害度を見積もる際に考慮に入れられた力関係と親疎関係という社会言語学的要素の影響を最低限に抑えるために，すべての会話例を，社会的立場がほぼ同等である大学生同士によって行われた一対一の会話から取り出した。そして，二人[39]が会話を始める時点では，フェイスがバランスを取っている状態にあるとして，会話の流れとともにそれがバランスを失う危険性をはらんでいるという前提に立っている。そもそも，順調な伝達過程とは，情報伝達が順調になされるだけでなく，対人関係においてもフェイス状態の均衡が取れていることを意味しているため，会話参加者がフェイス状態の均衡を維持するもしくは戻すためには，フェイス状態に影響を与える行為を取

[39] 社会言語学的要素の影響を最小に抑えるように，本稿で取り上げたデータはすべて若者同士の会話に限定している。

らなければならない。次に，フェイスバランスに影響を与える行為とは何を指しているかについて述べる。

両者間のフェイスバランスにとって，B&L(1987)の枠組みにおけるフェイス侵害行為が最も脅威となる要因であると言えよう。しかし，本研究では，次の 2 種類の要素を取り入れて総合的に判断したい。第一に，フェイスバランスの不均衡状態が必ずしも FTA によるとは限らず[40],「フェイス支持行動」(Face Supporting Act，略称 FSA)[41]も考えられる。第二に，この 2 種類の行為には指向性があることを看過してはならない。というのは，指向性のある FTA が常にマイナス的な効果をもたらすわけではなく，フェイスバランスを修復する時に重要なストラテジーの一種になることがあるからである。[42]また，フェイス支持行為もその指向性によってフェイスバランスを修復したり崩したりすることができる。つまり，自己指向的(self-oriented)であるか他者指向的(other-oriented)であるかという点から 4 種類に分けられる。表 6 で示す。

表 6： フェイスバランスに影響のある行為

| 種類 | 自己指向性(＋) | 自己指向性(−) |
|---|---|---|
| FTA | ①自己指向的 FTA | ②他者指向的 FTA |
| FSA | ③自己指向的 FSA | ④他者指向的 FSA |

まず，FSA について見る。FSA とは，フェイスを持ち上げる効果のある行為，いわゆる，自分／相手に関わっていることを褒める／賞賛するという発話行為を指している[43]。それに対して，FTA については数多くの先行研究があり，特に B&L(1987)であらゆる発話が FTA になりうるという考えが示されて以来，ある発話がフェイス侵害行為になるかどうかをめぐって議論されてきている。ここでは，FTA とは，フェイスを押し下げる効果のある行為を指す。FTA というのはある種のフェイス欲求を侵害するものであるため，ネガティブフェイスに対する侵害なのかそれともポジティブフェイスに対する侵害なのか，その発話が

40 この点では，従来の研究における FTA だけに注目したやり方と異なっている。
41 岡本(2006)で、この名称が用いられている。そこでは、「聞き手のフェイスへの影響」という観点から、「①聞き手のフェイスに関わらない行動②FTA③聞き手のフェイスへのダメージの回復を目指す行動」という 3 種類に分けた上で、更に③を「フェイス補償行動・フェイス修復行動・フェイス支持行動」という下位類型を提出した。フェイスへのダメージは FTA だけによる点や、3 つの下位類型の関係はすべて FTA を解消するための装置であるという点などにおいてまだ検討する余地があるのではないかと考える。
42 これについては例 7 を参照されたい。
43 ただ，相手の既に損害があったフェイスを持ち上げるかそれとも普通の状態から持ち上げるかというふうに区別が必要である。というのは，前者は損害のあるフェイス状態に対して修復機能があるのに対して，後者はかえってフェイスバランスの均衡状態を崩す行為になりかねないのである。これについては後に実際の会話例で説明する。

どのようなフェイス欲求を侵害したかを判断しておかなければならない。フェイス欲求の種類に関しては，次に示すように，B&L(1987)における二分法ではなく，更に詳しく分類した研究もある。ここでは，Ting-Toomey(2004,2005)を取り上げる[44](横溝 2012)。

① autonomy face: 他者に管理されたくない，何かを負担したくない，自由でありたいということを他者に認識してもらいたいというフェイス。

② inclusion face: 親しさ，協力性を感じさせる価値ある仲間であると他者に認めてもらいたいというフェイス。

③ approval face: 外見，社会的魅力，地位，物，コネといった外的な要素を認めてもらいたいというフェイス。

④ reliability face: 自分の言動は信頼できるということを認めてもらいたいというフェイス。

⑤ competence face: 知性，技術，専門的な知識，能力といった内的な要素を認めてもらいたいというフェイス。

⑥ moral face: 自らの誠実さ，威厳，名誉，礼節，道徳的高潔など他者に尊重してもらいたいというフェイス。

B&L(1987)における二分法に照らしてみると，①はネガティブフェイスにほぼ対応しており，残りの 5 種類はポジティブフェイスを細分化した結果ではないかと考えられる。実際，この 6 種類を見ても，表 6 に示した 4 種類がそれぞれ具体的にどういう発話行為を指しているか，この 4 種類の行為をどういう基準で会話資料から抽出するか不明であると言わざるを得ない。

従って，本研究では論点を絞るために，便宜上，表 6 で示した 4 種類の行為に対して，その概念範囲を縮小して分析に利用したい。つまり，ある言語的行動がこの 4 種類のどちらに近いか判断する際に，主に「発話者がある発話をもって誰／何に対して否定的評価／肯定的評価を下したのか」ということを基準にする。以下では，先行研究を踏まえて，否定的評価と肯定的評価について述べる。

### 6.2.3. 否定的評価と肯定的評価について

ある言語的行動が表 6 の 4 種類のどれに近いか判断する際に，「発話者がある発話をもって誰／何に対して否定的な評価／肯定的な評価を下したのか」ということを基準にすると述べた。では，否定的評価と肯定的評価をどう判断するべきか。

本研究では，関崎（2013）で提案された基準を利用して考えたい。関崎（2013）では，「言

[44] この 6 種類が排他的な関係ではなく，「重複して現れることがあると論じている」と横溝（2012 : 18）で述べている。

語行動としての否定的評価」の定義について，次のように述べている。

会話の相手と，相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない／逸脱したものとして低く価値づけそれを表現することである。なお，「相手に属する人」とは，相手の親族や同一の組織に属する人物，相手が好意を抱いている人物を含むウチの人物を，「相手に属するモノ」「相手に属するコト」とは相手の所有物や思考，行動等を指す。（p. 113）

関崎（2013：113）では，発話に使われる評価を表す言語形式によってではなく，その機能に着目して判断しているとも示している。本研究でも，ある発話が一定の基準に合わせて，否定的評価の機能を果たしていれば否定的評価であると認定される手法を取る。

そして，関崎（2013）で提案した定義を利用することにしたのは，同論文は本研究の会話データの性質と同じである「日本人大学生同士の雑談」という会話資料を利用していることとも関連がある。というのは，上記の定義が否定的評価の性質に対する認識であるものの，実際の雑談資料から否定的評価の例を抽出する際に，この定義だけでは不十分である。そこで，関崎（2013）では例文の抽出基準として，以下のように述べた。

否定的評価の機能の有無の判断は，発話の内容や口調等から，話者が対象を低く価値づけていると判断できること，かつ，当該の発話の聞き手が反論や修正，弁解，謝罪等を行っていることを基準に行った。つまり，会話参加者の行動から発話の機能を認定する方法である（p. 114）

上記で示したような関崎（2013）で提案された否定的評価の定義や抽出基準に関して，本研究では次のように拡大しつつ，利用したいと考える。

第一に，言語行動としての否定的評価だけでなく，肯定的評価も視野に入れながら，指向性という要素を取り入れた上で，以下の 4 種類を対象とし，それぞれに対する定義を示しておく。

(1) 自己指向的否定的評価とは，自分もしくは自分に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わないものとして低く価値づける行為を指す。
(2) 他者指向的否定的評価とは，会話の相手と，相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない，逸脱したものとして低く価値づける行為を指す。
(3) 自己指向的肯定的評価とは，自分もしくは自分に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わないものとして高く価値づける行為を指す。
(4) 他者指向的肯定的評価とは，会話の相手と，相手に属する人／モノ／コトに対して

特定の基準に合わない，逸脱したものとして高く価値づける行為を指す。

第二に，関崎（2013:113）では，研究対象について，「語用論的諸条件がなく，否定的評価を表現すること自体が目的となっていると考えられる言語行動」（p.113）としている。つまり，語用論的条件を考慮に入れると，言語行動としての否定的評価が語用論的条件によってさまざまな機能を果たすこととなる。これに対して，本研究では，発話者が指向性のある否定的評価（肯定的評価も含むが）を利用して，フェイスバランスにいかなる影響を及ぼすかについて語用論的条件と結びつけて考察するところに重点を置いているため，上記の４種類の定義は，特定の発話が否定的評価であるか肯定的評価であるかを判断する際に役立つが，特定の評価発話がフェイス状態に対する影響を判断することに対しては不十分であると言わざるを得ない。これについては次の方法で対応する。

第三に，関崎（2013:114）で示した否定的評価の抽出基準と関連しているが，本研究においても，話し手が発した否定的評価が両者間のフェイス状態にどういう影響を与えるかについて判断する時に，その内容や示し方だけでなく，聞き手の反応も重要な手がかりとする。例えば，話し手が発した聞き手指向の否定的評価に対して，聞き手が自分のフェイスを持ち上げるために自分に指向する肯定的評価をするか，それとも相手のフェイスを押し下げるように相手に指向する否定的評価するか（他の選択肢も考えられるが）によって，フェイスバランスの状態が大きく変わる。フェイス状態の均衡化と非均衡について，次節で詳しく検討する。

### 6.2.4. フェイス状態の均衡化―ミクロの視点とマクロの視点

論理的には，フェイス状態におけるアンバランスを修復することとは，フェイス状態が非均衡状態に落ちていることが前提として成立しなければならない。同時に，非均衡状態に落ちるフェイス状態が，もともとは均衡していることが必要である。

会話の開始時点においては，（力関係と親疎関係の影響を最低限に抑えられた）会話参加者両者間のフェイス状態が均衡していると仮定していいだろうが，途中のとある会話断片の開始時点においても依然として均衡しているとは限らない。それは，それまでのやりとりでは，例えば，A のフェイス欲求が抑えられた一方で，B のフェイス欲求が満たされたばかりであった場合，これからのやりとりにおいて，A が積極的に B のフェイスを侵害する可能性が十分考えられる。それは，既にバランスを失ったフェイス状態を元に戻すための行為として捉えられるが，その断片だけを見ては，A が一方的にフェイス侵害していると判断してしまう可能性がある。つまり，分析の単位（小さな発話連鎖か大きな連鎖か）によって，同じ行為に対して判断が異なる可能性があるということである。これに関しては，本研究では，最初は小さな連鎖に限定して考察するが，枠組みの有効性と一般性を論証する

ために，より大きな連鎖まで拡大して考察する必要もあるため，ミクロ的考察とマクロ的考察に分けて展開していくプロセスを取りたい。

#### 6.2.4.1. ミクロ的に捉えるためには

本節では，次の三点に分けて，ミクロ的に考察する方法について説明する。

第一に，断片の開始時点に会話参加者間のフェイス状態が均衡しているとすれば，どのような行為がその均衡化に影響を与えるかについて，指向性のある否定的評価と肯定的評価から判断するという手段を取る。

ここでは，一対一の会話における会話参加者をAとBであるとし，AがBに対して否定的評価をする行為には，Bのフェイスを押し下げる働きがあると見て，A→B[↓]と示す。同じく,AがBに対して肯定的評価をする行為がフェイス状態に与える影響を,A→B[↑]と示す。つまり，発話者 A が指向性のある否定的評価と肯定的評価を利用して，フェイス状態に与える影響のパターンを 4 つの組み合わせが考えられる。表 7 で示す。

表 7：フェイス状態に与える影響の表示方法

| 行為種類 | フェイス状態に与える影響 | 表示方法 |
|---|---|---|
| ①Aの自己指向的肯定的評価 | Aが自分のフェイスを持ち上げる | A→A[↑] |
| ②Aの他者指向的肯定的評価 | AがBのフェイスを持ち上げる | A→B[↑] |
| ③Aの自己指向的否定的評価 | Aが自分のフェイスを押し下げる | A→A[↓] |
| ④Aの他者指向的否定的評価 | AがBのフェイスを押し下げる | A→B[↓] |

第二に，発話内部で施された＜フェイス状態の非均衡＞を抑制するための調整行為について説明する。Aの発話がフェイス状態に与えうる影響は常に 1 種類しかないというわけではない。というのは，Aが自分に対しての肯定的評価（A→A[↑]）の直後に，すぐ自分に対して否定的評価をする（A→A[↓]），もしくは相手に対して肯定的評価をする（A→B[↑]）という可能性が考えられるからである。結果としては，両者間のフェイス状態が均衡になっていると見えるが，会話を対象とする以上，聞き手 B の行動から B が A の行為をどう捉えているか判断できることが多いため，総合的に考える必要がある。ただ，このように，話し手は発話権が変更になる前に，自分の発話内部でフェイス状態に対する影響をバランスよく維持しながら施した行為を，＜フェイス状態の非均衡＞を抑制する機能のある調整行為として捉える。そして，このような行為は＜情報伝達的な調整＞と違い，＜対人関係的調整＞の一種として捉えられることを主張したい。＜情報伝達的な調整＞では，発話者

は相手に理解上の問題を生じさせないように事前に発話の示し方を調整するが，そのほか，第 5 章で論じたように，受容上の問題を生じさせないように主張態度を調整することや，自分が両者間のフェイス状態に対する配慮を欠いたことで相手に受容されないように調整することもあるため，これらを＜対人関係的調整＞の一種として位置づけたい。次の例を参照されたい。

例 59＜BTS 初対面同性同士雑談 14＞A が「パソコンの操作が速い」と言った。

1A　→ 私も、今までこそそれなりに速いです。まあ速いってもあれなんですけど、でき
2　　ますけど、最初の頃はレポート、学校の課題のレポートとかも、手書きのほうが、
3　　もう、明らかに[速いんですよ、もう]。
4B　　[僕もそうなんだけど]、僕もそうなんだけど。
5A　　速いんですけど、パソコンでやっていかないと、全然上達しないんですよね。
6B　　だから、もうホントに嫌だねぇ。

1A では，自分のパソコン操作が「それなりに速い」と肯定的な評価をした。その直後で，「まあ速いってもあれなんですけど」というメタ的表現でその肯定的評価を取り消し，＜（パソコン操作が）それなりに速いのではなく，できます＞という意味になっている。これらの行為がフェイス状態に与える影響から見ると，A が A→A[↑]の直後に，A→A[↓]という機能のある発話を通して，発話内部におけるフェイスバランスを維持したと言えよう。4B（「僕もそうなんだけど、僕もそうなんだけど」）で B が相手の発話に対して共感を示したところから，A の発話が両者間のフェイス状態に悪影響を及ぼしていないと判断できるだろう。

このように，話し手 A は表 7 の 4 種類のうち，どれかの機能がある発話をした直後に，自らそれを解消する／解消しようとする行為を実施した。このような行為は＜フェイス状態の非均衡＞を抑制するための調整行為として捉える。

第三に，会話断片の開始時点で両者間のフェイス状態の均衡が取れているという前提に立ってみると，A が表 7 の①～④のいずれかを行ったこと自体，両者間のフェイス状態を不均衡にさせる行為であると考えられる。そうすると，A の発話に対する B の反応に，こうした不均衡になりかけた状況を修復する機能が備わっている可能性があるということになる。話し手 A の発話が両者間のフェイス状態に影響を及ぼすものである場合，B の反応発話もいくつかのパターンで行われることが予測できる。詳しくは以下の表 8 でまとめて示す。

表 8：フェイス状態に影響のある発話に対する反応発話の種類（16 種類）

| 1A の発話機能 | 表示方法 | 2B の発話機能 | 表示方法 |
|---|---|---|---|
| ⅰ.A が A のフェイスを持ち上げる効果のある肯定的評価 | A→A[↑] | ①B が A のフェイスを押し下げる | B→A[↓] |
| | | ②B が B のフェイスを持ち上げる | B→B[↑] |
| | | ③B が A のフェイスを持ち上げる | B→A[↑] |
| | | ④B が B のフェイスを押し下げる | B→B[↓] |
| ⅱ.A が B のフェイスを持ち上げる効果のある肯定的評価 | A→B[↑] | ⑤B が B のフェイスを押し下げる | B→B[↓] |
| | | ⑥B が A のフェイスを持ち上げる | B→A[↑] |
| | | ⑦B が B のフェイスを持ち上げる | B→B[↑] |
| | | ⑧B が A のフェイスを押し下げる | B→A[↓] |
| ⅲ.A が A のフェイスを押し下げる機能のある否定的評価 | A→A[↓] | ⑨B が A のフェイスを持ち上げる | B→A[↑] |
| | | ⑩B が B のフェイスを押し下げる | B→B[↓] |
| | | ⑪B が A のフェイスを押し下げる | B→A[↓] |
| | | ⑫B が B のフェイスを持ち上げる | B→B[↑] |
| ⅳ.A が B のフェイスを押し下げる機能のある否定的評価 | A→B[↓] | ⑬B が B のフェイスを持ち上げる | B→B[↑] |
| | | ⑭B が A のフェイスを押し下げる | B→A[↓] |
| | | ⑮B が B のフェイスを押し下げる | B→B[↓] |
| | | ⑯B が A のフェイスを持ち上げる | B→A[↑] |

ミクロ的に見ると，先に触れた調整方策が含めていない 1A には既に両者間のフェイス状態を非均衡にさせる機能があるため，2B にはそれを修復する機能があると言えよう。

しかし，これら 16 種類のパターンは使用頻度において偏りがあり，同じ頻度で現れることがない。例えば，ⅰ.の A→A[↑]とⅳ. A→B[↓]という機能のある発話自体の使用に語用論的制限がかけられており，実際の会話で殆ど観察されていないため，故にそれぞれに対応する 8 つのパターンの使用頻度もその他のパターンより低いということである。そして，これらの 16 種類の反応発話すべてに修復機能があるわけではない。むしろ，フェイスバランスを更に悪くするものが大半を占めていると言える。表 8 から，2B を経た両者間のフェイス状態は，以下の 3 種類のケースに分けて捉えられる。

（1）理論上，2B を経て，フェイスバランスが取れているケースには，ⅰにおける②／ⅱにおける⑤と⑥／ⅲにおける⑨と⑩／ⅳにおける⑬があると想定できる。それぞれ，以下の作例を通して簡単に説明する。

表 9：フェイス状態に対する修復が起きにくいケース

| 種類 | フェイス状態に与える影響 | 作例 |
|---|---|---|
| i における② | A→A[↑] <= B→B[↑] | 例 60.<br>1A：イタリア語，少し話せます。<br>2B：うん，私も少しできます。 |
| ii における⑤と⑥ | ⑤A→B[↑] <= B→B[↓] | 例 61.<br>1A：英語，お上手ですね。<br>2B：いえいえ，全然だめです。 |
| | ⑥A→B[↑] <= B→A[↑] | 例 62<br>1A：英語，お上手ですね。<br>2B：A さんもお上手ですね。 |
| iii における⑨と⑩ | ⑨A→A[↓] <= B→A[↑] | 例 63.<br>1A：私，全然英語だめです。<br>2B：いやいや，アメリカに留学なさったこともありますから。 |
| | ⑩A→A[↓] <= B→B[↓] | 例 64.<br>1A：専攻が英語なのに，うまく話せないです。<br>2B：いや，私もベトナム語 3 年間習いましたけど，まだ話せないです。 |
| iv における⑬ | A→B[↓] <= B→B[↑] | 例 65.<br>1A：専攻は英語だから，しゃべれないとはおかしいよ。<br>2B：日常生活の会話なら問題ないよ。 |

上記の 6 種類において，②と⑩のケースでは，B が A に対して共感を示し，いわゆる「共感形成」という結果をもたらしている。この２種類においては，フェイス状態に対する修復が最も起きにくいと想定できるだろう。そのほかの 4 種類では，B が 2B を発する時のイントネーションなどの非言語的要素によって，その後続の展開で必ず修復が起きないとは限らない。ここでは，上記の６種類のケースを後続の展開において修復が起きる可能性が低いものとして位置づけたい。そして，本研究では，上記の 6 種類のケースにおいて，1A の発話で両者間のフェイスバランスに生じた影響を相殺する機能のある 2B には，＜フェイス状

態の非均衡＞を修復する機能が備わっている一方，更なる非均衡を抑制するという調整機能もあると捉えたい。このことを検証するために，6.3.1 では実際の会話例を取り上げて分析を行う。

（2）理論上，会話参加者間のフェイス状態が均衡化になっているはずであるものの，後続の展開で修復が起きる可能性が（1）より高くなるケースとして，ⅰにおける①／ⅳにおける⑭がある。

表 10：フェイス状態に対する修復が起きやすいケース（①）

| 種類 | フェイス状態に与える影響 | 作例 |
|---|---|---|
| ⅰにおける① | A→A[↑] <= B→A[↓] | 例 66.<br>1A：よく描いただろう。<br>2B：いや，いまいちだね。 |
| ⅳにおける⑭ | A→B[↓] <= B→A[↓] | 例 67.<br>1A：子供さえ知っていることだから，あんた知らないの。<br>2B：あんたも知らないくせに。 |

例 66 では，A が B の賞賛を得たいのに，B がそうした期待に応えなかった。例 67 も，相互攻撃と言えるほどまるでけんかをしているかのように見られかねないものだと考えられる。しかし，このような例文は，かなり親しい間柄にしか見られないものだと言える。親しい間柄では，このような会話でも，フェイスに対する侵害は深刻ではないだろう。ただ，会話参加者の間柄によって，会話の開始時点における両者間のフェイス状態がかなり異なってくるため，本研究では，このような状況をあらかじめ除外しておきたい。実際，この 2 種類のケースに関する実例は，本研究のデータの性質によって，一件も観察されなかった。

（3）表 8 の 16 種類から，表 9 と表 10 で示したものを除いた 8 種類を後続の展開でフェイス状態に対する修復が起きる可能性が高いケースとして扱う。いずれも，A が両者間のフェイス状態の均衡化を失わせた状況を元に戻すことなく，むしろ悪化させたケースとして捉えることができる。これについて，実際の会話例を用いて，その後続の展開において，両者がどのように非均衡状態に陥ったフェイス状態を修復するかについて述べる。

その後続の展開について分析を行うとは，分析単位が大きくなるだけでなく，これまで示した基準を踏まえて，よりマクロ的にフェイス状態に対する修復について考察するということである。これがいわゆるマクロ的な視点であり，次節では簡単に説明する。

#### 6.2.4.2. マクロ的に捉えるためには

マクロ的な捉え方とは，二つの側面を意味している。一つは，分析単位を大きな連鎖に拡大すること。いま一つは，前節のミクロ的な捉え方と呼応しているものとして，2B に均衡化が失った／失いかけたフェイス状態を修復する機能がない場合，つまり，両者間のフェイスバランスが非均衡になったあと，その後続の展開で起きた修復について考察するということである。

前節まででは，フェイス状態に対処する調整と修復をミクロ的に捉える場合，①フェイス状態の非均衡化を抑制する調整行為，②ミクロ的なフェイス状態に対する修復行為，③マクロ的なフェイス状態の非均衡化に対する判断基準の 3 つのことについて論じてきた。6.3.1 では，ミクロ的な考察結果として，フェイス状態の均衡化を作り出すために，会話参加者がどのような対処策を講じるかについて，実際の会話例を用いていくつのパターンに分けて考察する。その上で，6.3.2 ではミクロ的な視点から提出した各判断基準を踏まえて，より長い会話連鎖を取り上げて，フェイス状態の均衡化を維持するために会話参加者がどのような修復方策を取るかについて考察する。

## 6.3　フェイス状態の非均衡化

本節では，ミクロ的な視点とマクロ的な視点に分けて考察する。6.3.1 では，ミクロ的な視点からフェイス状態の非均衡化について述べ，6.3.2 では，マクロ的な視点からフェイス状態の非均衡化について述べる。

### 6.3.1.　ミクロ的な視点からみるフェイス状態の非均衡化

#### 6.3.1.1. 他者指向的 FSA に対しての修復策

他者指向的 FSA とは，話し相手のことを褒める行為を意味する。また，褒めに対する修復とは，褒め行為を受け入れない行為を指している。つまり，〈褒め–受け入れ拒否〉という場合である。次の例を参照されたい。

例 68＜BTS 初対面雑談 8＞

1A　　若いですね、でも。

2B　　え、若くないです。え、若いです、そっちのほうが、若いじゃないですか。

3A　　私なんか、子供すぎて、なんか、ほんとよく下のほうに見られるんですけど,,

例 68 で，両者間のフェイス状態にかける影響から考えると，相手の「褒め」を拒否する行為は，A が B に肯定的評価をすること（褒め）で B のフェイスを持ち上げたということになる。フェイス状態の均衡化を維持するために，B が自分に対して否定的評価をすること（褒

めを却下する）を通して自分のフェイスを押し下げたということとなる。簡単な表示方法で示すと，A→B[↑]<= B→B[↓]ということとなる。ミクロ的な捉え方では，B→B[↓]という行動を「フェイスバランスの非均衡化」を解決した修復行為としても，更なる非均衡を抑制する調整行為としても捉えることができる。

しかし，褒め行為が起きた会話では，相手が好意の下で褒めていることが多いと想定されるため，その褒めをただ拒否するだけで終わるケースがむしろ少ない。そこで，例 68 で，2B が褒めを拒否した直後に，相手のことを褒め返すという手段を取った。これは，相手の好意に応えるために行われた行為として理解できる一方，両者間のフェイス状態にもたらす影響からみると，1A と同じく，相手に対して肯定的評価を示すことでフェイスを持ち上げた。それに対して，褒めを受けた A が 2B と同じく，自分に対して否定的評価（「子供過ぎる」という表現には，評価表現によく使われる「…すぎる」というところから，自分の顔立ちが話者の基準から見て逸脱しているという意味で，否定的な価値づけが生じるからである）を通してフェイスを押し下げた。簡単な表示方法で示すと，B→A［↑]<= A→A［↓]ということである。ミクロ的な捉え方では，A→A［↓]という行動を「フェイスバランスの非均衡化」を解決した修復行為としても，更なる非均衡を抑制する調整行為としても捉えることができる。

全体的には，この断片の終わりになるまで，両者間のフェイス状態が均衡化になっていると言える。ただ，例 68 では褒めが一回で終わる場合であるが，それに対して，褒めが繰返して行われるケースもよく見られる。次の例を参考されたい。

例 69＜BTS 初対面雑談 8＞B が小さい頃アメリカに暮らしていたことがあることと，自分の専攻が英語であることを A に伝えたあと。

| | | |
|---|---|---|
| 1A | すごい、スペシャリストじゃないですか。 | ←A→B[↑] |
| 2B | いやいや。 | ←B→B[↓] |
| 3A | 東外大の英語科って、すごいじゃない[ですか]。 | ←A→B[↑] |
| 4B | [うーん]、英語しかできないんですよ。あの、多分、[あの],, | ←B→B[↓] |
| 5A | [英語]できれば十分[ですよ]。 | ←A→B[↑] |
| 6B | [副専攻]で、副専攻でドイツ語とったんですけど,, | ←話題転換 |
| 7A | あ：難しそう。 | |

まず，内容的な流れからみると，1A における「スペシャリスト」という表現には，相手の能力を高く価値づける機能があるため，B に対する肯定的評価として認定できる。2B では，「いやいや」という否定的表現が使用されているものの，これには，自分の能力を低く評価する機能がないと言えるが，相手の褒めを受け入れない態度を示したところから，自

分に対してより弱い否定的評価をしたと言えよう。そして，3A の「東外大の英語科って、すごいじゃないですか」という表現から，＜こんなにすごいところに入れるのは，あなたの英語能力がすごいからだ＞という推意が得られる。これも，相手の能力を高く価値づけるものであり，肯定的評価として認定できる。それに対して，4B（「英語しかできないんですよ」）から，＜英語能力がいい＞という褒めを直接拒否するのではなく，＜英語能力がいい＞ということをネガティブ（「しかできない」という表現には，そのほかの能力がないということを連想させる機能がある）に捉えることで，論点をずらして自分に対する否定的評価を示した。1A〜4B にかけて，A→B[↑]<= B→B[↓]というパターンが 2 回連続して起きたあと，5A で 3 回目の A→B[↑]が生じ，B が B→B[↓]という手段ではなく，話題転換という手段で終わらせたように見える。

つまり，例 69 では，A が B のことを連続的に褒め，B がその褒めを拒否し続けた現象が見られた。両者間のフェイス状態に着目すると，A が B に対して何度も肯定的評価を示すことで B のフェイスを持ち上げたが，B が自分に対して何度も否定的評価を示すことでフェイスを押し下げたことが分かる。ミクロ的に捉えると，2B と 4B における「自己指向的否定的評価」と 6B における話題変換という行為を，両者間のフェイスバランスを維持するために施されたものとして扱うことができる。

例 68・例 69 では，いずれも A が積極的に B のことを褒めているが，時には，次の例 70 で見られるように，話し手 A が自分に対して否定的評価をしたため，B がそれを補償するように消極的に褒める場合もある。次の例を参照されたい。

例 70＜HCR②＞A は韓国語を専攻としており，B は A の先輩であり，且つ韓国人と結婚している。

1A　　韓国語忘れちゃうからってゆって，私には韓国語を話してくれる人が多いので，
2　→　練習になります。でも，まあ，留学してた頃よりはちょっと：：落ちたかな：：
3B　=>　やあ，でも：：話，私あんまり内容分からないですけど，話してるん聞いたら
4　　日本語か韓国語かぐらいは分かるから，したら，あ，すごい，なんかぺらぺら
5　　と韓国人みたいに話している,X さんとかなども，本当にペラペラだと思って：
6A　→　多分皆さん優しいからきっと，何言ってるか分かんないけど,,
7B　=>　いやいや，そんなことはない，すごい自然な，何というの，普通の会話，自然
8　　に話していいな。
9A　　〈沈黙 2 秒〉ご主人と韓国語で話さないですか.

この例では,2A の後半部分の＜自分の韓国語が留学していた頃より落ちた＞という意味から，

A が自分の現在の韓国語能力に対して，ある基準に照らして低く価値づけたことが分かる。両者間のフェイス状態に着目すると，2A には A→A［↓］という働きがある。それに対して，3B～5B では，「ぺらぺら」という形式からも分かるように，B が相手に対して肯定的評価を示した。つまり，両者間のフェイスバランスを維持するために，A→A［↓］に対して，B→A[↑]の機能のある行為を行った。ここまでで，均衡状態に戻されたフェイス状態に対して，6A について＜韓国人と話す時にペラペラに聞こえるのは，自分の韓国語が上手であるからでなく，相手が優しいからだ＞というふうに理解できる。つまり，A が自分に対して否定的評価をすることでフェイスを押し下げた。こうした A→A［↓］の働きのある行為に対して，B が B→A[↑]という効果のある 7B を用いて，両者間のフェイスバランスを元に戻した。もし，7B に対して，A が引き続き自分に対して否定的評価をするとしたら，これまでのパターンと同じく，＜褒め–受け入れ拒否＞という展開になるかもしれない。そこで，A が話題転換という手段で，新たな展開を進めた。全体的に見て，9A の話題転換になるまでの部分では，両者間のフェイスバランスが均衡になっていると言えよう。

本節では，ミクロ的視点から，積極的な褒め行為と消極的な褒め行為に分けて，それぞれ両者間のフェイス状態に与える影響について考察してきた。具体的には，両者間のフェイス状態に着目すると，例 68 と例 69 に起きたように，積極的に相手のことを褒めるという行為には両者間のフェイスバランスを崩しうる働きがある一方，例 70 に起きた消極的に相手のことを褒める行為（相手が自分に対して否定的評価をしたことが前提である）には，両者間のフェイスバランスを均衡にする機能があるということである。

そして，積極的な褒め行為がある会話において，一回だけ褒めた場合と連続して褒めた場合を取り上げた。そもそも，褒められた側の対応として，①褒めを受け入れる②相手のことを褒める③褒めを受け入れないという三種類の選択肢が考えられる。

①では，謙遜を知らないと思われうるため，自分のイメージを傷つけるだけでなく，補償が必要でないフェイスを持ち上げる行為を受け入れると両者間のフェイスバランスに悪影響を生じてしまうのである。 ②はバランスを維持する手段としてよく使われるが，例 70 のように，褒める側 B が褒められた側 A の先輩であるため，自分の先輩の語学力を褒め返すことが好まれるとは言いがたいだろう。そうすると，ここでは，褒められた側には③という選択肢しか残っていないが，③にはまたリスクが潜んでいる。というのは，積極的な褒め行為がフェイスバランスを失わせる働きがあるものの，好意のもとで施される特徴は変わらないため，褒め行為を受け入れないことは相手の好意を拒否することに繋がっており，連続的な拒否行為では相手に不快感を感じさせるだけではなく，自分のイメージをも（素直でないとかのようなもの）傷つけてしまう可能性がある。従って，例 69 と例 70 で観察されたように，褒められた側がともに話題転換という手段を用いて，そのようなリス

クを抑制した。つまり，普通の状態（ダメージを受けていない）にあるフェイスを持ち上げる場面においては，フェイスバランスに与える悪影響を最小限に抑えるために，褒めを受け入れない趣旨から出発し，褒められた事項を否定したり低く評価したりすることが可能であり，時に返事を曖昧化したり話題を転換したりする方法が有効である。

このように，両者間のフェイス状態に着目すれば，会話参加者がフェイスバランスを維持するために行ったさまざまな修復行為が見えてくる。そして，各修復行為の特徴がそれぞれ異なっているのではなく，一定のパターンになっていることも観察された。

#### 6.3.1.2. 自己指向的 FTA に対しての修復策

本節では，自己指向的FTAに対する修復について，2種類に分けて議論する。一つは，話し手が自分のことに対して否定的評価を下したあと，聞き手が話し手に指向した肯定的評価をする場合を指す。この視点から見ると，例70がその例である。もう一つは，話し手が話し手自身に対して否定的評価を下したあと，聞き手も聞き手自身に対して否定的評価をするという「共感形成」の場合である。前者について，例70のほか，次の例も参照されたい。

例 71（例 11 の再掲）＜BTS 初対面同性同士雑談⑧＞A は大学 4 年生で中国語を専攻しており，B は台湾で日本語教師を勤めているため中国語ができる。A が B に自分の中国に留学したときの経験について語っている。

1A　　でもいるときはほんとに辛くて，なんで辛いかっていうとたぶん言語が伸びな
2　　いからで。
3B　　〈笑い〉。
4A　　それは自分が悪いんですけど。
5B　→　まあね，ある一定ぐらいでね，行くと結構伸びるのほんと難しい：：
6A　　ね：：

A は自分の留学生活に対して否定的評価を行い(「つらい」「言語が伸びない」という表現には，自分の状況に対して低く価値づけていることが分かる)，2B で「好まざる反応」(他者の自己指向的 FTA がなされたのに対して，それを否定するかその立場に立って共感を示すかというような好ましい反応に対して言っている)が行われ，3A で引き続き自分に対して否定的評価（「自分が悪い」という表現から分かる）を行ったため，両者間のフェイスバランスが一旦崩れたと判断できよう。このような好ましくない状況において，B が修復を行う必要性も出てきた。

5B の修復方策を見てみると，B は相手の発話を直接的な否定ではなく，表では否定にな

らないような言い方を選択している。つまり，もしも A の「語学力が伸びないのは自分が悪い」という発話に対して，B が「あなたが悪くないよ」といった直接的な否定を示したとしても，フェイスに対する修復効果はあまりないだろう。「語学力が伸びないことに対して責任を感じている」という問題に対して，「一定のレベルとなると上達が難しくなる」という一般論を通して，＜それはよくあることだから，そんなに悪く思わなくてもいい＞という趣旨をもって，問題自体に触れずにそれに対する評価に論点をずらして修復を行った。つまり，4B で「否定的評価を解消・改善する」という方策で相手のフェイスを持ち上げたのである。全体的にみると，B は A→A [↓]に対して，B→A[↑]の効果のある行為を通して，両者間のフェイスバランスを維持した。具体的には，修復対象となったトラブルとは，A が施した連続的な自己指向的否定的評価によってバランスが失ったフェイス状態であり，このアンバランスな状態を修復したのは B であり，その修復方策とは他者指向的肯定的評価である。その修復が成功したことは 5A での共感を表す「ね：：」から窺えよう。つまり，B の反応が A に期待されるのと一致しているため，こうした応答によって双方間のフェイス状態のバランスを取り戻されたのである。

例 71 は，A→A [↓]に対して B→A[↑]の効果のある行為をしたという場合であるが，もう一つのパターンを見てみよう。

例 72＜BTS 初対面雑談⑧＞

1A　　あ、実家が東京なんですか?
2B　　あ、実家名古屋です。
3A　　あ、名古屋なんですか。
4B　　はい。
5A　　名古屋って都会ですよね。
6B　　都会、あ、ごめんなさい。名古屋って言ったんですけど、名古屋の近くの田舎み
7　→　たいなとこで、分かりやすく、ちょっと見栄をはってしまった。
8A　　あ、いやいや。私も、仙台ですけど、仙台の一番外れですから＜2 人笑い＞。
9B　　すいません。

内容的な流れからみると，B が 2B で実家の情報を粗略化して伝えた。というのは，初対面の人に実家がどこにあるかと聞かれる時，普通は誰でも知っている場所を言うだけで十分である。有名なところ以外，わざわざ詳しい場所を言う必要がないだろう。しかし，5A で B が実家について更なる情報を要求したため,グライスの質的原理を破らないように,「名古屋ではなく，名古屋の近くの田舎にある」というより詳しい情報を伝えた。そしたら，B

には＜なぜ最初にそう言わなかった＞ということについて解釈する必要があり，そこで，7B では＜見栄えをはってしまった＞という自分の行為を低く価値づけることで自分のフェイスを押し下げたのである。つまり，6〜7 行目の発話によって元々均衡が取れているフェイスバランスが崩れかけている。

そうした不均衡な状態を修復するために，8A では「実家が仙台の一番外れにある」という相手が求めていない事実を伝えることで，情報量を増やすことで相手のやり方に理解と同感を示し，相手の損害を受けたフェイスを持ち上げた。もし，8A で＜あなたが見栄えをはっていないよ＞というような直接的な否定をしたとしても，フェイスを修復する効果はあまりないだろう。つまり，相手の自己指向的な否定評価（＜見栄えをはってしまった＞）に触れずに，事実（＜私の実家も仙台の一番外れにある＞）に論点をずらして，＜そうした伝え方が見栄えをはっているというなら，私もそうしている＞という趣旨で相手の否定的評価に共感を示したわけである。これは，例 71 に見られたパターンと違い，A→A［↓］によって均衡化が失ったフェイス状態を修復するために，B→B[↓]という働きのある修復方策が用いられたのである。このような例はほかにも見られ，次の例 73 を挙げる。

例 73＜BTS 初対面雑談 7＞

1B　　専攻は、中国語で,,
2A　　はい。
3B　　何をやってらっしゃるんですか?
4A　　一応、文法なんですけど,,
5B　　文法。
6A　　まだ、基礎から、もう一度っていう感じで,,
7B　　ふーん。
8A　→　全然、研究のレベルにたどり着いてないんですけど…。
9B　　や：：私は、文法、ん：苦手というか,,
10A　　[ええ]。
11B　　[ちゃんと]やってきてなかったので：

この例に起きた現象も，例 72 と同じく，A→A［↓]によって両者間のフェイス状態がバランスを失った時，B が B→B[↓]という働きのある発話をもって元に戻した例である。4A〜8A にかけて，A の＜文法の研究しているものの，まだ研究のレベルに辿り着いていない＞という意味のある発話が，自分の状況や能力について低く価値づけるものである。両者間のフェイス状態に着目すると，A が自分のフェイスを押し下げたため，均衡状態が傾いた状況になっている。フェ

イスバランスの非均衡状態を修復するために，B が 9B～11B にかけて，＜私も文法をちゃんとやってきてなかった＞という意味合いの発話で，相手の否定的評価に共感を示した。これは，A に対する肯定的評価を通して直接的に相手のフェイスを持ち上げるのではなく，自分のフェイスも同じく押し下げることで両者間のフェイスバランスを維持したのである。

以上より，会話参加者間においてフェイスバランスというものが存在し，一方的な肯定的評価や否定的評価がその均衡状態に影響を及ぼしうるため，それを受けた発話者が当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などを総合的に判断した上で，そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているというシステムが成り立っていると考えられる。上記の例で示したように，一方的に自分に対してフェイス侵害をすると，つまり，一方が下がった状態になってしまうと両者間のフェイスバランスが均衡を失うことに繋がるため，こうした状況に対して，他方にとっては相手のフェイスを持ち上げるか自分のフェイスを取り下げるかという選択肢があるが，ミクロ的な視点からみれば，いずれも両者間のフェイス状態の非均衡状態を解決する機能があるため，これらを修復方策として扱えると考える。

#### 6.3.1.3. 他者指向的 FTA に対しての修復策

他者指向的 FTA に対する修復とは，相手にフェイス侵害されたあと自分で自分のフェイスを持ち上げる方策でバランスを取り戻す場合を指す。次の例を参照されたい。

例 74（例 23 の再掲）＜BTS 初対面雑談 1＞A と B は初対面で，B は就職試験で英語での会話能力が求められて困っているようであり，A に英会話を教えてほしいという希望を伝えた後，A は自分が語学研修に行ったことがあるのを B に話した。

1A　　あたし，2 年の 9 月ぐらいに，3 週間行ったんですよ。
2B　　3 週間?
3A　　はい，1 人で。
4B　→たった 3 週間で，何か，なります?　何かなるって[いうか：：]
5A　=>[いや，でも]，授業はおもしろかったですよ，すごい。
6B　　語学学校行ったん[ですか]。
7A　　[はい]。
8B　　あ，そうなんですか。

この例では，B が 4B で相手のしたことに対して否定的な評価(とういうのは，4B から＜たった三週間で何にもならないだろう＞という推意が得られるほか，「たった」という表現にも相手の経験を低く価値づける働きがある)を行ったため，これは両者間のフェイス状態

を崩すことに繋がった。さらに，B がそれを自ら認識できたことを「何かなるっていうか」という自己修復開始表現から窺えられる。それに対して，聞き手が 5A で＜3 週間の語学研修があまり役立たないかもしれないが，授業がすごく面白い＞という推意が得られる発話を用いて，自分の経験について高く価値づけたことでフェイスを持ち上げた。全体的には，A→B［↓］によってバランスが失ったフェイス状態に対して，B→B[↑]の働きのある手段で修復が実行されたのである。

修復組織からみると，例 74 は自己開始・他者修復の例であると言える。というのは，修復対象となったトラブルは 4B の＜他者指向的 FTA＞によるフェイスのアンバランス状態であり，これを修復開始したのは B であるが，修復を完成させたのは A であり，その修復方策とは自己指向的 FSA である。この傾向について，もう一つの例を見てみよう。

例 75（不同意の例として挙げた例 55 の再掲）＜BTS 初対面雑談 6＞

A は 18 歳までフランスで暮らしており，帰国子女として大学入試を受験した。そして B は 14 歳までインドネシアで暮らしていたこともあるものの，条件を満たさず帰国子女として試験を受けられなかった。そのことに対して A が「惜しい」と評価した。

1A　→ 惜しい。もうちょっとずらして【【。
2B　=> 】】インドネシアですからね：なんか、特に英語、中国語、フランス語、どれも、
3　　特にそんな、ねえ、関係ないんで：まあ。
4A　→ でもまあ、統一試験も受けられるっちゃ受けられる：あ：惜しいっすねえ。
5B　=> ん：：惜しいのか[なあ]。
6A　→ [ちょっと]ずれてた。
7B　=> でも、それでなんかやってもね（うん：）、たぶん、特にね、どれもピカ一なわ
8　　けじゃないんで、###。
9A　→ でもどっちがいいんでしょうね。
10B　　インドネシア語の日常会話のテストがあったら大丈夫かもしれない<2 人笑い>。

第 5 章では，この例を用いて，ある主観的認識をめぐって会話参加者間の認識が一致していない場合に生じた不同意について説明した。繰返しになるが，語用論的視点からみると，不同意の態度を示すことは，相手の同意要求に対する否定的評価として捉えられるため，相手のフェイスを侵害する恐れがある。この例に限っていうと，A→B［↓］に対する B→B[↑]が繰返し現れたことが分かる。

会話の流れから両者間のフェイス状態の推移について見てみると，1A では相手 B が帰国子女として統一試験を受けられなかったということについて，「惜しい」という評価をしたことから，

＜ちょっとずらせば受けられるのに，受けられなかったのは残念だ＞という推意が得られる。これには相手の過去の経験を低く価値づける働きがあるだろう。侵害の程度が深くないかもしれないが，相手のネガティブフェイスを侵害したものとして捉えることができる。つまり，A は A→B［↓］という働きのある発話をしたことによって，両者間のフェイス状態に良くない影響を与えた。これに対して，直接的に「惜しくないよ」という表現で不同意を表しておらず，自分が惜しくないと思う根拠に焦点をずらし，2B～3B では，＜インドネシアからの帰国子女だから，統一試験の外国語とはあまり関係ないので，受けられなくても惜しくない＞という意図が読み取れる。これは実質上，自分の過去の体験に対する肯定的評価に当たるため，A の A→B［↓］に対して，B→B[↑]を用いてフェイス状態の均衡化を戻したのである。更に，4A に対する 5B，6A に対する 7B～8B においても，1A に対する 2B～3B と同じパターンが観察された。いずれも，A→B［↓］に対する B→B[↑]という関係である。3 回も同じパターンが繰返されたあと，A が 9A（「でもどっちがいいんでしょうね」）で自分の主張を曖昧にしたとともに，会話も新たな展開になった。

全体的には，この例における両者間のフェイスバランスは崩れていないと言えよう。発話者 A が積極的に B のネガティブフェイスを侵害したためか，最後の＜主張態度の曖昧化＞をもってこの話題を終わらせた。全体的なバランスを維持できたのは，この例に繰返し行われた B→B[↑]の効果のある行為にあるだろう。本研究では，ミクロ的視点から，これらのような行為を両者間のフェイス状態の不均衡を解決する修復として扱えることを主張したい。

しかし，例 74 と例 75 におけるフェイス侵害の程度を次の例 76 と比較してみると，その侵害の程度はあまり深刻ではないことが分かる。次の例を参照されたい。

例 76＜BTS 友人同士雑談 6＞

1A　　普段相手にたいしている印象。
2B　→　あ：最近思ったんはな(ああ)、あれがある。A さんはなんか、人のこと干渉すん
3　　の結構好きやんか。
4A　　あん。
5B　→　やけど：自分に対しては、なんか、絶対干渉されやんようにしてるやろ、結構。
6A　=>　それでも、あんまね：干渉してこないよね、やっぱね。
7B　→　なんか、干渉すんなっていうオーラ出してるもん。
8A　　まじで?
9B　　うん。
10A　=>　おれ結構、あの：聞かれたら：：言う気まんまんなんだけどさ。

この例では,B は＜あなたが人のこと干渉することが好きだ＞という推意が得られる 2B、

＜自分のことを絶対に干渉されないようにしているのに，人のことを干渉するのが好きだ＞という意味のある 4B、＜人が干渉してこないではなくて，あなたが干渉させないようにしているからだ＞という 6B をもって，A に対して激烈なフェイス侵害行為をした。このような「他者指向的 FTA」に対して，A は，＜私は干渉されないようにしているのではなく，他の人が干渉して来ないだけだ＞という意味のある 5A、＜私は別に絶対に干渉されないと思っていないよ。干渉された時に色々話しているのよ＞という推意が得られる 10A を用いて自分の損害を受けたフェイスを持ち上げようとした。つまり，何回も繰返された A の A→B [↓]に対して，B が B→B[↑]という手段で，両者間のフェイスバランスを維持しようとした。

しかし，全体的にみても，理論上は，例 76 における両者間のフェイスバランスが維持されているはずであるが，実際，例 74 における＜相手の語学研修があまり役立たない＞という指摘や，例 75 のように，相手の過去の体験に対して「惜しい」と評価する行為がもたらしたフェイス侵害度は，例 76 における相手の性格を低く価値づける行為がもたらしたフェイス侵害よりかなり低いと言えよう。ただ，例 74 と例 75 では，会話参加者が初対面であり，例 76 では友人同士である。初対面の会話においては，例 74 の方が修復開始形式を伴っているところからも見られるが，そのフェイス侵害行為がかなり弱化されている。それに対して，例 76 の友人同士の会話となると，その侵害の程度が激化している。これは，初対面同士では両者間のフェイスバランスの傾きにより敏感であるため，友人同士ではフェイス侵害に対する許容範囲も多少広くなるということに関連しているかもしれない。そうはいっても，例 76 では，両者間のフェイス状態が均衡であるとは言いがたい。つまり，理論上は均衡が取れているはずであるが，フェイス侵害の性質や程度によって，両者間のフェイス状態が崩れたことになりうることを看過してはならない。

#### 6.3.1.4. まとめとこれからの対象

総じて，6.3.1 では，ミクロ的の視点から，両者間のフェイス状態が結果として均衡している場合に限定して議論を展開したが，具体的には，6.3.1.1 では A→B[↑]によるフェイス状態の非均衡に対処する修復策，6.3.1.2 では A→A [↓]によるフェイス状態の非均衡に対処する修復策，6.3.1.3 では A→B [↓]によるフェイス状態の非均衡に対処する修復策について考察してきた。

だが，一つ看過してはならないこととは，A→A[↑]による非均衡化のケースを取り上げられなかったということである。大まかには，これは発話者が自分に対して肯定的評価をする場合を指す。理論上は，このような行為によるフェイス上の不均衡状態に対して，聞き手の B にとって，B→B[↑]という効果のある発話を用いて，いわゆる共感形成を通してフェイスバランス

を維持するか，B→A［↓］という効果のある発話を用いて，相手のフェイスを押し下げることで不均衡を解決するかという 2 種類の対策が考えられる。このような対話は親しい友人同士の会話では見られるかもしれないが，本研究では，録音録画という形で取られた会話資料を利用しているためか，親しい友人同士の会話でも一件も観察されなかった。これは，データの性質のほか，こうした積極的な自己指向的肯定的評価はそもそも厳しい語用的制約がかけられており，発生の可能性が元々低いという可能性も考えられる。両者間のフェイスバランスを維持するために行われた消極的な自己指向的肯定的評価を除き，積極的に自分のことを自慢げに披露する行為は両者間のフェイスバランスを崩す可能性が高いということは，言語を超えて一般的な傾向と言っても過言ではないだろう。

更に，本研究では，A→A[↑]に対して，最も多く行われた対応発話が B→A[↑]という機能のあるものである。結果として，A のフェイスが一方的に高められて，両者間のフェイスバランスが崩れることに繋がっている。フェイスバランスが崩れたあとのやりとりで，会話参加者がどのように修復を行ったかについて，よりマクロ的な視点から考察する必要がある。そこで，次節から，分析単位を拡大して考察をする。

### 6.3.2. マクロ的な視点からみるフェイス状態の非均衡化

本節では，フェイス状態に影響を与えた 1A に対して，2B では非均衡になりかけた状況を改善するのではなく，更に悪化させた場合に生じた＜フェイスバランスの非均衡状態＞に対して，会話参加者がどのように修復するかについて考察する。

#### 6.3.2.1. 自己指向的 FSA による非均衡状態

自己指向的 FSA による非均衡状態については，先述の通り，A が自分のフェイスを高める機能のある行為を積極的に行ったあと，相手 B が A のフェイスを持ち上げた機能のある反応発話をした場合を指す。両者間のフェイス状態に着目すると，これは，A のフェイスが一方的に高められたことによって，両者間のフェイバランスが崩れた現象である。次の 2 例を用いて，フェイスバランスが崩れたあとで行われた二人の修復行動について説明したい。

例 77＜BTS 初対面雑談 1＞A が公務員試験で外務専門職を狙っていると B に伝えたあと，自分の動機について話している場面。

1A　あたし、も、ずーっとなんか、小学校の頃から、もう、なんか、何だろ、夢があ
2　って：なんか、外務専門職(う：ん)なりたい、って(うん)、思ってて,,
3B　うんうんうんうん。
4A　→ でよくここまで続いたなって思ってるんですけど。

5B　→ すごいですよ、でも。夢まであと一歩って感じじゃないですか。
6A　　え、でも、全然ね、今年は、無理かなあって思う…。
7B　　あ：
8A　　う：ん、一発で受かる人ってあんまりいない[から：]。
9B　　[うん：]、大変ですもん。

この例では，1A～4A にかけて，A が＜外務専門職になりたいという夢を小学校の頃から現在まで続いた＞という趣旨が述べられており，長く続けられる夢があり且つそれを実現するために努力しているということは，＜根性がある＞＜向上心がある＞というイメージと連想されやすいため，実質上 A が自分の状況を高く価値づけることを通して，自己指向的肯定的評価を実行した。両者間のフェイス状態に着目すると，A→A[↑]によってフェイスバランスが崩れかけていると言える。それに対して，5B では，「すごい」「夢まであと一歩」という表現からも見られるように，B が A に対して肯定的評価を示した。これで，5B までのやりとりでは，A のフェイスが一方的に高められたことによって，両者間のフェイスバランスが非均衡状態になっている。

こうした非均衡状態に対して，A は 6A～8A にかけて，＜今年全然無理だ＞＜一発で受かる人があまりない＞という表現で，身を置いた状況について低く価値づけることで，自分に対して否定的評価をした。つまり，A→A[↓]の働きのある手段でフェイスバランスの非均衡状態を修復したのである。これは，これまで指摘した通り，修復行為とはトラブルを含む発話そのものを形式上修正するものではなく，修復実行側が当該のトラブルを引き起こした原因を特定してから取り除く作業であるという記述に当てはまっている。というのは，両者間のフェイス状態を非均衡にさせた原因が A→A[↑]にあるため，それを修復するために，A→A[↓]という機能のある発話を通して修復実行したからである。これに対して，次の例 78 では，同じ状況に対して，B が B→A[↓]という機能のある発話で修復しようとしたが，その結果について見てみよう。

例 78＜BTS 初対面雑談 1 ＞A が自分の高校について,「けっこう英語に力入れてる学校だ」と言ったあと。
1A　　選択授業とかもあったんですけど、それで英語いっぱいとると、10 個以上とかあ
2　　って,,
3B　　あ：
4A　→　うん。それで鍛えられました。
5B　=>　すご：い。
6A　　<笑い>。

7B　　あ：もう、高校の英語なんて受験英語[ばっかりで],,

8A　　[う：ん]。

9B　→　つまんない、つまんない。

10A　　学校、なんか、すごいうち進学率は良かったんですけど、なんか、受験勉強のた

11　　めの英語??っていう授業は全然なかったんですよ。

12B　　あ：

13A　　なんか、もう、大学の授業でやるような内容[をやってて]。

14B　　[え：]、おもしろそう。

15A　　うん。

4A では，自分の英語能力が「鍛えられた」という評価的表現から，A が自分の経験を高く価値づけたことが分かるだろう。フェイス状態からみれば，これは A→A[↑]に当たる。それに対して，B が「すごい」という評価的表現で A のことを褒めたことを通して，いわゆる B→A[↑]に当たる行為を取った。結果的には，A のフェイスが一方的に高められ，両者間のフェイスバランスの均衡が失われたのである。

こうした非均衡状態に陥ったフェイスバランスに対して，7B〜9B を発した。7B〜9B では，＜高校の英語が受験勉強のためのものであり，つまらない＞という発話内容から，＜あなたの高校が英語の授業が多くても，受験勉強のためのものであるはずだから，つまらない＞という推意が得られる。これは，実質上，A の経験について低く価値づけた行為であり，B→A[↓]の機能が備わっている。つまり，フェイスのアンバランスを修復するために，B が一方的に高められた A のフェイスを押し下げたことを通して実現させようとした。しかし，当該のアンバランス状態を引き起こした原因が，4A における A→A[↑]にあるため，後続の展開からも分かるように，9B における B→A[↓]の機能のある修復方策が成功したとは言えない。

というのは，9B に対する 10A で，A に反論されているからである。＜自分の高校の英語授業は受験勉強のためではない＞という意味から分かるように，10A は 9B に対する直接的な反論になっている。もし 10A が「そうかもしれませんね」というような相手の評価に共感を示すものであったら，B の修復が成功したとは言えるが，反論となると，B の修復方策が成功したとは言えなくなる。一方，フェイス状態に着目すると，10A には A→A[↑]の機能があるため，フェイスのアンバランス状態が修復されたどころか，むしろ悪化されてしまったと言えるのではないか。結果的には，A のフェイスが一方的に高められた状況が変えられずじまいになっているため，両者間のフェイスバランスが失ったと判断できる。

本節で分かったのは，次の２点がある。第一に，1A の積極的な自己指向的肯定的評価に対して，2B で相手指向的肯定的評価がなされた場合，両者間のフェイスバランスは非均衡状態にな

る。第二に，この非均衡状態に対して，A→A[↓]の機能のある修復策が有効であるが，B→A[↓]の機能のある修復策はあまり効果的ではない。これは，会話参加者は両者間のフェイス状態をバランスよく維持することに責任があるが，自分のフェイス状態に対しては，各自が管理しており，自分ではフェイスを持ち上げたり押し下げたりすることができるものの，他者の同じ行為が許されないということに原因があるのではないかと考えているものの，例文が足りないぶん，十分に論証できていないことを否めないため，現段階ではそこまで結論を出すことができない。

次に，他の原因によるフェイスバランスの非均衡状態に対処する修復について見てみよう。

#### 6.3.2.2. 他者指向的 FTA による非均衡状態

まず，フェイス侵害行為が起きたものの，調整行為に伴ったため，フェイスバランスが崩れるリスクが解消された例を参照されたい。

例 79 ＜BTS 初対面雑談 1＞A と B は初対面で，B は A に英会話を教えてもらうように頼んだ後，しばらく経ってから再確認を行っている。

1B　　え，でもほんとにいいですか：？
2A　→　や，別にいいですよ。あんまり為にならないと思いますけど。
3B　=>　いや，ってか，本当になんか，しゃ，しゃべ，んーと，なんか，あ，相手がい
4　　るだけでいいん[ですよ]。
5A　　[ん：]。
6B　　でも，あたしの英語ってほんとにだめなん[ですよ]。
7A　　[え：]，そんなことないですよ：東外大受かるくらいだもん。
8B　　や，それない。何で受かったのか不思議なくらいだもん(う：ん)，ほんとに。

この例では，A は初対面の B の依頼を受けたこと自体が B に利益を譲渡した行為である。同時に，利益を最小化することで相手にかける精神的負担を軽減しようとして，2A で＜自分の協力がためにならない可能性がある＞という否定的評価で「自己指向的 FTA」を行った。両者間のフェイス状態に与える影響を見ると，これは A→A[↓]の機能がある。この場合，フェイスバランスを維持するためなら，B にとって，相手の損害されたフェイスを持ち上げてあげるか（B→A[↑]）もしくは自分のフェイスを押し下げることで共感形成を目指すか（B→B[↓]）という行為が有効であろう。

その後の展開からみると，3B～4B からは少なくとも 2 種類の推意が導かれる。一つは＜しゃべらないといけないので，別に誰でもかまわないが，相手がいるだけでいいから＞という意味であり，これでは＜相手の能力を重視しない＞という相手指向的否定的評価にな

り，フェイスバランスが崩れてしまった状況を招いてしまうのである。もう一つは，「相手がいるだけでいいんですよ」という発話には，＜そんなに大変ではないよ＞＜いてくれるだけで十分ですよ，ちょっとだけ協力してくれればいいんですよ＞といった意味合いが込められているため，相手に対して負担の大きい要求をしていないという配慮がなされているということになる。ただ，こうした推意からも＜相手の能力を重視していない＞ということを読み取れる。この 2 種類の推意が競合した結果，＜相手の能力を重視していない＞という側面が取られ，実質上の「他者指向的 FTA」になってしまい，A のフェイスを侵害したことになったのである。つまり，4B までは，結果的に A→A[↓]という働きのある発話が二回もなされたということである。これによって，両者間のフェイスバランスが完全に崩れ，修復に入る可能性が高いと予測されやすいだろう。

しかし，4B の文末の「ですよ」と 5A の「ん：」と重なっていることから，4B と 6B の間にはほぼ隙間がないことが分かる。つまり，B が 4B の直後に 6B を発したのである。6B を B が均衡を失ったフェイス状態に対する修復行為とするより，フェイスバランスの崩壊を抑制する調整行為としたほうが適切であろう。その調整方策とは，相手に対するフェイス侵害行為の補償としての自己指向的 FTA（6B から＜自分の英語が本当にだめなので，あまり能力を発揮しなくても十分役立つのである＞という推意が得られる）というものである。つまり，発話内部で，A→A[↓]として捉えられてしまう部分の直後に B→B[↓]という働きのある調整方策を施したのである。

ここで重要なのは，会話参加者 A の行動（7A）から，その調整行為が成功したと判断できるということである。というのは，7A は，2 回ともなされた A→A[↓]に対する反発ではなく，B→B[↓]に対して，B→A[↑]という消極的な褒め行為になっているからである。7A と 8B が「消極的な褒め行為」に対する「褒め行為の受け入れ拒否」というパターンになっており，先述の通り，これは両者間のフェイスバランスの均衡化を維持するのに有効なものである。というのは，フェイス侵害がなされたにもかかわらず，調整行為が両者間のフェイスバランスが完全に崩れることを抑制する機能があるということである。それに対して，次の例では，一方的なフェイス侵害によってフェイスバランスが完全に崩壊したのである。

例 80＜BTS 初対面同性同士雑談 12＞B は自分の専攻が日本語であるということを A に伝えたあと。

1A　→ えと、日本語以外に、（ええ）の外国語は…?
2B　　ええ、はできないですね：英語だけですね。
3A　→ ああ、英語だけ。
4B　　いやいや、だって英語はみんなね（はい）受けますもんね(はい)、日本人は。だ

5　　か、それ：を受けてきたっていうだけで、(はい) あとはないですね。
6A　→ 海外体験は?
7B　　海外も行かないですね、本当に。1 回そのなんか、教育実習みたいので、(はい)
8　　あのー、スロヴェニアという国へ（ええ、ええ、ええ）行って::それは、2 週間
9　　だけ(はい)で。あとは韓国へ遊びに行ってたのが(はい)1 週間で、(はい) 本当に
10　　そうしたちょいちょいって(はい)###。
11A　→どっか学んでみたい、こう、外国語とかはあるんですか?
12B　　あぁでも、結構なんかやってみたら、どれでも面白そうですね、(えぇえぇ) な
13　=> んか。なんかそうしたの、できるんですか?
14A　　いやだから、あの、外国語を学ぶのはね (えぇえぇ) 結構好きなんです[けども]。
15B　　[あ、そう]なんですか。
16A　　でもコンタクト全然とれないんで：：
17B　=>は：：：え、今ちなみに、何語ができるんですか?
18A　　僕ね、英語の TOEFL が 470 点（あぁ：はいはいはい）ぐらい。
19B　　ええ、ええ、ええ。
20A　　だ、その程度なんですよ。
21B　　そうですか：：でも、そのぐらいとれれば、いいんじゃないです[か?]。
22A　　[いや]、それあの皆、大体高校 3 年の人,,
23B　　あぁ、そうなんですか：：僕あんまり受けたことないんで。

この会話は二つのブロックに分けられる。

１～12B にかけて A は連続的な他者指向的 FTA を行ったことが観察される。ここで言うフェイス侵害の性質がこれまで論じてきたものと違うことを断っておきたい。これまでのフェイス侵害行為は否定的評価を指しており，ネガティブフェイスを侵害する行為を取り上げていない。こうした初対面の相手のネガティブフェイスを侵害する行為は，直接的に相手に対する否定的評価にはなっていないものの，相手の返事によって否定的な評価になる可能性があるため，つまり，潜在的に否定的評価になりうるということである。

具体的に会話の流れを見ると，B にとって，2B の＜英語以外の外国語ができない＞という返答が自分の能力を低く価値づけるものであるため，B にとってフェイス侵害になっている。それに，3A におけるその事実を繰返す発話（「英語だけ」）にはその侵害行為を激化させた働きがある。また，4B の「いやいや，だって」という表現から分かるように，B が相手に対して反論を試みたが，しかし，最後まで見ると，結果的には，＜学校で習った英語だけで，そのほかの外国語ができない＞という自分に対する否定的評価になっている。こ

れはまた実質上のフェイス侵害になっている。つまり，1A から 5B までの両者のフェイス状態に関しては，A→B[↓]のため B のフェイスが押し下げられていた状況にあり，フェイスバランスの均衡が失われかけている。

こうした状況に対して，フェイスバランスを取戻すためには，A にとって，B のフェイスを持ち上げてあげるもしくは自分のフェイスを押し下げるという手段があるだろう。しかし，6A・11A を通して A は連続的な他者指向的 FTA を施している。いずれも相手のネガティブフェイスを侵害する行為である。というのは，1A と同じく，こうした質問は相手の返答により，相手に対する否定的評価になってしまうリスクを孕んでいるため，例えば，相手がもし＜海外に行ったことがない＞＜これ以上外国語を勉強する予定はない＞という返答をする場合，自分のイメージに対して低く価値づけることになってしまい，その返答が直ちに自分に対するフェイス侵害になる。総合的に見て，12B までのブロックでは，B のフェイスが完全に抑えられ，両者間のフェイスバランスが完全に崩れたと言えよう。

次に，13B～23B にかけて，フェイスバランスが完全な非均衡状態になった状況に対して，二人が修復行動を実行した。まず，13B と 17B で B がこれまで A によって行われた行為と同じく，A のネガティブフェイスを侵害しうる行為をした。これらはいずれも 1A・6A・11A と同じような機能があるものとして捉えられる。つまり，これらはいずれも B→A[↓]という機能があると言えよう。そして，13B に対する返答に当たる 14A と 16A では，A が「でもコンタクト全然とれない」という表現で，自分の能力を低く価値づけたことが分かる。また，17B の返答に当たる 18A と 20A では，A が自分の TOFEL の点数（これは高くはないと判断できるだろう）と「その程度なんですよ」という表現で，自分の英語能力を低く価値づけたことも分かる。フェイス状態に与える影響からいうと，これらはいずれも A→A[↓]という機能がある。というのは，この 2 個目のブロックでは，1 個目のブロックとは逆の状況，いわゆる A のフェイスが一方的に押し下げられたことが見られた。

また，この 2 個目のブロックでは，A が自分のフェイスを守る調整行為などしていないところから，B のフェイス侵害行為に対してあまり抵抗していないようにも見える。この A の反応は三牧(2008)で指摘された「過度な FTA[45]を犯したと認識した側が相手からの FTA を誘導したり，自らに対して FTA を遂行したり」するという指摘に合致する。一方，B の行動も「相手から過度な FTA を受けたと認識すると自発的に相手に対する FTA を遂行する」という指摘に合致している。つまり，この例からは，フェイスバランスというものが存在し，会話参加者がその状態を総合的に判断した上で，二人で協力して修復方策を施したという現象が見られた。

[45] ここでは主に，一個目のブロックでフェイス侵害行為が何回も繰返されたことを指して「過度な FTA」だと言っている。

全体的には，一個目のブロックにおいて，会話参加者がフェイスバランスの崩壊を認識し，二個目のブロックにおいてその状況を修復するために協力し，そのバランスを取戻したのである。最後に，もう一つ看過されてはならないことがある。一個目のブロックではAが一方的にBのフェイスを侵害し，二個目のブロックではBが一方的にAのフェイスを侵害したところから，フェイス侵害行為がフェイスバランスに均衡を失わせる働きだけでなく，均衡を取戻す方策として使える面もあるということである。

もちろん，上記の例では，両者間のフェイスバランスが完全に崩れたものの，会話参加者の修復行動で取戻されたのであるが，次の例で示すように，完全に崩れたままになっているものもあった。

例 81＜BTS 初対面雑談 1＞

1A　→ 本とか読みます?
2B　　英語?
3A　　いやいやいや、日本語で。
4B　　あ：日本語で…。
5A　→ あたし読書大好きなんですよ：
6B　　ロシア文学?=
7A　→ =うん。常に本読んでます、[暇な時は]。
8B　　[へ：]、そうなんですか：
9A　→ 日本文学もけっこう読みますけど、外国文学おもしろいですね、昔のやつとか。
10B　　ふ：ん。あたしもいっぱい本読まなきゃな。全然なんか、離れてた=。
11A　　=う：ん。
12B　　最近、ずっと試験勉強してて…。
13A　　う：んうんうん。
14B　　本とか、離れてた。/少し間/ロシア文学か。

この例について，結論からいうと，B のフェイスが一方的に押し下げられたため，両者間のフェイスバランスが完全に崩れた状況において，有効な修復行動が行われずに，フェイスバランスが崩壊したままになっている。

内容的な流れについて見てみる。1A「本とか読みます?」という発話には，例 80 で現れたものと同じく，相手のネガティブフェイスを侵害するリスクだけでなく，相手の返答内容によっては相手指向的否定的評価に繋がるリスクも孕んでいる。その後続の返事では，特に 4B における B の躊躇っている態度から，B があまり本を読んでいないことが窺えるだろう。つまり，両者のフェイス状態に関しては，1A～4B では， A→B[↓]という働きに

よってフェイスバランスの均衡が失いかけた。

しかし，5A では，こうした非均衡になりかけている状況に対して，修復行為を講じるのではなく，むしろフェイスバランスを悪化させる行為を行った。それは，自分のフェイスを持ち上げる効果のある自己指向的肯定的評価である。というのは，「読書大好き」とは，自分のイメージを高めることに繋がっているからであろう。しかも，A は後続の 7A と 9A で，相手があまり本を読んでいない可能性が高いという状況において，自分の「読書好き」をアピールした。この行為は，自分のことを積極的に褒めるという行為であり，元々両者間のフェイスバランスを崩す働きがあるものである。また，10B では，B の＜本読まなきゃ＞＜全然離れてた＞という発話が B に対して否定的評価になっているため，ここまで，B のフェイスが完全に侵害され，両者間のフェイスバランスが完全に崩壊したと言える。これは，連続的な A→B[↓]及び B→B[↓]によってもたらされた結果であろう。

こうした完全的な非均衡状態に対して，フェイスが抑えられてきた B が 12B で「最近、ずっと試験勉強してて…」という発話を用いて，＜ずっと本を読んでいないわけではなく，最近試験勉強のせいで読んでいない＞という推意が得られるように，自分に対する否定的評価の影響を抑えることでフェイスバランスに対して修復を試みたが，それが成功したとは言いがたい。B が話題を転換したことで，この断片を終わらせているところからみると，両者間のフェイスバランスが修復されずじまいになっていると言えよう。

#### 6.3.2.3. 他者指向的 FSA と自己指向的 FTA による不均衡状態

本研究で用いたデータでは，他者指向的 FSA と自己指向的 FTA によって，会話参加者間のフェイス状態が不均衡になり，長いプロセスを経て修復されるもしくは修復不能になる例は観察されなかった。これに関しては，次のように考えている。

まず，他者指向的 FSA とは，本研究での視点からみると，会話の相手に対して肯定的評価をすることで，相手のフェイスを高めるということを指す。こうした行為のほとんどは好意の元で発されたと言えよう。会話参加者間のフェイス状態に着目すると，ミクロ的な視点からみれば，6. 3. 1. 1 で述べたように，こうした行為は両者間のフェイス状態に均衡を失わせる機能があるが，マクロ的な視点からみると，こうした行為によってフェイス状態の均衡を完全に失わせたり修復不可能にさせたりすることがないということになる。こうした行為に対しては，褒められた側が拒否する行為が好まれており，逆に，褒めをすんなり受け入れる対応のほうが，会話のルールから逸脱してしまい，より広範囲のフェイスバランスを崩すことに繋がってしまう。そうした場合にこそ，修復行動が現れる可能性が高くなるのである。

次に，自己指向的 FTA は，自分指向的否定的評価をすることで，自分のフェイスを押し下げるということである。同様に，そうした行為は発話者の＜謙遜／自慢しない＞という特徴に繋

がっているため，聞き手にとって，それを否定する行為が好まれている。同時に，それ以外の対応はルールから逸脱したものとして見られてしまう可能性が高い。両者間のフェイス状態に与える影響に関しては，6.3.1.2 で述べたように，ミクロ的な捉え方では，それが局所的にフェイス状態の均衡化を失わせる働きがあるものの，マクロ的な捉え方では，それによってフェイスバランスの全面崩壊や修復不可能の場合が観察されなかったということである。

## 6.4　修復・調整の枠組みから見るフェイスバランス

本章では，フェイスバランスの視点を確定した上で，それを崩す行動にはフェイス侵害行為だけでなく，フェイス支持行為も該当し，且つこの 2 種類の行為は指向性を持った作用力であると指摘した。しかし，フェイスという概念にはさまざまな要素が含められているため，B&L（1987）におけるフェイス概念を全面的には取り入れないことにした上で，その一部の構成要素として，指向性のある肯定的評価と否定的評価に絞って議論してきた。一対一の会話を対象として，自己指向的／他者指向的肯定的評価と自己指向的／他者指向的否定的評価という 4 種類の作用力の下で，会話参加者間に存在しているフェイスバランスの均衡状態に着目した。

フェイスバランスの均衡状態を維持する機能のあるものを調整行為とした一方，非均衡状態に陥った状況を解決する機能のあるものを修復行為とした。

まず，フェイスバランスの非均衡状態を抑制する調整行為を＜対人関係的調整＞の一種として捉えられることを主張した。というのは，発話者は相手に理解させやすくもしくは発話内容を受け入れさせやすくするために事前に発話の示し方や主張態度を調整するだけでなく，自分が両者間のフェイス状態に対する配慮が足りないことで相手に受容されないことを避けるために調整することも多い。そのため，自分の発話内部において，両者間のフェイス状態に悪影響を及ぼしうる発話のそうした働きを相殺する機能のある行為を取ることがよくある。本研究では，それらの行為を，対人関係的調整行為の一種として，「フェイス状態の非均衡化」を抑制する機能があると主張してきた。

次に，ミクロ的視点とマクロ的視点に分けて，フェイスバランスの非均衡状態を修復する行動について考察した。＜情報伝達的修復＞と違い，フェイスバランスの非均衡状態を解決する修復行為を＜対人関係的修復＞の一種として捉えられることを主張した。

ミクロ的な捉え方では，自己指向的／他者指向的肯定的評価と自己指向的／他者指向的否定的評価という 4 種類の作用力には，その程度が違うものの，いずれも両者間のフェイス状態にその均衡を失わせる機能があるため，それに対処する方策を修復行為として分析した。フェイスのアンバランスを引き起こした上記の行為はそれぞれ性質が異なるため，両者間のフェイスバランスに与える影響も異なってくる。従って，トラブルを引き起こし

た原因を取り除くことを目的とする修復行為についても，さまざまなパターンが観察された。つまり，局所的な会話連鎖において，異なる原因によって生じたフェイスのアンバランスに対して，聞き手が一定のパターンでそれを修復しつつ，両者間のフェイスバランスを維持しているシステムが潜んでいるのではないかと考えられる。

それに対して，マクロ的な考察方法から，分析単位を拡大した上で分析すると，上記で観察された調整行為や局所的な組織における修復パターンが見られない場合に，両者間のフェイスバランスが非均衡になってしまう現象が見られた。最も多く観察されたのは，自己指向的フェイス支持行為や他者指向的フェイス侵害行為が連続的に行われたことによってフェイスバランスが完全に崩壊してしまった場合である。前者によって生じた非均衡状態を修復する際に，聞き手が自分のフェイスを抑えることを通して共感形成を求める方策が有効であるものの，相手のフェイスを抑える方策はあまり効果的ではなかった。一方，後者によって生じた非均衡状態を修復する際に，連続的な A→B[↓]に対して連続的な B→A[↓]が観察され，表面的には相互的攻撃になっているものの，フェイスバランスの均衡に有効であることが判明された。

総じて，フェイスバランスというものが会話参加者間において客観的に存在し，発話がその均衡状態に影響を及ぼしうるため，話者が発話する際に，当面のフェイスバランスの状態及び相手の言動がそれに与える影響などを総合的に判断した上で，そのバランスを維持する効果のある発話を選択しているシステムが成り立っていると主張したい。このシステムの有効性を検証するために，本研究では，ミクロの捉え方とマクロの捉え方から，分析単位をある程度拡大することができたが，今後更に広範囲にわたる会話例を用いて検証する必要がある。

# 第7章　修復の開始形式についての日中対照

本章では，日本語と中国語における自己開始形式と他者開始形式について比較対照を行う。

## 7.1　　日本語と中国語の自己開始形式の比較

日本語における修復の開始形式についての先行研究では，他者開始に使用される形式に関するものが数多くあるが，自己開始形式の特徴についてのものが多くはないようである。原田(2011)では，自己開始・自己修復に注目し，自己修復の開始テクニック[46]を調査した。ここでは，原田(2011)で示した結論について，本研究で収集した会話資料をもとに検証した上で，中国語の自己開始形式と対照することを通して，両言語間の相違点や共通点を明らかにする。

### 7.1.1.　日本語の自己開始形式に関する先行研究

自己開始の形式について，SJS（1977）では少し触れられている。まず，「修復の自己開始と他者開始に際して，ある程度決まった開始の技法が用いられる」（西阪 2010：177）と示した。そして，具体的な開始形式に関しては，「(トラブル源を含む）当の順番内での自己開始においては，様々な非語彙的な言い淀みが用いられる」（西阪 2010：177）ということだけ言及した。例として，①[語や音の]中途停止，②音の伸び，③「えーと」などを挙げた上で，④修復対象となる部分を置き換えるという手段で修復を行う時に，「修復開始は置き換えとして認識可能な語の産出とともに行われる」（西阪 2010：179）ということも指摘した。④については，次の例 82 を参照されたい。

例 82＜BTS 女性同士討論 4＞

1A　→ 私は共働きに，がいいなあって思ってて。っていうのは女性は結婚するって
2　　専業主婦になっちゃったら，それでなんか，人生終わっちゃったのかなって。
3B　　ああ。

[46] 修復開始形式については，開始技法や開始テクニックなど呼んでいることもあるが，本研究では，修復開始形式や修復開始表現を用いる。

この例では，「共働きに」の「に」を「が」に置き換えたのである。しかし，同時に，①[語や音の]中途停止も発生している。つまり，単一の手段だけでなく，複数の手段を組み合わせて使用されることがある。それだけでなく，この例で生じた中途停止は，語の中断ではなく，文の中断である。

ここで，修復を開始する時に，修復対象がどの単位で中断されたか，修復対象に誤りを含んでいるかどうかという基準で自己開始のテクニックを考察した原田（2011）を取り上げてみる。原田（2011）の結論は，次の 3 点にまとめられている。

（1）語の産出途中で訂正を開始する場合，発話表現を挟まずに訂正が行われることが典型的で，語の中断という非発話的な表現だけでも誤り訂正の開始の標識になる。

（2）文の産出途中で訂正を開始する場合，「ていうか」「じゃない」「あっ」「違う」「そか」などの発話表現を挟んで訂正が行われることが典型的である。

（3）誤りを含む文を完全に産出した後にその誤りを訂正する場合，発話表現を挟んで訂正すが行われることが典型的である。

これについて，次の 2 点を指摘したい。第一に，原田（2011）では，修復ではなく，「訂正」を対象としている点から，訂正の対象すべてが何らかの間違いを含んでいるものであるということが分かる。しかし，本研究では，特に誤りを含んでいない場合においても，自分の発話を訂正する場合もあるということを示したい。第二に，中断された部分の単位を語や文に分けているが，本研究のデータではそれと一致していない例文が多く現れたため，開始形式の分類方法についてはまだ検討する余地があるのではないかと考える。

### 7.1.2. 考察方法

誤りを含んでいるものが生じた場合，たいてい修復が行われる[47]が，特に誤りではないものに対しても自己修復を開始することもある。これについて，次の例 83 を参照されたい。

例 83＜BTS 初対面同士 9＞

1A → ですから，あの：こうした先進国で，やっぱり感染症ってのなくなる，その，予
2 防できる感染症はなくなってしまうっていうのはね，まああまり，喜ばしいこと
3 ではないんですよね。
4B う：ん。

[47] ここで言う誤りとは，産出上の間違い，いわゆる言い間違いなどのような不本意なミスを指していると考えられるため，ここでは，このような産出ミスを含んでいない場合にも自己修復は行われるものであると示したい。

この例では，話者 A が，「やっぱり感染症ってのなくなる」という文を中断し，「その」という言い淀みで修復を開始し，「感染症」を「予防できる感染症」に変えたのである。この修復では，特に発話産出上のミスが見当たらない。本研究では，こうした場合も視野に取り入れる。

次に，原田（2011）の結論を批判しながら展開していく。

第一に，「語の中断という非発話的な表現だけでも誤り訂正の開始の標識になる」ということについて，これは SJS（1977）における「語や音の中途停止」と一致しており，「語の中断」を誤り訂正の自己開始標識としていいが，句や節の中断も文の中断も同じく扱うべきだと考える。

例えば，「だからじょ，男性の女性化でしょ?」（BTS 男女討論①）において生じた語の中断は，「それで，主婦を，専業主婦をやりながら自分の好きなこともできると思うんだけど」（BTS 女性同士討論④）という発話における節の中断と，「だから父親は最近，最近っていうか，ここ 10 年，20 年くらいかな，自分でお茶を入れるということは別に普通に」という発話における文の中断と，修復開始を示す機能においては同じであると考えていいいだろう。そこで，本研究では，中断された部分の単位に拘らず，修復開始側が何らかの中断を伴って修復を開始したか，それとも当面の発話の完成後に修復を開始したかを区別する。次節では，これについて量的に捉えてみる。

第二に，語の中断から文の中断まで，いずれも自己開始を標示する非発話的表現とする以上，修復開始側としては，利用可能の開始手段とは，①非発話的表現（各種の中断），②非発話的表現（各種の中断）＋何らかの発話表現，③中断せずに（発話完成後）修復開始という 3 種類になる。

第三に，原田（2011）では，「ていうか」「じゃない」「あっ」「違う」「そか」などのような開始形式を，非発話的表現に対し，発話表現としている。ただ，同論文の中では，このような発話表現は，「文の産出途中で訂正を開始する場合」において典型的であるとも示した。本研究で収集したデータでは，文の産出途中で使用されるケースも多く見られたが，同時に，語の産出途中と発話の完成後に使用されるケースもいくつか見られた。そして，本研究のデータから，自己開始形式として使われる発話表現にはある種の秩序性が潜んでいるようであり，それらの発話表現について分類基準を一つ提案することを試みたい。

### 7.1.3. 考察結果

#### 7.1.3.1. 非発話的表現の使用

ここでは，非発話的表現とは主に，語／句／節／文の中断といった各種類の中途停止を

指す。発話が完成されずに現れた一時停止には，話し相手に何らかの問題が生じたと認識させる機能が備わっている。本研究では，日本語の会話例を75個収集して分析した結果[48](参考資料Ⅰ)，①非発話的表現（各種の中断），②「非発話的表現（各種の中断）＋何らかの発話表現」，③中断せずに（発話完成後）修復開始という3種類にまとめられる。その分布状況は表11で示す。

表11：開始形式の各種類の分布状況

| 開始形式の種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|
| ①非発話的表現（各種の中断） | 30 | 40% |
| ②非発話的表現＋発話表現 | 32 | 42.7% |
| ③中断を挟まずに自己開始[49] | 13 | 17.3% |

表11から，非発話的表現の使用率が合計82.7%もあり，自己開始する時に，何らかの中断を伴っていることが多いことが分かってきた。そして，①と比べて，②の方は発話者が何らかのトラブルを抱えていることを際立たせる効果があり，それと同時に，何らかの発話表現を伴う方が相手にトラブルの性質を認識させる機能もある。これについては後に詳述する。③については，ここで少し説明する。

自分の発話を中断せずに自己開始することは，基本的に２種類に分けることができる。一つ目は，自己開始自己修復という組織の中で，文を言い終わってから問題に認識し，修復を実行する場合を指す。例84を参照されたい。

例84＜BTS 初対面同士雑談10＞

1A　→　あ：：でも，じゃあ，じゃあ，日本語と英語はもうぺらぺらなのかな?あ，英語
2　　はぺらぺらなのかな?
3B　　まあ，少しは。

この例では，会話者は二人とも日本人であるのに，AがBに「日本語と英語はもうぺらぺらなのかな?」と聞いたのは不適切であり，そこで，「あ」という感動詞で何らかの問題が生じたと認識したことを示してから，修復を実行したのである。それに対して，二つ目は，相手が既に何らかの反応を示した後に前の発話を修復するケースであり，いわゆる「第三順番での自己修復」に当たる。例85を参照されたい。

48 「参考資料1」を参照されたい。
49 13例のうち，何の開始形式も使用されていない例文が4つ観察されたので，②＋③を合計して，発話表現のある例文は41例である。その内訳については表12を参照されたい。

例 85＜BTS 初対面雑談 1＞二人がロシアの気候について話している。

1A　　夏はすごく暑いんですけど,,

2B　　=あ，そうですか=。

3A　　=短いですね，すごく。

4B　　あ，なるほどね：

5A　　でも寒いから逆に，きちんとしてて，うん：逆にいうと日本が暑いぐらい。

6B　　あ：そっか。

7A　→ あ，日本が寒いぐらい。

この例では,「逆にいうと日本が暑いぐらい」という文を完成し，且つ，相手が「あ：そっか」という納得の返事を示した後に，第三順番で「あ」という感動詞で問題に認識したことを示した上で修復を実行したのである。次節では主に，自己開始形式としてよく利用される発話表現について見てみよう。

#### 7.1.3.2. 自己開始形式としての発話表現

本研究でのデータを観察した結果，自己開始形式としての発話表現を形式から分類すれば，大まかには，次の 4 種類に区別できる。その内訳を表 12 で表す。

表 12：自己開始形式として使われる発話表現の内訳

| | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|
| (1) 直前の発話を否定する表現 | 12 | 29.3% |
| (2) 入出力制御系の感動詞類 | 11 | 26.8% |
| (3) 修復対象（一部）の繰返し＋っていうか | 12 | 29.3% |
| (4) 言い淀み系の感動詞類 | 6 | 14.6% |

以下では，各表現について例文を付けながら説明する。

（１）直前の発話を否定する表現。例えば,「じゃない」「違う」「～じゃなくて」「～わけではない」というようなものがある。これをもって修復開始する場合には，開始側自身は既に，直前の発話に間違いが含まれていることを認識した。次の例 86 を参照されたい。

例 86＜BTS 初対面雑談 3＞

1A→　　なんか関東，じゃない，東京より：どっちだ?西の人,,

2B　　西の方，うん。

（２）「あ（っ）」「あれ」で代表される入出力制御系の感動詞類。これについて，田窪(2005)

では，感動詞が「入出力制御系」(基本的に対話相手が言った内容を自分がどのように処理したかを示すもの)と「言いよどみ系」(間投詞に相当し，フィラーとも呼ばれるもの)に分けられている。同論文は「(入出力制御系の感動詞に) 上昇調或は促音を付けて発音される場合には，相手が言った内容を受理するのに失敗したことを表す機能がある」と(p. 19)述べているが，その他，発話者が自分の発話を監視しているメカニズムが働いているため，自分が言った内容について質的に問題があることを表す機能もあると考えられる。

言い換えれば，自分の発話に何らかの間違いが生じた場合に，「あ」「あれ」といった感動詞が見られれば，発話者は自分でその間違いに既に認識しており，これから修復に入るということを相手に知らせることができる。これについては，次の例 87 を参照されたい。そして，この例に生じたトラブルの性質は例 84 とほぼ同じである。

例 87＜BTS 初対面雑談②＞

1A　ふぅん，え，じゃあベトナム語もアメリカ語，あ，アメリカ語，英語ももうばっ
2　ちりですか?
3B　いや，ばっちりって程でもないですね。

（３）修復対象（一部）の繰返し＋っていうか。原田（2011）では，「文の産出途中で訂正する場合」に用いられる発話表現の一つとして，「っていうか」を列挙した。本研究のデータでは，75 例のうち，「っていうか」という形式は合計 12 例ある。表 13 を参照されたい。

表 13：自己開始形式としての「っていうか」

| 出現位置 | 例文数（割合） | 例文 |
|---|---|---|
| ①語の中断 | ３例（25%） | 例 88＜BTS 女性討論 3＞<br>相手の人にもこう意識が，ちが，違うというか，相手の人にもこう，また，(うん)理解が(うんうん)ないと，難しいかもしれない。 |
| ②文の中断 | ５例（42%） | 例 89＜BTS 男女討論 1＞<br>あと，なんかあの女の子はその，子供産もうと思ったら，産もうと思ったらっていうか，変わっちゃうじゃん?生活ががらっと(んー)。 |
| ③文の完成後 | ４例（33%） | 例 90＜BTS 初対面雑談 3＞<br>日本語科の方たちって，すごいですよね。すごいですよねぇっていうか，なんか(はい)私たちにない視点をもってるっていうか。 |

表 13 から分かるように，各位置に現れた例文数について，大きな差は見当たらなかった。つまり，本研究のデータからみれば，自己開始形式としての「っていうか」は，必ずしも文の産出途中で使われる発話表現ではないということである。そこで，自分で直前の発話を修復する際に，どのような場合に「っていうか」を使うかについて，その出現位置によってではなく，その機能に着目して議論すべきではないかと考える。上記の 2 種類（「違う」や「あっ」とかのような表現）の機能と最大の相違点は，「っていうか」を使用する時に，発話者は自分の直前の発話が間違っているは明確に判断をしていないというところにあるだろう。つまり，発話者は自分の発話に間違いと言えるほどのトラブルがないものの，当の表現では自分の意図を正確に表現できない，もしくは何らかの不自然や不適切がある場合に，自分のこうした認識を相手に伝えるかのように，「っていうか」を開始形式として使用するのである。

「っていうか」については，既に数多くの先行研究がなされてきた（梅澤 1999； 沖 1999；寺井 2000；李 2001；若松 2003；メイナード 2004；細馬, 2005；趙 2007 など）。先行研究によれば，発話における出現位置やその前後の内容によって，「というか」には様々な語用的機能があるということである。例えば，発話の冒頭に使用される場合，新しい話題を提示する機能があり，発話末尾に現れる場合，断言を回避する機能がある。そして，会話における「っていうか」には，＜共話形成＞の機能[50]もあれば，＜修復を予告する＞機能もある。本研究では，修復開始を示す機能のある「っていうか」を対象とすることを断っておきたい。また，もし修復対象となるのは「っていうか」の発話者自身の発話内容であり，且つ「X というか Y」の場合，修復組織からみれば，自己開始・自己修復という類型になり，一方，もし修復対象となるのは相手の発話内容であり，且つ「X というか Y」の場合，修復組織が他者開始・他者修復になるように，「X というか Y」というパータンにおいて，X と Y の発話者が同一であるかどうかによって，修復組織も異なってくるということである。本節では，自己開始形式としての「っていうか」について，次節では他者開始形式としての「っていうか」についてそれぞれ考察を行う。

---

[50]これは，会話参加者が「っていうか」で提示された部分を協力して完成する現象を指す。これについて，次の例を参照されたい。この例は BTSJ（2007）における「初対面同性同士雑談 9」から取り出した会話である。

1A　→　中国語は、発音も大事なんですけど、それよりもやっぱこう、上がり下がりっていうか,,

2B　　そう、声調でしょ。

3A　　そう、声調が、あれは、すごい大事ですね。

（4）言い淀み系の感動詞類。形式としては，主に「あの：」「その：」「ん：」「ええと」などの表現が観察された。しかし，自分の発話を修復しようとする際に言い淀みの現象が見られるものの，その言い淀み自体から，発話者が直前の発話に対してどのように判断したのかが分からない。

というのは，上記の形式では，「違う」「あっ」「っていうか」などの形式には，発話者が直前の発話に何らかの間違いや不適切なところがあると認識したことを相手に伝える機能があるのに対して，言い淀みには発話者が直前の発話に問題が生じたため言い淀んでいるか，それとも後続の内容で言い淀んでいるか，相手にトラブルの性質を明確に伝えられないのではないだろうか。これについては，次の例 91 を参照されたい。

例 91＜BTS 初対面雑談 4＞

1A　→ あ，もう就職，あの：：卒業ですか?
2B　　卒業です。
3A　　うんうん。
4B　　4 年生です，今。
5A　　あ，そっかそっかそっか。

正確に言うと，この例では，言い淀みだけではなく，＜文の中断＋言い淀み＞で修復開始を示したのである。先述した通り，発話表現の開始形式の殆どが何らかの中断を伴っている。程度が異なるかもしれないが，こうした中断自体にも発話者が問題を認識していることを伝える機能がある。つまり，中断は言い淀みの自己開始形式としての機能を強めることができる。もし文の中断がない場合，言い淀みだけでは，発話者が問題に認識し，修復を開始していることが相手にとっては不明瞭になってしまう可能性がある。次の例 92 を参照されたい。

例 92＜BTS 初対面雑談 10＞

1A　→ ですから，あの：：：こうした先進国で，やっぱり感染症ってのなくなる，その：
2　　予防できる感染症はなくなってしまうっていうのはね，まああまり，喜ばしいこ
3　　とではないんですよね。
4B　　うーん。

この例では，「やっぱり感染症ってのなくなる」という文が発話としてはまだ不完全であるが，文としては完成している。この文の直後に現れた「その：」という表現を挟んで，A が修復を行った。しかし，文の中断がないため，「その：」を発する時点で，B にとっては

A がその直後に修復を行うことに対する予測ができず，言い換えれば，言い淀みの「その：」だけでは，直前の発話に何らかの問題が生じていることを示すことができないのである。

### 7.1.4. 日本語における自己開始形式のまとめ

自己開始形式の機能は，＜先の発話に何らかの問題があるため，私自らそれを修復しようとしている＞という予告と，＜その問題の性質に対する発話者の判断＞とともに，相手に伝えるところにある。表 11（再掲）を踏まえて，その違いを見てみる。

表 11（再掲）：開始形式の各種類の分布状況

| 開始形式の種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|
| ①非発話的表現（各種の中断） | 30 | 40% |
| ②非発話的表現＋発話表現 | 32 | 42.7% |
| ③中断を挟まずに自己開始 | 13 | 17.3% |

まず，自己開始する場合，各種の中断自体には，発話者が修復を開始しようとするという予告機能があるため，①と②は同様に扱える。そして，③における 13 例のうち，9 例は何らかの発話表現を伴っており，4 例は何も挟まずに修復を実行している。すべての例において，予告機能が備わっていないのはこの 4 例しかない。

次に，①と②の違いについて述べる。発話の中断だけでは，修復を開始する予告になるものの，その直前の発話にどのようなトラブルが生じているか，発話者自身の判断はどのようなものか相手に伝わらない。本研究のデータから観察された四種類の自己開始形式は，トラブルの性質に対する発話者の判断においては，(1) 直前の発話を否定する表現と (2) 入出力制御系の感動詞類は何らかの質的な問題が生じている時に使われるのに対して，(3)「修復対象（一部）の繰返し＋っていうか」は間違いではないものの何らかの不自然／不適切なところがある時に使われることが多い。そして，(4) 言い淀み系の感動詞類では，発話者のトラブルの性質に対する判断が一定ではない。つまり，①と②を比べてみると，②のほうが，修復の予告機能だけでなく，トラブルの性質もある程度伝えることができる。この点から，非秩序とされてきた自己開始形式においても，非発話的表現や発話表現の使い分けなどにおいて，ある種の秩序が潜んでいると示された。

### 7.1.5. 中国語における自己開始形式との異同

HCR 中国語会話から 66 例を収集して分析した結果（参考資料Ⅱ），上記の分類方法は直接利用できることが分かったので，表 11 にならい，日本語と中国語の自己開始形式について，

各種類に分けてその内訳を表 14 で示した。

表 14：中国語の自己開始形式の分布状況

| | 開始形式の種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|---|
| 日本語（75 例） | ①非発話的表現（各種の中断） | 30 | 40% |
| | ②非発話的表現＋発話表現 | 32 | 42.7% |
| | ③中断を挟まずに自己開始[51] | 13 | 17.3% |
| 中国語（66 例） | ①非発話的表現（各種の中断） | 30 | 45.4% |
| | ②非発話的表現＋発話表現 | 14 | 21.3% |
| | ③中断を挟まずに自己開始[52] | 22 | 33.3% |

まず，両言語とも非発話的表現の使用が顕著であり，日本語は合計 82.7%もあり，中国語は合計 66.7%である。いずれも大半を占めている。発話の中断と何らかの発話表現には，いずれも発話者が修復に入ろうとするという予告機能があるため，発話の中断を挟まずに且つ何の発話表現も使用せずに自己修復開始する場合に限り，修復の予告機能がないと見なされる。日本語においては，修復の予告に当たる手段を使わずに自己開始する例は 4 例しか観察されず，それに対して，中国語においては僅か 2 例しかなかった。つまり，日本語にも中国語にも，自分の発話を修復する際に，何らかの手段で相手に予告するところが一致している。ただし，中国語と比べて，修復予告機能のある例文の割合は日本語のほうが上回っている。

次に，発話表現の使用状況について述べる。中国語における開始形式として使われた発話表現は 3 種類にまとめられる。次の表 15 を参照されたい。

表 15：中国語の自己開始形式として使われる発話表現の内訳

| | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|
| (1) 直前の発話を否定する表現 | 10 | 62.5% |
| (2) 入出力制御系の感動詞類 | 3 | 18.75% |
| (3) 言い淀み系の感動詞類 | 3 | 18.75% |

(1) 直前の発話を否定する表現には，主に［不是～］（「じゃない／～じゃなくて」に相当

[51] 13 例のうち，何の開始形式も使用されていない例文を 4 つ観察されたので，つまり，②＋③を合計して，発話表現のある例文は 41 例である。その内訳については表 12 を参照されたい。
[52] 22 例のうち，何の開始形式も使用されていない例文を 2 つ観察されたので，何らかの発話表現を使用した例文は，②＋③を合計して 16 例である。

する）[不对]（「违う」に相当する）[不能这么说]（「～わけではない」に相当する）という表現が見られた。その中には，「入出力制御系の感動詞類＋否定的表現」という複合的手段が使われた例が 2 例ある。次の例 93 を参照されたい。

例 93＜HCR 中国語会話 2＞

上次坐公交，　　不是公交车，　　打那个出租车，　　就那个接电话。

（この間バスに乗る，バスじゃない，タクシーに乗った時に，電話に出てたんで。）

(2) 入出力制御系の感動詞類。主に，[欸?（えっ）][啊（あっ）]が観察された。

例 94＜HCR 中国語会話 5＞

我是 0，　欸?　　我是 12 年毕业的。

私は０，えっ？　私は 12 年卒業したのです。

(3) 言い淀み系の感動詞類。主に，[那个 :] に代表される表現が観察された。

例 95＜HCR 中国語会話 2＞

如果下个星期三是演，那个，特殊演习的话，，

もし来週の水曜日演，その，特殊演習だったら，，

発話表現の使用上の相違点については，第一に，日本語においては，開始形式としての発話表現の種類が中国語より豊富であり，使用頻度も高い（日本語は 74 例のうち 41 例であり，中国語は 66 例のうち 16 例しかない)。第二に，中国語のデータから「っていうか」に相当する開始表現は観察されていないものの，他の三種類は形式も機能もほぼ一致している。つまり，直前の発話に間違いがある場合，日本語でも中国語でも，否定的表現や出入力制御系の感動詞が使用される傾向がある。一方，直前の部分に生じた問題が必ずしも間違いではなく，不適切／不自然なところがある場合において，日本語では「っていうか」という手段で自分のそうした認識を相手に伝えられるが，中国語には遅延や「怎么说呢」（日本語の「どういえばいいだろう」という表現に相当する）などの方法が考えられるが，本研究でのデータからは具体例が観察されなかった。

### 7.1.6.　本節のまとめ

本節では，原田（2011）の研究対象の範囲を拡大し，同じ順番内の自己開始形式だけでなく，第三順番における自己開始形式も含めて，全体的に考察を試みた。

そして，発話の中断の有無及び発話表現の有無に着目し，日本語と中国語に分けて量的に調査した。また，各種の中断及び発話表現の形式だけではなく，修復のプロセスにおける各手段の機能についても考察した。その結果，従来，非秩序的とされてきた自己開始形式の使用において，トラブルの性質によって各種の開始手段が使い分けられている可能性があると示された。なお，この秩序性は日本語だけでなく，中国語にも同じ傾向が観察されたため，一般的な現象ではないかと考えている。

## 7.2　日本語と中国語の他者開始形式の比較

### 7.2.1.　日本語における他者開始形式の形式整理と分類基準

本節では，構造上から修復行動の一部，いわば「修復開始」における他者開始という部分に限定して考察する。その上で，これまでの他者開始に関する先行研究を踏まえながら，その問題点を指摘した上で，修正案を提出することを試みたい。

具体的に言えば，英語及び日本語における他者開始表現について整理を行った先行研究をまとめたところ，その中には①他者開始の一部しかない②分類基準が不明瞭であるといった二つの問題点が浮かんできた。そこで，①を解決するために，まず組織別に他者開始・他者修復（Other initiated Other repair, OIOR）と他者開始・自己修復（Other initiated Self repair, OISR)という 2 種類に分けて開始形式を整理する。②に対して，「トラブル源を特定する程度の強弱」という従来の基準では判断不能な例が数多く観察されたため，それを改善するために，話し手の「修復要請の意図明示性」という視点から「相手に課する特定の労力」という基準をもって，従来の分類基準での順序付けにおける不合理なところを解決することを試みたい。

以下ではまず，日本語における修復の他者開始表現について形式整理する。

#### 7.2.1.1. 日本語における他者開始形式の整理

##### 7.2.1.1.1　先行研究の概観及びその問題点

ここでは，Schegloff et al(1977), Schegloff (2000, 2001a), Suzuki(2010)を中心に紹介する。

まず，Schegloff et al(1977)においては，他者開始の発生位置と形式について触れており，「自己開始と他者開始はそれぞれ決まった位置を取る」（西阪 2010：172）と述べ，他者開始は「トラブル源の出現した順番の直後の順番」にしか現れないと主張した。そして，表 16 に示すような 5 種類の＜他者開始の技法＞を列挙した。

表 16：Schegloff et al(1977)における他者開始形式

| | フォーマット | Schegloff et al(1977)の例 |
|---|---|---|
| ① | 無限定の質問[53] | Huh? What? |
| ② | 質問語でできているもの | Who? Where? When? |
| ③ | トラブル源を含む順番の一部を繰り返し，かつそこに質問語を付加する | All the what?／The who?／Met whom? |
| ④ | トラブル源を含む順番の部分的な繰り返し | One ten?／Nothing:: |
| ⑤ | 理解候補の提示 | You mean homosexual? |

そして，他者開始の発生位置については，Schegloff (2000)では，Schegloff et al(1977)での論述を修正した。つまり，「トラブル源の出現した順番の直後の順番」という位置以外にも他者開始が発生可能であるとして，⑴Multiples（複数回の他者開始がなされる場合），⑵Larger unit in progress（より大きな単位の発話を優先する場合），⑶Addressed other goes first（複数参加者の会話において，指定された聞き手による開始を優先する場合），⑷Post-response（取りあえず連鎖上適切な返事をしてから修復開始をする場合）といった 4 種類をあげた。

また，他者開始の形式については，Suzuki(2010)によれば，Schegloff (2001a)では Schegloff et al(1977)においての 5 種類のほか，⑥トラブル源を含む発話の一部を取り上げて質問するもの(ex: What's a Gwaff? )，⑦相手の発話全体に対して質問するもの(ex: Whatya mean by that?)の 2 種類を追加した。そして，この 7 種類は，Schegloff et al(1977)で述べたように，「このタイプは，順不同に並べられたものではない…いくつかの変数の上に働く相対的な「強さ」「力」といったものに基づいている（西阪 2010：236）」として，Schegloff (2001a)では「トラブルを特定する程度の強弱」という基準でもって順序付けたのである。

最後に，Suzuki(2010)では，上記で述べた順序に従い，日本語における他者開始形式を整理した。表 17[54]で示す。

53 Drew(1997)で取り上げた"open forms of repair initiation"と同じ形式である。

54 Suzuki(2010)では，表 17 にある矢印は実線ではなく破線で表示されている。なぜかというと，「"非特定的他者開始"と"理解候補の提示"は両端に位置すべきである一方，"繰返し"と"トラブル源を特定する疑問形式"とはどちらが上位に位置するべきか不明確なため，破線で表示したのである」(p153：筆者訳)という説明をしている。一方，suzuki(2010:p153)では，「細かいところについてはまだ議論の余地が残されているものの，Schegloff の提案は全体的には日本語のデータに応用することができる」と括っている。

表 17： Suzuki(2010)における他者開始形式

| | フォーマット | トラブルの特定する力 | Suzuki(2010)の例 |
|---|---|---|---|
| ⑴ | なし | 最弱 | え?ん?はい?あ?は?何? |
| ⑵ | 疑問詞＋上昇イントネーション | | 誰?いつ?どこ? |
| ⑶ | 部分繰返し＋疑問詞 | | おばあちゃんが何? |
| ⑷ | 部分繰返し＋「って」＋(疑問詞) | | そちらって：/どこ?それ。 |
| ⑸ | なし | | どういうこと?/よく分からない |
| ⑹ | 全部/部分繰返し(＋動詞句に「の」) | | 今日?/日比谷線?/行ったの? |
| ⑺ | ⅰ.X じゃない?<br>ⅱ.部分繰返し＋って＋理解候補 | 最強 | 藤木直人じゃなくて?<br>もうちょっとって１時間ぐらい? |

これには，主に二つの問題点があると考えられる。

第一に，他者開始される場合には２種類の修復組織を導きうるのであり，一つは他者開始・自己修復(略称：OISR)であり，いま一つは他者開始・他者修復(略称：OIOR)である。しかし，これまでの先行研究において扱われてきたのはすべて OISR の場合であり，OIOR という組織における他者開始表現の特徴については完全に無視されてきたと言っても過言ではない。それは Schegloff et al(1977)に由来したある論点と密接な関係があると言わざるを得ない。その論点とは，「修復の自己開始は自己訂正を導く，一方，修復の他者開始も自己訂正を導く」という自己訂正の優先性についてのものである。つまり，OIOR という組織が最も非優先的なものであるという認識はそれ以来の修復に関する研究において「暗黙の了解」になっているようであり，その例が少ない分，取り上げて分析する研究も少ないため，他者開始表現を分析する際に除外されてしまったのであろう。

第二に，「トラブル源を特定する力の強弱」という基準についてである。この基準によれば解釈できないことが生じてしまう。例えば，表 17 で示した例に限ってみれば，⑴の例，いわゆる「非特定的他者開始」ではトラブル源を特定できないとする一方，⑸で挙げられた「どういうこと?」や「よく分からない」といった例ではトラブル源をより明確に特定できるかというと必ずしもそうではないだろう。そして，⑷の「そちらって?」と⑺の２番目「もうちょっとって１時間ぐらい?」とでは「トラブルを特定する程度」にはあまり差がないのではないかという疑問も浮かんでくる。

この二つの問題点を解決するために，まず他者開始表現を修復組織類型によって 2 種類

に分けてその形式を整理することと，OISR における開始表現に対しては「トラブル源を特定する程度の強弱」という基準を踏まえて，「相手に課するトラブル特定の労力」という基準を提案したい。詳しくは後に述べるが，その前にまず組織別に他者開始形式を一通り整理してみる。

#### 7.2.1.1.2　日本語データから見る他者開始表現の形式

日本語における他者開始表現について，本研究でのデータから合わせて 65 例を収集した（参考資料Ⅲ）。その内訳を次の表 18 で示す[55]。

表 18：本稿のデータによる他者開始形式例の内訳

| 修復開始の発生位置 | 修復組織の類型 | 例文数 |
|---|---|---|
| TS と OI が離れていない | 他者開始自己修復(OISR) | 39 |
| | 他者開始他者修復(OIOR) | 17 |
| TS と OI が離れている | 他者開始他者修復(OIOR) | 9 |

また，TS（Trouble Source）と OI（Other-initiated）が離れているかどうかは修復類型を考える際に看過してはならない重要な点であると思われるが，他者開始表現形式だけに集中して，修復類型ごとに整理することを目的とする。

第一に，OISR における他者開始形式について述べる。ここでは，構成上の特徴によって 5 種類に分けて，量的多寡によって実例を挙げながら説明を進める。

ｉ．先行発話の一部を繰返し＋(文末イントネーション/引用形式って/だっけ)の形式で修復を要請する場合。主に，「そのままの語気で部分繰返し」のほか，「明日のこと?」というような「部分繰返し＋上昇イントネーション」や，「隙がない：：」のような「部分繰返し＋延長」といった形式があり，一方，「態度って」「え，３時の予約だっけ」といったような他の形式を付加される例もいくつか観察された。次の例 96 を参照されたい。

例 96＜BTS 初対面同性同士雑談 9＞A が B の研究方向について聞いている場面。

1A　　どう，どういうことやってらっしゃるんですか?

2B　　いや，いや，もうホントになんか，私の指導教官の人がなんか，もうヴォイスとか,,

3A　→　ヴォイス?

4B　　ヴォイスとか，だから受身とか(あ：)，使役とか，そうしたやつとか，あとまあ，周

55 略称について説明しておく。TS は‘Trouble-source’の略称であり，OI は‘Other-initiation’，そして TTR は‘Third-turn repair’とそれぞれ表示している。

5　　りにはアスペクトとかやってる人(あー)とか，まあ，私もまあ，それ似てますね。

6A　　え：あ，(ええ)へぇ：：あぁ：：

ⅱ．非特定的標識で修復を導いた場合。主な形式には，「えっ?」「あん?」「ん?」「え，どういうことですか?」「えっ，それは何か：」「どういうこと?」などが観察された。

例 97＜BTS 初対面雑談 3＞A が中国に留学した時 CD の海賊版を購入した経験があり，二人がそれについて話している場面。

1A　　でもほんと明らかに，か，海賊版って感じで::(あ:)途中で飛んだりとかしてる。

2B　　それって，違法ではないんでしたっけ? 大丈夫なんでしたっけ?

3A　→ えっ?

4B　　売る，売る人は違法なんでしたっけ。

5A　　違法なのかな? でもけっこう堂々と，店を出して…。

6B　　そうですよね。

ⅲ．確認発話で修復を導いた場合[56]。主に，「～かね／かな／かしら」といった文末形式が付加された例を観察した。このような表現に修復を要請する機能があると判断するには，その後続展開において，会話参加者の相互行動も重要な手がかりである。つまり，こうした発話を受けてから，聞き手がたいてい先の発話を修復した現象が見られたからである。そして，このような開始形式は理解過程のトラブルに対するのではなく，受容困難がある時に使われることが殆どである。相手の発話内容や意図を受け入れない時に，聞き手が受容しがたい態度を示す時によく使われる手段として捉えることができる。

例 98＜BTS 友人雑談 2＞二人は「相手に対して抱いている印象」という話題をめぐって話している。B の考え方がおかしいと言い出した後。

1A　　だから，ちょっと考え方がおかしいんや，相当。

2B　→ 考え方おかしいかな?

3A　　考え方っていうか，考えることがおかしい。だから，何か，なんつの，何だろうね。

4B　　なんやろ：ね。

5A　　だか，なんかよく分からんねん，とにかく，おまえの言うことは。

---

56　これについては，Levinson(1983,p339)では，以下のような論述がある。‘We have also briefly indicated that the delay component of a dispreferred second can be realized by what may be called a next turn repair initiator, or NTRI, which invites repair of the prior turn in the next turn.’ これは，このカテゴリを立てる根拠の一つであると思われる。

ⅳ.「疑問形式＋上昇調」という形式。主に，「何でですか?」「何ですか，それ」「誰?」などの例を観察した。

例 99＜HCR 日本語会話 2＞二人は A が台湾に行ったときの経験について話している。

1A　　台湾:観光みたいなことをしたのは,本当に故宮博物院に行った,それっきりなんで。
2B　→　何，何ですか，それ。
3A　　故宮博物院ってあのう，何だっけ，元々北京にあったお宝をその，まあ，ごそっ
4　　と(う：ん)，その，国民党政府が台湾に逃げた時に一緒に持ってたんで(う：ん)
5　　で，を展示している(う：：ん)博物館，で，けっ，かなりいいものがあって,,
6B　　あ〜あ。

ⅴ．「理解候補＋上昇調」という形式。「〜じゃないの?」といったような焦点や前提を持つ疑問文で修復を要請する形式が使用された例が観察された。

これと関連して，串田(2009)では理解チェックに用いられる基本的形式として，「①指示語の復元②省略されたことばの復元③再定式化(reformulate)④挿入可能なことばの提示⑤置き換え可能なことばの提示」という 5 種類を提示し，さらに，Kusida(2011)ではその論述を一部修正し，「a.直示表現で理解候補を示す b.指示語の復元 c.挿入可能なことばの提示 d.置き換え可能なことばの提示(p.2721:筆者訳)」の 4 種類にまとめあげた。しかし，串田の論述は「理解候補を受けた側が「うん」もしくは「そう」という表現で肯定的返答を与えた場合」に関するものであり，本研究で取り上げた「理解候補を提示したが，それは不適切であったため，自己修復を導いた」という現象とは性質が異なっていることを予め断っておきたい。つまり，串田における現象とは Schegloff et al(1977)で言及された「弱められた他者訂正(modulated other correction)」に当たる現象であり，本研究では「他者開始・自己修復」に相当するものである。次の例 100 を参照されたい。

例 100＜BTS 友人雑談 5＞B は彼女との別れ話をしている途中。

1A　　それで，お前からもう,,
2B　　[いや],,
3A　　[バイ]バイっつった[↓]
4B　　おれか，おれからじゃないな。
5A　→　あっちから?[57]。

57　ここに関してはある重要なことを無視することはできない。それは，この 5 つの例において，修復開始側が修復を要請する意図の明示程度がかなり異なっているということを指す。程度の差はあるものの，他の例と違って，例(9)における A は「あっちから?」という表現で必ずしも修復を要請する意図を持っているとは判断しがたく，ただ結果的に相手の修復行為を導いたに過ぎないということから，「意図的修復要請」

6B　　いや，あっち，あ，ちゃうちゃうちゃう。“もう，おれはもう高校辞めます”っ
7　　ていう話(うん)をした，し，もうそんときには，別れられると思ったんだよ。

上記の内容のまとめとして，表 19 を提示する。

表 19：OISR における他者開始形式の内訳（日本語）

| | 種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|---|
| i | 先行発話の一部を繰返し＋上昇調 | 10 | 35.9% |
| | 先行発話の一部を繰返し＋(って/だっけ・・) | 4 | |
| ii | 「え?はい?」のような非特定的開始標識 | 10 | 25.7% |
| iii | 「かな/かねといった文末形式」がある確認発話 | 9 | 25% |
| iv | 疑問形式＋上昇調 | 3 | 7.7% |
| v | 理解候補＋上昇調 | 3 | 7.7% |

第二に，OIOR における他者開始形式に関して，TS と OI が離れていない場合と TS と OI が離れている場合とに分けて述べる。まず，トラブル源と他者開始が離れているか否かによって２種類に分けて整理する。

(1) TS と OI が離れていない場合において，主に 4 種類の開始形式が観察された。

ｉ.「否定応答」で修復開始を標識する。主に，「いや＋(ていうか/～じゃない)」「違う」「じゃなくて」などの形式が観察された。会話分析の立場から「いや」を分析した串田(2005)では，「いや」が用いられた主要な位置として挙げた 6 種類のうち，①相手の聞き間違いや誤解を正す発話の冒頭②自分の先行発話(部分)を撤回する発話の冒頭といったような修復と直接的に関係しているものがある。他の否定応答も同じような性質を持っていると言えよう。次の例を見よう。

例 101＜BTS 初対面同性同士雑談 6＞A はこの実験で既に何人かと話してきて，B の前の二人が日本語教育の人だったので，B もそうであるかもしれないと推測していたことが背景になっている。

1A　　東外大の方ですか?
2B　　はい，ここの大学院で。
3A　　あっ，じゃ，あっ，じゃあ日本語教育を。
4B　→　じゃなくて，全然…，え：と，地域研究の，中国の方の研究を[してまして]。
5A　　[あっ，そうなんですか]。あ，なるほどね，中国。

と「結果的修復要請」に分けて議論を進めていきたい。

6B　　はい。

ⅱ.「全体/部分繰返し＋っていうか」という形式で修復開始を標識する。

例 102＜BTS 初対面同性同士雑談 4＞B は既に就職が決まった大学 4 年生で, A は台湾で日本語教師になる前に 10 何年間も日本の企業で働いたことがある。A は B に就職が決まってから正式に入社するまでの一年間どうやって過ごすかについて聞いたあと。

1A　　自分でそれなりにパソコンとか(うんうんうん), 財務とか(お：)やっぱある程度勉
2　　強しとかないと駄目なのかなあ, とか思ってるとこです。
3B　　前向きですね：ん：
4A　→　前向きっていうか後ろ向きな前向きですよ。
5B　　いやいや。
6A　　就職してから苦労したくないからまあ今のうちに[やっとかなきゃとか思って]。
7B　　[それはでも]うん, いいと思う。役に立つ, うん。

ⅲ.「逆接表現」で修復開始を標識する。主に,「でも(ね)」「ただ(ね)」といったような形式が観察された。

例 103＜BTS 友人同士男女間討論 3＞

1A　　女の人はさ, なんかさ(ん), 毎朝化粧をしなきゃいけないとかさ(ん：), なんか
2　　考えると, あーなんかめんどくさそうだなとか思うんだけどさ(うん),,
3B　→　でも, 別にしない人も［いるしね]。
4A　　［でもさ］(ん：), なんか聞いた話なんだけどね(んん), なんか友達の彼女は
5　　化粧してるのを見てね, なんか〝女の人って毎日化粧しなきゃいけないから大変だ
6　　よな〟, ってつぶやいたんだって(んん)。そしたらね, 彼女がね(ん：), 〝男は素
7　　顔で勝負しなきゃいけないからかわいそうだよね〟, とか言って。

ⅳ.「入出力制御系の感動詞類[58]」で修復開始を標識する。主に「あ：：」「あっ」「ん：」などのような発音上の延長・抑揚(上昇調や促音を付けるような)などのパターンを指す。

例 104＜BTS 初対面同性同士雑談 2＞A は台湾の大学で日本語教師を勤めており, B は卒業後

58 田窪(2005)での感動詞に対する分類に用いられた用語であり, 感動詞を主に「入出力制御系」(基本的に対話相手が言った内容を自分がどのように処理したかを示すもの)と「言いよどみ系」(間投詞に相当し, フィラーとも呼ばれるもの)に分けており, 本稿では前者の使用が数多く観察された。これは,「(入出力制御系の感動詞を) 上昇調で或は促音を付けたりして発音される場合には, 相手が言った内容を受理するのに失敗したことを表す機能があると田窪(p.19)で示したことと関連していると考えられよう。

台湾へ就職しようと考えている。A は，経営難に陥った当地の日本語学校で日本語教師を勤めている知り合いのことについて B に話したあと。

1A　　そうした意味では，そうしたちゃんと，福利じゃないけど，うん，条件がいいところ，，

2B　　そう［ですね］。

3A　　［とかで］決まると，うん，大分楽ですよね，うん。

4B　　条件がいいところって言ったら大学とか高校になりますね。

5A　→　あ：：：高校はちょっと非常勤：：以外(あー)は難しいかもしれない。

6B　　そうすると，，

7A　　まぁ，大学に入れれば１番良さそうだと思う。

8B　　そうですよね。

(2) TS と OI が離れている場合においては，形式上がバラエティーに富んだが，ほぼ同じパターンをなしている。それは「うん/そうですね/なるほどね＋でも/ただね/いや」などのように，いったん肯定の返事をしてから逆接表現などで修復を開始するものである。

例 105＜HCR 日本語会話 3＞二人(K と N)は N の主人の仕事について話している。

1K　　道内でガイドをなさっているんですか。

2N　　うん。

3K　　う：ん，すごい年間韓国人の方がすごい旅行来ますもんね，絶対需要がありますよ。

4N　→　そうですね。でもいまはそんなに来ていないですけど，でも，，

5K　　そうなんですか。

6N　　やっぱり震災の後だと思う。

以上，他者開始他者修復における修復開始形式について整理してきた。その結果を表 20 にまとめた。

表 20：OIOR における他者開始形式の内訳（日本語）

| | 修復開始形式のフォーマット | 例数 |
|---|---|---|
| TS と OI が離れていない | 否定応答(いや/違う/じゃなくて) | 7 |
| | 全体/部分繰返し＋っていうか | 4 |
| | 逆接の接続表現 | 4 |
| | 入出力制御系の感動詞類 | 2 |
| TS と OI が離れている | 肯定の返事＋逆接の接続表現 | 9 |

最後に，他者開始・自己修復における他者開始形式と，他者開始・他者修復における修復開始形式について，機能上において重要な相違点があることを看過してはならない。というのは，両者に共通している機能はトラブルを特定することであるが，そのほか，前者には他者開始形式をもって相手に修復を要請する機能があり，後者には修復を要請する機能がなく，相手に修復に入ることを予告する機能がある。ただ，他者開始他者修復という組織において，何らかの予告表現，いわゆる他者開始形式がないケースも見られたため，そうした直接的な修復実行のケースを考えると，こうした予告機能が必ず付随されているものではないということである。

ここで分かったのは，修復の組織類型によって開始形式の機能も異なってくる可能性があるため，開始表現の形式だけでなく，その機能に着目して，会話参加者がどのような基準で使い分けているかについて考察する必要もある。本研究での分類基準を提案する前に，先行研究での知見を説明しておきたい。

#### 7.2.1.2. OISR における開始形式の分類基準

先述したように，先行研究における「トラブル源を特定する力の強弱」という基準では，Suzuki(2010)でまとめられた 7 種類の形式を順序づけることは無理があるため，その代わりに「相手に課する修復の労力」に着目し，その代案を考えてみたい。修復の労力には，大まかに，トラブルを特定する労力と修復実行になるまでの労力からなる。修復開始形式とは，主に前者のほうに関わっている。

繰返しになるが，本研究では，トラブルを発話産出/聞き取り・理解・受容という三つの段階に分けて捉えている。後ろの段階におけるトラブルの認定は，前の段階においてトラブルが生じなかったことを前提としている。例えば，OISR において，相手が修復を要請する表現を発した場合，受ける側にとってはまず，産出問題かそれとも聞き取りのトラブルかを判断しなければならず，もし前の段階に問題がなければその次の段階，いわゆる理解上のトラブルであるかどうかを判断し，最後に受容上のトラブルであるかどうかを確認する，といった順序に従ってトラブルを特定する作業を行うはずである。だが，例文を観察すれば分かるが，理論上かなり複雑な作業が一瞬で行われるケースが殆どであり（もちろん，一回目で特定失敗のため何度も修復開始を行われるケースもあるが），聞き手が開始表現を通して，さまざまなヒントを話し手に与えているのではないかと考えている。換言すれば，相手に課するトラブル特定の労力が異なっている開始表現が使用されたからである。

それで，表 19 で示した他者開始自己修復における 5 種類の開始形式について具体的に考えてみる。

第一に，例 97 のように，非特定的開始標識が使用されれば，受け手は「産出/聞き取り/

理解/受容」というすべての段階を範囲として特定作業を行わなければならず，話し手の「修復要請の意図」が明示されていないので，特定の労力もかなり大きいと言えよう。

第二に，例 98 で示したような＜確認発話＞が使用された例では，受け手が聞き取りに問題が生じなかったとすぐ判断できるはずであり，「産出/理解/受容」から特定しなければならない。話し手の「修復要請の意図」が曖昧であるため，トラブル特定の労力も相当大きいが，非特定的開始標識よりトラブルにアクセスしやすいと言える。

第三に，＜部分繰返し＋他の形式や上昇調＞という形式は，殆ど先行発話の一部に対しての理解問題が生じる時に限って使用されており(受容の問題にも関わりそうであるが，現時点ではそのような例は見つかっていない)，話し手の「修復要請の意図」がより顕在化し，受け手にとって「理解か受容」の段階から特定すればいいため，トラブルにアクセスする労力が前の２種類より小さくなったと言えよう。ちなみに，会話における繰返し発話とは，中田(1992)，福原(2010)によれば，「相手の発話を言語表現として理解できるが，内容に関して不明な部分があり，説明を求める」という「説明要求の機能」や，「内容が確かであるかどうか確認を要求する」という「確認要求の機能」や，「相手に反論・訂正を行う時，相手の感情を考慮し，和らげようとする「反論の和らげ」という機能が備わっている会話方策であるため，理解か受容のトラブルに対しての修復要請表現として使われているわけである。

第四に，例 99 で示したような＜疑問形式＋上昇調＞という形式は，先行発話の一部に対しての理解不能というトラブルが生じた場合に使われた例しか観察されていない。つまり，このような形式が使用されれば，話し手の修復要請の意図が明示され，受け手にとっては＜ある部分に対しての理解不能＞というトラブルを特定すればいい。そのため，トラブルにアクセスする労力もかなり小さくなる。

第五に，例 100 で挙げた＜理解候補＋上昇調＞という形式では，話し手が先行発話のある部分に対して理解上の問題が生じたことを明示しただけでなく，試解決案まで提供したという点から見れば，この形式を受けた側が自らトラブルを特定する義務さえなくなったと言えよう。したがって，トラブルを特定する労力も最も小さいと判断できる。

さらに，トラブルを特定してから修復実行に入る。しかし，修復実行の労力はトラブルの性質によって大幅に異なる可能性がある。例えば，産出/聞き取りの問題ならトラブルになった部分を繰返すだけで解決できるが，理解の問題に対してはトラブルになった部分を再解釈することが必要になる。一方，受容のトラブルとなると，先行発話の特定の部分ではなく，その発話の前提や推意などを受け入れがたい状況も生じうるため，修復実行されるまでいっそう労力がかかってしまうと言えよう。

従って，先述した受容段階に関わりそうなトラブルを特定する際によく使用される 3 種

類の形式で開始される修復では，その修復を実行する労力も相応的に大きくなると言える。つまり，トラブルを解決する労力とは，トラブル特定の労力と正比例になっていると言えよう。他者開始・自己修復という組織類型における他者開始表現の特徴については表 21 で示す。

表 21：OISR における他者開始形式の分類基準

| 他者開始形式の種類 | 相手に課する特定労力 | トラブルの性質と位置の特定 |
|---|---|---|
| 非特定的開始標識（え?はい?あん?どういうこと?など） | 大 | 性質も位置も判断不能 |
| 確認発話（「かね/かな」のような文末形式がある） | | トラブルの性質が判断可能 |
| 先行発話の部分繰返し＋上昇調/って/だっけなど | | |
| 疑問形式＋上昇調 | | 性質も位置も判断可能 |
| 理解候補＋上昇調 | 小 | |

つまり，これは，他者開始自己修復という組織において，聞き手(即ち他者)がトラブルの性質によって異なる他者開始形式を使い分けている可能性が示唆されている。一方，異なる開始形式は話し手にかける負担も異なっているため，その大きさはトラブルが「物理的失行(産出ミスや聞き取り失敗など)→理解レベル→受容レベル」といったような順に大きくなるということが分かってきた。

#### 7.2.1.3. 日本語における他者開始形式のまとめ

本節では，英語及び日本語における他者開始表現について整理を行った先行研究をまとめた上で，その中には①他者開始の一部しかない②分類基準が不明瞭であるといった二つの問題点を指摘した。それらを解決するために，まず組織別に OISR/OIOR という 2 種類に分けて開始形式を整理し，そして，「トラブル源を特定する程度の強弱」という従来の基準の代わりに，相手に課する修復労力の構成要素に当たる＜相手に課する特定労力＞及び＜トラブルの性質と位置を特定する程度＞という点に着目し，従来の分類基準での順序付けにおける不合理なところに対して，新たな視点から提案を試みた。

他者開始表現に対しての順序付けは OISR に限っているところが先行研究と一致している。というのは，OISR における他者開始表現は修復を要請する機能を持っているのに対して，OIOR における開始表現は性質上 SISR と似ており，修復に入ることを予告する機能しか持っ

ていないからである。また，修復の開始と実行は常に一体化しており，特に目立った開始形式を使用されていないものが数多くあるため，同じ手法では通用できないからである。

### 7.2.2. 中国語における他者開始形式との異同

#### 7.2.2.1. 中国語のデータからみる他者開始形式

日本語における他者開始形式について，前節で得られた知見を踏まえながら，中国語から収集した会話例（参考資料Ⅳ）を用いて，その使用状況における異同について考察する。

まず，日本語のデータでは，修復組織に分けて他者開始形式が使用された例文（65 例）を集めたが（その内訳を表 18 で示した），同じ手法で中国語のデータ（64 例）を収集した。その内訳を次の表で示す。

表 22：中国語のデータによる他者開始形式例の内訳[59]

| 修復組織の類型 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|
| 他者開始・自己修復(OISR) | 45 | 70% |
| 他者開始・他者修復(OIOR) | 19 | 30% |

次に，64 例のうち，他者開始・他者修復の 19 例から，直接修復を実行した例が 8 例があった。これは修復を開始する予告機能のある形式の不在であり，本研究では，便宜上，「ゼロ形式」で呼ぶ。そこで，64 例のうち，何らかの開始表現を伴っている例は合わせて 56 例である。それらを分析したところ，日本語と同じく，以下の 5 種類に分けて捉えることができる。量的多寡によって分けておき，例文を挙げながら説明する。

Ⅰ．先行発話（もしくはその一部）をそのまま繰返す（2 例）もしくは発話末が上昇調である（12 例），「ってどういう意味」に相当する［什么意思］（2 例），終助詞の［啊（a)］（5 例）を付ける場合。次の 2 例を参照されたい。

例 106＜HCR 中国語会話 2＞A が学部時代の専攻を B に伝えている。

1A　　外国语学院的英日方向。

2B　→ 英日方向?

3A　　对，就是，我们外国语学院嘛，然后有日语系，日语系里头有英日方向，英法方向。

4B　　啊:::

（日本語訳）

[59] 例文数が足りないかもしれないが，中国語のデータから，トラブル源と修復開始が離れた例文は観察されなかった。

1A　　外国語学院の英日コース。
2B　→ 英日コース?
3A　　そう。つまり，外国語学院があって，その下に日本語専攻があって，日本語専攻
4　　には英日コース，英仏コースがある。
5B　　あ:::

この例に起きたトラブルの性質については，相手の発話の一部に対しての不理解であり，このカテゴリーにおいては最も多いケースでありながら，すべてこうした不理解に対しての修復要請表現である。次の例 107 をも見てみよう。

例 107＜HCR 中国語会話 6＞北大にどれぐらいの留学生がいるかについて話している。
1A　　一共是，我看网站上写的是 1100 留学生，八百是中国人。
2B　→ 一共 1100 个［留学生啊］。
3A　　1100 多，不到 1200，然后中国留学生是 780 多还是 790 多来着。
（日本語訳）
1A　　合わせて，ホームページには留学生 1100 名，そのうち 800 名が中国人って書いてあります。
2B　→ 留学生が合わせて 1100 名なんですか。
3A　　1100 ちょっと，1200 未満。で，中国人の留学生が 780 か 790 ぐらい。

この例で観察されたのは，相手の発話の一部を繰返してから，［啊（a)］という終助詞が付けられているものである。この［啊（a)］の機能について，中国語の終助詞に関する先行研究として Wu（2004）を参考する。まず，Wu（2004）では［啊（a)］の出現位置を三種類に分けられている[60]が，本研究のデータから，「先行発話のそのまま繰返し（repeat）／部分繰返し(partial repeat)／先行発話に対する理解候補」という発話の最後に現れる場合が最も多かった。その機能について，Wu（2004）では，「繰返された部分が話し手の期待に反していることを示すこと,いわゆる,認識のずれや不同意を事前に予告する機能がある」(marks the matter being addressed as counter to the a speaker's expectation-i.e., marking a pre-misalignment or pre-disagreement. Wu, 2004:235，筆者訳)。これによれば，この部分で観察された［啊（a)］には，すべてそうした機能が備わっていると言える。修復開始側は相手の言ったことが自分の期待とずれていると認識したため,［啊(a)］を付けて修復を要請したのである。

[60] 三種類とは，①repeat, partial repeat or candidate understanding of another's prior talk ②grammatically-constructed question ③non-interrogative というものであるが，本研究では①しか観察されなかった。

そして，例 107 では，［啊（a)］を上昇調に変えてもそのまま削除しても，修復要請の機能が変わらないことを考えると，こうした例を単独のカテゴリーとして立てるより，上昇調と同じく，先行発話の（部分）繰返しという手段に伴って現れたものとして捉えたほうが適切ではないかと考える。

Ⅱ．非特定的開始標識が使用される場合。形式としては，［嗯?］（「ん?」に相当する）［啥?］（「何?」に当たる）［啊?］（「あ?」）［什么意思?］（「どういう意味?」に相当する）というものが見られた。次の例を参照されたい。

例 108＜HCR 中国語会話 7＞B の趣味はダイビングであり,A に「20 メートルまで潜ったら，水面に戻るまで時間がどれくらいかかるか」を聞かれた。

1A　　那大概一次是多长时间?
2B　　两米每分钟。
3A　　两米每分钟（好像在考虑)。
4B　　然后::
5A　　（20 米）四十分钟?
6B　→ 嗯?
7A　　两米每分钟,,
8B　　五米每分钟，什么两米每分钟，五米每分钟（两人开始笑)。

（日本語訳）

1A　　で，大体，一回どれぐらいかかりますか。
2B　　一分間で２メートル)
3A　　一分間で２メートル＜考えているようである＞
4B　　そして:,,
5A　　４０分?
6B　→ ん?
7A　　一分間で２メートル,,
8B　　一分間で 5 メートル，何が一分間 2 メートルだよ，一分間で 5 メートル。＜二人笑い出す＞

Ⅲ．理解候補＋上昇調という手段が使われた場合。日本語では，65 例のうち，3 例しか観察されなかったが（4.6%），中国語では 20%も占めている。次の例を参照されたい。

例 109.＜Wu,2004：129＞

1A　　欸?那什么时候毕业?

2B　→ Julie 啊?

3A　　嗯。

4B　　大概十月吧。

（日本語訳）

1A　　え?じゃ，いつ卒業なの。

2B　　Julie のこと?

3A　　うん。

4B　　おそらく十月かな。

この例における「先行発話に対する理解候補」に付けられた［啊（a)］の機能については，先に述べた通り，相手の発話に対して理解上の問題が生じてしまい，修復を要請する時に，他者開始表現の最後に使われることが多い。日本語訳と結びつけて考えると，ここの［啊（a)］に相当する表現は，「か／ですか」になるが，修復要請という機能に着目すると，それは必須要素ではなく，あくまでも理解候補に付随されたものに過ぎないということである。

Ⅳ．確認発話で修復要請の機能を果たした場合。このような場合，これまで論じてきたⅠ．先行発話の一部繰返しⅡ．非特定的開始標識Ⅲ．理解候補＋上昇調という三種類と違い，理解上の問題が起きる時ではなく，相手の発話を受け入れない時に確認発話として発されたものとして捉えることができる。日本語では，「～かな／かね」という形式が観察されたが，それはいずれも相手の意図や発話内容をすぐに受容することができないときに発されたものである。同じように，中国語のデータから，［是吗?］（「そうかな」に相当する）［不会吧］（「そんなわけないでしょう」に相当する）という形式が観察された。次の例を参照されたい。

例 110＜HCR 中国語会話 2＞二人があるドラマについて話している。

1A　　芒果台改的吧?

2B　　芒果还是湖南，现在湖南卫视,,

3A　　湖南卫视就是芒果。

4B　→ 是吗?

5A　　湖南卫视那个标志就是那个芒果。

（日本語訳）

1A　　マンゴーテレビ改作したでしょ。

2B　　マンゴーテレビそれとも湖南テレビかな，いま湖南テレビで,,

3A　　湖南テレビはマンゴーテレビだよ。

4B　→ そうかな?

5A　　湖南テレビのマーク，あのマンゴーでしょう。

この例では，マンゴーテレビは湖南テレビであるかどうかについて，二人の認識が異なることによって生じたトラブルである。3A では，A が既に B の間違った世界知識に対して，他者開始・他者修復を実行したのであり，4B から B がその趣旨をすぐ受け入れない態度が窺える。これは確認発話の一種であり，相手の発話を受容することに困難である場合によく使われるものである。

Ⅴ．疑問形式＋上昇調という手段で修復を要請する場合。それぞれ，日本語では３例，中国語では 2 例観察された。形式的には，［谁?］（「誰?」）［哪个…］（「どの…」）というものが見られた。

例 111. ＜Wu,2004：141＞　　（日本語訳）

1A　　哦::你跟陈祖一样，在仁爱路。　　ふ：ん，陳祖さんと同じ，仁愛路だね。

2B　→ 谁?　　誰?

3A　　陈祖。　　陳祖さんよ。

4B　　啊，对对对对，我跟陈祖一样。　　あ，そうそうそう，陳祖さんと同じだ。

上記の５種類を整理したところ，45 例に占める割合などについて次の表にまとめた。

表 23：OISR における他者開始形式の内訳（中国語）

| | 種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 先行発話（一部）の繰返し＋上昇調 | 12 | 46.7% |
| | 先行発話（一部）の繰返し（時には［什么意思／啊］という形式が付けられる） | 9 | |
| Ⅱ | ［嗯?啥?啊?什么意思?］など非特定的開始標識 | 9 | 20% |
| Ⅲ | 理解候補＋上昇調 | 9 | 20% |
| Ⅳ | ［是吗］というような確認発話 | 4 | 8.9% |
| Ⅴ | 疑問形式＋上昇調 | 2 | 4.4% |

そして,「他者開始他者修復」における修復開始形式に関しては,19 例のうち,8 例が「ゼロ形式」,いわば,直接他者修復を実行した場合のほか,修復を予告する機能のある開始表現が 11 例観察されたため,その内訳及び例文を次の表 24 にまとめた。

表 24：OIOR における他者開始形式（中国語）

| 種類 | 例文数 | 割合 | 会話例 |
|---|---|---|---|
| ①否定的応答（[不是]（「違う／じゃなくて」に相当する（2 例））[没有]（「それがない」という意味に近い）（4 例）） | 6 | 54.5% | 例 112＜HCR 中国語会話 2＞<br>1A:如果下个星期三是演，那个，特殊演习的话，,<br>2B:→*不是*星期三，星期五。<br>3A：星期五那个啊（啊），十页左右。 |
| ②（一部繰返し）＋遅延 | 3 | 27.3% | 例 113＜HCR 中国語会話 4＞<br>1A:你要是预算到了 3 万多，4 万的话，你没有必要合租啊。<br>2B:→（2 秒）*合租*…其实我不是因为钱，确实不是因为考虑钱。 |
| ③入出力制御系感動詞（[嗯（en)][啊（a)]という音を延ばしたもの） | 2 | 18.2% | 例 114＜HCR 中国語会話 4＞<br>1A:你们店跟你一起打的是不是都是跟你同龄人啊。<br>2B:→*嗯…*我是 hall 里面最大的。 |

以上，他者開始・自己修復という修復組織における他者開始の形式および他者開始・他者修復という組織における他者開始形式について，日本語の形式を踏まえて整理してきた。ここでは，この 2 種類の開始表現の形式に重点を置き，その機能についてはあまり分析しなかったが，他者開始形式の共通の機能とはトラブルを特定することであるが，両者のその最大の違いとは，前者には，相手に修復を要請する機能もある一方，後者には，修復側が修復を実行することを予告する機能がある。

#### 7.2.2.2. 日本語と中国語の異同

まず，他者開始・他者修復という組織における開始形式について，その分布状況を表 19（以下で再掲）と表 23 を比べてみる。

表 19（再掲）：OISR における他者開始形式の内訳（日本語）

| | 種類 | 例文数 | 割合 |
|---|---|---|---|
| i | 先行発話の一部を繰返し＋上昇調 | 10 | 35.9% |
| | 先行発話の一部を繰返し＋(引用形式って/だっけ・・) | 4 | |
| ii | 「え?はい?」のような非特定的開始標識 | 10 | 25.7% |
| iii | 「かな/かねといった文末形式」がある確認発話 | 9 | 25% |
| iv | 疑問形式＋上昇調 | 3 | 7.7% |
| v | 理解候補＋上昇調 | 3 | 7.7% |

表 19 と表 23 から次の 3 点が分かる。

第一に，日本語と中国語では，他者開始・自己修復という組織における開始形式の類型はほぼ同じであり，5 つの下位類型が観察された。そして，よく使われる開始手段も同じであり，一つは「先行発話の繰返し＋さまざまな付随形式」であり，いま一つは非特定的開始標識である。

第二に，日本語も中国語も，他者開始表現の機能が似ている。修復の労力には，トラブルを特定する労力と修復実行の労力があり，この 5 種類の開始表現が相手に課する「トラブル特定の労力」は異なる。この点は日本語と中国語では共通している。つまり，非特定的開始標識＜確認発話＜先行発話の（部分）繰返し＋各種類の付随形式＜疑問形式＋上昇調＜理解候補＋上昇調という順に，相手にとって，トラブルが理解過程の問題か受容過程の問題か，どの部分についてのトラブルかなどを特定する労力が小さくなる。

第三に，日本語と中国語の相違点に関しては，日本語では，「かね／かなという文末形式が付けられる確認発話」が 25%であり，三番目の手段となるが，中国語では，それに相当するのは「理解候補＋上昇調」である。これは，相手の発話に対して不同意の態度を示す時によく使われるものであるが，中国語では，こうした婉曲的な不同意表現で修復を要請する手段より，直接的に不同意を示すもしくは直接的にトラブルを引き起こした原因を修復する（他者開始他者修復において，ゼロ形式が 8 例もあるのに対して，日本語では 1 例も観察されなかったことと繋がっているかもしれない）手段のほうが多い。

次に，他者開始・他者修復における開始形式使用状況に関して，表 20（再掲）と表 24 を合わせてその違いを見てみよう。

表 20（再掲）：OIOR における他者開始形式の内訳（日本語）

| | 修復開始形式のフォーマット | 例数 |
|---|---|---|
| TS と OI が離れていない | 否定応答(いや/違う/じゃなくて) | 7 |
| | 全体/部分繰返し＋っていうか | 4 |
| | 逆接の接続表現 | 4 |
| | 入出力制御系の感動詞類 | 2 |
| TS と OI が離れている | 肯定の返事＋逆接の接続表現 | 9 |

表 20 と表 24 から以下の相違点が分かる。

第一に，例文数が足りないことと関連があるかもしれないが，中国語のデータからトラブル源と他者開始が離れている，つまり，いったん相手の発話を肯定してから（「そうですね」「そうかもしれないね」という表現がある）修復に入るケースは観察されなかった。それに対し，中国語で聞き手が修復に入る前に何の予告もせず，直接に他者修復を実行したケース（本研究では「ゼロ形式」と呼んでいるが）は 8 例もあったが，日本語では一例も見られなかった。この結果からも，中国語では，何らかのトラブルに対して，聞き手がいったん相手の発話を肯定してから修復するどころか，直接他者修復を実行する割合が日本語より高いという現象を語っている。

第二に，日本語では，4 種類の開始表現が観察されたのに対して，中国語では 3 種類であった。中国語では逆接の接続表現がないほか，日本語における「全体/部分繰返し＋っていうか」という手段に対して，中国語では，「（一部繰返し）＋遅延」という手段が使われている。他者開始・他者修復は，自己開始・自己修復と相似しているため，上記の結果に対して更なる証拠を提示することができたと言えるだろう。ただ，自己開始形式では遅延の使用が観察されなかったが，他者開始形式では，遅延という非言語的要素の使用が目立っている。

## 7.3 両言語における修復開始形式の特徴

本章では，修復開始と修復実行からなる修復行動の構成部分の一つにあたる修復開始に着目し，その形式や機能について整理したうえ，日中対照を試みた。

日本語においても中国語においても，修復開始に関する研究はされてきている。諸研究の知見をまとめた上で，日中間の共通点と相違点について分析した。

まず，自己開始形式の日中対照において，日本語の会話例 75 個（参考資料Ⅰ），中国語の会話例 66 個（参考資料Ⅱ）を収集して分析したところ，（中国語には「っていうか」に

相当する手段がないなど）相違点が少しあるものの，全体的にはほぼ共通しているという結論に至った。次に，他者開始形式の日中対照にあたって，開始表現の形式整理だけでなく，その機能に着目して提出された分類基準における不合理な点に対して新たな提案を示した。そして，その形式に関して，日本語の会話例 65 個（参考資料Ⅲ），中国語の会話例 64 個（参考資料Ⅳ）を収集して分析した結果，各種類の開始形式の割合が少し異なっているが，下位分類がほぼ同じであるだけでなく，その機能もかなり共通していることが分かってきた。

次章では，修復行動の構成部分におけるもう一つの部分，いわゆる修復実行に着目し，修復方策の一部に限定して日中対照を試みたい。

# 第8章　修復方策に関する日中対照

修復の各組織によって修復方策もさまざまであり，本研究では，自己修復という類型に着目し，その修復方策について日中対照をする。そして，自己開始・自己修復の下位類型として，第 2 章で示したとおり，同一ターンにおける自己開始自己修復／TRP での自己開始自己修復／第三順番での修復／第三位置での修復という 4 種類がある。ここでは，日中において先行研究が集中している同一ターンにおける自己開始自己修復という類型に限定し，日中間の差異について初歩的考察をする上で，他者開始自己修復という類型における修復方策についても考察する。

## 8.1　同一ターンにおける修復方策の対照研究

### 8.1.1.　考察方法

まず，データの性質について説明する。本節では，日本語での修復の例として，日本語における同一ターンでの修復方策（参考資料Ⅴ）のほか，第 7 章で自己開始形式を考察する際に収集した参考資料Ⅰのなかから，「同一ターンにおける自己修復」にあたる例文を取り出し，合わせて 99 例を収集した。

そして，中国語での修復の例として，中国語における同一ターンでの修復方策（参考資料Ⅵ[61]）のほか，参考資料Ⅱ（自己開始形式を考察する時に使用した）から該当の例を取り出し，合わせて 93 例を集めた。

次に，上記の例文に対する予備分析を踏まえて，修復策略の種類を整理したいが，その前に，自己修復方策に関連のある先行研究における成果についてまとめる。ここでは，中国語における修復に対しての一列の先行研究（L,Tao, 1995; Chui, 1996; Zhang, 1998; Chang, 1998; Yang, 2006; Tseng, 2006; Tang, 2010）における修復方策の種類を出現頻度によって表 25 にまとめてみた。

[61]参考資料Ⅵは，中国のテレビで放送される「非常静距離」というトーク番組における一対一のインタビューから取り出した。

表 25:先行研究における修復方策の種類

| 種類 | 出現回数[62] | 詳細 |
|---|---|---|
| 置き換え | 6 | 問題源になった表現を新しい表現で入れ替える。 |
| 添加・詳細化 | 6 | 問題源を含んだ発話に新しい表現を挿入する。 |
| 繰り返し | 4 | そのまま或は一部修正を入れた上で問題源を繰り返す。 |
| 再構成 | 4 | 問題源を含んだ表現の統語構造を変更する。 |
| 完結 | 3 | 未完成の発話を完結にする。 |
| 途中放棄 | 2 | 問題源を含んだ表現を途中で諦め、新表現を開始する。 |

そのほかに言及された方策もあるが，表 25 で示した 6 種類は上位的な方策として捉えることができる。しかし，これらの方策には重なる部分や曖昧なところが存在しているため，更に整合・整理の必要があると考える[63]ため，表 26 のように再整理してみた。

表 26：再整理した修復方策の種類

| 策略名 | 種類 |
|---|---|
| 言い換え | ①置き換え：旧要素と同じ性質の新要素で替える。 |
| | ②増減：言い換える時に旧要素を消去する或は新要素を付加する。 |
| 繰り返し | ③そのまま繰り返し |
| | ④加工された繰り返し：①或は②の上で繰り返す。 |
| 途中放棄して再構成 | ⑤旧要素を捨象し、新しい表現で言い直す。 |
| | ⑥旧要素を利用し、新しい構造で構成する。 |

しかし，再整理してもいくつかの問題点が残されており，そのままでは使えないと言わざるを得ない。というのは，上記の方策は先行研究と同じく，修復された部分の統語的単位に着目して行われた分類である。本研究では，トラブルの性質に着目しているため，上記の分類では，どのようなトラブルが生じ，そのトラブルの性質によってどのような修復

[62] これは，上記で触れた一連の先行研究においてそれぞれ言及された回数のことである。
[63]例えば、何か新しい表現を付け加えることで詳細説明をつけるということはより広範囲の言い換えと同然ではないか、それに、途中放棄とはそもそもストラテジーの一種とは言えず、元の表現を放棄してはじめて再構成できるようになるのではないかという点があげられる。

方策が使用されるかを説明することができない。そして，例えば，繰返しという方策に関しては，本研究のデータでは，他者開始される修復において観察されたものの，同一ターンでの自己修復においては観察されなかった。つまり，同一ターンでの自己修復か他者開始・自己修復かによって，修復方策も異なってくる可能性がある。

そこで，本研究では，①修復組織の種類，②トラブルの性質に着目し，修復方策の再分類を試みる。次節では，日本語のデータに対する予備分析を踏まえて，同一ターンにおける自己修復方策の類型を整理する。

### 8.1.2. 日本語における同一ターンの自己修復方策

トラブル産出側がトラブルを認識することを前提としているが，認識できる位置によって修復のパターンも異なってくる。例えば，話し手が同一のターンにおいてトラブルを認識し，修復を実行する場合もあれば（同一ターンにおける自己修復），聞き手のターンが終わったあとのターンでトラブルを認識し修復する場合もある（第三順番の自己修復もしくは第三位置での自己修復）。本節では前者を対象にする。

先行研究では，修復された部分の統語的単位によって，自己修復方策を分類することが多い。繰返しになるが，本研究では，トラブルの性質に着目して，その方策を分類することを試みる。同一ターンにおいて，自己修復対象となるトラブルを引き起こした原因について，次の表 27 で示しておきたい。

表 27. トラブルを引き起こした内部誘因

| 誘因の所在 | トラブルの種類 |
|---|---|
| 内部誘因 | ①音素・形態レベルのトラブル(意図通りに発音できなかった場合) |
| | ②文法レベルのトラブル(語彙誤り・活用語尾の間違い・語順問題など) |
| | ③概念レベルのトラブル(意図の維持・変更) |

まず，①は，意図通りに発音できなかった場合を指すが，これは，語の途中で中断し，その後続で言い直したというケースであろう。これは，産出ミスというトラブルとして捉えられよう。次のようなケースである。

例 115.（横線は修復された部分を指す）
あのさ、部活後みたいにさ :: ひさびしぶり、<u>久しぶりに</u>に、コンビニで買って。

次に，②について，語彙誤りとは，修復された語彙と間違えられた語彙とで異なる意味がある場合を指す。語順問題や活用語尾の間違いのほか，助詞の間違いなどのような現象も多く見られた。次の例で示す。

例 116. ＜活用語尾の間違い＞

絶対注意した方がいいよとかいって、言われた。

例 117. ＜語順問題＞

おれが、さんね、さん、3 年のおれが何か言ってもさー、なんか、先輩だから気まずいかなって感じがすんだよ。

例 118. ＜助詞の間違い＞

だから、他の、にやる時間ができて、ま、いろいろ広げていくってことか、女性の場合?

更に，概念レベルで生じたトラブルはその範囲がより広く，修正された部分と間違えられた部分では，内容的には質的な違いがある場合とそうでない場合に区別できる。前者の場合，①と②と同じく，＜言い直し＞という方策で修復される。後者の場合，トラブルとなった部分が間違いというより，何らかの不適切であるという判断のうえ，修復される場合が多い。前者と区別するため，これを＜言い換え＞と呼ぶ。つまり，＜言い直し＞というのは，発音レベル／文法レベル／内容レベルにおいて生じた何らかの間違いに対する修復方策として捉えられる。一方，内容レベルにおいて間違いではなく，不適切な表現に対して実施された修復方策を＜言い換え＞とする。次の例を参照されたい。

例 119. ＜言い換えの例＞

どうやら、正式なっていうか、あのオフィシャルな、指導教官は「人名 1」先生だっていう先輩がいて。

また，＜言い直し＞と＜言い換え＞のほか，＜言い足し＞という方策もよく使われる。これは内容レベルにおいて，直前の発話に新たな要素を付加することである。これについて，次の 2 例をそれぞれ参照されたい。

例 120. ＜内容レベルでの言い足し＞

なんか、写真とかで、これは見せたくない、見せたくないっていうか、あんまり人には見せたくないってのはさ、自分の家族なら分かるんだけどさ、自分と付き合ってる子の写

真とか見したくなくね?

予備分析の結果，上記の３種類のほか，＜途中放棄（再構成）＞という手段も目立つ。これは，トラブルが特定されたが，それが修復されないまま，発話者が新たな内容で先に展開する場合（例 121）と，ただ発話を途中で放棄し，新たな内容で先に展開する場合（例 122）に分けることができる。

例 121.
あと、なんかあの女の子はその、子供産もうと思ったら、産もうと思ったらっていうか、変わっちゃうじゃん?生活が(ん：)、がらっと(ん：)。

この例では，発話者は,「っていうか」という標識をもって,「産もうと思ったら」という部分に対して修復することを予告したものの，後続の発話から分かるように,「産もうと思ったら」と同等の意味がある代案が提出されずに，先に進めたのである。こうしたタイプの例が他にもいくつか観察された。そして，例 122 で示すように，発話者が「っていうか」という標識でトラブルを特定せず，ただ中断して先に展開したケースもある（日本語のデータから１例しか観察されなかったが)。

例 122.
わたしもでも実家千葉なんだけど、その、割と南の方、だから、遠いとは、遠いことは遠いけど、でも、別に帰れるのに、もう、全然帰ってなくて、うーん。

例 122 では，中断された部分を復元するとしたら，＜遠いとは言えない＞というような内容になるが，＜実家が千葉県の割と南の方にある＞という情報と関連づけて考えると，発話者が＜実家が千葉県にあるものの，南のほうにあるので，東京から遠い＞ということを意味している。しかし，もし「遠いとは」という発話を完成するとしたら，内容的に一貫性がなくなってしまう恐れがあるため，そこで，発話者が途中で放棄し,「遠いことは遠いけど」という一貫性のある内容で展開した。

以上，日本語において，同一ターンで自己修復する場合，よく使われる方策について述べてきた。次の表 28 にまとめた。

表 28：同一ターンにおける自己修復方策（日本語）

| 種類 | 下位分類<br>（全体の割合） | トラブルの性質 | 例文数<br>（99 個） | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| 修復完成 | 言い直し（60.6%） | 発音レベルにおける間違い | 6 | 6.1% |
| | | 文法レベルにおける間違い | 17 | 17.2% |
| | | 内容レベルにおける間違い | 37 | 37.3% |
| | 言い換え（18.2%） | 内容レベルにおける不適切 | 18 | 18.2% |
| | 言い足し（13.1%） | 内容レベルで要素の欠落 | 13 | 13.1% |
| 途中放棄 | トラブルが特定されたところで中断 | | 8 | 8.1% |

### 8.1.3. 中国語における同一ターンの自己修復方策

中国語における自己修復方策に関しては，収集したデータに対する予備分析を踏まえた結果，日本語と同じく，４種類に分けて捉えられることが分かった。ここでは，例文を挙げながら逐次に説明する。

まず，言い直しという修復方策の下位分類では，文法レベルと内容レベルの間違いに対する修復現象が見られたが，発音レベルの間違いに対する修復は観察されなかった。例 123 と例 124 を参照されたい。

例 123. ＜文法レベルにおける間違い＞

因为　我　　都没有　　看电视，　　所以　　我不知道　　小虎队　　要，

から　私　していない　テレビを見る，だから　私知らなかった　小虎队　蓋然性を表す

要甄选小虎队这个事，　　我不知道。

小虎队を選抜すること　　知らなかった。

「私はテレビ見ていなかったから知りませんでした，小虎队が，小虎队を選抜することを知りませんでした。」

この例では，[小虎队要]という部分が中断され，[甄选]という動詞が挿入されたのである。もしそのまま[小虎队要甄选]という文として完成するなら，元々[甄选]の目的語である[小虎队]が主語になってしまい，意味上大きな違いが生じてしまう恐れがある。そして，[要]という能願動詞がそもそも動詞の前に使われるものであるため，[要]を動詞の[甄选]の前に出されたのは語順上の問題でもある。そこで，発話者が途中で中断し，修復を実行したのである。こうした文法レベルで生じた間違いを修復した方策を＜言い直し＞の一種

とする。例 124 では，文法レベルではなく，内容レベルで生じた問題である。

例 124．＜内容レベルでの間違い＞

我　小学的时候，我　中学的时候　　拿，　一年　　最多[64]　　拿过

私　小学校の頃，私　中学校の頃　もらう，一年間　最も多い時　もらったことある

四个　　不同的奖学金。

四つ　それぞれ違う奨学金。

「私は小学校の頃，私は中学校の頃に奨学金をもらい，最も多いときは一年間で四種類もの奨学金をもらったことがあります」

例 124 では，[小学]を[中学]で置き換えられたのである。これを＜言い換え＞ではなく，＜言い直し＞とした理由は，[小学]と[中学]とは質的な違いがあるからである。というのは，「四種類の奨学金をもらった」という出来事が[中学]時代に起きたことであり，小学時代と言ったのは間違いだからである。もし，[小学]と意味上近い表現に変えるとしたら，＜言い換え＞になるが，こうした内容的に間違っている場合に対する修復方策を＜言い直し＞と判断する。もう一つの例を参照されたい。

例 125．＜内容レベルでの間違い＞

就 觉得　我　　不知道　　自己　该干嘛，　　就　每天唱歌，啊，　不是，就

そう思う　私　分からない　自分 するべきか　　毎日歌う、あっ、違う

每天　去（上班），　回来，　去，　回来。

毎日　仕事に出る、帰る、　行く、　帰る。

「私は自分が何をしたら良いのかわからなくなって、毎日歌っていた。あ、そうじゃなくて、ただ仕事に行って、帰って、行って帰っての毎日だった。」

例 125 では，トラブルになった[唱歌]（歌を歌う）と，[每天去（上班）回来，去，回来]（ただ仕事に行って、帰って、行って帰っての毎日だった）とは，内容的に全く異なっているため，言い換えれば，発話者が発話内容を間違っていたということである。つまり，＜言い直し＞は何らかの間違いに対する修復方策として捉えることができる。それに対して，＜言い換え＞は間違いまでなっておらず，内容的に何らかの不適切に対する修復方策

64 二重の横線は，一つの例に起きた二つ目の修復を示している。

として捉えられる。次の例 126 を参照されたい。

例 126. ＜内容レベルでの不適切＞

我觉得　　妮姐　　对东南西北，　　她　　对方向感　　真的是，　就是，
私は思う　妮姐（人物名）東西南北について，彼女　方向感について　本当に，　強調，
她　　应该　　再　　配一个指南针，　　我觉得　　更好一些了。
彼女　すべき　あと　コンパス一つをつける，　　と思う　　もっといい
「私は妮姉さんが東西南北について，彼女は方向感について本当に，つまり，彼女はコンパスも一つ付けるべきです。そうしたほうがいいと思います。」

この例では，[对东南西北]を[对方向感]に言い換えられたのである。[东西南北]という表現は元々方向を指す言葉であり，ここでは，言い間違いとは言いがたい。[东西南北]に対する感覚を[方向感]で入れ替えたのである。こうしたトラブルと例 124・例 125 におけるトラブルとの最大の違いは，[她对方向感]という部分を削除し，[妮姐对东南西北真的是]という発話のままでも意味上では大きなずれが生じないところである。こうしたトラブルは，あくまでも（発話者の判断では）ある種の不適切であり，間違いという程度のトラブルではない。よって，こうしたトラブルに対する修復方策を＜言い直し＞ではなく，＜言い換え＞とする。

次に，＜言い直し＞と＜言い換え＞のほか，＜言い足し＞という方策もよく使われる。例えば，例 124 では，2 種類の修復方策が見られる。一つは先に述べた＜言い直し＞であり，もう一つは＜言い足し＞というものである。具体的には，[我中学的时候拿]という発話が完成されずに途中で中断され，[一年最多拿]という説明を付け加えられたのである。[一年最多拿四个奖学金]（最も多い時は一年間で 4 種類もの奨学金をもらったことがある）という趣旨に対して，もしそのまま［我中学的时候拿过四个奖学金］（中学時代では 4 種類の奨学金をもらったことがある）というふうに発話を完成するなら，肝心な要素が脱落したということになる。もう一つの例を参照されたい。

例 127.＜内容レベルで要素の欠落＞

我　　在剧中，　　我　　提到　　一个　，是　　我跟导演曹盾　　提到
私　ドラマの中で，　　私　提出した　一つ，　は　私と監督の曹盾さん　提出した
一句话，　　叫　　细节　　打败　　爱情。
一つの文，いわば　細かいこと　破る　　愛情。

「私はドラマの中で一つ(の言葉を)案出しました。私は監督の曹盾さんと一つの言葉を案出しました。いわば,「愛は細部に適わぬ」というものです。」

[细节打败爱情]という表現を考え出したのは自分([我])だけでなく,[导演曹盾]と一緒に考え出したものであるため,修復した時に,脱落した要素を補ったのである。本研究では,例 124 と例 127 で示したように,内容レベルで脱落した要素を付け加えることで修復した方策を＜言い足し＞とする。

最後に,＜中断して再構成＞という手段も観察された。日本語では,トラブルが特定された(「っていうか」という表現で)が,修復せずに発話を展開した場合と,トラブルが特定されないまま中断され,新たな内容で発話を展開した場合に分けられる。それに対して,中国語では,後者しか観察されなかった。次の例 128 を参照されたい。

例 128.＜中途放棄＋再構成＞

她　真的是　可以,　真的是　一个　特别　需要　GPS　的　人,就是　永远

彼女　本当に　していい,本当に　一人　特に　必要　GPS　の　人,つまり　常に

有　一个人　在旁边　告诉她,　往左拐　往右拐。

いる　一人　隣にいて　彼女に教える,　左を曲がる　右を曲がる。

「彼女は本当に,本当に GPS が必要な人,常に誰かが隣にいて左を曲がるか右を曲がるかを教えてあげなきゃならないのです。」

この例では,中断された[她真的是可以]という部分にある[可以]というのは,許可を表す時にもしくは「してごらん」という意味で人に何かを推薦する時に使われるが,ここでは,[可以]に何かを付けて「彼女は本当に GPS が必要とする人」という意味を構成することができない。そこで,発話者が[她真的是可以]という文を放棄し,新たな言い方で再構成した。中国語における同一ターンにおける自己修復方策は表 29 にまとめた。

表 29：同一ターンにおける自己修復方策（中国語）

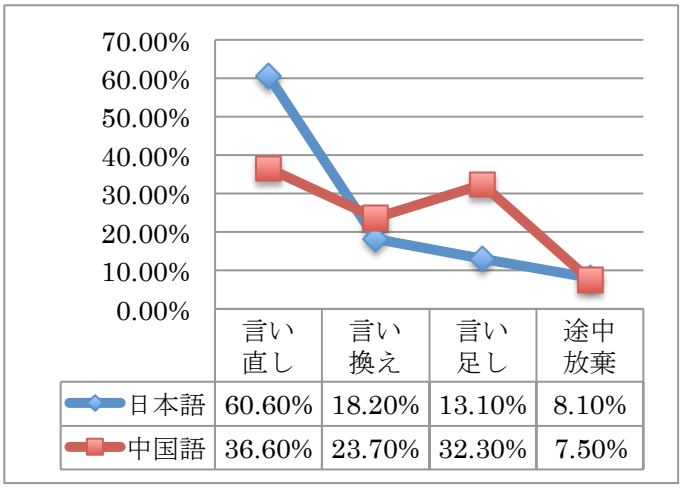
| 種類 | 下位分類<br>（全体的割合） | トラブルの性質 | 例文数<br>（93 個） | 割合 |
|---|---|---|---|---|
| 修復完成 | 言い直し(36.6%) | 文法レベルにおける間違い | 7 | 7.5% |
| | | 内容レベルにおける間違い | 27 | 29.0% |
| | 言い換え(23.7%) | 内容レベルにおける不適切 | 22 | 23.7% |
| | 言い足し(32.3%) | 内容レベルで要素の欠落 | 30 | 32.3% |
| 途中放棄 | 中断して再構成 | | 7 | 7.5% |

### 8.1.4.　同一ターンにおける修復方策の比較

日本語会話例（99 個）と中国語会話例（93 個）を分析した結果，日本語と中国語とでは同一ターンにおける自己修復方策がともに 4 種類に分けて捉えられるところが共通している。その四種類とは，①さまざまなレベルで生じた間違いに対する言い直し，②内容的レベルで生じた不適切に対する言い換え，③内容レベルで要素が欠落したもしくはメタ的レベルで付加説明するという言い足し，④中断して再構成，というものである。そして，＜言い直し＞という方策が最もよく使われているところも共通している。

日本語と中国語とでは，基本的な方策の種類が共通しているものの，相違点もある。各修復方策が全体を占める割合を次の図 2 で示す。

図 2：同一ターンにおける修復方策の割合（日本語と中国語）




| | 言い直し | 言い換え | 言い足し | 途中放棄 |
|---|---|---|---|---|
| 日本語 | 60.60% | 18.20% | 13.10% | 8.10% |
| 中国語 | 36.60% | 23.70% | 32.30% | 7.50% |

相違点に関しては，　まず，＜言い直し＞という方策で修復されるトラブルのうち，内容レベルで生じたものが最も多いが，日本語の例では発音レベルで起きたトラブルが見られたが，中国語の例では観察されなかった。そして，日本語の例では文法レベルで起きたトラブル（語順問題・活用の間違い・助詞の間違い）が 17 例もあるのに対して，中国語の例では統語上の問題と見られるのは 7 例しかない。これは，日本語と中国語の統語上の違いから由来した問題として理解していいだろう。

次に，日本語では言い直しが圧倒的に多いのに対して，中国語では言い直しと言い足しが割合的には大差がないところが目立っている。

更に，途中放棄の場合，日本語の例で最も多いのは，「っていうか」という表現でトラブルを特定し，発話者が何らかの不適切を認識し表明することで発話を先に展開するケースが殆どである（8 例のうち 7 例が該当し，残りの 1 例はトラブルを特定せずに発話を先に展開したものである）。それに対して，中国語の例では，発話者が殆どトラブルを特定せずに，

発話を中断してから再構成を行った。次の 2 例を参照されたい。

例 129. ＜トラブルが特定されたところで中止＞
で、奥さんが働いて、働いてっていうかまあ。ん：でも少ないよね、それは、まれな例だと思う。逆は山ほどあるだろうけど。

例 130. ＜中断＋再構成＞

那是　因为 我 当初，　我　　反省　　这件事情　就是说，如果
それは　ので　私　当初、　私　反省してみたら　そのこと　つまり，もし
让　　我　现在　回到当初，　我　可能就　不会来　考　这个学了。
させる　私　いま　当初に戻れば，私　多分　来ない　受ける この学校

「それはその時の私であって、私はこの結末（事情）を反省しているの。つまり、もし当時に帰ることができれば、多分この学校を受けに来ないわ。」

2 例とも＜途中中断＞というケースであるが，「っていうか」という開始標識には，相手にこれからの内容を予告する機能や断言を避けるといった機能が備わっているため，どのような単位のトラブルに対しても使用できるのは非常に便利である。これに対して，例 130 で示したように，トラブルが特定の単語ではなく，先行発話全体が問題になってくる場合では，中国語では[65]修復するとすれば元の発話を放棄しなければならず，聞き手に修復行為を予告することができないという特徴が見られた。

## 8.2　他者開始自己修復における修復方策の日中対照

日本語と中国語の修復方策のデータについて説明する。日本語のデータに関しては，他者開始形式を考察する際に収集した参考資料Ⅲのうち，他者開始・他者修復の例を除き，全部で 49 例を集めた。中国語のデータに関しては，他者開始形式の考察にあたって収集した参考資料Ⅳから，全部で 44 例を集めた。これらの会話例に対する予備分析では，トラブルの性質ごとに修復方策の種類を整理してみた。次節では，自己修復方策について，両言語のデータから見られた主な修復方策について述べる。

65 「違う」に相当する「不是」は使えるが、その修復を予告する機能は「っていうか」ほど明確的ではない。

### 8.2.1. 自己修復方策の種類

本節では，積極的な修復方策と消極的な修復方策に分けて述べる。積極的な修復方策とは，相手に修復を要請されたあと，①言い直し②言い換え③言い足し（付加説明），という手段を指す。一方，消極的な修復方策とは，④修復回避⑤理解候補を肯定する，という手段を指す。ここでは，両言語の具体的な例をもって，具体的にどういう方策であるかを述べる。

#### 8.2.1.1. 積極的な自己修復方略

本節では，①言い直し②言い換え③言い足し，という方策について，日本語と中国語の会話例を用いて説明する。

①言い直しとは，トラブルになった部分を否定する，もしくはその適切性を疑うことで自己修復する手段を指す。日本語では 4 例見られたが，中国語では相当するケースが見られなかった。日本語の例について，次の例 131 を参照されたい。

例 131＜BTS 初対面同性同士雑談 3＞二人は鼻濁音の「が」を発音することができるかどうかに関して話している。B は日本語科出身の人である。

1A　　でも全部『がー』で話しちゃうんですよね、(うん)今の人って。
2B　　え、今の人って?
3A　→ 今の人っていうか割と若い人,,
4B　　あ：若い人、[あ：そうですよね]。
5A　　[特に東京より]西の人は特に。
6B　　はい。

この例では，聞き手が「え、今の人って?」という表現で修復を要請した。トラブルの産出側（A）が「今の人っていうか割と若い人」という表現で自己修復を行った。「今の人」と「割と若い人」とは，意味上では異なっている。話し手が言いたかったのは＜割と若い人たちが全部『がー』で話しちゃう＞という意味であることが後続の展開から分かる。よって，「今の人」ではそうした意味を表現することはできない。つまり，話し手が表現を間違えたために相手に不理解をもたらしてしまい，表現の間違いを正しくするために修復を実行したのである。こうした表現の間違いから起きる不理解に対する修復方策を＜言い直し＞とする。例 128 は理解上の問題に対する修復であるが，受容上の問題に対処するケースも見られた。

例 132＜BTS 友人雑談＞A は B の考え方がおかしいと言い出した後。

1A　　だから、ちょっと考え方がおかしいんや、相当。

2B　　考え方おかしいかな?

3A　→　考え方っていうか、考えることがおかしい。

4B　　だから、何か、なんつ：の、何だろうね。

5A　　なんやろ：ね。

この例では，聞き手が「考え方おかしいかな?」という表現で受容上において問題があるという態度を表明した。それを受けて，トラブルの産出側（A）が「考え方っていうか、考えることがおかしい」という発話で自己修復を行った。「考え方」（物事を考える時の思考の筋道や方向などを意味している）と「考えること」（思考内容）とは，意味的には異なっている。つまり，話し手が表現を間違えたということになる。繰返しになるが，こうした表現上の間違いを修復する方策を＜言い直し＞とする。ただし，例 131 では，修復実行のあとでの，聞き手の反応（「あ：若い人、あ：そうですよね」）から分かるように，修復が成功したのである。例 132 では，修復実行の次のターンを見てみると，修復が成功したとは言いがたい。なぜなら，例 131 では，理解上の問題であるのに対して，例 132 では，受容上の問題であり，且つ，相手のフェイスをひどく侵害した行為であるからである。「考え方がおかしい」を「考えることがおかしい」と言い直されても，その侵害の程度はほぼ変わらないだろう。

②言い換えとは，トラブルになった部分を他の表現で取り替える手段を指す。言い換えれば，トラブルとなった発話と修復された後の発話は，言い方は異なるものの，意味上は同じであるという場合を指す。これに対する例は，日本語では 6 例，中国語では 8 例見られた。それぞれ具体例を挙げて説明する。

例 133＜BTS 初対面同性同士雑談 16＞B は中国語が専攻であり，何度も中国に行ったことがある。A が中国に旅行に行く予定があるという話をしたあとの会話である。

1A　　一番こう、難しい、んと：中国にいて、失敗したっていうか、/少し間/困った、

2　　っていうのは…。

3B　　困った?

4A　→ はい、こおりゃ‘こりゃまいった″っていう…。

5B　　いやあ、けっこうたくさんあるんですけど。

この例では，聞き手が「困った?」という先行発話の一部を繰返すことで修復を要請した。

それを受けて，トラブルの産出側（A）が 4A で自己修復を実行した。その方策について，「困った」という表現を「こりゃまいった」という表現に変えたのである。これらの表現には，＜出来事をどう処理してよいか分からず悩む／つらい状況に遭って苦しむ＞という意味合いが含められているため，意味上の差異が小さい。よって，本研究では，修復される前の部分と修復されたあとの部分が意味的に似通っている場合，言い方を変えただけの＜言い換え＞として捉える。こうした修復方策について次の中国語の例も参照されたい。

例 134＜HCR 中国語会話 5 劉 / 陳＞

1A　　哎，那你毕业两年干嘛去了?

2B　　连工作带玩儿，国内还考了半年研。

3A　　啥?

4B　→　国内研究生还考过半年。当时我总，，

5A　　你经历挺丰富啊。

＜日本語訳＞

1A　　で，卒業したあとの二年間，何してたの?

2B　　働いたり遊んだり，国内で半年ぐらい準備して修士試験を受けたよ。

3A　　何?

4B　　国内の修士試験，半年ぐらい準備して受けたことある。その時僕はいつも，，

5A　　豊富な経験持ってるね。

この例では，聞き手が[啥?]（「何?」）という開始表現をもって，理解上の問題が起きたと示し，相手に修復を要請した。それを受けて，トラブルの産出側（A）が自己修復を実行した。その修復方策について，[国内还考了半年研]（「国内で半年ぐらい準備して修士試験を受けた」）と[国内研究生还考过半年]（「国内の修士試験，半年ぐらい準備して受けた」）とは，言い方が少し違うものの，意味的には全く同じである。よって，内容レベルで先行発話の内容と違う内容で言い直したり，先行発話に出ていない新しい内容を付け加えたりするようなケースと区別し，こうした言い方だけ変えた方策を＜言い換え＞とする。

次には，先行発話に出ていない新しい内容を付け加えることで自己修復を実行した方策について見てみよう。これはいわゆる，③＜言い足し＞に当たる。日本語においても中国語においても，トラブルの性質を問わず，この＜言い足し＞が最もよく使われる方策である。両言語の具体例を挙げて見てみる。

例 135．＜BTS 初対面雑談③＞中国に留学していた頃，A がよく海賊版の CD を買っていたこ

とについてBに話している場面。

1A　　でもほんと、明らかに、か、海賊版って感じ[で：],,

2B　　[あ::]

3A　　途中で飛んだりとかしてる。

4B　　それって、違法ではないんでしたっけ?大丈夫なんでしたっけ?。

5A　　え：?

6B　→ 売る、売る人は違法なんでしたっけ。

7A　　違法なのかな?。でもけっこう堂々と、店を出して…〈軽く笑う〉。

8B　　そうですよね。

この例では，聞き手（A）が「え：?」という非特定的開始標識で修復を要請した。それを受けて，トラブルの産出側（B）が自己修復を実行した。B がトラブルを含んでいる発話 4B における「違法ではないんでしたっけ?」という部分を，「売る、売る人は違法なんでしたっけ」という表現に変えた。4B の表現では，違法の対象が＜買う人＞か＜売る人＞か不明確であるため，6B で省略された主語を復元したことで自己修復を実行した。＜言い直し＞と＜言い換え＞に比べると，修復実行側がトラブルを含んでいる発話の一部を否定したり，他の言い方に変えたりするのではなく，その中で出ていない内容を付け加えて修復を実行した。これは，＜言い直し＞と＜言い換え＞と区別し，＜言い足し＞とする。このような方策が中国語でも最もよく使われているものである。次の例 136 を参照されたい。

例 136.（再掲）＜HCR 中国語会話 2＞A が学部時代の専攻を B に伝えている。

1A　　外国语学院的英日方向。

2B　　英日方向?

3A　→ 对，就是，我们外国语学院嘛，然后有日语系，日语系里头有英日方向，英法方向。

4B　　啊:::

（日本語訳）

1A　　外国語学院の英日コース。

2B　　英日コース?

3A　→ そう。つまり，外国語学院があって，その下に日本語専攻があって，日本語専攻

4　　には英日コース，英仏コースがある。

5B　　あ:::

この例では，[英日方向]（「英日コース」）に対する不理解を解決するために，トラブル

産出側（A）が説明を付け加えることで修復を実行した。また，言い足しという方策で修復された例に対する予備分析を通してみると，トラブルは理解不能と受容困難の 2 種類であり，修復開始形式は理解上の問題に対しては＜非特定的開始標識＞と＜先行発話の一部の繰返し＋上昇調＞が最も多く，受容上の問題に対しては＜確認発話＞や＜そのまま繰返し＞という手段が最も多い。なお，理解上の問題が生じた場合，＜理解候補の提示＞という手段で修復を要請する場合も，日本語でも中国語でもそれぞれ 5 例見られた。理解候補の提示は当面のトラブルに対して，聞き手が解決策を提示することでもあるため，もしその理解が間違った場合，受け手（トラブル産出側）が説明を付け加えて修復を実行する場合もある。次の例 137 を参照されたい。

例 137.＜BTS 友人同士男女間討論①＞ A(女性)と B(男性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。

1A　　だから独身の人が増えてんのかな。
2B　　何、フェミニズム化ってこと?
3A　→ ん：と、いや、というよりも、あの、/少し間/そうやってこう、自分が誰かを養
4　　わなきゃいけないっていうような人が少なくなった。自分ひとりでいいよ、みた
5　　いな。
6B　　あ、そっか。

聞き手 B は 1A に対して不理解が生じてしまい，2B で理解候補を提示した。しかし，その理解が間違っていることは後の 3A での（＜独身の人が増えているのは，フェイミニズム化によってではなく，誰かを養わなければならないと考える男性が少なくなってきたからである＞から分かる。つまり，トラブル産出側（A）がその理解候補を否定し，更なる説明を付け加えて修復を実行したのである。

本節では，積極的な自己修復方策の下位分類として，①言い直し②言い換え③言い足し／理解候補を否定してからの言い足し，という 3 種類に分けて，実例を挙げながら整理してきた。次節では，消極的な修復方策について述べる。

#### 8.2.1.2. 消極的な自己修復方策

本節では，④修復回避⑤理解候補を肯定する，という 2 種類に分けて述べる。

④修復回避とは，聞き手に修復要請されたのに，トラブルを含んでいる発話を維持することを指す。次の 2 例を参照されたい。

例 138＜BTS 男性友人同士雑談＞A が B の高校時代の恋人について聞いている。

1A　　どんな子だったの?

2B　　え?

3A　→ どんな子だったの?=

4B　　=普通。

5A　　普通。

例 139＜初対面同性同士雑談 12＞

1A　　/少し間/本とか読みます?

2B　　本?[↓]

3A　→ はい。

4B　　本はでも、あんまり読まないですね。

5A　　あ：は：

非特定的開始標識(「え?」)が使われた例 138 と,先行発話の一部の繰返し＋上昇調(「本?」)という開始形式が使われた例 139 において，受け手の反応からみると，例 138 ではトラブルを含んでいる発話がそのまま繰返されているが，例 139 では肯定応答だけである。しかし，二例とも修復が成功したことが分かる。というのは，2 例における 4B を見れば分かるが，相手の修復方策がそのまま受け入れられたからである。こうした修復方策について，中国の会話例にもいくつか見られた。次の例 140 を参照されたい。

例 140＜Wu, 2004：157＞

1A　　你上次，上，前阵子跑去哪儿?

2B　　嗯?

3A　→ 前阵子跑去哪儿?

4B　　去，跑去：到处鬼混。

＜日本語訳＞

1A　　前回，前，この間どこに行ったの?

2B　　うん?

3A　→ この間どこに行ったの?

4B　　行った::遊び回ってきただけ。

この例は性質上，日本語の例 138 と全く同じである。聞き手の B がともに非特定的開始

標識で修復を要請したものの，受け手，いわば，トラブル産出側（A）が元の発話を繰返すことで修復を実行した。前節で述べた＜言い直し＞＜言い換え＞＜言い足し＞という方策は，いずれもトラブル産出側が元の発話を工夫することで積極的に修復を行っている。それに対して，こうした元の発話をそのまま繰返すことや修復開始表現に対して肯定的な応答することで修復を実行する手段を消極的自己修復方策とする。

また，そのほか，消極的な自己修復方策のもう一つの下位分類として，⑤理解候補に対して肯定的な応答することを通して修復を実行する場合もいくつか見られた。次の 2 例を参照されたい。

例 141＜BTS 女性友人同士雑談＞

1A　　でも、あるんじゃない?ま、マネージャーさんから始まって(うん)、テニス部に
2　　始まって、そのつながりとか。
3A　　誰?あ：他の部員?
4B　→ そうそうそう。
5A　　あ：

| 例 142.（再掲）＜Wu,2004：129＞ | | ＜日本語訳＞ |
|---|---|---|
| 1A | 欸?那什么时候毕业? | え?じゃ，いつ卒業なの? |
| 2B | Julie 啊? | Julie のこと? |
| 3A→ | 嗯。 | うん。 |
| 4B | 大概十月吧。 | おそらく十月かな。 |

これらの 2 例において，聞き手 B の理解候補（「誰?あ：他の部員?」と[Julie 啊?]）に対して，トラブル産出側（A）が肯定的な応答だけで修復を完成した。こうした＜理解候補に対する肯定的応答＞も，＜元の発話のまま繰返す手段＞と＜修復開始表現に対する肯定的応答＞と同じく，消極的な修復方策として捉える。

### 8.2.2.　他者開始・自己修復方策における比較

まず，他者開始・自己修復という組織における自己修復方策について，日本語の 49 例と中国語の 46 例を利用し整理してみた。日本語と中国語における修復方策の使用状況の内訳を次ページの表 30 にまとめた。

表 30：他者開始・自己修復方策の使用状況の内訳（日本語・中国語）

| 方策の性質 | 下位分類 | 日本語(計 49 例) | 中国語(計 44 例) |
|---|---|---|---|
| 積極的自己修復方策 | ①言い直し | 6（12.2%） | 0 |
| | ②言い換え | 6（12.2%） | 8（18.2%） |
| | ③言い足し | 27（55.1%） | 25（56.8%） |
| 消極的自己修復方策 | ④修復回避 | 9（18.4%） | 6（13.6%） |
| | ⑤理解候補に肯定応答 | 1（2.1%） | 5（11.4%） |

表 30 から，日本語と中国語において，他者開始・自己修復の方策の使用状況における共通点と相違点がいくつか見られる。

まず，共通点について，両言語において，他者開始・自己修復という組織に限定して考察した結果，修復方策が 5 つのカテゴリーに収まっていることが分かってきた。そして，両言語において最もよく使用されるのは③言い足しという手段であり，いずれも過半数を占めている。

次に，最も顕著な相違点とは，中国語のデータから①言い直しという方策が全く観察されていないところである。そもそも，言い直しというのは，先に述べた通り，トラブルになった部分を否定する，もしくはその適切性を疑うことで自己修復する手段を指している。つまり，中国語の修復例では，聞き手がトラブル産出側に先行発話を修復するように要請した場合，トラブル産出側がトラブルを導いた発話を否定したり，不適切だとマークしたりすることで修復を実行する傾向が見られていないということである。しかし，本節で使用するデータが足りないことは否めないため，こうした傾向が成立するとは言いがたい。これを検証するために，更に多くの会話例を通して考察する必要がある。

## 8.3　日中両言語における自己修復方策の特徴

本章では，修復方策の一部，いわゆる，同一ターンにおける自己修復方策と他者開始・自己修復における修復方策に限定して，日中対照を試みた。

まず，日本語の会話例（99 例）と中国語の会話例（93 例）を用いた予備分析を通して，同一ターンにおける自己修復方策を次の四種類に分けて捉えることができる。それぞれ，①さまざまなレベルで生じた間違いに対する＜言い直し＞，②内容的レベルで生じた不適

切に対する＜言い換え＞，③内容レベルで要素が欠落したもしくはメタ的レベルで付加説明するという＜言い足し＞，④＜中断して再構成＞，というものである。こうした共通の類型が成り立っているほか，最もよく使われる方策はともに＜言い直し＞であることも判明した。相違点に関しては，(1) 日本語には文法レベルで生じた間違いに対処する言い直しの例が中国語より多く観察された，(2) 途中放棄の場合，日本語では「っていうか」という標識でトラブルを特定するだけで発話を先に展開するケースが殆どであり，中国語では当面の発話を中断し発話を先に展開したケースしか見られなかった，という 2 点が挙げられる。

次に，他者開始・自己修復という組織における自己修復方策について，日本語例（49 例）と中国語例（44 例）を用いた予備分析では，積極的自己修復方略と消極的自己修復方略に大きく分けることができる。積極的自己修復方略には，①言い直し（トラブルになった部分を否定する，もしくはその適切性を疑うことで自己修復する手段を指す），②言い換え（トラブルになった部分を他の表現で取り替える手段を指す），③言い足し（先行発話に出ていない新しい内容を付け加えることで自己修復を実行した方策・聞き手の理解候補を否定してから付加説明する方策を指す），という 3 種類がある。そして，消極的自己修復方略には，④修復回避（聞き手に修復要請されたのに，トラブルを含んでいる発話を維持することを指す）⑤理解候補に対して肯定的な応答することを通して修復を実行する場合，という 2 種類がある。つまり，日本語と中国語においては，他者開始・自己修復における修復方策の類型がほぼ共通していることが分かってきた。なかには，中国語においては言い直しという方策が観察されていないといった相違点が見られたものの，全体的には相似的であると言えよう。

しかし，データ数が十分とは言えないため，本章で見られた傾向がどこまで成立するかについては更に多くの例を取り上げて分析する必要がある。そして，本章では，修復方策の一部だけに限定して考察したため，ほかの組織における自己修復方策や他者修復方策についても更なる考察が必要であろう。

# 第9章　全体のまとめと今後の課題

本章は，本研究に対する全体のまとめと今後の課題である。まず，9.1 で全体的にまとめた上で，9.2 で今後の課題を述べる。

## 9.1　　全体のまとめ

本研究は，「言語的修復行動に関する語用論的研究」というテーマのもとに，会話参加者が順調な会話伝達を目指す過程において，あらゆるトラブルをどのように抑制・解決するかというプロセスを動的に捉えることを通して，修復の語用的機能を明らかにすることを主要目標としている。そのほか，修復組織の一部に当たる修復方策について日中両言語を対照して，その一般性を検証することも目標の一つとして設定している。

本研究は，三部に分けて展開してきた。第Ⅰ部は，「第１章」「第２章」「第３章」であり，第Ⅱ部は，「第４章」「第５章」「第６章」であり，第Ⅲ部は「第７章」「第８章」である。最後に，「第９章」で全体のまとめ及び今後の課題について述べる。各部の概要は，次の通りである。

I.　調整機能を取り入れて修復機能を捉える枠組みを確立した。
II.　修復機能について，トラブルの性質を「理解上のトラブル」と「受容上のトラブル」に分けた上で，調整機能と修復機能との連動的関係について考察した。
III.　修復構造に当たる修復開始と修復実行に着目し，修復開始形式及び自己修復方策について日中両言語での対照を行った。

次に，各部に分けて内容についてまとめることにする。

まず，第Ⅰ部（第１章・第２章・第３章）の内容について述べる。第２章では，次の２点をめぐって展開した。

[1]　枠組みを構築するにあたって，研究背景として主要な先行研究の整理。
[2]　先行研究を踏まえ，本研究の研究方法を提出した上で，日本語の会話例を用いて修復組織の各類型の整理。

まず，[１]に関しては，研究の視点によって，会話分析の手法と語用論の視点からなされた研究に分けて述べた。そもそも，修復の研究が会話分析から由来し，且つ，修復組織についても色々解明されてきた。本研究では，会話分析の研究成果が研究の背景に当たり，主要な研究をまとめて整理した。そして，本研究は語用論の視点を取っているため，英語

における語用論的研究において，関連性の高い諸研究を整理してみた。更に，修復組織に限定し日中対照を行うにあたり，日本語や中国語における修復諸研究が会話分析の手法が用いられた修復組織に関するものが殆どであるため，研究背景の一部として主要な研究を取り上げて整理した。

次に，[2]に関しては，先行研究を踏まえながら，本論文の研究方法について述べた。主に，①伝達の理解過程まで生じたトラブルを修復対象とする研究範囲を，伝達の受容過程まで拡張して設定し直した，②語用論の視点を導入して，伝達過程における修復の語用的機能に重点を置いている姿勢を明確化にした，という２点をめぐって述べた。そして，伝達における修復の語用的機能を考察する際に，修復組織に対する把握が基礎になり，且つ，日本語の会話例を用いて修復組織の各類型について説明する研究が管見の限りまだないようであるため，修復の機能に対する考察の土台として，実際例を用いて整理した。

以上，研究背景について述べた。そこで，第 3 章では，順調な伝達が達成されるために修復装置どのように働いているかという修復の機能を動的に捉えるためには，「会話参加者がトラブルを解決するには何をしているか」だけでなく，「参加者が順調な会話を妨げるトラブルを予防するには何をしているか」ということも考慮に入れる必要があると考え，修復行為と相補的な機能を持つ装置である調整行為も考察対象に入れることにした。第 3 章は，次の 2 点をめぐって展開した。

[3] 修復と調整の構造上の相違点について述べたうえで，調整の対象を「情報伝達的調整」と「対人関係的調整」に分けて，具体的な言語現象を取り上げて説明したこと。

[4] 伝達過程を産出過程・理解過程・受容過程に分けて，それぞれの過程に生じたトラブルに対する調整行為と修復行為の接点を探ってみた。その上で，二つの過程に同時に関わっているトラブルに対する修復行為と調整行為を説明したこと。

まず，[3]では，「会話の流れをいったん止めて行うか」という基準をもって，調整行為は構造的に潜在性が高いのに対して，修復行為は構造的に顕在性が高いという結論に至った。調整の対象について，具体的には，「情報伝達的調整」は聞き手の理解過程まで生じうるトラブルを抑制するものであり，「対人関係的調整」は聞き手の受容過程に関わっているトラブルを防ぐものである。よって，前者について，正確な理解を妨げる＜形式文脈の非共有＞と＜会話参加者が知識上の非共有＞に対して，「形式文脈の共有義務違反を防ぐ」調整行為と「一時的な知識共有」に対する調整行為を対象として具体例を挙げながら説明した。後者については，相手の受容態度を妨げる＜不同調＞と＜フェイス状態の非均衡化＞に対して，「同調による効果を目的とする」調整行為と「フェイス状態の均衡化を目的とする」調整行為を対象として具体例で説明した。

[4]では，発話の産出・理解・受容過程における調整と修復の接点に関しては，主に，従来の研究では修復対象とされてきた発話現象を調整対象とするほうが適切であるという前提に立って，例えば，発話者が明らかに言い間違っている場合に，その言い間違いを訂正する現象は修復とするべきだが，発話者が特に言い間違っていない時にも既に言い出した内容に対して付加説明や注釈挿入をする現象は，聞き手の理解上の問題や受容上の問題を防ぐための調整とするべきだと主張した。そして，二つの過程に同時に関わっているトラブルに対する調整と修復に関しては，①産出と理解②産出と受容③理解と受容に分けて捉えた。①については，主に＜形式文脈共有義務の違反による理解上の問題＞を抑制する調整行為と＜話題転換を予告することで理解上の問題を抑制する＞調整行為を取り上げ，理解上の問題を抑制するという調整機能について考察したうえで，その効果を検証するために，上記のケースにおいて調整行為が行われない場合に修復が生じた例を用いて説明した。②については，産出過程において受容上のトラブル（不同調やフェイス状態の非均衡）を防ぐために行われた調整行為について述べた。更に，③については，理解過程に生じた不理解というトラブルが時に受容上の問題（主にフェイス状態に与える影響）にも関わっているため，この二つの過程を独立に扱うのではなく，相互的に影響を与える可能性を考慮に入れなければならないとした。

以上のように，各過程における修復行為と調整行為の対象や機能について具体例を挙げながら考察した結果，「情報伝達的調整／修復」「対人関係的調整／修復」に分けて捉えることができるという枠組みを確立した。

以上のことを踏まえて，第Ⅱ部（第４章・第５章・第６章）の内容について述べる。第４章では，理解過程に生じた２種類のトラブルを取り上げ，次の２点に分けて論じた。

[5] 不理解を防ぐ調整行為と不理解を解決する修復行為について，不理解を導く原因をどのように防ぐか，その原因をどのように取り除くかというメカニズムに対する考察。

[6] 誤解を防ぐ調整行為と誤解を解決する修復行為について，誤解を導く原因を事前的に防ぐ，もしくは事後的に取り除くというメカニズムに対する考察。

まず，[5]では，不理解を招く原因について，知識上の問題（間違った想定／百科事典的知識上のギャップ／知識の一時的非共有）が重要なファクターであることについて述べた上で，こうした知識文脈の状態に対する調整と修復の機能について考察した。不理解という理解上の問題を抑制するために，知識文脈に対する調整行為に関して，①新情報を出す時に遅延や半疑問などの手段で相手との一時的共有を目指す調整行為，②新情報を出す時に発話を中断し，付加説明を付けて調整する行為，③聞き手の知識状況を事前に確認するという調整手段，という３種類を用いて説明した。そのうえで，こうした調整行為が行わ

れない場合において，修復装置がどのように作動し働いたかについて実例を用いて述べた。以上のことを踏まえ，伝達過程における理解上の問題をなくすために作動している調整装置と修復装置の連動的関係について，不理解を抑制する機能のある調整とそれを事後的に解決する機能のある修復の実例を使用して論じた。

次に，[6]について述べる。聞き手が理解できない時には，よく「え?」「何?」或は「相手の先行発話の一部の繰返し＋上昇調」といった修復開始表現を用いて相手に修復を要請する。こうした修復開始表現がなされた瞬間，聞き手には既に（発話全体もしくは一部に対する）不理解が生じたことになる。そこで，話し手が不理解を導く要素を事前に防ぐことに失敗した場合，修復装置でそれを解決するしかない。それに対して，誤解には程度の違いがあるため，完全な誤解にならないように，話し手も聞き手も調整することが可能である。話し手の調整手段は不理解を抑制する調整手段と重なっている部分が大きく，一方，聞き手の調整手段としてよく使われるのは，自分の理解が正しいかどうか確認するという＜理解チェック発話＞である。それは，もし自分の理解が誤解の方向に進んでいるものであった場合，受け手がそれを遮断することができるからである。それにもかかわらず，話し手の調整手段と聞き手の調整手段は抑制機能が十分に発揮せず，聞き手が完全に誤解した場合，修復装置でその原因を取り除かなければならなくなる。そこで，完全な誤解に対して，修復がどのように行われたか，どういった修復組織が利用されているかについて考察した。そして，伝達過程における理解上の問題をなくすために作動している調整装置と修復装置の連動的関係について，誤解を抑制する調整とそれを事後的に解決する機能のある修復の実例を使用して論じた。

第 5 章と第 6 章では受容上の問題について述べた。それぞれ，第 5 章では会話参加者間の不同意を，第 6 章では会話参加者間におけるフェイス状態の非均衡化という問題を取り上げた。主に次の 3 点をめぐって述べた。

[7] 不同意を抑制する調整行為について，具体的な調整手段やその機能に対する考察。

[8] 不同意を解決するための修復行為について，不一致の性質によって分けて修復の結果に対する考察。

[9] フェイスバランスの枠組みを確立した上で，フェイス状態の均衡を保つ調整行為とフェイス状態の非均衡を解決する修復行為に対する考察。

まず，[7]について述べる。順調な伝達には，話し手の発話内容が聞き手に受け入れられ，両者間の分岐が最小限に抑えられていることが必要であろう。そこで，話し手が最大の一致を求め，不同意を抑えるために事前に調整することが想定できる。話し手の調整手段として，①発話の示し方で主張態度を弱める（発話末が「かな」「気がする」というモダリテ

ィ要素を使う／自分の管理下にある情報を出す時に半疑問を伴う）②自分の見方を低く価値づける，という２種類について述べた。これらの手段には，相手の受容態度を同意に導く機能があるため，不同意を抑える機能のある調整装置とした。繰返しになるが，こうした調整行為には抑制機能しか備わっていないため，完全に不同意をブロックする機能がない。そこで，そうした不一致が顕在化になった場合に起きた修復について考察した。

次に，［8］では，不同意を抑える調整機能が十分に働いていない場合，両者間の不一致は不同意発話が表明されることで顕在化されてしまう。その不同意を引き起こした原因（事実に対する認識上の不一致か，評価や見方における不一致か）によって区別し，各場合における修復プロセスを考察した結果，事実に対する認識上の不一致を修復する時に，両者間の不一致が一致に変わるが，主観的な見方や評価に対する認識上の不一致は簡単に修復されず，必ずしも不一致から一致にはならないという傾向が分かった。こうした不一致の性質による修復結果の違いや先に述べた不同意を抑制する調整行為（例えば，自分の見方を低く価値づけるという手段には，自分のフェイスを侵害する可能性がある）に関しては，ポライトネスの視点から分析する必要があると考える。

さらに，［9］について述べる。そもそも，順調な伝達とは，情報が聞き手に正確に理解され，発話内容が聞き手に受け入れられただけではなく，会話参加者間のフェイス状態の均衡も同時に保たなければならない。まず，フェイスバランスの枠組みとは，ある行為が話し手のフェイスを侵害したか聞き手のフェイスを侵害したかという一方向的な捉え方ではなく，会話参加者の間にフェイス状態というものが抽象的に存在しているという仮設のもとで，会話参加者が当面の発話がフェイス状態に与える影響を見積もりながら，フェイス状態の均衡化を取るために調整を行う，もしくはフェイス状態の非均衡化を修復するというメカニズムを検証するためのものである。そして，どのような行為を対象とするかに関しては，文脈によってあらゆる行為がフェイス侵害行為になりうるため，本研究では，B&L（1987）の枠組みにおけるフェイス侵害行為の内容について全てを取り入れるということはせず，その一部に限定した上で，フェイス支持行為も考慮に入れた。具体的には，指向性のある（自己指向的か他者指向的か）否定的評価と肯定的評価に縮小して論じた。これら 4 種類の行為には，いずれもフェイス状態の均衡を失わせる働きがあり，同時にそれを修復する機能がある。具体的な考察では，分析単位を小さな発話連鎖から大きな会話断片まで拡大しつつ，会話参加者が両者間のフェイスバランスを維持する実態を把握することができた。

以上のように，理解上の問題に対処する調整と修復は，受容上の問題（不同意とフェイス状態の非均衡化）に対しても機能していることが分かった。続いては，本研究の第Ⅲ部について述べる。

第Ⅲ部は，修復機能ではなく，修復構造について日中両言語を対照している。修復行為は構造的に，＜修復開始＞と＜修復実行＞からなる。これまでの修復研究を概観して，管見の限り日中対照はまだなされていないため，修復構造の一般性をある程度検証することができるのではないかと考える。そこで，第 7 章と第 8 章は，次の 2 点に分けて述べた。

[10] 自己開始形式と他者開始形式に対する日中対照。
[11] 修復実行方策のうち，同一ターンにおける自己修復方策と他者開始・自己修復方策についての日中対照。

まず，［10］では，自己開始形式を考察するとき，中断の有無及び発話表現の有無に着目し，日本語の会話例として 75 例，中国語の会話例として 66 例を収集して，その使用状況について量的に調査した。日本語の例と中国語の例との共通点については，日中ともに非発話的表現の使用が顕著であり，非発話的表現（中断）と何らかの発話表現には，いずれも発話者が修復に入ろうとするという予告機能があるため，つまり，日本語にも中国語にも，自分の発話を修復する際に，何らかの手段で相手に予告するところが一致している。それに対し，相違点に関しては，①日本語においては，開始形式としての発話表現の種類が中国語より豊富であり，使用頻度も高い（日本語は 74 例のうち 41 例であり，中国語は 66 例のうち 16 例しかない)。②中国語のデータから「っていうか」に相当する開始表現が観察されていないものの，他の三種類（直前の発話を否定する表現／入出力制御系の感動詞類／言い淀み系の感動詞類）は形式も機能もほぼ一致している。全体的には，従来非秩序的とされてきた自己開始形式の使用において，トラブルの性質によって各種の開始手段が使い分けられている可能性があることが示された。なお，この秩序性は日本語だけでなく，中国語にも同様の傾向が観察されたため，一般的な現象ではないかと考えられる。

そして，他者開始形式を考察するにあたって，日本語に関する先行研究における形式が不完全であることや（他者開始・自己修復という類型に限定されており，他者開始・他者修復に関する考察がない)，分類基準に問題があることなどを指摘し，実例を用いて形式の再整理及び分類基準の修正を行った。その上で，日本語の会話例として 65 例，中国語会話例として 64 例を利用して対照してみた。その結果，それらの例の共通点に関しては，他者開始・自己修復という組織における開始形式の類型がほぼ同じであり，その機能も相似している。他者開始・他者修復という組織における他者開始形式において，日本語では，4 種類の開始表現が観察されたのに対して，中国語では 3 種類が観察された。日本語における「全体/部分繰返し＋っていうか」という手段に対して，中国語では，「（一部繰返し）＋遅延」という手段が使われている。

全体的にみると，使用状況においては細かな差異があるものの，修復の開始形式の類型や機能が高度に似ていることが分かってきた。

次に，［11］について述べる。同一ターンにおける自己修復方策に関する日本語と中国語の先行研究を踏まえて，修復方策の類型を再整理した。日本語の会話例を 99 例，中国語会話例を 93 例収集して予備分析を行った結果，自己修復方策を，①言い直し，②言い換え，③言い足し，④途中放棄して再構成，の 4 種類にまとめ直した。このように，修復方策の基本的類型が共通していることが予備分析を通して判明した。具体的な使用状況においては，例えば，日中両言語ともに＜言い直し＞という方策が割合的に最も多いこと，中国語には文法レベルの間違いに対処する＜言い直し＞の例が日本語より少ないこと，というようなばらつきが観察されたものの，全体的には相似していると言える。そして，他者開始・自己修復という組織における修復方策について，日本語会話例を 49 例，中国語会話例を 44 例収集して予備分析をすることを通して，（相手に修復を要請されたあと）積極的に修復する方策と消極的に修復する方策に分けて捉えることができると分かった。前者には①言い直し，②言い換え，③言い足しという 3 つがあり，後者には④修復回避⑤理解候補を肯定するという手段がある。同一ターンにおける自己修復方策と同様に，日中両言語ともに 5 つの下位類型に収束されていることが最大な共通点になっている。最も顕著な相違点とは，中国語のデータから＜言い直し＞の方策が全く観察されていないところである。つまり，日本語と比べて，中国語では，相手に修正を要請された場合，トラブル産出側が自分の発話を否定したり不適切であると示したりする傾向が見られていないということである。

## 9.2　今後の課題

最後に，これから検討すべき課題について触れることにする。

第一に，研究対象について更に拡大して考察する必要がある。まず，理解上の問題について，不理解と誤解に限定しているが，その他にもあるはずであり，例えば，理解困難というトラブルに対して，聞き手がどういう手段で困難さを表現するか，会話参加者がどのように修復するかなどについて考察する必要がある。そして，受容上のトラブル，特にフェイス状態に関わる部分において，すべての発話行為ではなく，フェイス状態に対する影響が明確的である肯定的評価と否定的評価に限定しているが，フェイスバランスの枠組みの有効性を検証するためには，ほかの発話行為に拡大して考察しなければならない。また，修復実行方策に対する日中両言語の対照も自己修復方策の一部に限定して行ったため，ほかの組織類型における自己修復方策や他者修復方策について日中対照をする必要もある。

第二に，フェイス状態の均衡化を保つための調整機能とその非均衡状態を解決する修復機能は，理解上の問題を解決する修復機能とは同じ次元のものではなく，発話を産出する

時にも理解過程の問題に対処する時にも，会話参加者が常に両者間のフェイス状態に配慮しながら行動している可能性がある。例えば，相手の理解に明らかに問題がある場合においても，フェイス状態に与える影響を見積もってあえて修復しないこともあれば，フェイス状態に対する配慮が足りず相手の理解上の問題を修復するのに失敗することもある。つまり，伝達上の何らかの破綻は会話参加者のどちらかが失行したことを意味しており，その破綻を修復する際に，両者間のフェイス状態に必ず何らかの影響を与えるだろう。順調な伝達を達成するために，フェイスバランスが優先されている場合についても考察する必要がある。

第三に，本研究では，修復構造に限定して日中対照を行ったが，修復の機能に関しては対照研究ができなかった。これも今後の重要な課題として設定しておきたい。

以上，今後の研究では，日本語における言語的修復行動に対して，研究対象を拡大して語用論的視点からより全面的に考察することと，修復構造だけでなく，修復の機能に関しても日中対照を試みて，機能上においても一般性があるかどうか検証することを通して，修復の研究に役立つことを目指す。

# 参考文献


安達太郎(1997)「なるによる変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』4, 71-83.

新里勝彦(2003)「日本語の省略性について」『沖縄国際大学外国語研究』, 6(2), 247-267

井上史雄 (1998)『日本語ウォッチング』岩波書店

井原圭子 (1994)『気分は半クエスチョン当世若者話し言葉事情』No.27 朝日新聞社

梅澤実 (1999)「「ていうか」の使用心理から探る中学生の友人関係」『日本語学』12, 79-83

大塚容子(1999)「テレビ討論における前置き表現-「ポライトネス」の 観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部・外国学部』通号 37 岐阜聖徳学園大学教育学部・外国語学部紀要

大塚淳子 (2005)「不同意の表明-日本人大学生の場合」『日本語日本文化』31, 81-95

沖裕子 (1999)「若い人が使う「というか」はどんな言葉ですか」『月刊言語』5 月号, 80-83

小沼喜好 (2007) 「日本語の前置きの働きと分類について」『外国語教育論集』29, 127-137

王萌 (2007)「不同意の表明の仕方-日中の対照を中心に-」『比較社会文化研究』22,13-22

岡本真一郎 (2006)『ことばの社会心理学[第 3 版]』ナカニシヤ出版

加藤重広 (2006)「語用論 の / という 問題」『共同研究プロジェクト報告書　言語基礎論の構築にむけて』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所,169-190

加藤重広 (2009a)「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128, 195-223

加藤重広 (2009b)「語用論から認知言語学を見る」『JCLA Proceedings (認知言語学会発表論文集)』9,535-550

加藤重広(2012)「コンテクストと前提」『ひつじ意味論講座 6 意味とコンテクスト』39-62

木山幸子(2005)「日本語の雑談における不同意の様相-会話教育への示唆」『言語情報学研究報告』NO.6,165-182

串田秀也 (1995)「トピック性と修復活動-会話におけるスムーズなトピック推移の一形式をめぐって-」『大阪教育大学紀要第 44 巻第 *1* 号』,1-25

串田秀也 (1997) 「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰編『コミュニケーシ

ョンの自然誌』新曜社，173-212.

串田秀也(2005a)「参加の道具としての文：オーヴァーラップ発話の再生と継続」『串田秀也・定延利之・伝康晴（編）シリーズ文と発話 1 活動としての文と発話』ひつじ書房，27-62.

串田秀也(2005b)『「いや」のコミュニケーション学-会話分析の立場から―』『月刊言語』11 月号, 44-51

串田秀也（2006）「会話分析の方法と論理：談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」伝康晴・田中ゆかり編『講座社会言語科学 6 方法』ひつじ書房，188-206.

串田秀也(2008) 「指示者が開始する認識探索:認識と進行性のやりくり」『社会言語科学』, 10(2)，96-108.

串田秀也(2009)「理解の問題と発話産出の問題-理解チェック連鎖における「うん」と「そう」-」『日本語科学』25, 43-66

久野暲(1978)『談話の文法』　大修館書店

栗原豪彦（2008）「ポライトネス理論をめぐる論争―「合理主義的(rationalist)アプローチ」と「言説的(discursive)アプローチ」」『北海学園大学人文論集第 *41* 号』，1-51

栗原豪彦（2009）「ポライトネス理論をめぐる論争―「合理主義的(rationalist)アプローチ」と「言説的(discursive)アプローチ」（承前）」『北海学園大学人文論集第 *42* 号』，85-126

郡史郎（2003）「イントネーション」『朝倉日本語講座③音声・音韻』朝倉書店

ゴッフマン（1967）『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』［浅野敏夫（訳）］法政大学出版局

鈴木加奈(2008)「『何かが欠けている発話』に対する他者開始修復:会話の事例から『文法項の省略』を再考する」 『社会言語科学』，10(2)，70-82.

ジェフ・ヴァーシューレン著（2010）『認知と社会の語用論-統合的アプローチを求めて-』［五十嵐海理・春木茂宏・大村吉弘・塩田英子・飯田由幸（訳）］ひつじ書房

田中博子(2008)「阿吽の呼吸:暗示的発話の生成」『社会言語科学』10(2)，109-120.

田窪行則(2005)「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』11 月号, 14-21

田山のり子(2000)「複合辞「ようになる」の意味と用法」『東京外国語留学生日本語教育センター論集』26，69-76.

高木智世（2008）「相互行為を整序する手続きとしての受け手の反応-治療的面接場面で用いられる「はい」をめぐって-」『社会言語科学』10(2)，55-69

田野村忠温(1996)「メタ言語とは何か」『日本語学』15（11)，11-18

張玲玲(2012)「言語的修復行動における他者開始について-形式整理と分類基準を中心として」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』12，249-266.

張玲玲(2011)「言語的修復行動の語用論的研究-その定義と認定基準について-」北海道大学大学院文学研究科，平成 23 年度博士後期課程研究論文Ⅰ（未発表）

張玲玲（2013)「会話における修復の機能に対する一考察-調整との関係に着目して-」『日本語学会 2013年度春季大会予稿集』93-100,日本語学会(2013年6月,於大阪大学)

趙剛（2007)「談話標識「というか」の用法と機能」『日本言語文化研究』10，1-12

陳臻渝(2007)「日本語会話における前置き表現」『言語文化学研究・言語情報編』2，99-115

寺井妃呂美（2000)「談話における「トイウカ」の機能」『日本と中国ことばの梯―佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版，175-186

中村香苗（2011)「会話における見解交渉と主張態度の調整」『社会言語科学』第14巻第1号,33-47

中田智子(1992)「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究報(国立国語研究所研究報告 103)』13，秀英出版,267-302

筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』　くろしお出版

永山友子(1996)「展望：repair と呼ばれる言語方略について」『言語学論叢 14 号』43-57

西阪仰（2005)「複数の発話順番にまたがる文の構築: プラクティスとしての文法Ⅱ」串田秀也・定延利之・伝康晴編『文と発話』ひつじ書房，pp.63-90

西阪仰(2007)「繰り返して問うことと繰り返して答えること-次の順番における修復開始の一側 面-」『研究所年報』37:133-143

西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房

林始恩（2010)「親和的関係における否定的評価-日韓の話者の話し方と FTA 補償行為に注目して-」『筑波応用言語学研究 *17* 号』,99-109

林宅男（2008)『談話分析のアプローチ-理論と実践-』研究社

林誠（2005）「『文』内におけるインターアクション−日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって−」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』 ひつじ書房，1-26.

原田幸一（2011）「自分の誤りを自分で訂正するために―同じ順番内での訂正に焦点をあてて―」2011 年度日本語教育学会秋季大会口頭発表

古別府ひづる(1994)「研究報告場面における口頭発表のメタ言語表現−日本人と留学生との比較−」『平成 6 年度日本語教育学会春季大会予稿集』，103-108

福原奈美(2010)「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究』第 5 号大阪府立大学，105-125

船橋瑞貴（2011）「注釈挿入の発話構造と言語形式−言語に寄る発話構造の有標化」『日本語文法』11 巻 1 号，105-121

船橋瑞貴（2013）「注釈挿入における発話構造の有標化−言語形式以外のリソース使用に注目して−」『日本語教育』155 号，126-141

平地恩（2008）「新しい音声表現の研究−アクセント・イントネーションによる情報付加に注目して」『文化環境研究』2，30-39.

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』 くろしお出版

堀田智子・吉本啓（2012）「中国人日本語学習者の不同意行動」『2012年度日本認知科学会第29回大会予稿集』，453-462

ホール E.T.（1976)『文化を超えて』[岩田慶治・谷泰（訳）]，阪急コミュニケーションズ

細馬宏通(2005)「修復をとらえなおす−参照枠の修復における発話とジェスチャーの個体内・個体間相互作用−」『串田秀也・定延利之・伝康晴（編）活動としての文と発話』ひつじ書房，123-158

椙本総子（2004）「提案に対する反対の伝え方―親しい友人の会話データを基にして」『日本語』23(10)，22-33

増井展子(2005)「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化−共生言語学習の視点から」『筑波大学地域研究』第25号，1-17

丸山岳彦・高梨克也・内元清貴（2004）「『日本語話し言葉コーパス』に現れた挿入構造の分析」『言語処理学会第10回年次大会発表論文集』，448-451

三牧陽子 (2008)「会話参加者による FTA バランス探究行動」『社会言語科学第 11 巻第 *1* 号』

125-138

都恩珍(2009)「重なり後の発話の中断と修復現象の一側面」『桜花学園大学人文学部研究紀要』第 11 号, 69-77

宮永愛子 (2009) 「出現環境から見た「あの」の談話機能-修復との関わりから」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第58号, 253-260

村田和代(1997)「同意・不同意表現にみられるていねいさ (politeness)」『人間文化研究科年報 13』, 37-48

メイナード・泉子・K (1993)『会話分析』くろしお出版

メイナード, 泉子・K (2004)『談話言語学』くろしお出版

ヤコブ・L・メイ著(2005)『批判的社会語用論入門-社会と文化の言語-』[小山亘(訳)]三元社

八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子 (2009)『異文化トレーニング』三修社

李長美 (2001)「若者語における「ていうか」の用法について」すっきゃねん若者ことばの会第 15 回, 1-17

横溝環(2012)『フェイス相互作用理論―日本語学習クラスにおける相互作用からフェイスワークをとらえる―』 春風社

楊昉 (2009)「意見の不一致における類型と調整ストラテジー-中国語母語場面と日中接触場面 の事例分析-村岡英裕(編) 多文化接触場面の言語行動と言語管理-接触場面の言語管理研究 vol.7 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書218, 65-85

若松美記子・細田由利(2003)『相互行為・文法・予測可能性―「ていうか」の分析を例にして―』『語用論研究』第 5 号, 31-43

Brown, P., & Levinson, S. C., (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Besnier, N. (1989) Information withholding as a manipulative and collusive strategy in Nukulaelae gossip. *Language in Society*, Vol. 18, 315-341.

Bazzanella,C.,Damiano,R.(1999)The interactional handling of misunderstanding in everyday conversations. *Journal of Pragmatics* 31, 817-836

Bosco,F.M.,Bucciarelli.M.,Bara.B.G.(2006) Recognition and repair of conmmunicative failures: A

developmental perspective. *Journal of Pragmatics* 38, 1398-1429

Blum-Kulka,S., Elda,W.(1988) The inevitability of misunderstanding:Discourse ambiguities, *Text* 8, 219-241

Clark,H., Schaefer,E.(1987) Collaborating on contributions to conversations. *Language and Cognitive Processes,* 12 (1987), 19–41

Chui, K.W.(1996) Organization of Repair in Chinese Conversation. *Text* 16/3. 343-372.

Chang, K. (1998)Choosing Repair types in Conversation: Semantic and pragmatic dominants. MA thesis, National Chengchi University.

Drew Paul.,(1997) 'Open' class repair initiators in response to sequential sources of troubles in conversation. *Journal of Pragmatics* 28, 69-101

Dascal,M.(1999)Introduction: Some questions about misunderstanding. *Journal of Pragmatics* 31, 753-762

FerenČík, M. (2005) Organization of Repair in Talk-in-Interaction and Politeness. *Theory and Practice in English Studies* 3, 69–78

Fox, B. A., Hayashi, M., & Jasperson, R. (1996) Resources and repair: A cross-linguistic study of syntax and repair. In E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. A. Thompson (Eds.), *Interaction and Grammar*. Cambridge University Press, 185-237.

Fox, B., Wouk, F., Hayashi, M., Fincke, S., Tao, L., Sorjonen, M.L., Laakso, M. and Flores, W. (2009) A cross-linguistic investigation of the site of initiation in same turn self repair. In J. Sid -nell (ed.), *Conversation Analysis: Comparative Perspectives*, 60-103.

Fox, B.,Maschler, Y., Uhmann, S.(2010) A cross-linguistic study of self-repair: Evidence from Eng –lish, German, and Hebrew. *Journal of Pragmatics*42, 2487–2505

Hayashi, M. (2003) Language and the body as resources for collaborative action: A study of word searches in Japanese. *Research on Language and Social Interaction*, 36(2), 109-141.

Jacobs, S., Jackson,S.(1989)Building a Model of Conversational Argument, in B.Dervin (ed), *Rethin -king Communication*. Newbury Park: Sage, 153-171

Jasperson, R., Hayashi, M., and Fox, B. (1994) Semantics and interaction: Three exploratory case studies. *TEXT* 14(4), 555-580.

Jefferson,G.(2007) Preliminary notes on abdicated other-correction. *Journal of Pragmatics* 39, 445–461

Kasper,G.(1985) Repair in foreign language teaching. *Studies in Second Language Acquisition 7,* 200-215

Levinson, S.C.(1983)*Pragmatics*. Cambridge University.

Liang.T.(1995) Repair in natural Beijing Mandarin Chinese. *Yuen Ren Treasury*, ed.by D. P. Branner, 55-77.

Mori, J.(1999)*Negotiating agreement and disagreement in Japanese*. Amsterdam:John Benjamins.

Myers, G.(2004) *Matters of Opinion: Talking about Public Issues*. Cambridge University Press,

Moerman, M. (1977) The preference for self-correction in a Thai conversational corpus. *Language,* Vol. 53, 872-882.

Norrick,N.R.(1991)On the organization of corrective exchange in conversation. *Journal of Pragma -tics* 16,59-83

Pomerantz, A. (1984)Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/ dispre -ferred turn shapes. In J. M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis,* 57-101

Rees-Miller, J. (2000)Power, severity and context in disagreements. *Journal of pragmatics*, 32,1087-1111.

Sacks,H.,Schegloff,E.A.,Jefferson,G.(1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn -Taking for Conversation. *Language,* 50(4),696-735.

Schegloff,&Jefferson,& Sacks.(1977).The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 54 (2), 361–382.

Schegloff.E.A(1979)The Relevance of Repair to Syntax-for-Conversation, in T. Givon (ed.), *Syntax and Semantics, Volume 12: Discourse and Syntax*, New York: Academic Press, 261-286.

Schegeloff,E.A.(1987) Some sources of misunderstanding in talk-in-interaction. *Linguistics* 25, 201-218

Schegloff, E.A.(1992) Repair after next turn: The last structurally provided place for the defence of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology,* 95(5), 1295-1345.

Schegloff, E.A. (2000)When 'others' initiate repair. *Applied Linguistics*, 21(2), 205-243.

Shuya Kushida(2011) Confirming understanding and acknowledging assistance: Managing trouble responsibility in response to understanding check in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics 43*, 2716-2739

Suzuki, Kana(2010)Other-initiated repair in Japanese: accomplishing mutual understanding in conversation. Unpublished doctoral dissertation, Kobe University.

Svennevig,J.(2008)Trying the easiest solution first in other-initiation of repair. *Journal of Pragmatics 40*, 333-348.

Sifianou(2012) Disagreements, politeness and face. *Journal of Pragmatics*.44: 1554–1564

Tomasello, M., G.Conti-Ramsden and B.Ewert (1990) Young children's conversations with their mothers and fathers: differences in breakdown and repair. *Journal of Child Language* 17,115-130

Tanaka, H. (1999) *Turn-taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.

Tanaka,Noriko(2010) Politeness Strategies Used to Agree, Disagree, and Avoid Disagreement : roles and linguistic choices in face-to-face interactions, 『清泉女子大学紀要 58』,109-129

Tseng, S. C. (2006) Repairs in Mandarin Conversation. *Journal of Chinese Linguistic*, 34 (1), 80-120.

Tang,C.(2010)Self-monitoring in Classroom Monologue: Self-repairing devices and discourse markers. Doctoral Dissertation, National Tsinghua University.

Tang. C. (2011) Self-Repair Devices in Classroom Monologue Discourse. *Concentric: Studies in Linguistics* 37(1), 93-120

Weigand,E.(1999)Misunderstnding: the standard case. *Special issue on 'misunderstanding'. Journal of Pragmatics* 31, 763-785

Zaefferer,D.(1977) Understanding misunderstanding: A proposal for an explanation of reading choices. *Journal of Pragmatics* 1, 329-346

Zhang, W. (1998) Repair in Chinese Conversation. Doctoral dissertation, University of Hong Kong.

Yang.R.W.(2006) Repair in web-based conversation: a case of Chinese academic discussion. Doctoral dissertation, University of Leicester.

**コーパス類**

宇佐美まゆみ監修(2007)「BTSJによる日本語話し言葉コーパスー日本語会話1（初対面・友人、雑談・討論・誘い)」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)課題番号(15320064)研究成果

# 参考資料 I

# 日本語における自己開始形式

1. ＜BTS 男女討論 1＞

29　29　*　JPF01　あんまり思わなかったな、あの、私。

30　30　*　JPM01　あ、ほんとに?。

31　31　*　JPF01　あ、でも、小学校、中学…、あ、中学校か、中学校でマラソン大会とかの距離(<笑い>) が女の子の方が短いから、<笑いながら>あーよかったと思う。

32　32　*　JPM01　<そんな理由かよ>{<}<笑いながら>。

2. ＜BTS 男女討論 1＞

123　116　*　JPM01　いずれは家庭を持って、養うか。

124　117　*　JPF01　んー、でも誰でもがさ、やし、誰かを養うって考えてるわけじゃないよね。[最後の方遅く]

125　118　*　JPM01　んー。

127　120　*　JPM01　んー、でもさ、世間一般的にそういう風に見られてるっていう事実はあるでしょ?(んー)。

3. ＜BTS 男女討論 1＞

213　202　*　JPF01　んー、何だろ、/少し間/上上ってや、目指さないって###。[語尾は小声]

214　203　*　JPM01　あ、そうか。

215　204　*　JPF01　目指す必要を感じてないとか。

216　205　*　JPM01　あ、そっか。

217　206　*　JPF01　んー。

218　207　*　JPM01　だから、他の、にやる時間ができて(んー)、ま、いろいろ広げていくってことか(んー)、女性の場合??。

4. ＜BTS 男女討論 1＞

257　245　*　JPM01　だからじょ、男性の女性化でしょ?。

258　246　*　JPM01　で、女性の男性化が<あるってことでしょ?、きっとね>{<}。

259　247　*　JPF01　<あ、そっかそっか、そうだね、そうだね>{>}。

5. ＜BTS 男女討論 2＞

48　46　*　JPF02　あと、なんかあの女の子はその、子供産もうと思ったら、産もうと思ったらっていうか、変わっちゃうじゃん??、生活が(んー)、がらっと(んー)。

6. ＜BTS 男女討論 2＞

58　56　*　JPF02　=だから子供いらっしゃらない先生もいるし。

59　57　*　JPM02　やっぱり、はなからそういうふうに結構あきらめてる、あきらめてるっていう<か>{<}。

60　58　*　JPF02　<んー>{>}あきらめてるっていうか、一番忙しいときが重なるっていうか、その一番子供が出来やすい時期と重なって、Ｐｈ.D やっててそれどころじゃないとか。

7. ＜BTS 男女討論 2＞

83　79　*　JPF02　で、奥さんが働いて、働いてって言うかまあ。

84　80　*　JPF02　んー、でも少ないよね、それは、まれな例だと思う。

85　81　*　JPF02　逆は山ほどあるだろうけど。

8. ＜BTS 男女討論 2＞

122　117　*　JPM02　やっぱ基本的にたまーに帰ってくるので(んー)、だんだんお客様扱いに、お客様扱いっていうか(ん)、ほんと世話してあげよう(ん)っていう、感じになっちゃうんだけれども(んー)、やっぱりこう何にもしないでいるのもなんか悪いし。

9. ＜BTS 男女討論 2＞

148　140　*　JPM02　だから父親は最近、最近っていうか、ここ 10 年、20 年くらいかな(んー)。

149　141　*　JPM02　自分でお茶を入れるということは別に普通に。

150　142　*　JPF02　んー、ほんとー。

10. ＜BTS 男女討論 3＞

53　46　*　JPM03　<ま>{あ}、そういうの考えれば(うーん)、<笑いながら>女の人生、まあ人生ってほどではないけどさ(うーん)、うん、得なんじゃない。

11. ＜BTS 男女討論 4＞

38　33　*　JPM04　=いや、女に生まれたいとも<笑い>思わないですけど、ただ(うん)、そのもう少しあの(うん)、なんていうんだろ、いわゆる男女(うん)、女性に対して不平等みたいな(うん)流れの中で(うんうん)、まーある意味、女性にはそれによってある程度(うん)、例えば男女雇用機会均等法(うん)とか、そういうようなところで、まあ今もまあ差別みたいのがたぶんあると思うんですけど、正社員で受けようと思ったりしたら。

12. ＜BTS 男女討論 4＞

157　136　*　JPF04　そう、子供を生む生まないを考えたら、結婚はすごい早くしないとさ。

158　137　*　JPF04　だめ…じゃない?。

159　138　*　JPM04　うん。

160　139　*　JPF04　だめともいわないけど。

161　140　*　JPF04　それがなんか、大変かなーと思って。

162　141　*　JPF04　んん。

13. ＜BTS 男女討論 4＞

201　180　*　JPF04　就活、就職活動で友達とかすごい苦労してたし。

202　181　*　JPM04　あー。

14. ＜BTS 男女討論 5＞

117　112　*　JPM05　/少し間/なんか全員が全員、きれいに丸められる、丸めこまれると怖いけどさ、絶対田島陽子みたいな人が<####>{<}。

118　113　*　JPF05　<<笑い>>{>}。

15. ＜女性同士討論 1＞

54　54　*　JDF01　だから私はー、仕事をーするならばー、ちゃんと

ーブランクがあっても、(うん)キャリアになるような、なんかそういう、資格とか、そういうーので一行きたいなっていうふうに、思ってるんだ。

55　55　*　JDF02　/少し間/だけどもなんか、逆にー、じ、自分のしたい仕事ー(うん)に就いた時にー/少し間/その一子どものためにー、(うん)自分のやりたい研究だったりー(うん)そういうのをー、こう、一旦中止してー(うん)/沈黙　4 秒/子どもにそれをす、捨てるわけじゃないけどー(うんうんうんうん)、1 回あきらめーてー、こう、子どもと生活していきますか?。

56　56　*　JDF01　んーっとね、多分やることによって違う、と思うのね。

57　57　*　JDF01　<もし>{<}【【。

58　58　*　JDF02　】】<私は>{>}それがちょっとできないかなって思って(んんんん)。

16. ＜女性同士討論 2 ＞

121　119　*　JDF03　/沈黙　6 秒/でも、か、今ーこう、大学で、4 大出てー、完全にしゅう、結婚したら、もうすっぱり仕事を辞めます、っていう人は、やっぱり少ないです<よね?>{<}。

17. ＜女性同士討論 2 ＞

124　122　*　JDF04　ていうかあれでしょう、がく、学歴っていうか、その大学とか出ちゃってー、(んー)そこまでいったのにー、(んーんー)もう、なんか完全に家んなか、みたいなの、なんか、少ないんじゃないかなーって思う。

18. ＜女性同士討論 2 ＞

126　124　*　JDF04　下手に、こう、視野が、広めに、広くなっちゃうとさあ(<笑い>)なんか、ね?、大体、こう(うーん)、うん。

19. ＜女性同士討論 3 ＞

113　100　*　JDF06　相手の人にもこう意識が、ちが、違うというか、相手の人にもこう、また、(うん)理解が(うんうん)ないと、難しいかもしれない。

114　101　*　JDF06　で、理解のある人、#####<笑いながら><2 人笑い

20. ＜女性同士討論４＞

1　1　*　JDF07　私は共働き、に、がいいなあって思ってて。

2　2　*　JDF07　っていうのは女性、は結婚するって専業主婦になっちゃったら、それでなんか、人生終わっちゃったのかなって<笑いながら>。

21. ＜女性同士討論４＞

5　5　*　JDF08　それで、主婦を、専業主婦をやりながら、自分の好きなことも、できると思うんだけど。

22. ＜女性同士討論４＞

8　8　*　JDF07　仕事も、仕事は 1 つとあってー、(うん)そこで、なんだろう?、多分その仕事につくために、今まで勉強してきたり(うんうん)、大学も行ったりとかして、(うんうん)と思うから、それで、やっぱり、それを通して(うん)、やりたいものを見つけて、やって得た仕事なのに(うんうん)、結婚した瞬間にやめちゃって(うん)、なんか言い方悪いけど、夫の、に従うみたいな感じ??<2 人笑い>、になっちゃうのが、悲しいなー(ああ)って。

9　9　*　JDF08　じゃあ、共働きしたらー、あのー、家庭のことはどうするの?。

23. ＜女性同士討論４＞

39　36　*　JDF08　仕事、大学卒業したら働、いて、働、こうと思ってるの?。

40　37　*　JDF07　思ってるよ、<思ってる>{<}。

41　38　*　JDF08　<ああ、そうか>{>}。

24. ＜女性同士討論４＞

104　97　*　JDF08　なんか、そう、旦那さんがすごい、収入も安定してててー、(うん)そういう人だったら、別に、専業主婦、になっても全然、普通に暮らしていけるんだったら、それでいいけどー、本当に、こま、お金にね、困って、なんか、困ってたらー、やっぱり私が働くしかない<とは######>{<}。

105　98　*　JDF07　<そうですね>{>}、働かざるをえ<なくなるからね>{<}。

25. ＜女性同士討論４＞

112　104-1　/　JDF07　"やっぱりさみしいしょう、幼少時代を過ごすと、大人になってね,,"

113　105　*　JDF08　そうそうそそうそう。

26. ＜初対面雑談 1＞

144　133　*　JBF01　うん、授業は 1 年間ずっとひたすら『赤ずきんちゃん』??、違う、『白雪姫』(うんうんうん)を、読むんですよ、ディズニーの。

145　134　*　JSF02　ふーん。

27. ＜初対面雑談 1＞

198　184-1　/　JSF02　"でもー、なんか 2 次会があって、(うん)2 次会は私たちもともともう行くって言う(うんうんうん)予定になってたみたいで、(うん)その、夫婦が大学の友達同士で、で、その大学のときの友達と私たちと、で、皆で 2 次会に、を開いて(ふぅん)で、そ、それがすごい楽しくてパーティーで,,"

199　185　*　JBF01　へぇ<ー>{<}。

28. ＜初対面雑談 1＞

311　290　*　JSF02　あーそうそうだってマレーシアに、あーじゃない韓国行った時も、その、飲み屋とかも(うん)、奥地っぽい(うんうん)なんか'ここがいいんだよ'みたいなとこで。

312　291　*　JBF01　ふーん。

30. ＜初対面雑談 2＞

41　40-1　/　JOF01　"=今はね一時帰国中で、(あぁー)あの、あのなんか SARS が結構ね,,"

42　41　*　JBF01　あ、<そうですよね>{<}。

43　40-2　*　JOF01　<あの、はやってたときに>{>}(うん)1 回戻ってきて、(へー)でそのまま、まだいるんですけど。

44　42　*　JBF01　じゃあ(ん)、今度いつ…帰られ、戻られるんですか?。

45　43　*　JOF01　そうですね、8 月…頃に、うん、戻ろうかなーと(うーん)思ってるんです=。

31. ＜初対面雑談 2＞

239　223　*　JOF01　ロシアしかも、寒いですか?。

240　224-1　/　JBF01　"うんー,,"

241　225　*　JOF01　そうでもない?。

242　224-2　/　JBF01　"夏はすごく暑いんですけど,,"

243　226　*　JOF01　=あ、そうですか=。

244　224-3　*　JBF01　=短いですね、すごく。

245　227　*　JOF01　あ、なるほどねー。

246　228-1　/　JBF01　"でも寒いから逆に、(うんうん)きちんとしてて、うんー、逆にいうと日本が暑いぐらい,,"

247　229　*　JOF01　あーそっか。

248　228-2　*　JBF01　あ、日本が寒いぐらい。

249　230　*　JOF01　あっ、あー、そっか(うん)そっか。

250　231　*　JOF01　暖房のね、そう、設備が。

251　232　*　JBF01　そうそうそう。

252　233　*　JOF01　そういえば、(うん)台湾も暑いって思ってると、(うん)結構冬は寒くて、(あー)それなのに暖房の設備がないんですよね。

32. ＜初対面雑談 2＞

260　241　*　JOF01　うん、でも夏が、やっぱりすごく長くて、(うん)こう春夏、あ、春と秋??、すごい過ごしやすい時期は(うん)ほんのちょっと。

261　242　*　JBF01　ちょっとだけ?。

262　243　*　JOF01　うん、それであとはなんか謎の冬みたいな<2 人で笑い>。

33. ＜初対面雑談 2＞

284　263-1　/　JBF01　"仕事で、その台湾に、ご主人と(うん)行かれる前は、(うんうん)その、有無を言わさず(うん)、連れて行った、行かれたというか,,"

285　264　*　JOF01　<<笑い>>{<}。

34. ＜初対面雑談 3＞

9　48　*　JBF02　=日本語科の方たちって、すごいですよね。

50　49　*　JBF02　すごいですよねぇっていうか、なんか(はい)私たちにない視点をもってるっていうか。

51　50　*　JSF02　あー、なんかやってることが全然違いますよね、なんかね<笑い>。

35＜初対面雑談 3＞

71　70-1　/　JBF02　なんか関東、じゃない、東京よりどっちだ西の人,,"

72　71　*　JSF02　西の方、うん。

36. ＜初対面雑談 3＞

100　96　*　JSF02　ふぅん、え、じゃあベトナム語もアメリカ語、あ、アメリカ語(<笑い>)、英語ももうばっちりですか?。

101　97　*　JBF02　いや、ばっちりって程でもないですね。

37. ＜初対面雑談 3＞

205　187　*　JSF02　そこでマレーシアで、なんか色々聞いて、はぁー、なんかこれ、多言、マレーシアもー、多民族国家じゃないですか。

206　188　*　JBF02　うん。

38. ＜初対面雑談 3＞

274　248　*　JBF02　似て…、(へぇー)似てるときもあって。

275　249　*　JSF02　すごいおもしろい、へぇー。

39. ＜初対面雑談 3＞

291　264　*　JSF02　え、半年くらい、10 日、あ、10 日じゃない、10ヶ月くらい?<笑い>。

292　265-1　/　JBF02　"丸々1 年,,"

293　266　*　JSF02　あ、そう<なんですか>{<}。

294　265-2　*　JBF02　<1 年ですね>{>}。

295　267　*　JSF02　それはいいですね。

40. ＜初対面雑談 3＞

309　279　*　JBF02　そう、何かお金好きなんでー(<笑い>)、お金好きなんでっていうか(へー)なんか卒論のテーマで(うんうんうん)そん中からー。

41. ＜初対面雑談 3＞

434　394　*　JSF02　あーでもマレ、あれ、シンガポールはすごいきれいですよねー。

435　395　*　JBF02　うーん、<きれい、すぎる>{<}。

436　396　*　JSF02　<確かに>{>}清潔って感じが。

437　397　*　JSF02　なんか治安とかも日本よりもいい感じはしますよね、少しねー。

42. ＜初対面雑談 4＞

124　116　*　JOF01　じゃあ将来は何をしたい…?。

125　117　*　JBF02　あー、もう…就職決まっちゃったんですよ<笑い>。

126　118　*　JOF01　あ、本当に?。

127　119　*　JOF01　あ、もう就職、あのー、卒業ですか?。

128　120　*　JBF02　卒業です。

129　121　*　JOF01　うんうん。

130　122　*　JBF02　4 年生です、今。

131　123　*　JOF01　あ、そっかそっかそっか。

132　124　*　JBF02　はい。

43. ＜初対面雑談 4＞

278　255　*　JOF01　そう､私は入社 1 日目かなんかのときにー(うん)、すごいおじいちゃんみたいな人たちと(えぇえぇ)、まぁおじいちゃんだけじゃないんですけど、いろんなね、うん部の人とご飯を食べることがあって(はい)、もうなんかみんなの話題が(はい)、なんかこう年金とか、なんかもう全然わからない世界でしょ<笑いながら>。[↑]

44. ＜初対面雑談 4＞

295　270-1　/　JBF02　"なんか上司からのいびり(ほぉ)、いびりっていうか怒られるのは辛くないんですけどー(ええ)、その怒られた後にー(うん)、なんか、なんか""君精神病なの?""とかー,,"

296　271　*　JOF01　ほんとに?。[驚いた様子で]

45. ＜初対面雑談 4＞

313　286　*　JOF01　じゃあ今あと 1 年間??(えー)、どうやって過ごそうと思ってます?。

314　287　*　JBF02　いやーちょっとなんか、だめですねー、だめですねっていうか、暇な時間の使い方がわからないんですよー。

315　288　*　JOF01　うんうんうんうん。

316　289　*　JOF01　なんかやり、やっていたいっていう、感じ?。

46. ＜初対面雑談 5＞

56　53-2　*　JBF03　<1、2>{>}、3、4 人か 5 人ぐらいかな??、もっと、あ、4 人ぐらいかな??。

47. ＜初対面雑談 5＞

132　120-1　*　JSF02　なんか、で、なんか、「人名 4」は広東、あ、広東じゃない、香港出身だけど、香港の英語もかなりすごいよとか言って<2 人で笑い>。

48. ＜初対面雑談 5＞

171　157-1　/　JSF02　"後ね、ペルシャ科の友達もね、なんか、ペルシャ語で語学、言語学を、卒論で持てる（うん）先生がいないとかいって,,"

49. ＜初対面雑談 5＞

259　235-1　/　JSF02　"えー、そっか、中国語、じゃ、中国にいたん,,"

260　236　*　JBF03　は、あります。

50. ＜初対面雑談 5＞

283　257　*　JSF02　あ、でも「人名 1」さん、春、あ、じゃ、、今度夏調査行くとか言ってましたよね。

51. ＜初対面雑談 6＞

241　219　*　JBF03　"なんか（うーん）、まだ自分の中でも、答えを出てない、が出せてない（うん）ことを（うんうんうん）そうやってよく聞かれたりして、（うんうんうん）""今まだそれ悩んでるんだよね""とか言いながら<2 人で笑い>。"

52. ＜初対面雑談 7＞

70　69　*　JBF04　えーと、3 年生終わっ、じゃない、2 年が終わってから…。

71　70　*　JSF02　あー、そっかそっか。

53. ＜初対面雑談 7＞

89　83-2　*　JSF02　で、なんかでも寮に、あっ、寮っていうか、大学で教えているから、皆寮に入ってて、で、中国ってけっこう寮多い<じゃないですか?>{<}。

90　86　*　JBF04　<うんうん>{>}。

54. ＜初対面雑談 8＞

48　47　*　JBF04　えー、じゃ向こうに、い(うん)、行く、行ったばかりの時は、やっぱ困ったん<ですか?>{<}。

55. ＜初対面雑談 8＞

64　61　*　JOF01　うん、そうですね、日用会、うん日常会話なら、だいたい大丈夫=。

56. ＜初対面雑談 8＞

120　112　*　JBF04　そうすると、日本語を、(うん)あっ、日本語じゃ、ない(うんうん)でしたっけ?、(うんうん)教えるんですか?。

121　113　*　JOF01　うん、日本語教えてる=。

57. ＜初対面雑談 8＞

193　180　*　JOF01　うん、私 1 回ね、なんかちょっとあの、(うん)海外にちょっと出た時に、(うん)あの、日本語、あ、日本語じゃない、日本を紹介する(あぁ)ガイドの(うん)あの試験みたいなのがあるのね、通訳ガイド(へぇー)っていうのがね。

194　181　*　JBF04　へぇー、えっ、あの国家試験ですか?。

195　182　*　JOF01　あ、国家試験。

58. ＜初対面雑談 8＞

210　197　*　JBF04　<あそこ>{>}ってなんか、(うん)時給じゃなくて、なんだっけ、あの、月給じゃなくて、(うん)日給制なんですよ=。

211　198　*　JOF01　=出来高みたいな?。

59. ＜初対面雑談 9＞

219　203-1　/　JBM01　"文字化はアルバイトで(はいはい)やってる、<やってたんですけど>{<},,"

220　204　*　JSM02　<あーあー、そうなんですかはい>{>}。

221　203-2　/　JBM01　"んーまあ、まあ今も<やってるんですけど>{<},,"

222　205　*　JSM02　<へえー>{>}。

60. ＜初対面雑談 10＞

28　27　*　JOM02　でも、日本の、ね、今まで日本が ODA でね、ばら撒いてたお金のこと考えると、これから、社会、世界で日本語教えるようになれば、そういうことで得られるね、今後の収穫っていうのはよっぽど得られるもの以上に多いと思います。

61. ＜初対面雑談 10＞

33　32　*　JOM02　海外の、たいけ…海外体験とかはあります?。

34　33　*　JBM01　海外は 1 回、1 年間ぐらい（ええ)、アメリカに、その大学で、(はい）まあ、TA みたいな感じなんですけど（ええ)、そこで日本語を教えるというのを<やって##> {<}。

35　34　*　JOM02　<それは> {>}、小学生、中学生ですか?。

36　35　*　JBM01　あ、大学生です。

62. ＜初対面雑談 10＞

39　38　*　JOM02　<あー、でも、じゃあ> {>}、じゃあ、日本語と英語はもうぺらぺらなのかな、あ、英語はぺらぺらなのかな?。

40　39　*　JBM01　まあ、少しは<笑い>。

63. ＜初対面雑談 10＞

195　186　*　JOM02　ですから、あのー…、こういう先進国で<軽い笑い>、やっぱり感染症ってのなくなる、その、予防できる感染症はなくなってしまうっていうのはね、まああまり、喜ばしいことではないんですよね。

196　187　*　JBM01　うーん。

64. ＜初対面雑談 11＞

246 227 * JSM02 今どちらに、ひとりぐら、1 人暮らしですか?。

247 228 * JBM02 や、今自分実家暮らしです。

248 229 * JBM02 あ、実家暮らし。

249 230 * JBM02 はーい。

65. ＜初対面雑談 11＞

419 388-2 * JBM02 あの単位に(はい)、が出る実習もあるんですけど。

420 391 * JSM02 あーー。

421 392 * JBM02 それはそれでやって、それとはまた別で<という>{<}感じで。

66. ＜初対面雑談 16＞

55 53 * JOM02 で、中国、中国語圏の人たちも来るし…、ねぇ。

56 54 * JBM04 うーん、そうですね。

67. ＜初対面雑談 16＞

84 79 * JOM02 でも、国連に入るんだったら、あれだよね…、母国語を、母国語じゃないところのだい、大学院でないとだめなんだっけ?。

85 80 * JBM04 そうなんですか?=。

86 81 * JBM04 =僕はよく分からないんですけど。

68. ＜初対面雑談 16＞

205 190 * JBM04 勉強したことあるん###?。

206 191 * JOM02 でも、今してるんですけど。

207 192 * JBM04 あー。

208 193 * JOM02 してるんじゃなくて、もうただね、こう、中国の放送を聞いてる=。

209 194 * JOM02 =ただ、ただ(へえー)それだけなんですけど。

69. ＜初対面雑談 16＞

312 290 * JOM02 /少し間/一番こう、難しい、んとー、中国にいて、

失敗したっていうか、/少し間/困った、っていうのは…。

313 291 * JBM04 困った?(はい)。

314 292 * JOM02 """こおりゃ‘こりゃまいった""、っていう…。"

315 293 * JBM04 いやあ、けっこうたくさんあるんですけど(うん)。

316 294 * JOM02 一番の思い出って。

70. ＜初対面雑談 16＞

321 298 * JBM04 あの、これは、僕のともだ、一緒に旅行行った友達の話なんですけど(ええ)。

322 299 * JBM04 友達が、あの、道路渡ろうとして、あの、あの、オートバイぶつかったんですよ(ええ)。

71. ＜初対面雑談 15＞

33 31-1 / JBM04 "じゃあ、あの、専攻は言語…,,"

34 32 * JSM02 そうです。

35 31-2 * JBM04 日本語学?。

36 33 * JSM02 日本語じゃなくて英語なんですけど。

37 34 * JBM04 英語?。

38 35 * JSM02 あのー、その「先生 1 姓」先生の、論文とか読んでましてずっと、(あぁ)はい(あぁ)。

72. ＜初対面雑談 15＞

180 171-1 / JOM02 "=今日のね、朝日新聞でね、（ええ）なんか ODA のことを少し、あっ、NGO のことちょっと書いて<あったけど>｛<｝,,"

181 172 * JBM02 <あぁ、本当>｛>｝ですか=。

73. ＜初対面雑談 13＞

219 203-1 / JBM01 "文字化はアルバイトで(はいはい)やってる、<やってたんですけど>{<},,"

220 204 * JSM02 <あーあー、そうなんですかはい>{>}。

74. ＜初対面雑談 2＞

284 263-1 / JBF01 "仕事で、その台湾に、ご主人と(うん)行かれる前

は、(うんうん)その、有無を言わさず(うん)、連れて行った、行かれたというか,,"

285　264　*　JOF01　<<笑い>>{<}。

75. ＜初対面雑談 6＞

241　219　*　JBF03　"なんか（うーん)、まだ自分の中でも、答えを出てない、が出せてない（うん）ことを（うんうんうん）そうやってよく聞かれたりして、(うんうんうん）""今まだそれ悩んでるんだよね""とか言いながら<2 人で笑い>。"

# 参考資料Ⅱ

# 中国語おける自己開始形式

1. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

在你用，在你想用这个材料的时候，想要解释某句话的时候，你得解释很多背景方面的东西。

2. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

A:但是刚开始上午，刚开始安排的时候，那个小涵好像只有上午有时间，我认为。

B:但是其实你也不应该安排胡旗跟我聊，我跟她也很熟啊。

A:没办法啊，实在避不开了。就有两组都很熟，剩下的好像都不怎么熟。

B:但你要安排我跟小涵，我跟小涵也挺熟的呀。

A：是呀，就是上午的避不开了嘛，剩下的人要么时间不合适要么

3. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

我昨天听说，我昨天，不是，就是那个入学欢迎会的时候，不是有个新生欢迎式?我没去，那天去教课嘛，没去成。听说那天你彼氏募集?

4. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

a：都挺，叫什么，叫什么，都挺呆板，不能这么说，就有点循规蹈矩的那种，没有人敢开玩笑那种。

B：对啊，我觉得开个玩笑，这，气氛轻松一下挺好啊。

A：我很喜欢啊。

B: 我说是说彼氏募集，但是大家都知道，其实研究室的人都知道，我是不吃窝边草的那种人。

5. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

上一个人是谁，下一个人上来的时候上一个人是谁大家马上就忘掉了。

6. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

后来那个就，后来就过了没几天，就说＊＊的送别会嘛。

7. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

但其实这个气氛哪，其实中国跟，中国学生和日本学生是有这个臭毛病，我觉得是臭毛病哈，就直说，我觉得是臭毛病。

8. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》
她马上，好像你们老师就是说，我要退休了，所以我要培养自己的后植势力，后继，后继的这种，继承自己的这种学说什么的对吧。

9. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》
a：但是呢，我已经有，他已经有两个博士了，已经有两个博士，准备收两个博士研究生了，自己的博士也够多了，所以呢，再收两个博士的话可能就没办法收修士了。然后呢就说，，
b：很委婉的?
A：没有，那个老师反倒很直接，直接告诉我，他有两个，已经有两个那个了，这两年不打算收修士。

10. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》
是申 san 先感冒的，我们研究室的申 san 先感冒的，然后，之后坐在他旁边的，上课都坐在他旁边的孙 san 感冒了，然后，之后，我跟孙走得比较近，经常一起吃饭，我也开始咳了。

11. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》
上次坐公交，不是公交车，打那个出租车，就那个接电话。

12. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》
a：但是哪有订婚戴花戒的啊?
B：嗯?那不是花戒吗?那不是钻戒吗?
A：这是个花戒啊，哪有钻这么小。

13. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》
a：现在八零后啊，也不是所有的不过，八零后比较穷嘛，所以可能不会有太大的钻戒。这就挺标准的一个结婚戒的感觉。
B：没有哎，这就几分哪，从大，是从大的钻石上面切下来的。

14. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》
我们那真是人才，古代的时候是人才辈出，现在不行了。

15.《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

A：一个半小时，那你得准备几篇儿啊?

B：几篇。。一篇呗。你是说多少页是吗?

A：啊。

B：如果下个星期三是演，那个，特殊演习的话，，

A：不是星期三，星期五。

B：星期五那个啊（啊），十页左右。

A：十页左右啊。

16. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

a：我们现在用的，不是现在用的，现在用的是简体字。之后那个开诚，开诚是那个唐代的一个年号，开诚之后，唐宋元明清，都用的是开诚标准。

B：你这方面好了解啊，你以前大学也是学的这个吗?

A：我大学学的不是那个。

B：那你学的什么?

A：我大学其实，我大学，其实我来的时候，刚刚来的时候方向不是这个东西，是那个古代语法的问题。

B：那你大学的时候也学的古语呗。

A：大学没学多久，就学了那么，哎，国内教育嘛，就学了那么一学期。

B：那你专业是什么啊，大学。

A：大学，中英，啊，英日方向。

B：英日方向。

A：就是外国语学院的英日方向。

B：英日方向?

A：对，就是，我们外国语学院嘛，然后有那个日语系，日语系里头有英日方向，英法方向。

B：啊：：：

17. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

A：英语系学什么我也学什么，日语系学什么，其他学校日语系学什么，，

B：那你是四年还是五年?

A：四年。

B：我们学校双语的话要五年。

18. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

a：那你英语也应该挺好的啊。

B：不行，浪费了，就是不说就浪费了。

19. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

a：就是隔了，江西跟湖南就是隔了那个山。

B：我地理学得不好，那你应该挺，挺南边哈?

A：就是很南边儿啊，我告诉你，我们那里现在那个状况就是，江西在这里，这边是福建，下头是那个广东，，

20. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

B：那么近啊?

A：然后就是海了。

B：挨着广东，那广东的北边呗。

A：广东的北边，广东的，左西右东，东北边。

21. 《HCR 中国語会話 2 胡 / 李》

他跟台长吃过饭，湖南台长吃过饭。

22. 《HCR 中国語会話 3 马 / 陈》

a：我记得我上，我上大一，还是大，好像是大二的时候，当时我们那儿有个老师，他是助教，欸?不对，他是讲师，应该是讲师，他说他每个月工资才两千多，，

b：不能吧?

A：就不包括奖金，就纯工资。那应该是 07 年吧。然后我们当时都不相信。

B：不想活了。

A：然后他说再发奖金啊，但是就是那个学校待遇比较好嘛。什么过节给你发点儿水果啊或者发点什么礼品券啊什么的。

23. 《HCR 中国語会話 3 马 / 陈》

因为就是有一次，那个，我俩坐地铁，她那时候在宿舍我也在宿舍，然后，坐地铁正好碰到了。我俩就一块走回去的。

24. 《HCR 中国語会話 3 马 / 陈》
他现在研二，修二，但是马上就毕业了。

25. 《HCR 中国語会話 3 马 / 陈》
他有一个妹妹，也在国外，也在日本读语言学校。
26. 《HCR 中国語会話 4 丁 / 陈》
合租有利于身心健康，这种感觉。因为自己住，住时间长了就不好。也不是说不好，就是你在学校都没人交流，但是保不齐寒暑假的时候回家的话，自己一个人呆着的话我觉得不好。

27. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
一般一顿饭的钱，你像我在旅游区的岛上，，一顿饭就十几块钱，人民币。

28. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
他们大学生平均，他们大学毕业的一年的平均工资，曼谷，不到人民币两千块钱。

29. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
a：哎，那你毕业两年干嘛去了?
B：连工作带玩儿，国内还考了半年研。
A：啥?
B：国内研究生还考过半年。当时我总，，
A：你经历挺丰富啊。
B：我总分，国内考研，总分过了我们学校 50 多分的线（啊），然后政治差三分，然后就没能进复试。

30. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
我是 0，哎，我是 12 年毕业的。

31. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
四个小时，开车四个多小时。然后还不方便，开车过去的话（嗯），特别难走。就哈尔滨市内，特别难走。然后又不了，不熟悉路。

32. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
a：如果坐火车的话，两天一宿?还是两宿，，

b：也没多远啊。

A：大哥啊，四十多个小时啊。对啊，不远啊，但是就是那个，特别慢啊。

B：啊，没有直接过去的?

A：对。

B：你要去，，

A：不是不是，就，有。佳木斯直达烟台的。

B：那不应该挺快啊?

A：四十多个小时。都跑到深圳了，就那个。

33. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》

后来文革结束的时候，可以回来，可以回到北京，但是那个时候只能带 18 岁以下的孩子回去。

34. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》

a：自由行东北不好办吧。

B：对啊，特别不好办。

A：得找旅行社什么的特别麻烦。

B：旅行社压根儿就没有咱们东北，压根儿就没有来札幌的团儿。就没有来北海道的团儿（啊），就有上东京和大阪的有，［其它就没有］。

A：［找，］找旅行社办自由行也能办，就是费用可能会［比较高］。

B：［它必须得］是有到北海道的团儿才能办自由行。

A：还有这样的说法?

B：啊，我也是才知道的，我差点没气晕。

35. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》

a：我们班一共 4 个男生，25 个人 4 个男生。

B：啊，大家都一样。

A：啊，24 个人 4 个男生。

36. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》

反正就，就学日语的，学语言的就是男生少。

37. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》

a：那你大学交换的时候就交换到这儿来了?

B：我就很倒，就很巧啊，我就，我不是交换在北大，我是交换在那边的北海学园大学。

A：哦哦哦：：：

B：就 nei，就那儿。我就在那边上了一年。

A：然后就在这边的时候联系了李老师。

B：对。

A：你是大三下学期走的还是大四上学期。

B：我大三上，我大二下学期走的。哎，不对，反正我是大四上学期，大四下学期回去的。

A：那咱俩一样，都是大三下学期走，大四下学期结束。

38. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

你是那个公费，公派的吗?

39. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

a：有八百留学生呢，北海道，不，中国的留学生，在北海道。

b：嗯，好像七八百的样子，不过基本上应该都集中在北大了吧。北大有，，

A：就说北大是八百中国留学生。

B：哦，北大，嗯嗯。

A：一共是，我看网站上写的是 1100 留学生，八百是中国人。

B：一共 1100 个［留学生啊］?

A：1100 多，不到 1200，然后中国留学生是 780 多还是 790 多来着。

40. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

去年上海高考招 11 万人，结果，欸，是招 12 万人，报考，反正招和报的人差了三千人。

41. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

我一同学，以前在国内的时候认识的同学，他，他在俄罗斯留学了几年嘛，那边特别特别冷。

42. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

原来在群马的时候，零下十几度，零下 10 度，冬天最冷的时候零下 10 度嘛，平时也就零下 7，8 度。

43. 《HCR 中国語会話 6 刘 / 隋》

a：但我记得我妈说每到周三也能两点半放学，但是每周只有那么一天。

B：是啊。

A：啊，三点半放学，两点半放学，对，两点半放学。

B：哦，那还可以啊。

44. 《HCR 中国語会話 7 刘 / 刘》

a：上来大概花多少时间。

B：上来的时候简单的算法是，你吐气的时候看你的气泡不要超过速度最慢的气泡。

A：那大概一次是多长时间?

B：两米每分钟。

A：两米每分钟（好像在考虑）。

B：然后：：

A：（20 米）四十分钟?

B：嗯?

A：两米每分钟，，

B：五米每分钟，什么两米每分钟，五米每分钟（两人开始笑）。

45. 《HCR 中国語会話 7 刘 / 刘》

上来的时候然后在 3 米的时候，在 5 米的时候一般会五米三分钟停留。

46. 《Wang,2005》

看来您还是这个口味比较复，比较多噢。各种东西都想品尝一下。

47. 《Wang,2005》

呃，那你们都看过这篇文，这本小说。

48. 《Wang,2005》

或者说需要一些 shi，书，补充你的这个知识。

49. 《Wang,2005》

他可以继续跟你有，在经济上有牵扯。

50. 《Wang,2005》

人要力争上流嘛，上游嘛。是这样的一种精神。

51. 《Wang,2005》

下班的时候有时候打开车厢里的录音机啊。收音机，收听你的节目。

52. 《Wang,2005》

a：包括房子我都，都不，都没有填我自己的名字。

B：不会吧?

A：真是这样的，真是这样的。

53. 《Wang,2005》

a：从来没有磕磕碰碰的。

B：嗯。

A：脸红，脸都没红过。

54.《Wu,2004:141》

a：我们学校有教师会哦?

B：刚成立，兆明是第一届的会长。

A：兆明?

B：我们怂恿他出来做的。

A：那教师会还有什么，就是，教师会还有什么前途呢。

55. 《Wu,2004:144》

a：可是我有，我有定过长荣，它要七百块啊。我就，来回啦，七百啦。

B：要七百块?怎么那么贵。

A：结果新航才六百啊。

B：那我算一算，我说，我也有贵宾卡啊，我在想说，那我多花那一百块：

A：嗯。

B：然后，去积累历程又觉得，并不觉得很划算。

A：ok。

56.《HCR 中国語会話 8 張 / 胡》

我就... 我其实是想不用她帮忙了的。

57. 《HCR 中国語会話 8 張 / 胡》
我都没有看短信，没看那个邮件。

58.《HCR 中国語会話 8 張 / 胡》
我就吃过那种草，抹茶的那种草绿色的嘛。

59.《Liang,1995》
用完之后往，往抽屉里一搁，也没入柜子，没入保险柜。

60. 《Liang,1995》
在那儿当了 5 个月，2 个月翻译。

61. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》
a：你可能也，也不太知道，有一个跟我，就是比我低一届，台湾的一个小姑娘。叫＊＊＊。
B：我认识我认识。
A：你来的时候她还在?
B：嗯，去年来的时候她还在嘛，去年上半年她还在嘛。
A：上半年还在。

62. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》
她就跟我讲，经常跟我讲台湾的事情嘛。

63. 《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》
她的性格可能，她习惯了以前的那种环境嘛，她就经常第一个讲。

64. 《HCR 中国語会話 5 刘 / 陈》
a：跟他们喝酒，必须得喝到不省人事。
B：是吗?不是吧，我觉得只有东北才愿意把你喝到不省人事啊。
A：我，我，我，东北那些哥们，从小长大的哥们还真没有这样的。就是后来认识山东人净这样的。

65. 《HCR 中国語会話 7 刘 / 刘》
你像潜水长就是 40 本，就 40 瓶，你就可以参加课程，60 瓶，毕业的时候至少要 60 瓶。

66.《Wang,2005》

a：就是有点想（0.2）好像说想不开啊，呃，嗯::轻生那种念头比较多就＝

b：＝轻生的念头＝

a：＝就是，就是，就是说，就是说他不想分手。

**参考文献**

Tao, Liang. 1995. Repair in natural Beijing Mandarin Chinese. *Yuen Ren Treasury,* ed. by D. P. Branner, 55-77. N.p.: Yuen Ren Society.

Ruey-Jiuan Regina Wu(2004)*Stance in talk: A conversation analysis of Mandarin final particles*, John Benjamins Publishing Company.

Yun,Wang(2005)A Study on the Organization of Repair in Mandarin Chinese Conversation, A Research Paper Submitted in Partial Fulfilment of the Requirements for the Degree of Master of ArtsinLinguistics, The Chinese University of Hong Kong

# 参考資料Ⅲ

# 日本語における他者開始形式

例 1＜BTS 初対面雑談 3＞

F1　でもー(うん)、明日はー、3 時でしょ？　3 時に予約をしてある(そうそうそう)から、<あのさ、>{>}【【。

F2→　】】<えっ、3 時>{<}の予約だっけ？　えっ、あれ、4 時半、あれ、<3 時半>{>}。

F1　<ううん>{<}、4 時とれなくて、3 時半か。

F2　<3 時半>{<}。

F1　<3 時半>{>}だから(うん)、午前中は空いてるでしょ?。

例 2＜初対面雑談③＞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 347 | 302-1 | /UF05 | "でもほんと、明らかに、か、海賊版って感じ<でー>{<},," |
| 348 | 303 | UF06 | <あー>{>}。 |
| 349 | 302-2 | UF05 | 途中で飛んだりとかしてる<笑い>。 |
| 350 | 304 | UF06 | <笑い>それって、違法ではないんでしたっけ?大丈夫なんでしたっけ?。 |
| 352 | 306 | UF05→ | えー? |
| 353 | 307 | UF06 | 売る、売る人は違法なんでしたっけ。 |
| 354 | 308 | UF05 | 違法なのかな?。 |
| 355 | 309 | UF05 | でもけっこう堂々と、店を出して…<軽く笑う>。 |
| 356 | 310 | UF06 | そうですよね。 |

例 3＜BTS 友人同士雑談＞

1　M1　そういう話、この前、あれだからね、やっと同級の「人名 3」と「人名 4」にしたばっかりだからね、おれは。

2　M2　なんで?。[↓]

3　M1 →　え?。

4　M2　なんで?トラウマだった?>{<}<笑い>。

6　M1　<いや、そういうの>{>}全然聞かれんかったしさ(あ、そっか)、自分か

ら言うわけでもねーじゃん。

7　　M2　　あ、そっか、そっか。

例 4 ＜友人同士男女間討論①＞

1A　　んー、/沈黙 7 秒/そうね、B さんぐらいになると、あんまりそういう経験はない

2B　　んだろうけどね。

3B　　ん?。

4A　　→ やっぱり女だからどうのこうのって言われるような機会はないでしょ=。

5B　　=そういうとこに出てないから(んー)ね、まだ。

例 5＜初対面雑談②＞

1A　　(就活)お疲れ様です<笑いながら>。

2B　　いえいえいえ、全然。就職活動の、後遺症みたいな…。

3A→　　え、どういうことですか?。

4B　　私、メーカー病だったんですよ。メーカー病、メーカー病になっちゃったってい

5　　うか、メーカー希望で。

6A　　はい。

7B　　メーカーだと CM とかすごいいっぱいやってるじゃ<ないですか>{<}。

8A　　<あー、はい>{>}、やってます。

例 6＜BTS 男性友人同士雑談＞

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 289 | 267 | * | M06 | どんな子だったの?。 |
| 290 | 268 | * | M05→ | え?。 |
| 291 | 269 | * | M06 | どんな子だったの?=。 |
| 292 | 270 | * | M05 | =普通。 |
| 293 | 271 | * | M05 | 普通。 |
| 294 | 272 | * | M06 | 明るいとか。 |
| 295 | 273 | * | M05 | や、普通、普通。 |

例 7＜BTS 男性友人同士雑談＞

1A　　普段相手にたい、している印象。

2B　　あー、最近思ったんはな(ああ)、あれがある。

3B　　「A の名前」はー(ああ)、なんか、人のこと干渉すんの結構好きやんか。

4A　あん。

5B　やけどー、自分に対しては、なんか、絶対干渉されやんようにしてるやろ、結構。

6A　せ‘それ'でも、あんまねー(うん)、干渉、してこないよね、やっぱね。

7B　なんか、干渉すんなっていうオーラ出してるもん。

8A→　まじで?。

9B　うん。

10A　おれ結構、あのー、聞かれたらー、言う気まんまんなんだけどさ<笑い>。

例 8＜BTS 男性友人同士雑談＞

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 101 | 96 | * | M09 | 叫んでみろよ、じゃあ。 |
| 102 | 97 | * | M10 | 叫ぶのじゃない、今日は。 |
| 103 | 98 | * | M09→ | あん?。 |
| 104 | 99 | * | M10 | そういう、なんつーの、ちょっとおかしいと思う<こと>{<}。 |

例 9 ＜BTS 女性友人同士雑談＞

| | | |
|---|---|---|
| 1 | M1 | あのねー<軽い笑い>、あのー、プリクラだと(うん)、すごい光がぱっと来てさ、ほとんど白くなるじゃん。 |
| 2 | M2 | あれだろ、反射(うん、そうそう)っつーか(そうそう)、飛ばすんでしょ?。 |
| 3 | M1 | そうそう。で、やっぱ色黒っていうのは分かる(うん)んだけど,, |
| 4 | →M2 | 色白でしょ?。 |
| 5 | M1-2 | いろじ…、色黒んなるんだよ。[「黒]を強調して] |
| 6 | →M2 | え?。 |
| 7 | M1-2 | この携帯の,, |
| 8 | M2 | あーあー。 |
| 9 | M1-3 | 写真だと。 |
| 10 | M2 | うん。 |

例 10＜BTS 女性友人同士雑談＞

| | | |
|---|---|---|
| 1 | M1 | <冷やかしに来るもん>{>}、冷やかし<が>{<}。 |
| 2 | M2→ | <え?>{>}。 |
| 3 | M1 | 冷やかしが。 |
| 4 | M2 | 冷やかしねー(うーん)、やばいよね、あれ。 |

例 11＜BTS 女性友人同士雑談＞

5　　M1　　でも、あるんじゃない?ま、マネージャーさんから始まって(うん)、テニス部に始まって、そのつながりとか<若干笑いながら>。

6　　M2→　　誰?。あー、他の部員?。

7　　M1　　そうそうそう。

8　　M2　　<あー>{<}。

例 12<初対面雑談②>　二人は無指定で雑談している場面において、A は進学することを B に伝えた後、B の進路について聞いている。

1 A:　　でも結局、そう 4 月に、一番はじめに内定もらった会社に、行くことにしたっ

2　　ていう…。

3 A:　　もうあたしバカだなーっ<て>{<}。

4 B:→　　<え>{>}、何でですか<笑いながら>。

5 A:　　"2 ヶ月以上も,,"

6 B:　　ああ、<そういう意味>{<}<笑いながら>。

7 A:　　<無駄に就職>{>}活動してしまったなー、と思って。

例 13<初対面雑談 4>

1 A-1:　　"でも、私の場合、朝鮮語自体が、日本人にとって勉強しやすいっていう部分が,,"

2 B:　　あー。

3 A-2:　　大きいと思うんですよ。

4 B:→　　え、それは、何か…。

5 A:　　も、語順がいっしょっていうのが大きいと思うんですよ<ね>{<}。

6 B:　　<はー>{>}、そうなん<ですかー>{<}。

例 14＜HCR 日本語会話 2＞二人は O が台湾に行ったときの経験について話している。

O : 台湾 : : 観光みたいなことをしたのは、本当に故宮博物院に行った、それっきりなんで。

M : 何、何ですか、それ。←

O : 故宮博物院ってあのう、'何だっけ'、元々北京にあったお宝をその、まあ、ごそっと(う : : ん)、その、国民党政府が台湾に逃げた時に一緒に持ってたんで(う : : ん)で、を展示している(う : : ん)博物館、で、けっ、かなりいいものがあって, ,

例 15＜BTS 友人同士雑談＞

| | | |
|---|---|---|
| 1 | F1 | "それはそうとさー<笑いながら>,," |
| 2 | F2 | はい。 |
| 3 | F1 | 明日のことを決めなきゃいけない<笑いながら> |
| 4 | F2→ | 明日のこと?。 |
| 5 | F1 | これ、これ[話題の紙]が出てきたから、話がそれまくっちゃった。 |
| 6 | F1 | うんと。 |
| 7 | F2 | うーんと。 |

例 16＜BTS 友人同士雑談＞

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 396 | 380 | * | M07 | /沈黙 5 秒/うーん。 |
| 397 | 381 | * | M07 | [咳払い]まー、でもなー、もてたいね。 |
| 398 | 382 | * | M07 | なんか、うはうはしたい。 |
| 399 | 383 | * | M08 | 2 丁目行ったら?。 |
| 400 | 384 | * | M07→ | 2 丁目?。 |
| 401 | 385 | * | M08 | うん<笑いながら>。 |
| 402 | 386 | * | M07 | それ違う意味でもてるんじゃないの?。 |
| 403 | 387 | * | M08 | うん<笑いながら>。 |

例 17＜初対面同性同士雑談 12＞

| | |
|---|---|
| 1A | /少し間/本とか読みます?。 |
| 2B→ | 本?。[↓] |
| 3A | はい。 |
| 4B | 本はでも、あんまり読まないですね。 |
| 5A | あーはー。 |
| 6B | どう、どうして…?。 |
| 7A | いや、なんかいやただ、うん、（あぁー）いや、だから、あのー、本屋さんに行 |
| 8 | って、どういうふうな本を買うかなぁと思って。 |
| 9B | "あぁー、（えぇ）そうですね、でも最近なんか勉強、<ねぇ、こう、ばっかり>{<}、 |

例 18＜BTS 初対面雑談＞

| | | |
|---|---|---|
| 1 | F1-1 | "<でも>{<},," |
| 2 | F2 | <それ>{>}だけなんだけど。 |

3　　F1　　うん、そっか。

4　　F1-2　　"で、その、なんか、め、面接で言われた、かもしれないけどー、やっぱり、こう、(うん)なんだろう、隙がー、あんまり最初ない、最初じゃなくてもー、<なんか>{<},,"

5　　F2→　　<隙が>{>}ない…。

6　　F1-3　　"あ,,"

7　　F2　　あー。

8　　F1-4　　"隙っていうか、あたしは、なんか、全面にさ、""「F19 あだ名」ちゃん""みたいな感じで(<大きな笑い>)話すからさ<笑い>、あれだけ<どさー>{<}。"

9　　F2　　"<え、でも>{>}、""どんどんつついてください""っていう<笑いながら>

10　　F1　　そうそう<笑いながら>。

例 19<初対面雑談③> 無指定的な雑談場面において、A はフィットネス部から中途でやめたことを B に伝えた後、B はその原因を探っている。

1A　　"それに入ってたんですけど[「た」の部分を強調して](はい),,

2B　　やめちゃったんです<か?>{<}。

3A　　<6 月>{>}で、やめました<笑い>。

4B　　それ、え、3 年生が引退だから、とかじゃなくっ<てー>{<}。

5A:　　<あ>{>}、あたしは、途中で。

6 B:→　　途中。

7 A:　　ほんとは、3 年生の、今年の「大学名 1」祭で(あ)、引退のはずなんですけど。

8B:　　えー、きついんですか?、練習が。

9A:　　ちょっと、あの、アルバイトとかはじめちゃって(あー)、時間がとれなくなっちゃった<みたい…>{<}。

例 20＜友人同士男女間討論②＞A(男性)と B(女性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。A は「女性が出産の経験を持っているという点で男性より得だ」という考えを示したあと。

1A　　"だからその社会的に??、得っていんじゃなくて、その、経験として,,"

2B　　経験として。

3A　　→ 生きているうえでの経験としては(んー)、得っていうことばが当てはまるかどう

4　　かわからないけど。

5B　　1 つ多いよね(んー)、経験できることはね。

6A　　子供と接している時間も全然(ん)、/少し間/まあ…、母親の方が多いのかな?。
7B　　"んー、まあ,,"

例 21＜初対面同性同士雑談⑨＞A は B の研究方向について聞いている場面。
1A　　どう、どういうことやっていらっしゃるんですか?。
2B　　"いや、もうホントになんか、私の指導教官の人がなんか、もうヴォイスとか,,"
3A　　ヴォイス?。
4B　→ ヴォイスとか、だから受身とか(あー)、使役とか、そういうやつとか、あとまあ、
5　　周りにはアスペクトとかやってる人とか、まあ、私もまあ、それ似てますね。
6A　　えー、あ、(ええ)へぇー、あぁー。

例 22＜初対面同性同士雑談⑯＞B は中国語が専攻であり、何度も中国に行ったことがある。A は中国に旅行に行く予定があるという話をしたあと。
1A　　/少し間/一番こう、難しい、んとー、中国にいて、失敗したっていうか、/少し間
2　　困った、っていうのは…。
3B　　困った?。
4A　→ はい、"こおりゃ‘こりゃまいった"、っていう…。
5B　　いやあ、けっこうたくさんあるんですけど(うん)。
6A　　一番の思い出って。僕もこれから、中国、あ、これからちょっと中国初めて行く
7　　んですけどー,,"
8B　　ああ。
9A　　一番困ったこと、何ですか?。[→]
10B　　そう、ですね。

例 23＜初対面雑談③＞
194　168　*　UF06　なんか、昔スピーチで優勝しましたよね?、あの人。
195　169　*　UF05　<昔>{<}…。
196　170-1　/　UF06　"<なんかの>{>}雑誌のスピーチコンテストで、テープを送ってってやつで,,"
197　171　*　UF05　<あー>{<}。
198　170-2　*　UF06　<優勝>{>}して、したらしくて、なんかそれ、優勝者になんか、ちょっとしたプロフィールが載ってるんですよ。
199　172　*　UF05　あー。

例 24＜初対面同性同士雑談⑬＞

1A　　へぇー、あのー、文系の大学院ってのは、(はい)研究室はもちろんあるんですか?。

2B　　"あの机の,,"

3A　→ 机の?

4B　　その、机と椅子が 1 人 1 つ一応あるん(あっ)ですよ。だけど、パソコンとかはな

5　　いですけどね、ええ。確か「大学名 2」はありますよね。<パソコンが、1 人 1 台

6　　>{<}ありますよね。

7A　→ <あります、あります、あります>{>}。1 人 1 台以上<ありますね>{<}<笑い>。

8B　　<以上>{>}あります。あー、すごい。

例 25＜BTS 男性友人雑談＞

1A　　それで、お前からもう,,"

2B　　"<いや>{<},,"

3A　　<バイ>{>}バイっつった?。[↓]

4B　　おれか、おれからじゃないな。

5A　→ あっちから?。

6B　　いや、あっち、あ、ちゃうちゃうちゃう。”もう、おれはー、もう高校辞めます"っていう話(うん)をした、し、もうそんときには、別れられると思ったんだよ。

例 26＜BTS 友人雑談＞

1　　F1　　<あ、でも>{>}スーパーとかってそういう程度だよね。

2　　F2→　　態度って?。

3　　F1　　そういう程度、だか、だ、ほら飲食店とかだとー(うん)、店長も一緒に普通にこうやってるからー。

4　　F2　　あーあーあーあー、え、店長が、ウェイトレ、<ウェイターやってる>{<}。…でも、たいていさ、なんか、もう、混んでる時はー(うん)、じゅ、5 分か 10 分に 1 回ぐらい(うん)、呼び出されるからー<笑い>、クレーム対応とかさー。

例 27＜初対面同性同士雑談⑨＞

168　155　*　JSM02　ま、かなり理、理論がこう、(うん)複雑になって、(ええ)ますよね。

169　156　*　JBM01　前、「先生 2 フルネーム」先生がいらっして(うん

うん)、講演なさった、それ聞いたんですけど、/沈黙 2 秒/なんかやっぱ違いますよね。

170　157　*　JSM02→ あ、どういう方ですか?、「先生 2 姓」さんって。

171　158　*　JBM01　あの、生成文法、(はい)やってらっしゃる先生で。

172　159　*　JSM02　あぁ、はい。

例 28＜初対面同性同士雑談③＞二人は鼻濁音の「が」を発音することができるかどうかに関して話している。B は日本語科出身の人である。

1A　でも全部『がー』で話しちゃうんですよね、(うん)今の人って。

2B　え、今の人って?。

3A　→ "今の人っていうか割と若い人,,"

4B　あー、若い人、<あーそうですよね>{<}。

5A　<特に東京より>{>}西の人は特に。

6B　はい。

例 29＜BTS 女性友人同士雑談＞

3　M07　/沈黙 8 秒/まーねー、だか、何人、な、何人、ね、来るかによるけどね

4　M08　うーん。

5　M07　まー、「人名 5」は集中講義で来ないしー、だから、5 人でこう、うはうはしてればいいんじゃないの、豊島園で。

6　M07　豊島園の豊島園で。

7　M08　プールは決定なん?、ほんとに。

8　M07　え、プールじゃないの?。

9　M08　何でもいいんやけど、別に。

例 30＜初対面同性同士雑談①＞A は何回も海外に旅行した経験をもっているため、その旅行先について話している。

1A　"で、行って、で、2 回目がマレーシア(へぇー)かな??、で、3 回目がシンガポー

2　ル(うん)で、あともう 1 回がヨーロッパ(ふーん)に,,"

3B　どこ<ですか?>{<}。

4A　→ ヨーロッパですか?=。

5　=ヨーロッパは、イタリアから入って、ずーっとニース回って、(うん)バルセロナ

6　行って、(うんうん)帰ってくるっていうコースで。

7B　"ふぅん、スペインか、(うん)スペイン行きたかったんですけどね,,"

8A　　あー。

例 31＜友人同士男女間討論②＞A(女性)と B(男性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。A は B の「生まれ変わっても男になりたい」という考えを聞いたあと。

1A　　それはでも、じゃあそれはやっぱりなんかさ(<笑い>)、今得だからと思う、
2B　→ 得なのかな、分かんない。得、とかそういうんじゃなくて(んー)、なんか、なん
3　　か、女の人ってさ(んー)、なんか制約が多そうでさ。
4B　　あー。

例 32　＜友人同士男女間討論＞「相手に対する印象について語る」という話題をめぐって話している。

1A　　お前はねー、ま、さっき言った通りだな。よくしゃべって、よく笑って。
2B　→ よくしゃべるかね。ま、お前にはよくしゃべるけどさ、他の部員にあんましゃべ
3　　んなくね?。
4A　　そうか?まーまーしゃべるじゃん。
5B　　誰?。
6A　　やー、だから、普通に話し掛けられればさー(あーはいはいはいはい)、先輩とか
7　　普通にしゃべるじゃん。
8B　　田中さんとかね。
9A　　うん。

例 33＜初対面同性同士雑談②＞ロシア語を習っている A は今後の進路について話している場面。

1A　　で、ロシアに行って教えようかなって思ってたんですけど、(うんうん)でも遠い
2　　んですよ、ロシアって。
3B　　そっか<笑い>。ロシアしかも、寒いですか?。
4A　→　うんー,,
5B　　そうでもない?。
6A　　夏はすごく暑いんですけど, 短いですね、すごく。
7B　　あ、そうですか。なるほどねー。
8A　　でも寒いから逆に、きちんとしてて、うんー、逆にいうと日本が暑いぐらい,,
9B　　あーそっか。

例 34＜BTS 親しい女性同士雑談＞。

1　F1　「F2 あだ名」ちゃんはしっかりマイ・ウェイって感じかな。

3　F2　えー、ほんとにー?。

4　F1　うん。

5　F2　→　そうかなー。

6　F1　そうー、だと思う。

7　F2　私、しっかりマイ・ウェイ、かしら。

8　F1　しっかり、違うな、ちゃんとやることはやって(うん)、マイ・ウェイ。

9　F2　そうか<なー>{<}。

10　F1　<そう>{>}。

例 35＜BTS 友人雑談＞大学での人との付き合いなどに関して二人は意見が分かれている。

535　M06　部活んとかも(うん)、とかもやってるし。

536　M06　そでねー、どんどんどんどんねー、距離はねー、離れていくんだよ、逆に<少し笑いながら>。

537　M05　そうかな。

538　M06　ちゃう、気が合う人とはすごい、近づくんだけど(うん)、思いっきり=。

539　M06　=おれも、仲いいやついる<けど>{<}。

540　M05　<いい>{>}じゃん。

541　M06　でもね、あんま気が合わない人は(うん)、離れてくよ=。

例 36＜BTS 友人雑談＞「相手に抱いている印象を語る」という話題について話し合っている。

469　M06　あとは、ぶっきらぼうなやつだなって思って<笑いながら>。

470　M05→　ぶっきらぼうか?、おれ。

471　M06-1　いや、あの、特にマネージャーとお前しゃべってるとこ見て(うん)、""あー、ぶっきらぼうだなー""って思って<軽く笑い気味>。

474　M05　そうか?。

475　M06　そう。

例 37＜BTS 友人雑談＞相手に対して抱いている印象。A は B の考え方がおかしいと言い出した後。

1 A:　だから、ちょっと考え方がおかしいんや、相当。
2 B:　考え方おかしいかな?。
3 A:　考え方っていうか、考えることがおかしい。
4 B:　だから、何か、なんつーの、何だろうね。
5 A:　なんやろーね。
6 A:　だか、なんかよく分からんねん、とにかく、おまえの言うことは。

例 38<初対面雑談②>　二人は無指定で雑談している場面において、2 年間留学経験がある B は、留学する意向がある A に対して留学を薦めた。しかし、A は研究内容が日本思想史であるため、「外国に出て勉強する必要性がなかなかない」と言ったので、B は態度を変えたあと。

1 B　じゃ、日本のがいいかもしれないですね。
2 A　逆に、あの、今ゆさぶりをかけられるともう崩れてしまいそうっていう。
3 B　→あ、すいません。
4 A　あー、ぜんぜん、<そういう意味>{<}じゃなくて、あの…。
5 B　<いえいえいえ>{>}、やーでもあの、んー、私アメリカの、院に行ってたわけじゃ
6　ないんで、そんなには分からないんです<けど>{<},,"
7A　<はい>{>}。

例 39＜友人同士男女間討論①＞ A(女性)と B(男性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。

1A　でもやっぱりお金をためようとか、なんかやっぱり養わないといけないとか思うのかなー、男の人は。で、それが重荷だったりすんとか。
2
3B　重荷なのかな。
4A　ん、もちろんそれはね、"よし頑張るぞ"って思う人はいるかもしれないけど(んー)。
5B　んー。
6A　だから独身の人が増えてんのかな。
7B　何、フェミニズム化ってこと?。
8A　んーと、いや、というよりも、あの、/少し間/そうやってこう、自分が誰かを養わなきゃいけないっていうような人が少なくなった。自分ひとりでいいよ、みたいな。
9
10
11B　あ、そっか。

例 40<初対面雑談④>　B は交換留学で韓国に行ったことがあると A に伝えたら、選抜のことについて B に聞いている場面である。

1 A:　　へー、それは何年生の時ですか?。

2 B-1:　"えっとー,,"

3 A:　　選'えら'…【[。

4 B-2:→　]】選ぶっていうか、選考があるのが、2 年生の、12 月ぐらいですかね。

5 A:　　へー。［↑］

6 B:　　うーん。

例 41＜初対面同性同士雑談 4＞B は既に就職が決まった大学 4 年生で、A は台湾で日本語教師になる前に 10 何年間も日本の企業で働いたことがある。A は B に就職が決まってから正式に入社するまでの一年間どうやって過ごすかについて聞いたあと。

1A　　自分でそれなりにパソコンとか(うんうんうん)、財務とか(おおー)やっぱある程度勉

2　　強しとかないと駄目なのかなあ、とか思ってるとこです。

3B　　前向きですねー、んー。

4A　　前向きっていうか後ろ向きな前向きですよ。

5B　　<笑い>、いやいや。

6A　　就職してから苦労したくないからまあ今のうちに<やっとかなきゃとか思って>{<}。

7B　　<それはでも>{>}うん、いいと思う。役に立つ、うん。

例 42＜友人同士男女間討論 5＞A(女性)は昔留学に行った国について B と話している。その国には亭主関白主義のようなものがないという話をしている。

1A　　なんか、男の人が…。

2B　　あんまり強くない?。

3A　→ あんまり強くないっていうか、女の人のためにすごい(あー)働くっていうか、家

4　　のことやる…、やるのかそれはちょっとわかんないですけど、なんか。

5B　　それが、その延長があいう風な男の子なんだからっていうのになる。

6A　　たぶん。でもなんか、今ちょっと思ったのは、「国名 1」だと、男の子だからとか

7　　じゃなくて、男の人が進んでそういう風になってて(んー)

例 43＜HCR 日本語会話 2＞

台湾の食べ物について話している。

O：何かお茶に中国人が砂糖を入れるなんて＜相手が笑い出す＞、だって、普通にコンビニにこういうの<テーブルに置いてあるウーロン茶を持って>ポンと買って、飲んだら砂糖を入れて<えっ！>緑茶とかそういうの関係なく。

M：へ：：：：：

O：これは何かもう,,

M：まずい。

O：まずいというか、飲めない<笑い出す>。←

M：う：：ん、う：：：ん。

例 44＜BTS 友人雑談＞二人は遊園地の項目について話し合っている。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 86 | 85 | * | M07 | → でも、絶叫系、おれ怖いから乗れないんだけど。 |
| 87 | 86 | * | M07 | 普通に。 |
| 88 | 87 | * | M08 | そんな、でも、絶叫とかさー、なくない?。 |
| 89 | 88 | * | M07 | <笑い>バンデッドがあるよ、バンデッドが。 |
| 92 | 91 | * | M08 | 速いやつ?。 |
| 93 | 92 | * | M07 | "なんか、すんごいねー、超速くてー(ああ)、急降下するやつでー、今あるかわかんないけどー、当時あってー(うん)、おれ 1 回乗ったけどー、なんかもう"ひー、もういいです"って感じなんだよね。" |

例 45＜友人同士男女間討論③＞

| | | |
|---|---|---|
| 1A | | "女の人はさ、なんかさ(ん)、毎朝化粧をしなきゃいけないとかさ(んーんー)、な |
| 2 | | んか考えると、あーなんかめんどくさそうだなとか思うんだけどさ(うん),," |
| 3B | → | でも、別にしない人も<いるしね>{<}。 |
| 4A | | "<でもさ>{>}(んー)、なんか聞いた話なんだけどね(んーんー)、なんか友達の彼女 |
| 5 | | は(うん)化粧してるのを見てね、なんか""女の人って毎日化粧しなきゃいけない |
| 6 | | から大変だよな""、ってつぶやいたんだって(んーんー)。そしたらね、彼女がね(ん |
| 7 | | ー)、"男は素顔で勝負しなきゃ<いけないからかわいそうだよね"、とか言って。 |

例 46<初対面雑談 4> A は学部を出て 5 年間高校の教員として働いてからまた大学院に入った経歴を持っており、それを B に話しているやりとりの一部である。

| | | |
|---|---|---|
| 1 A: | | "それでね（そう)、""このままじゃいかん""っていう感じで、とりあえず今の職 |
| 2 | | は、あの、休職できる制度が、あるんですよ、<今>{<}。" |

3 B:　　<うーん>{>}、あー、いいですねー、<それ>{<}。

4 A:　　<でも>{>}、給料一切出ないんですよ。

5 B:　　あ、あ、なるほど<笑い>。

例 47＜BTS 友人雑談＞

277　266　*　M07　普段相手にたい、している印象。

278　267　*　M08　あー、最近思ったんはな(ああ)、あれがある。「M7 名」はー(ああ)、なんか、人のこと干渉すんの結構好きやんか。

280　269　*　M07　あん。

281　270　*　M08　やけどー(うん)、自分に対しては、なんか、絶対干渉されやんようにしてるやろ、結構。

282　271　*　M07　でも、あんまねー(うん)、干渉、してこないよね、やっぱね。

283　272　*　M08　なんか、干渉すんなっていうオーラ出してるもん。

例 48＜BTS 友人雑談＞

336　323　*　M07　まー、そらー、まー、あのー、楽しかった過去の思い出で。

337　324　*　M08　楽しかったんかどうか、分からんけど(<笑い>)。

338　325　*　M07　いや、楽しんでたじゃん、それなりに。

340　327　*　M08　楽しかったんかなー。

341　328　*　M07　いろんなとこ行ってさ、行ってさ。

342　329　*　M08　まーな<軽く笑いながら>。

例 49 ＜友人同士男女間討論①＞A(女性)と B(男性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。

1A　　力はもっとあればいいかなとは思うね。筋力ってこと。

2B　　あ、なるほどね。そしたらじゃあ基本的に全くおんなじになるってことでしょ?。

3A　→ いや、<って言うか便利>{<}。

4B　　<男性と>{>}。あー。

5A　　自分にとって、もっと便利。

例 50＜友人同士男女間討論②＞A(男性)と B(女性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」

という話題をめぐって話している。A は「日本に関しては、やっぱり女の人は大変なんじゃないのかな」という話をしてから、自分の妹の就職状況について話している。

1A　　んー、まず、総合職で就職しようと思ったけども(んー)、人数が少なくて、無理
2　　で、人数が少なくてっていうか、まあ、本人の能力的に、な評価も(んー)厳しか
3　　ったみたいだしね(んー)、一般職で入ったんだけども、そうすると、やっぱりど
4　　うしても男のサポート役みたいな(んー)、仕事みたいで、アシスタントっていう
5　　んですか?。
6B　　んー、総合職なのにね<笑い混じり>。
7A　→いや、総合職じゃないよ、一般職で入っ<て>{<}。
8B　　<一>{>}般職で入って、あ、そっかそっか。

例 51＜初対面同性同士雑談①＞二人は自己紹介している場面において、A(修士２年生)はB(修士１年生)に所属について聞いている。

1A　　今年何人入ったんですか?、修士、日本語。
2B　　日本語専攻…あ、日本語教育はわかんないんですけど、日本語専攻は９人ですよ。
3A　　あー、だいたい毎年それくらい<なんですかね>{<}。
4B　→ <いや、>{>}今年すごい少ない(うん)みたいで、定員は 12 人だったんですけど、
5　　実際 9 人で(うん)、で、先生たちも"去年よりずっと少ない〃とか言ってたから。
6A　　え、先生の数が少ないん<ですか?>{<}。
7B　→ <いやいや>{>}、先生じゃなく生徒が。
8A　　あぁー。

例 52＜HCR 日本語会話 4＞

M：ペット飼ったことがありますか。
K：ペットね、今飼っている。
M：オ：：、何を。
K：ハムスター。
M：ハムスターか。ハムスターは別に,,
K：ペットじゃない。<<両方笑っている>>
M：違う違う、あのう：：犬みたいに(
K：あ、そっかそっか。

例 53＜HCR 日本語会話 4＞

M：犬みたいにほっておいてもいいやつ,,
K：いや、ハムスターはね、エーと、基本的に一日に一回は掃除しないと、掃除するというか、見てあげないと、寿命が短いから、体がちっちゃいから、やっぱりあのう、何というの、サイクルがすごい短いというか、あのう、早い(うん)、うん、やっぱりあのう、ちゃんと餌あげて食べているかどうかというのを見てあげないとすぐ死んじゃうよね。
M：ふ：：ん。

例 54＜初対面同性同士雑談⑥＞A はこの実験でもう何人と話してきた。B の前の二人とも日本語教育という専攻だったので、もしかして B もそうだなと推測していた。

1A　「大学名 1」の方ですか?。
2B　はい、ここの大学院で。
3A　あっ、じゃ、あっ、じゃあ日本語教育を。
4B　→ じゃなくて、全然…、えと、地域研究の、中国、の方の研究<をしてまして>{<}。
5A　<あっ、そうなんですか>{>}=。あ、なるほどね、中国。
6B　はい。

例 55＜初対面同性同士雑談②＞A は台湾の大学で日本語教師をしており、B は卒業後台湾に就職しようと考えている。A は、経営難に陥った当地の日本語学校で日本語教師を務めている知り合いのことについて B に話したあと。

1A　そういう意味では、そういうちゃんと、福利じゃないけど、うん、条件がいいところ,,
2B　そう<ですね>{<}。
3A　<とかで>{>}決まると、うん、大分楽ですよね、うん。
4B　条件がいいところって言ったら大学とか高校になりますね。
5A　→ あー、ね、高校はちょっと非常勤…以外(あー)は難しいかもしれない。
6B　そうすると【【
7A　】】まぁ、大学に入れれば 1 番良さそうだと思う<笑い>。
8B　そうですよね。

例 56＜初対面同性同士雑談②＞B は旦那さんの転職につき、一緒に台湾に移住し、そこの大学で日本語教師をしている。A はその詳細について聞いている。

312　287　*　JBF01　だいたいあっちで教えてらっしゃる方って(うん)その、旦那さんのお仕事で(うん)、いる方とかー【【。

313　288　*　JOF01　】】あっそういう人はあんまりいないかもしれない。
314　289　*　JBF01　いないんですか。
315　290　*　JOF01　今まであまり会ったことないですね。

例 57＜友人同士男女間討論 2＞A(男性)と B(女性)は「男の人生と女の人生、どっちが得だ」という話題をめぐって話している。A は「派遣制度が女性の社会的ニーズから生まれてきたため、男が行っても、そういう派遣会社からは相手にされない」という考えを述べたあと。

1A　やっぱ実際に行ったとしても職場の人の(うん)目もやっぱり若干,,"
2B　厳しい。
3A　→ 厳しい、まあ厳しいって言ったら、言い過ぎかもしれないんですけど、違和感がある。
4B　違和感があ<る>{<}。
5A　<み>{>}たいな感じがあるんだよね。
6B　あー、そうなん<だ>{<}。

例 58＜初対面同性同士雑談②＞B は台湾で日本語教師をしている。A はそれについて聞いている場面。

1A　"や、なんかもし日本語教えるんだったら、まぁ、(うん)現地の言葉が出来た方が、
2　あのー、例えばあっちで""あの先生は中国語もわかんないんだよ〃って(<笑い>)
3　結構見下されたりするってことってありますね。"
4B　→ あー、なるほどねー。でもね、台湾に限って言うと、うん、私の経験だけですけ
5　ど、(うん)そういうのはないかなー。
6A　ないですか?。
7B　うん。

例 59＜初対面同性同士雑談②＞B は台湾の大学で日本語教師をしている。A はそこの生活状況について聞いている。

1A　生活費ってそんな高くないってイメージがあるんですけど。
2B　→ そうですね。ただね、やっぱり台北だと、(うん)うん、あの、借りる住居のね、(う
3　ん)値段、お値段がね、家賃は結構するんですよね。
4A　あー、そうなんだ。

例 60＜初対面同性同士雑談②＞B は旦那さんの転職につき、一緒に台湾に移住し、そこの大学で日本語教師をしている。A はその詳細について聞いている。

1A　"仕事で、その台湾に、ご主人と(うん)行かれる前は、(うんうん)その、有無を言
2　わさず(うん)、連れて行った、行かれたというか,,"
3B　<<笑い>>{<}。
4A　<そんな感じですか?>{>}。
5B　あ、その前は、うん台湾は行ったことなかったですねー(あー)、うーん。
6A　<じゃあ急に>{>}'行くよ'っていう感じで…。
7B　→ うん、でもなんか海外にきっと行くだろうなっていうのはあってー。
8A　あー。

例 61＜初対面同性同士雑談⑬＞A は「大学名 2」の理科系の学生で、B は文科系の人である。

1A　へぇー、あのー、文系の大学院ってのは、(はい)研究室はもちろんあるんですか?。
2B　"あの机の,,"
3A　机の?
4B　その、机と椅子が 1 人 1 つ一応あるん(あっ)ですよ。だけど、パソコンとかはな
5　いですけどね、ええ。確か「大学名 2」はありますよね。<パソコンが、1 人 1 台
6　>{<}ありますよね。
7A　→ <あります、あります、あります>{>}。1 人 1 台以上<ありますね>{<}<笑い>。
8B　<以上>{>}あります。あー、すごい。

例 62＜初対面雑談 4＞

233　200-2　*　UF07　"で、えっと職場に出て、5 年を過ぎて、""んーやっぱりこのままじゃ""って感じで、いったん休職してきたんですけど(あー)、今はだから、えっと、教育と英語の音声のところを、どうやってこうドッキングさせて(なるほど)、教育に、あの持ち込めるかなとか思ってるんですけど(うんー)今試行錯誤中です<笑い>。
241　207　*　UF08　あー。"えーじゃ、やっぱり、そこのコース、2 年,,"
243　209　*　UF07　ですねー。
244　208-2　*　UF08　2 年終わったら、やっぱり先生になるんですよね。
245　210　*　UF07→　そう、実は、あの、教員なんですよ、私。
246　211　*　UF08　あ、<そうなんです>{<}かー。

例 63＜HCR 日本語会話 3＞N さんのご主人の仕事について話している。

K : 道内でガイドをなさっているんですか。

N : うん。

K : う : ん、ね、すごい年間韓国人の方がすごい旅行来ますもんね、絶対需要がありますよ。

N : そうですね。でもいまはそんなに来ていないですけど、でも, ,

K : そうなんですか。

N : やっぱり震災の後だと思う。

例 64　M06 の高校時代の恋愛話である。当時の彼女と別れて何年間経ったある日に電車でばったり会ったときのことを M05 に言っている場面。

384　M06　大学行ったんだーとか(うん)言って、"へー、どこの大学?"ってなって、「大学名 1」、って言って。

386　M05　まー、すごい<とか?>{<}。

387　M06→　<そうそう>{>}。いや、"まーすごい"っていうか、何つった、"あー、そうなんだー"とか(うん)言って。

389　M05　やっぱ驚きあるよな。

例 65＜初対面同性同士雑談⑩＞A は B の専攻が何かと聞いたあと。

1A　あ、日本語なんだ。じゃあ、日本語の、今、教師けっこう求められてるから…。

2B　そうですね。

3A　え：：：。

4B　→ ま、場所にもよるんですけどね、（うん）けっこう必要とされてるところと、余

5　ってるところっていう…。

6A　うーん、じゃ、これから海外とかで…。

7B　そう、ま、それも考えてますね。

# 参考資料Ⅳ

# 中国語における他者開始形式

1.《HCR 中国語会話 1 張 / 胡》

1A:唐老师你认识吧?

2B:认识啊。

3A:有一次吃饭的时候唐老师就说，如果读研究生有用的话老师就留下你了。

4B:什么意思?←

5A:那老师干嘛不直接收了你，然后让你延期毕业不就是了，如果这个课题有前途的话。

2.《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：对了，你家乡在哪儿来着?

B：江西。

A：江西?←

B：江西

A：啊::

3.《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：可能大家都不知道吧，集安。应该大家都不,,

B：我知道江西，听过。

A：江西的集安。说集安大家都不知道，我们集安有一座山大家都知道。井冈山。←

B：啊！知道知道。

4.《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：不过给我感觉你还是挺，家庭啊什么的都挺富裕的那种感觉。

B：没有，是我这个人比较抛。

A：抛?←

B：你说抛，南方所有人都明白，抛的意思就是女人比较浮的时候，就像蒲公英一样的。

A：啊::

5. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A:你说抛，南方所有人都明白，抛的意思就是女人比较浮的时候，就像蒲公英一样的。她就是浮在空中的。

B：比较自由自在?←

A：不是，意思就是不沉稳。

B：啊::

6. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：不沉稳，然后你这个人比较抛，比较浮，浮，浮，浮于表面,,

B：怎么听起来像贬义词。

A：贬义词啊，抛是个贬义词啊。这个人比较抛，意思就是,,

B：比较轻浮?←

A：不叫轻浮,,

B：不稳重,,

A：不稳重，对，性格上不稳重（啊::）然后，我们那里的说法就叫比较抛。然后，但是我们那里，抛是算一个比较中性的词吧。（啊::）就是你抛，意思就是，你但凡比较沉稳你就比较不能健谈,,

B：也就是说,,

A：反正就是，有失有得。

7.《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：一个半小时，那你得准备几篇儿啊?

B：几篇。。一篇呗。你是说多少页是吗?

A：啊。

B：如果下个星期三是演，那个，特殊演习的话,,

A：不是星期三，星期五。←

B：星期五那个啊（啊），十页左右。

A：十页左右啊。

8. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：你题目叫什么?

B：跟我们老师很像，我研究的是唐代的“宫廷写经”唐代,,

A：宫廷写经。←

B：宫廷写经，啊::字体那方面的。

9. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：大学没学多久，就学了那么，哎，国内教育嘛，就学了那么一学期。

B：那你专业是什么啊，大学。

A：大学，中英，啊，英日方向。

B：英日方向。←

A：就是外国语学院的英日方向。

10. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：就是外国语学院的英日方向。

B：英日方向?←

A：对，就是，我们外国语学院嘛，然后有那个日语系，日语系里头有英日方向，英法方向。

B：啊：：：

A：英语系学什么我也学什么，日语系学什么，其他学校日语系学什么，，

B：那你是四年还是五年?

A：四年。

B：我们学校双语的话要五年。

11. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：你如果要从商的话，我感觉，你也是一个很精干的一个。

B：从商我倒觉得自己应该是挺精干的，就是总觉得对钱这方面不太有天赋。

A：啊：：（沉默 1 秒）嗯?矛盾的！←

B：不是，就是，啊，可能会很精干，在管理啊各种那个方面，然后找，也许，一旦下定决心做什么事情可能会比较那个的。问题是，，

A：金钱上不是很计较的一个人。

B：对。就没想过，因为从来没想过要什么这样那样的东西，所以就没有经济头脑，你知道吗。精干是精干，可能，精干跟精明是不一样的。

12. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：那你会唱粤语歌吗?

B：啊。

A：啊，真好，我可喜欢粤语歌了，但我不会唱，就是有些词什么的我发不出来那个音。

B：嗯?发不出来那个音?←

A：就是，就是发得不地道，没有那个韵味。

B：没有那个韵味太正常了，你又不是那边的人，发不出那个韵味很正常。

13. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：芒果台改的吧?

B：芒果还是湖南，现在湖南卫视，，

A：湖南卫视就是芒果。←

14. 《HCR 中国語会話 2 李 / 胡》

A：湖南卫视就是芒果。

B：是吗?←

A：湖南卫视那个标志就是那个芒果。

B：我知道网上都用那个芒果播放器看＝

A：＝他自己也是芒果卫视啊。

B：现在啊?

A：他自己也称自己［叫芒果卫视啊］。

15. 《HCR 中国語会話 3 馬 / 陳》

A：听说分，他都不会给太高吧。就是，，

B：他不会给你太低。←

A：不过。

B：对，就不会让你不过什么的。他，我觉得可能就是，一般的话，优吧，或者是，如果你答得特别好的话，就是秀什么的。

A：为什么我们，就是，就是我们老师的学生都说他，他给，就给的可低，就不是很高。从来都没得过优或者秀。

16. 《HCR 中国語会話 4 丁 / 陳》

A：但是合租真得找一个啥的，就跟你性格，对脾气的，要不一天到晚闹心，哎，你，，

B：其实性格我倒觉得无所谓，关键是习惯吧，习惯最重要。性格你说，要是特别不合适，吵啊什么的，，←

A：那也不可能一起合租啊。

B：性格可能不对付吧，比如说俩人习惯可能特别搭，比如就是一个人就是晚上九点洗澡，另外一个人就是早上七点洗澡，它又不影响，也吵不起来。

17. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：你是研究啥的啊?

B：我：：汉字。

A：汉字什么啊?

B：什么玩意?←

A：就是汉字的啥呀，音哪形哪，，

B：形，字体。

A：哦。

18.《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：要不然在国内（去泰国）还得再办签证什么的。

B：嗯：：：：那区别倒不太大。可能也就台湾有点区别吧。←

A：我特别嫌麻烦。

B：不是，我是说这个签证哈，好像就台湾不用办吧，别的国家也得办。

19. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：不是，我是说这个签证哈，好像就台湾不用办吧，别的国家也得办。

B：啊?不对啊，日本在那个泰国不是免签吗?←

A：那是日本人，不是中国人。

B：中国护照。

A：是看你的护照，不是看你从哪儿来。

B：欸，不是，，

A：而且，落地签是，落地签两周，全世界人都是。

B：完了，我好像弄混了。

20. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：池田老师我发现他的研究生都必须一年期啊。

B：没有，那个丁丁不是半年嘛。←

A：就她是半年。

B：剩下的大家都是。

21. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：哎，那你毕业两年干嘛去了?

B：连工作带玩儿，国内还考了半年研。

A：啥?←

B：国内研究生还考过半年。当时我总，，

A：你经历挺丰富啊。

B：我总分，国内考研，总分过了我们学校 50 多分的线（啊），然后政治差三分，然后就没能进复试。

22. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：跟他们喝酒，必须得喝到不省人事。

B：是吗?不是吧，我觉得只有东北才愿意把你喝到不省人事啊。←

A：我，我，我，东北那些哥们，从小长大的哥们还真没有这样的。就是后来认识山东人净这样的。

23. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：我爷爷是三青团的。

B：啥是三青团啊?←

A：国民党的三青团。然后，当时我爷爷是，就是，当时还不叫北医大，叫北医专，北医专毕业，到牡丹江市下面的灵口县。

24. 《HCR 中国語会話 5 劉 / 陳》

A：自由行东北不好办吧。

B：对啊，特别不好办。

A：得找旅行社什么的特别麻烦。

B：旅行社压根儿就没有咱们东北，压根儿就没有来札幌的团儿。就没有来北海道的团儿（啊），就有上东京和大阪的有，［其它就没有］。

A：［找，］找旅行社办自由行也能办，就是费用可能会［比较高］。

B：［它必须得］是有到北海道的团儿才能办自由行。←

A：还有这样的说法?

B：啊，我也是才知道的，我差点没气晕。

25. 《HCR 中国語会話 6 劉 / 隋》

A：那你是今年?

B：嗯?←

A：四月份刚过来吗?

B：对。

A：那就是明年四月份，，

B：对，明年四月份。

26. 《HCR 中国語会話 6 劉 / 隋》

A：多了半年，也还成吧。

B：什么啊?←

A：就是，就是，因为这样的话，就是多了半年的时间吗。

B：嗯，其实我觉得多，一年反倒还有点可以。

27. 《HCR 中国語会話 6 劉 / 隋》

A：有八百留学生呢，北海道，不，中国的留学生，在北海道。

B：嗯，好像七八百的样子，不过基本上应该都集中在北大了吧。北大有，，

A：就说北大是八百中国留学生。

B：哦，北大，嗯嗯。

A：一共是，我看网站上写的是 1100 留学生，八百是中国人。

B：一共 1100 个［留学生啊］?←

A：1100 多，不到 1200，然后中国留学生是 780 多还是 790 多来着。

28. 《HCR 中国語会話 7 劉 / 劉》

A：course director，课程总监，课程总监就是你可以教教练。

B：这么牛。

A：嗯。

B：不，你这才一年就可以跳到这种教练的程度。

A：我没到教练，我只到潜水长还没毕业。←

29. 《HCR 中国語会話 7 劉 / 劉》

A：那大概一次是多长时间?

B：两米每分钟。

A：两米每分钟（好像在考虑）。

B：然后：：

A：（20 米）四十分钟?←

B：嗯?

A：两米每分钟，，

B：五米每分钟，什么两米每分钟，五米每分钟（两人开始笑）。

30. 《HCR 中国語会話 7 劉 / 劉》

A：那大概一次是多长时间?

B：两米每分钟。

A：两米每分钟（好像在考虑）。

B：然后：：

A：（20 米）四十分钟?

B：嗯?←

A：两米每分钟，40 米，，

B：五米每分钟，什么两米每分钟，五米每分钟（两人开始笑）。

31. 《Wang,2005》

A：包括房子我都，都不，都没有填我自己的名字。

B：不会吧?←

A：真是这样的，真是这样的。

32.《Wu,2004：129》

a：欸?那什么时候毕业?

B：julie 啊?←

A：嗯。

B：大概十月吧。

33. 《Wu,2004：129》

a：你去 priceclub 买什么?

B：今天啊?←

A：嗯。

B：买，主要是买善存（维生素片）那些。

34. 《Wu,2004：130》

a：他高中学，我，我三岁就学舞了啊。

B：你三岁就学舞啊?←

A：嗯。

B：哦：：我怎么看不出来：：

35. 《Wu,2004：131》

a：结果人家跟我说他是外省人。我，我都吓一跳啊。

B：他是外省人啊?←

A：对啊。

B：他一半一半啦，一半客家一半：：：

36. 《Wu,2004：134》

A：听说他是你们以前的龙头老大。

（0.5）

B：[没，，

A：[教你们就是教你们的，，

B：没有，我没有被他教过啦。←

37. 《Wu,2004：134》

A: 我没有被他教过啦。

B：哦，你没有被他教过啊?←

A：我没有，他怎么可能教过我勒。他才大我没多，就是那种论舞龄的话，，

B：嗯。

A：也没有多少啊。

B：可是他好像是教那个谁，淑芳不是嘛。

38.《Wu,2004：139》

a：一部分等，九月回来再做吧。

B：九月回来?什么意思。←

A：九月再开始做那个啊。

B：哦，九月开始。

39.《Wu,2004：141》

A：我们学校有教师会哦?

B：刚成立，兆明是第一届的会长。

A：兆明?←

B：我们怂恿他出来做的。

A：那教师会还有什么，就是，教师会还有什么前途呢。

40. 《Wu,2004：141》

A：哦：：你跟陈祖一样，在仁爱路。

B：谁?←

A：陈祖。

B：啊，对对对对，我跟陈祖一样。

41. 《Wu,2004：157》

A：你为什么消失那么［久?］

B：［呃：］销声匿迹了啊。

A：对啊，你上次，上，前阵子跑去哪儿?

B：嗯?←

A：前阵子跑去哪儿?

B：去，跑去：到处鬼混。

42. 《Wu,2004：165》

A：所以他还付给他们啊，又买礼物给他们，你知道，那，因为他比较有钱，他可以这样子做啊。那［下一，，

B：［我不懂］，什么叫他比较有钱?＝←

A：＝就是学校有补助给他，给他钱做这个。可是他自己，本身有能力可以再多付。

B：可是现在问题是你们，你们是不是每个人有毕业舞展的话，学校都会资助啊?

A：对，都会资助，可是资助你知道，学费，学校资助你的钱只够你付场租费。

B：哦。

43.《Wu,2004：202》

A：所以东北比较穷哦，这样子吗?

B：东北不穷哦。←

44.《Wu,2004：202》

A：东北不穷哦。

B：不穷吗?←

A：那个，因为那个大豆，大豆卖的价钱很好，都被面粉也很好，东北不穷哦。

B：大豆拿来做什么?

45.<<HCR 中国語会話 6 孫 / 隋>>

A. 池田老师会吗?

B.会。

A.会啊?←

B.他就是很喜欢那个，呃。。。一起吃饭啊，还有就是出去喝酒啊也有。

46. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A.欸，就是那个，头发那样的小姑娘（伴有手势），她叫什么名儿啊。我们俩聊了半小时，我都不知道她叫啥名＝

B.头发那样的小姑娘?←

A.就是跟你头型有点像。

47. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A.（那个小姑娘）就是跟你头型有点像。

B.啊?←

A。就是坐我旁边那个。

48. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A: 就是坐我旁边那个(小姑娘叫什么啊)

B。你对面吗?←

A.对。

B.哎呀，我也不知道她叫什么。

49. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A.你是打算再申半年是吗?

B.我压根，我从来没住过宿舍。←

A.啊。

B.我一天宿舍都没住过。

50. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A.其实，我觉得你要是预算够了的话，不用跟别人合租。

B.预算够了的话?←

A.啊，你要是预算到了 3 万多，4 万的话，你没有必要合租啊。

B.（2 秒）合租。。。其实我不是因为钱，确实不是因为考虑钱。

51. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A. 你要是预算到了 3 万多，4 万的话，你没有必要合租啊。

B.（2 秒）合租。。。其实我不是因为钱，确实不是因为考虑钱。←

52. <<HCR 中国語会話 4 丁 / 陳>>

A.是店里人不好吗?

B.我们店真是，，

A.我们店里确实有欺负人的现象。

B.你们店跟你一起打的是不是都是跟你同龄人啊。

A。eng～←

A.不是啊。

B.我是 hall 里面最大的。

53. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

A.你们今年是不是有好多博士啊。

B.我们老师下面?←

A.啊。

B.三个。

54. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

A.每年教完研究论文，一个月以后答辩。

B.每年答辩一次啊?←

A.就是 11 月 30 号左右交，，

B.是中期发表吗?

A.不是。

B.不是。

A.它那个就是博士，嗯，你博士一年级的时候交你博士论文的一部分。

55. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

1A.　　我们老师手底下那个一色，好像也好几年了，不是三年。

2B.　　她，哦，没有，她和那个吴泰均，就是今年毕业的那个，←

3　　他们是一届的，但是她好像是，就是一个什么特别研究员，还是什么。

56. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

A.那个学姐，就是头发可长了，挺长的那个学姐，叫什么我也不知道。

B.头发挺长?←

A.他手底下不就她一个，现在已经博二，博三了吧。

B.是，就是这样把头发这样扎起来的吗?

A.还有一个把头发扎起来的吗?

57. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

A.他手底下不就她一个，现在已经博二，博三了吧。

B.是，就是这样把头发这样扎起来的吗?←

A.还有一个把头发扎起来的吗?

58. <<HCR 中国語会話 3 馬 / 陳>>

A.哎，姐，你们这国费的最后要求你们，就是要指定在哪工作吗。

B.没有，还得自己找。

A.喔。

B.但是就是，你比如说，你在这毕业了，你必须是回去两年，不管是在哪儿工作，就是工作两年之后，你才可以，比如说，你想再出来啊或者什么的，去别的地方才可以。

A.什么意思?你工作不也是自己找的吗?←

B.嗯，但是你必须得是在中国。

59. <<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.他说您的动词用的很好。他说现在的日本人都不会这么，这么丁寧地用，用动词了。然后我说，然后呢，动词用得好，，

B.哪个动词啊?你说的。←

A.就是，平常打电话的时候用的动词。我正在朝您那边，向かって什么什么什么。

B.嗯嗯嗯嗯。

60. <<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.最近做发表太痛苦了，说点别的，跟我们研究室那些人说发表的东西之外，你得说点别的，不然，只说发表太憋屈了。太憋屈了。

B.说点别的?←

A.就是不能说跟，要发表的东西有关的，知道吧。

B.嗯。

A.不过没事，我们也说不到发表的东西，不同一个 zemi 的说不到那些东西。

61<<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.因为我们家：：：江西嘛，在广东上面。

B.啊，那你平时说的是粤语?

A.我平时说的：：没有，家乡话。←

B.你家乡话什么样的?

A.家乡话：：：

62. <<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.反正我大概是能听懂广东话的。

B.啊：大概能听懂?←

A.我能听懂。说不太标准吧。

63. <<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.那你们家那边应该是没，一年四季没有冬天啊。

B.有冬天啊，冬天可冷了。

A.因为是内陆吗?

B.不是，南方没有暖气。←

A.啊。

64. <<HCR 中国語会話 2 李 / 胡>>

A.你不靠海?

B.我们不靠海。

A.啊，内陆的话，它可能就是温差挺大的。

B.是温差挺大，夏天的话，像现在，30 多度，但是，，

A.［啊，］冬天的时候零下?

B.没有零下的时候。［只有几度］。←

A.那能下雪吗?不下雪?

B.偶尔下下雪吧。

# 参考資料Ⅴ

# 同一ターンにおける修復方略（日本語）

1. あのさ、部活後みたいにさー、[ひさびしぶり] 久しぶりにに、コンビニで買って〈笑いながら〉。
2. なんかさー、[ふく、覆面座]、覆面座談会とかさー〈笑いながら〉
3. [何か、とも]、そのバイトのその友達曰くー、なんかね、(店長が) すごいねちねちしてすごい陰険なやつとか言ってー〈笑いながら〉。
4. 絶対注意した方がいいよとか [いって]、言われた。
5. え、店長が、[ウェイトレ]、ウェイターやってる。
6. でも、たいていさ、なんか、もう、混んでる時はー、[じゅ]、5 分か 10 分に 1 回ぐらい、(店長が) 呼び出されるからー、クレーム対応とかさー。
7. なんか、[[高校までは]、高校までは教育なんだけどー]]、あ、中学まではこう、しょ、教育なんだけどー、高校に入るとー、芸術になるんだよ。
8. [有名なしょど]、そう、有名な書道家とー、[あし]、結構、有名な書道家って、そのまま文学者だったりするからさ。
9. あのねー、すごい桜並木があってー、もう普通に [映画] で、ちゃう、ドラマで使われたとかいって。
10. え、他人 [が]、の、を見てさ、″あ、こいつプリクラと、なんか別人だ″とかいうのはさ、楽しいけどさ。
11. [朝 1 本と]、朝 1 本、昼 1 本、夕方 1 本、[[土日]]、土曜とかはね、もう 1 本あったんだけどね。
12. あんまりうちらがさー、[おれが、さんね、さん]、3 年のおれが何か言ってもさー、な

んか、先輩だから気まずいかなって感じがすんだよ。

13. まつが、すごい帰りそうにしてる。[かえりたが]、帰りたそうにしてるぜ。

14. [じゃん]、じゃんけんで、[[か]]、[[[負けたほ]]]、勝ったほうが言う、最初に。

15. そうー、で、[わたしもそんなにしょっ]、4年なんでー、学校しょっちゅう来てる訳じゃないからー、メールでこう,

16. ″何て言うんですかね、[ひつ]、[[なかなか必然性がない]] っていうか、″どうしてここで″、って言われると、″うーん″って感じになってしまうので<笑いながら>,,″

17. “広島県の、公立の高校の［教]、英語の教員で,,″

18. あの、向こうの大学に行ったら（うん)、もう、授業は全部その、[中、中国語] じゃないや、あ、朝鮮語ですよね?。

19. でー、えっとー、何だろ、[ポルトガル]、あー違う、ブラジルですよね?から来てらっしゃる方とか、けっこう、うん、英語以外の、第二外国語が要るところって、けっこうあるので。

20. 英語って、なんか、ほらゼミとかでなんか発表するとかそういうのになると、調べるのは［すべて]、すべてっていうか、ほとんど英語の文献とか探さないといけないから。

21. で、どうやら、[正式な] っていうか、あのオフィシャルな、指導教官は「人名 1」先生だっていう先輩がいて。

22. [最近] あれですよね、最近っていうか、けっこう前から、あのチョナンカンとか出て。

23. やっぱ、[ちゃんとした]、ちゃんとしたっていうか、何とかホテルっていうとこは高いんですよね。

24. あのすごくね、あの、[お世話になって] っていうか、助けていただいて<笑いながら>、何とかここまで…。

25. [選ぶ] っていうか、選考があるのが、2年生の、12月ぐらいですかね。

26. ＜交換留学の最初で朝鮮語の授業が聞き取れないことについて＞なんか、けっこう3ヶ月が［壁]、壁っていうか、山って言い<ますよね、なんかすごく…>{<}。

27. え、じゃあ、[今後]、今後っていうか（うん)、今 2 年生だから（うん)、研究をして、今年卒業ですよね?

28. なんか、″明日空いてますかー″とか言って、わたしが、[行き損ねたー]、行き損ねたっていうか、″都合でいけなくなった会話実験に行ってほしいんですけど″みたいなー。

29. ＜卒論の進展状況について＞［進んでる］っていうか、いちおう本は読んでる。

30. ＜約束の時間について＞あれさ、でも、[じゅ]、え、なに、10 時 6 分っつってたよねー。

31. ＜大学の教授たちの特徴について＞なんだろ、生徒の間に対して、[絶対答えれる]、絶対的にとかー、じゃないけど、うーん、なんか、じ、″結構あいまいな世界なんだよねー″、みたいな。

32. あーー、そう、そんなきっぱり、[答え]、こ、1 つの答えだ、あるわけじゃないっていう、いろんな答えがあるから。

33. なんか、うん、美術の先生とかに言わせたらー、なんか、これから、[はって]、なんか、発展途上のイメージみたいな。

34. ［内緒］っつーか、別になんかねー、そう、お別れ会で誰か一人からー、ゆうせいの誰か一人からー、手紙をもらおうって企画があって、フェアウェルは毎年。

35. もう 1 個、なんか、写真とかで、[これは見せたくない]、見せたくないっていうか、あんまり人には見せたくないってのはさ、自分の家族なら分かるんだけどさ、自分と付き合ってる子の写真とか見したくなくね?

36. （もし彼女ができたらオープンにするかどうかに関して話していて、もしオープンにしたらどうなるかについて語っている）冷やかし［に］来るもん、冷やかしが。

37. （相手に対して抱いている印象）あのねー、じゃ、おれはね、[わか]、何かを考えてるのは分かってるの。なにかを考えてるんだろうな、と思ってるけど，何を考えてるのかは分からない。

38. もう大学の時からずっと［そこに]、そこというか、中野の中では 1 回引越してるんだけど、ずっと中野にいるのでー、もう、うん、ず、中野は庭みたいな、かんじです。

39. わたしもでも実家千葉なんだけど、その、割と南の方、だから、[遠いとは]、遠いこと

は遠いけど、でも、別に帰れるのに、もう、全然帰ってなくて〈軽く笑い〉、うーん。

40. ［とも］、［［友達っていうか］］、同じゼミの人で、あの、同じ編入生で、教職をとってる人がいて。

41. （高校の教員として2年間働いたという経験について）やっぱり、現場にいると、生徒が一番になっちゃって、［自分の勉強］とか、自分を高めるための勉強っていうのが、疎かになってしまう自分がいて。

42. で、その、なんか、め、面接で言われた、かもしれないけどー、やっぱり、こう、なんだろう、［隙がー、あんまり最初ない］、最初じゃなくてもー。

43. （相手に対しての印象について）だから、ちょっと［考え方がおかしいんや、相当］。考え方っていうか、考えることがおかしい〈声を抑えた笑い〉。

44. （プリクラが白くなることについて）あれだろ、［反射］っつーか、飛ばすんでしょ?。

45. （初対面の雑談場面で留学意向がある相手にアドバイスをしている）［まあ、学部卒業したら向こうの院に行っちゃうとかどうですか?］〈笑いながら〉別にそんなの…, なんか、留学カウンセラーでもないのに、こんなこと言ってもしょうがないんですけど〈笑いながら〉。

# 参考資料Ⅵ

# 同一ターンにおける修復方略（中国語）

1. 非常静距离：吴奇隆和李静

吴：[我小学的时候]，[[我中学的时候拿]]，一年最多拿过四个不同的奖学金。

2. 非常静距离：吴奇隆和李静

吴：因为我都没有看电视，所以[我不知道有小虎队要]，要甄选小虎队这个事，我不知道。

3. 非常静距离：吴奇隆和李静

吴：[那时候其实我刚开始在，在那边]，像我后来在电视台帮他们拍电视剧的时候，那个强度是真的很高的。

4. 非常静距离：韩红和李静

韩：这个眼镜好像是一个魔镜似的，戴上以后［可以]，可以看到［百花从一样的]，一个百花从中的世界。

5. 非常静距离：韩红和李静

李：我觉得［在十年前]，在十五年前，我们在 95 年那时候相见的时候，怀揣着梦想，在中央电视台 9 楼。

6. 非常静距离：韩红和李静

韩：拿我唱片的那个制作人把我的照片放到［制作]，那个（やや強調）制作人的办公桌上，音乐制作人拿起照片一看，再也不说话了。

7. 非常静距离：韩红和李静（韩红现场反串主持人）

韩：今天特别想采访一下［我们全中国最好的]，号称最好的女主持。

8. 非常静距离：韩红和李静（你为什么那么有公益心）

韩：反正小时候受奶奶的影响很多。老人家［让我做很多的]（停留 2 秒）小时候做很多的对小朋友的帮助的尝试。

9. 非常静距离：陶晶莹和李静

陶：(采访对象的选择上) 我有[我喜欢的人]，不一定要喜欢，尊敬或好奇的人都可以。

10. 非常静距离：谢娜和李静

李：我觉得［我穿]，你穿得也特别像参加 party 的。

11. 非常静距离：谢娜和李静

谢：[其实我很享受]，我其实特别享受［那种]，就是我进入一个角色，然后所有的朋友全进入我这个角色，然后全在大声笑的感觉。

12. 非常静距离：谢娜和李静

谢：每次张杰就说看到静姐就有种踏实的感觉（是么?)，真的，就是那种特别踏实的感觉。

13. 非常静距离：张杰和李静

张：大家对我的看法，一些不理解，我觉得最难受的，[最不能容忍的就是]，不是容忍，就是最难受的，就是［不理解]，大家对我的误会，是误会。所以我特别难受。

14. 非常静距离：张杰和李静（关于张杰曾经因为事业不顺得忧郁症的话题）

张：就觉得我不知道自己该干嘛，就每天［唱歌]，啊，不是，是每天去（上班)，回来，去，回来。

15. 非常静距离：张杰和李静

张：我的同事呢认为天娱［最难搞的艺人就是]，我是其中一个。

16. 非常静距离：张杰和李静

张：[他们觉得我太较劲了]，对于音乐上面太较劲了。没必要吗，一个 wav 格式跟一个 mp3 格式有差别吗?我觉得有差别。

17. 非常静距离：张杰和李静（张杰说自己为什么唱歌只用 wav 格式）

张：因为我觉得［那个才]，至少那个才没有被损耗，里面的音乐的元素，你知道吗。

18. 非常静距离：闫妮和李静

李：我性格就迷迷糊糊的，[我就是在我]，[[我觉得咱们俩可能是]]，就是比如说拍戏也好，工作也好，我一点都不迷糊，生活中特别迷糊。

19. 非常静距离：闫妮和李静

姜：她［真的是可以]，真的是一个特别需要 GPS 的人，就是永远有一个人在旁边告诉她，往左拐往右拐。

20. 非常静距离：闫妮和李静

姜：我觉得［妮姐对东南西北］，她对方向感真的是，就是，她应该再配一个指南针我觉得更好一些了。

21. 非常静距离：闫妮和李静（关于闫妮没有方向感）

闫：就是这两个人（自己跟朋友），［稍微有一个好的］，就稍微有一个好一点儿的也行，对吧。

22. 非常静距离：闫妮和李静（闫妮朋友姜超对其演技的评价）

姜：她绝对是那种生动地，就极其［将一个人物］，将一个人物的灵魂，永远附在她身上的一个，一个人。

23. 非常静距离：姚晨和李静

姚：［好在我］，我觉得我特感谢我父亲，我母亲，他们是［天性都属于很乐观的人］，一种，很乐观的人。

24. 非常静距离：姚晨和李静

姚：这种（父母的乐观性格）基因［保留］，在我身上保留着，所以我觉得我不管遇到多大的事，就是，可能是会难受，也会痛苦，但最终都会往好的方向发展。

25. 非常静距离：姚晨和李静（姚晨当年上大学需要一大笔钱，父亲去借钱的事情）

姚：［其实这个事情，我自己啊］，我本人不是特别愿意提，这件事情。

26. 非常静距离：姚晨和李静

姚：［是因为我当初］，我反省这件事情就是说，如果让我现在回到当初，我可能就不会来考这个学了。

27. 非常静距离：姚晨和李静

姚：［就是没有，没有］，独生子女就特别不容易去为父母着想，就是不会去替家里人去着想说能不能承受这个东西。

28. 非常静距离：文章和李静（谈论文章好友）

文：这姑娘这张嘴，就像一个［化学武器］，生化武器（对方笑），你知道吗，生化武器。这个人家那，咱们这张嘴吧也就是一个扩音器的功能，［她那就是生］，特别具有杀伤力。

29. 非常静距离：文章和李静（购买表演道具时的趣事）

文：我一［大老爷们（men）］大老爷们儿跟一个大妈俩人在那论，三块钱一条你卖不卖。

30. 非常静距离：文章和李静（关于多年前跟好友演出的视频）

文：跟她（小白）呢是，[小白上舞院的时候]，她在上舞院的时候，她有一个同学写了一首歌，就是这首歌。

31. 非常静距离：文章和李静（由文章编剧，主演的电视剧得到高收视率的话题）

文：我之前也不知道（自己有写剧本的能力），[是我拍雪豹的时候]（观众笑），是我拍雪豹的时候，因为雪豹的，到后期的时候，档期比较紧了，然后那个剧本确实没有出完全。

32. 非常静距离：文章和李静

文：我是在雪豹的时候，[开始尝试]，开始尝试写。

33. 非常静距离：文章和李静

文：我在剧中［我］提到一个，是我跟导演曹盾提到［一个］，一句话，叫细节打败爱情。

34. 非常静距离：文章和李静

文：其实［我特，特别拧巴］，我有一段时间特别拧巴，我是想极力地证明自己。

35. 非常静距离：文章和李静

文：（心态不好的时期）那一段时间是［特别不好的］，是特别特别不好。不仅伤害我自己，而且还伤害我的亲人。

36. 非常静距离：文章和李静

文：是［我的行为］，是我的心态在伤害别人，就是我太把［舆论］当回事了，我太把别人说什么当回事了。

37. 非常静距离：文章和李静

文：(因为受到外界猜疑对太太发脾气，自己清楚这跟太太没关系）这就是我自己心态的问题，这是我心态的问题。

38. 非常静距离：文章和李静

文：是他们让我［认识到这］，认识到了这样一群特殊的群体。

39. 非常静距离：文章和李静

文：[我永远是你背后的那个]（观众笑），我永远是你背后的那个小男人。

40. 非常静距离：文章和李静

文：[我在家里是没有机会，去跟太太去表白的]。是没有太多的机会，去说这些肉麻的话的。

41. 非常静距离：文章和李静

文：[我其实大家都觉得说]，说我每次一遇到这种，所谓影视圈的这种大型的活动，[都会有一些]，我都会出其不意地对太太说点什么话。

42. 非常静距离：文章和李静

文：但是我真的是，[说的都是心里话]（停顿 1 秒），我说的都是心里话。因为［太太特别不容易]，她特别不容易，不仅要带一个小的，还得带一个我。

43. 非常静距离：文章和李静

文：她的妊娠反应［特别强]，特别大，就到四个多月了都还在吐血。

44. 非常静距离：文章和李静（谈自己不让亲人接近自己刚出生的女儿时的经历）

文：我那时候就是一个［神经病]（停顿 1 秒），神经病，一个彻彻底底的神经病。

45. 非常静距离：文章和李静

文：(太太停止母乳喂养这件事）[是强迫的]，是我强迫她的。

46. 非常静距离：文章和李静

文：(关于孩子先叫爸爸还是先叫妈妈的事）对，[我也争]，[[我也争了]]，我们俩也争了。

47. 非常静距离：文章和李静

文：我觉得生活，[就是去]，就是时时刻刻去感受爱的时候是最幸福的。

# あとがき

指導教官の加藤重広先生が受諾書を送ってくださった四年前のある冬の日まで，私にとって留学は遠い夢であった。当時，まだ系統的に言語学の知識を学んでいなかった私に，先生は数多くの本を紹介してくださり，私を言語学の道に導いてくださった。ここでは，加藤先生にこの上なく感謝の意を表したい。

留学生活を始めたその夜，北 24 条にある学生寮で博士論文の完成に向かって一生懸命頑張ろうと決めた光景はまだ記憶に残っている。あれからの生活は，研究がうまく進まず泣いたり一つの課題を解決できて喜んだりした日々が繰返されたものだった。この山を登り詰めるまでの時間は長いようで，あっという間のことだった。この間，様々な方々の支えがあったからこそ，ここまで頑張って来られた。

まず，指導教官の加藤重広先生からは，いつも懇切丁寧なご指導をいただいた。論文の構想から完成まで，ご迷惑を掛けっぱなしであったにも関わらず，一貫して厳しくも暖かいご指導をして頂いた。週に一回のゼミだけでなく，学会発表や投稿の際にもご助言・ご指導をしてくださり，大変お世話になった。いつも色々とお心遣いしてくださったおかげで，自分の研究に専念することができた。言葉で尽くせないほど先生に感謝している。

また，言語情報学講座の佐藤知己先生，池田証壽先生，小野芳彦先生，李連珠先生には，言語情報学講座研究発表会や研究論文の審査会などで貴重なご意見・ご指導をいただき，ここに感謝の意を表したい。そして，本論文の審査では，加藤重広先生，野村益寛先生，佐藤知己先生から大変有意義なご教示をいただいた。改めて深く感謝の意を表したい。

さらに，同講座の研究室で一緒に研究に取り込んでいる加藤ゼミの仲間たちに，論文に関する貴重なコメントをもらい，いつも励まされており，ここに感謝の意を表したい。そして，日本語と中国語の会話コーパスを作る際に，依頼を快く引き受けてくれた同講座の皆様にも感謝申し上げる。また，隣の席にいる一色舞子さんとマリアンナさんには，いつも励まされた。厚く御礼を申し上げる。

最後に，どんなに落ち込んでもそばで見守ってくれている夫に，そして精神的に支えてくれている母国の家族に，このささやかな喜びを捧げたい。

2014 年 2 月北海道大学言語情報講座研究室にて

張玲玲